

令和7年度

「ふじのくにグローバル人材育成基金」事業

成果報告書



ふじのくにグローバル人材育成基金で
高校生や教職員の「海外での学び」を応援しています

静岡県教育委員会

目次

「ふじのくにグローバル人材育成基金」事業概要	1
参加者等一覧	2
報告書	
(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組	
ア 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）	6
イ 教職員の海外研修	14
ウ グローバルハイスクール研究指定	24
(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成	
ア 海外インターンシップ	
① ジヤトコ株式会社	30
② ヤマハ発動機株式会社	44
③ 株式会社呉竹荘	58
④ 静岡鉄道株式会社	72
イ ものづくり等の世界大会参加	86
(3) トビタテ！留学 JAPAN 「拠点形成支援事業」	
ア マイ好奇心探究コース	92
イ 社会課題探究コース	100
ウ STEAM探究コース	108
エ スポーツ・芸術探究コース	110
オ ふじのくに地域探究コース	
① ものづくり・地域産業コース	114
② 多文化共生・多様性コース	118
③ 観光交流促進コース	130
④ 静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース	142
⑤ ものづくり×アジアコース	180
⑥ 観光交流×アジアコース	182
⑦ チーム応募	188
支援企業・団体一覧	194

「ふじのくにグローバル人材育成基金」事業概要

国際化が進む現在において、本県が地域間競争に勝ち抜き、持続的に発展していくためには、社会に変革を起こしていくグローバルリーダーとして未来を創る人材の育成が必要です。

静岡県教育委員会では、2016年4月に「ふじのくにグローバル人材育成基金」を創設し、国際的に活躍しようとする意欲ある高校生やグローバル教育を推進する学校を支援しています。

(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組

区分		概要		応募(人)	参加(人)
海外体験促進	短期留学	県関連事業留学	県及び県教委が主催、共催、後援又は募集している事業に静岡県代表として参加 〈済州青少年国際フォーラム〉 【募集】1校4人程度【期間】10/28～11/1 【補助】上限100千円	12	4
	教職員の海外研修	本人企画	海外教育機関等で専門分野や現代的な課題の研究等を実施 【期間】7～12月 【募集・旅費支給】 ①1週間以上3週間未満 4人・上限500千円 ②1か月程度 1人・上限1,000千円	15 ①14 ②1	5 ①4 ②1
グローバルハイスクール研究指定		学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研修機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定 【指定校】3校【指定期間】2年程度【補助】上限2,000千円		—	3校
合 計				生徒4、教員5 学校3	

(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成

区分		概要		応募(人)	参加(人)
海外インターンシップ		県内企業の海外支社や海外工場における就労体験等を実施 【募集】生徒28人、事務局職員4人程度 【期間】国内研修2日、海外研修3泊4日程度(7～8月) ※旅費・参加費県負担		70	28 引率4
ものづくり等の世界大会参加		ロボット競技等のものづくりに関する世界大会へ参加 【対象】専門学科等の生徒 【補助】上限300千円(国内開催は100千円)		3	3
合 計				生徒31、引率4	

(3) トビタテ！留学JAPAN(新・日本代表プログラム)「拠点形成支援事業」

区分		概要		応募(人)	参加(人)
拠点形成支援		官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN(新・日本代表プログラム)『拠点形成支援事業』」採択に伴う事業実施 ・静岡県の特性を踏まえた探究活動等を伴う留学の支援により、将来、本県の発展のために活躍できる人材を育成するとともに、令和5～7年度の3年間で、ノウハウの蓄積と事業の定着を図る。		110	51
合 計				生徒51	

参加者等一覧

(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組

ア 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）

静岡県立科学技術高等学校の生徒4人が静岡県の代表として参加し、さまざまな国の高校生と交流しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立科学技術高等学校	秋山 輪人	韓国	10月28日～11月1日	6
静岡県立科学技術高等学校	大石 維菜	韓国	10月28日～11月1日	8
静岡県立科学技術高等学校	小林 妃来里	韓国	10月28日～11月1日	10
静岡県立科学技術高等学校	野川 妙恵	韓国	10月28日～11月1日	12

イ 教職員の海外研修

それぞれが企画・計画した留学先で、専門分野や現代的な課題の研究等を実施しました。5人の教職員が海外での研修を行いました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立伊豆総合高等学校	千年 空	スウェーデン	10月2日～10月16日	14
浜松市立舞阪中学校	清澤 涼介	スイス	9月1日～9月24日	16
伊東市立対島中学校	佐藤 かおり	フィンランド	8月10日～8月22日	18
伊豆の国市立長岡中学校	山下 夕月	アメリカ合衆国	9月12日～9月21日	20
三島市立北中学校	山田 信彦	ニュージーランド	8月6日～8月15日	22

ウ グローバルハイスクール研究指定

学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研究機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定しています。

学校名	期間	掲載ページ
静岡県立吉原高等学校	令和6年度～	24
静岡県立榛原高等学校	令和6年度～	26
静岡県立浜北西高等学校	令和6年度～	28

(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成

ア 海外インターンシップ

県内企業の海外工場での就業体験等を実施することで県内企業の実力を肌で感じ、将来的に県内企業で活躍する意識を高めました。県内4企業の海外拠点等にて開催しました。

① ジヤトコ株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立沼津東高等学校	森田 奈緒	タイ	8月25日～8月28日	30
静岡県立沼津工業高等学校	勝又 大翔	タイ	8月25日～8月28日	32
静岡県立吉原工業高等学校	望月 涼聖	タイ	8月25日～8月28日	34
静岡県立静岡城北高等学校	杉山 菜那	タイ	8月25日～8月28日	36
静岡県立島田工業高等学校	鈴木 魁星	タイ	8月25日～8月28日	38
静岡県立浜松工業高等学校	加藤 来都	タイ	8月25日～8月28日	40
清水国際高等学校	澤野 修兵	タイ	8月25日～8月28日	42

② ヤマハ発動機株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立清水南高等学校	大場 百華	台湾	8月4日～8月7日	44
静岡県立掛川工業高等学校	鈴木 大翔	台湾	8月4日～8月7日	46
静岡県立磐田西高等学校	太田 海斗	台湾	8月4日～8月7日	48
静岡県立浜松東高等学校	真砂 侑依	台湾	8月4日～8月7日	50
静岡県立浜松商業高等学校	山崎 りん	台湾	8月4日～8月7日	52
静岡県立浜名高等学校	井田 深月	台湾	8月4日～8月7日	54
星陵高等学校	藤村 凌空叶	台湾	8月4日～8月7日	56

③ 株式会社呉竹荘

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立三島南高等学校	渡邊 心花	インドネシア	8月17日～8月20日	58
静岡県立御殿場高等学校	大胡田 葵心	インドネシア	8月17日～8月20日	60
静岡県立富士宮東高等学校	曾根川 智貴	インドネシア	8月17日～8月20日	62
静岡県立静岡農業高等学校	望月 れい	インドネシア	8月17日～8月20日	64
静岡県立静岡商業高等学校	植松 小春	インドネシア	8月17日～8月20日	66
静岡県立浜松大平台高等学校	佐野 楓真	インドネシア	8月17日～8月20日	68
沼津市立沼津高等学校	山道 はるか	インドネシア	8月17日～8月20日	70

④ 静岡鉄道株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立富士高等学校	後藤 久実	台湾	8月18日～8月21日	72
静岡県立科学技術高等学校	内野 壮一郎	台湾	8月18日～8月21日	74
静岡県立藤枝北高等学校	小林 凜久	台湾	8月18日～8月21日	76
静岡県立磐田南高等学校	秀平 誠朗	台湾	8月18日～8月21日	78
静岡県立浜松湖北高等学校	鈴木 一世	台湾	8月18日～8月21日	80
静岡市立清水桜が丘高等学校	大石 優芽	台湾	8月18日～8月21日	82
聖隷クリストファー高等学校	谷口 奏斗	台湾	8月18日～8月21日	84

イ ものづくり等の世界大会参加

ロボット競技等のものづくりの世界大会等へ参加を通して、知識・技能の習得やものづくりへの興味関心を高めました。今年度は静岡県立科学技術高等学校からARDF世界選手権に3人の生徒が参加しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立科学技術高等学校	杉原 伸弥	リトアニア	8月16日～8月21日	86
静岡県立科学技術高等学校	西島 大勝	リトアニア	8月16日～8月21日	88
静岡県立科学技術高等学校	森島 瑚葉	リトアニア	8月16日～8月21日	90

(3) トビタテ！留学 J A P A N 拠点形成支援事業

静岡県の特性を踏まえた探究活動等を伴う留学を支援し、将来、本県の発展のために活躍できる人材を育成する事業です。2期生 51 人が留学しました。

ア マイ好奇心探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	笠井 洋子	アメリカ合衆国	8月4日～8月22日	92
静岡県立静岡城北高等学校	佐々木 ありさ	カナダ	7月20日～8月2日	94
静岡県立沼津東高等学校	大川 大和	英国	8月4日～9月5日	96
静岡県立静岡高等学校	味元 葉瑠	英国	7月13日～8月15日	98

イ 社会課題探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立ふじのくに国際高等学校	須藤 馨	オーストラリア	7月28日～9月5日	100
静岡県立静岡高等学校	望月 咲杜	ニュージーランド	7月29日～8月15日	102
静岡県立清水南高等学校	野上 しずく	フィンランド	8月10日～9月6日	104
静岡県立静岡高等学校	アサディ あや	モロッコ	7月31日～8月18日	106

ウ S T E A M探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
沼津工業高等専門学校	佐久間 悠愛	アメリカ合衆国	8月4日～9月12日	108

エ スポーツ・芸術探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立駿河総合高等学校	繁延 亜周	アメリカ合衆国	7月24日～8月8日	110
日本大学三島高等学校	原 季実珂	英国	7月21日～8月15日	112

オ ふじのくに地域探究コース

① ものづくり・地域産業コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立科学技術高等学校	網谷 羽真	アメリカ合衆国	7月23日～8月29日	114
静岡県立浜松西高等学校	松島 詩歩	ニュージーランド	8月4日～8月22日	116

② 多文化共生・多様性コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立掛川西高等学校	多田 遥花	オーストラリア	7月28日～8月15日	118
藤枝明誠高等学校	菅ヶ谷 桜 パラマルタ	オランダ	8月2日～9月5日	120
静岡県立静岡東高等学校	長田 詞葉	カナダ	7月28日～8月15日	122
日本大学三島高等学校	森島 心	カナダ	7月21日～8月9日	124
静岡県立藤枝東高等学校	田中 鳳介	カナダ	7月28日～8月15日	126
静岡県立浜松西高等学校	下位 峻介	英国	7月21日～8月8日	128

③ 観光交流促進コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	ハーディケン 緞 マリ	アイルランド	7月12日～8月1日	130
静岡雙葉高等学校	東 すみれ	アメリカ合衆国	7月14日～8月1日	132
静岡英和女学院高等学校	上野 花帆	カナダ	7月28日～8月15日	134

静岡県立浜松北高等学校	森本 真帆	シンガポール	7月14日～8月1日	136
静岡県立駿河総合高等学校	佐々木 普慈	大韓民国	8月4日～8月20日	138
静岡県立浜松西高等学校	川島 美紗	カナダ	7月28日～8月15日	140

④ 静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立清水南高等学校	河原崎 朱	アメリカ合衆国	8月4日～8月22日	142
静岡県立藤枝東高等学校	中村 栞里	アメリカ合衆国	8月25日～9月11日	144
静岡県立静岡高等学校	柳井 花椰	アメリカ合衆国	8月4日～8月21日	146
静岡県立静岡中央高等学校	長谷川 芽咲	オーストラリア	9月1日～10月3日	148
知徳高等学校	戸塚 富有	オーストラリア	7月21日～8月22日	150
静岡聖光学院高等学校	夏目 徳	オーストラリア	8月4日～8月21日	152
沼津工業高等専門学校	高橋 英寿	カナダ	8月4日～9月12日	154
静岡県立浜松北高等学校	桂 花穂	カナダ	7月11日～7月30日	156
静岡県立清水南高等学校	笹本 のの	カナダ	7月14日～10月3日	158
静岡サレジオ高等学校	海野 桃花	シンガポール	7月28日～8月15日	160
静岡県立浜松西高等学校	鈴木 舞歩	デンマーク	7月14日～8月16日	162
静岡県立浜松湖南高等学校	藤田 優希	スウェーデン	8月5日～8月22日	164
静岡県立藤枝東高等学校	花田 くらら	トルコ	8月4日～8月29日	166
静岡県立静岡城北高等学校	磯部 さつき	フィリピン	7月20日～8月2日	168
静岡県立清水南高等学校	福地 絢心	フィンランド	8月25日～9月8日	170
静岡県立清水南高等学校	太田 小春	フランス	9月22日～10月14日	172
静岡県立韮山高等学校	北村 祐介	英国	8月2日～8月23日	174
静岡県立浜北西高等学校	桜井 唯稀	大韓民国	7月20日～8月9日	176
静岡英和女学院高等学校	武井 明	中国	7月22日～8月22日	178

⑤ ものづくり×アジアコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立科学技術高等学校	山本 ひより	シンガポール	7月21日～8月3日	180

⑥ 観光交流×アジアコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	香月 旺典	マレーシア	8月11日～8月29日	182
静岡サレジオ高等学校	渡邊 芳	インドネシア	8月6日～8月30日	184
静岡県立清水南高等学校	天野 ひな	大韓民国	8月4日～8月22日	186

⑦ チーム応募

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立焼津水産高等学校	石原 成真	ミクロネシア	8月7日～8月22日	188
静岡県立焼津水産高等学校	林 桜子	ミクロネシア	8月7日～8月22日	190
静岡県立焼津水産高等学校	大石 美濤	ミクロネシア	8月7日～8月22日	192

静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有		(有の場合)		日にち 12月23日	
学校名		県立科学技術高等学校		氏名		秋山 輪人	
				学年		2年	

1 目的・応募理由

私が今回、済州国際青少年フォーラムのプログラムに参加したいと思った理由は、主に次の2つです。

1つ目は、世界で取り上げられているさまざまな問題について、国によって異なる意見や考え方を直接聞きたいと思ったからです。近年、環境問題や生成AIなど明確な「正解」がないテーマが増え、国ごとに経済状況や文化が異なるため、課題に対する考え方や対策も大きく違うはずです。私は、こうした多様な視点を知り、自分の考えを深めたいと感じました。

2つ目は、国際交流を通して海外の友達をつくりたいと思ったからです。日本で生活していると外国の方と関わる機会は多くなく、同じ日本人が周りになると積極的になれないこともあります。実際に海外の同世代とつながり、その地域でどんな話題があるのか、どんな価値観を持っているのかを知りたいと思いました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

今回の研修では、大きく3つの観点から、海外の参加者との交流を深めました。

【テーマ別のディスカッションと発表】

環境問題・生成AI・心理的不安の4つのテーマに分かれ、テーマごとにグループで話し合い、どのようにその問題を発信するかを考えました。私のグループは「環境問題」を担当しました。問題への感じ方や必要な対策に関しては、国が違っても共通する意見が多く驚きました。私たちは「劇」で発表することにし、分かりやすく伝わる構成を工夫しました。発表後、先生方から「環境問題への考えがよく伝わっていた」と評価していただき、大きな達成感を得ました。

【済州島のフィールドワーク】

研修では、済州島がどんな場所なのかを観光名所を巡りながら学びました。済州島は温暖で、みかんやマンゴーなどの栽培が盛んです。みかん農



園ではみかん狩りを体験しました。他にも、済州最大の現代アート美術館を訪れ、自然を生かした独創的な作品を鑑賞しました。済州島は落ち着いた雰囲気、日本と似た安心感があり、現地の方の温かさも印象的でした。

3. 国際交流

今回の研修では、さまざまな国の生徒と交流し、お互いの文化や地域的话题を共有することが中心でした。私の班には、中国・オマーン・台湾・ハワイなどの生徒が参加しており、学校生活や流行など幅広く話すことができました。夜も部屋でミニゲームをして親睦を深めるなど、日本とは異なる価値観に触れられる貴重で刺激的な時間でした。



3 感想等

今回の留学を通して、私は多くのことを経験しました。その中でも特に学んだのは、テーマに関する議論や文化体験だけでなく、日本人としての“国際的な語学力”と“コミュニケーション力”の重要性です。私も決して英語が流暢に話せるわけではなく、発音やスピーキングで困ることが何度もありました。しかし、それでも多くの海外の生徒と関わることができました。その理由は、言葉だけではなく「リアクション」を大切にしたからです。完璧に理解できないときでも、表情や反応をしっかり示し、相手の話に気持ちを向けることで、思った以上に会話は成立します。そしてもう一つ必要だったのが、「一歩踏み出す勇気」です。うまく話せない、会話に入れないかもしれないという不安はたくさんありましたが、その気持ちのまま立ち止まるのではなく、自分から新しい輪に入っていくことで、言葉の壁を越えて多くの生徒と仲良くなることができました。これらの経験から、「挑戦すること」の大切さを強く実感しました。英語は国によって発音も違い、話題が合うかどうか分かりません。しかし、自分が勇気を持って踏み出せば、その気持ちに応えてくれるように結果がついてきます。この学びは、外国人との交流だけでなく、これからの私の日常生活でも生きてくると思います。できないと決めつ



けたり、失敗を恐れたりするのではなく、「まず挑戦してみる」という姿勢を持つことの大切さを学びました。今回の研修は、私に新しい目標を与えてくれました。もっと海外の人と交流し、現地の文化に触れながら、多様な価値観にふれてみたいという思いが強くなりました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	済州国際青少年フォーラム		訪問国	韓国		
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	12月23日	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年
学校名	県立科学技術高等学校	氏名	大石維菜		学年	2年

1 目的・応募理由

私がこの研修に参加したいと思った理由は、様々な国から来る高校生と共に今の社会問題について話し合い、私たちに何ができるのか考え、国際的な視野を広げたいからです。また、言語の違う者同士でグループを組むため、工夫してコミュニケーションを取ることが必要になります。ジェスチャーを使ったり、英語を使ったりして国際交流をして多文化共生の第一歩になると思ったからです。多文化共生は、お互いが歩み寄ることで深まります。私たち一人ひとりが日々の生活の中で意識し、実践していくことで、より豊かで多様な社会を築き上げていくことができると思います。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

1日目は、飛行機の都合で最初のアクティビティには参加できず、パネルディスカッションからの参加になりました。

2日目はオープニングセレモニーの後、日本人同士で写真を撮る時間があり、同じ班の日本の方と話すことができました。午後にはフィールドワークとグループディスカッションがありました。フィールドワークでは近代美術館を訪れ、不思議な感覚を味わいました。その後のパネルディスカッションでは、グループごとに現代の社会問題について取り組みました。



3日目は、同じ班の子からたくさんお土産をもら

い、その中の一人には似顔絵まで描いてもらいました。午前中はパネルディスカッションの仕上げとリハーサルを行い、午後に発表がありました。何百人もの前でのプレゼンはとても緊張



しましたが、同じ班の仲間がたくさん励ましてくれたおかげで無事にやり遂げることができました。夕食後にはK-POP learningがあり、プロのダンサーの方にダンスを教えてもらいました。ベストダンサーにも選ばれ、和菓子をいただきました。とても楽しく、1番思い出に残った時間でした。

4日目は、朝ごはんの後にフィールドワークへ行きました。植物園やビーチ、みかん畑を回りました。夜はクロージングセレモニーの後にカルチャーナイトがあり、お土産を配り合ったり、踊ったり歌ったりして、お祭りのように盛り上がりました。

3 感想等

初めてパネルディスカッションの部屋に入ったとき、すでにみんなが仲良くなっていて、途中から参加した私はうまく馴染めるかとても不安でした。初めてネイティブの英語を聞き、スピードも速く、話がどんどん進んでいくので、理解しようと一生懸命耳を傾けました。私たちのグループのテーマは「a peaceful and inclusive community (平和で包括的なコミュニティ)」でした。



自分の書いたエッセイを数人ずつで共有する場面では、緊張でうまく言葉が出てこなかったのですが、徐々に落ち着いて参加できるようになっていきました。その後、内容が似ているメンバー同士でグループに分かれ、再度ディスカッションを行いました。私のグループは5人で、私以外の4人は全員中国の学生でした。最初はみんな仲がよさそうで、少し気後れしてしまっていたのですが、実際にはとても親切で優しく接してくれて、とても嬉しかったです。私がどうしたらよいか迷っていたとき、同じ班の子が「このトピックをあなたに任せたい！あなたならきっと素敵なものができるよ！」と声をかけてくれ、勇気をもらいました。

このフォーラムでは、多文化について考えを深めたり、新しい知識を得たりできただけでなく、同じ場所で生活を共にするなかで、生活面でも大きく成長できたと感じています。これまでは新しいことや初対面の人に自分から話しかけることがあまり得意ではなかったのですが、今回の経験を通して、積極的に行動できるようになった気がします。他の国の参加者と話していると、「こんにちは」や「いただきます」などの日本語を使ってくれる人もいて、とても嬉しかったです。私も日本語や英語だけでなく、いろいろな言語を話せるようになれば、もっとコミュニケーションが楽になり、多文化の人たちとのつながりも深まると感じました。

今回学んだことや経験したことを、将来の仕事にも活かし、地域の活性化に貢献できるようになりたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		济州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		○有・無		(有の場合)		日にち 12月23日	
学校名		県立科学技術高等学校		氏名		小林 妃来里	
				学年		2年	

1 目的・応募理由

私が济州国際青少年フォーラムに参加した理由は、主に次の2つです。

1つ目は、他国の文化や人々の考え方に直接触れてみたいと思ったからです。私は、それぞれの国で考え方がどれほど違うのか深く意識したことがありませんでした。しかし、実際に調べたり交流したりする中で、自分では気づけなかった違いを発見できるのではないかと感じました。日本にいただけでは分からない価値観や生活の違いを自分の目で見て感じることで、自分の視野を広げたいと思いました。

2つ目は、日常生活の中で英語を実際に使ってみたいと考えたからです。私はこれまで一度も海外に行ったことがなく、英語だけで1日過ごすような機会もありませんでした。そのため、英語を使わざるを得ない環境に身を置き、自分の力を試してみたいと思いました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

- 一日目 オリエンテーション、パネルごとの顔合わせ
- 二日目 開会式、フィールドトリップ（济州現代美術館、芸術村）、パネルディスカッション準備
- 三日目 パネルディスカッション準備、パネル発表、K-POP ダンス学習
- 四日目 フィールドトリップ（济州公園、海岸、観光農園）、閉会式、カルチャーナイト
- 五日目 帰国



※一日目は研修場所に着いたのが遅かったため、顔合わせのみ参加した。

<パネルディスカッション>

1つのパネルには生徒17～18人、先生1～2人が参加し、与えられた議題についてプレゼンテーションを作成しました。スライド作成や発表方法などの役割分担もすべて自分たちで話し合っ決めてました。ディスカッションでは自分の意見を積極的に出すことに苦労



しましたが、周りのサポートもあり、無事に発表をやり遂げることができました。

<カルチャーナイト>

各国が自分たちの文化を紹介する歌やダンスを披露しました。私たちは法被を着て「港かっぽれ」を踊りました。他の国の参加者は、披露の途中にお菓子やぬいぐるみを配ったり、自国に関するクイズを出したりするなど、とても工夫されていました。日本ではなかなか味わえないほど会場全体が盛り上がっていて、とても楽しい時間でした。

3 感想等

今回の済州国際青少年フォーラムを通して、私が最も強く影響を受けたのは、他国の生徒の「積極性」と「行動力」です。私は普段から自分の意見をはっきり伝えることがあまり得意ではなく、特に英語でのコミュニケーションに対しては大きな不安がありました。五日間の中でも、「英語でちゃんと伝えられるだろうか」「相手の話が聞き取れなかったらどうしよう」という気持ちから、自由時間に一人で過ごしてしまう場面が何度かありました。



しかし、他国の生徒たちの姿は私の予想を大きく超えていました。パネルディスカッションでは、誰かが意見を述べるとそれに対してすぐに反応し、自分の考えを積極的に共有していました。先生に指名されなくても、自然と次々に発言が生まれ、議論が止まることなく進んでいく様子を見て、「同じ年代でもこんなに違うんだ」と強い刺激を受けました。さらに、印象的だったのはフィールドトリップへ向かうバスの中での出来事です。私は最初、知っている人がいない不安から一人で座っていました。しかし、ある生徒が声をかけて隣に座ってくれ、そのままお互いの国のことや学校生活について自然に会話が始まりました。私のつたない英語にも根気強く耳を傾けてくれ、笑顔で会話を続けてくれたことがとても嬉しく、自信につながりました。こうした交流を重ねる中で、他国の生徒たちの「まずは話してみる」「気になったら行動する」という姿勢が、本当に素晴らしいと感じました。そして、自分ももっと積極的になりたい、自分の思いを恐れずに伝えてみようという気持ちが芽生えました。今回の経験を通して、英語力だけではなく、国際的な場で必要になる行動力やコミュニケーションの大切さを実感しました。これからも英語の学習を続けると同時に、自ら一歩踏み出す勇気を持ち、多くの国の人たちと交流できるようにしたいと思います。



い、自分の思いを恐れずに伝えてみようという気持ちが芽生えました。今回の経験を通して、英語力だけではなく、国際的な場で必要になる行動力やコミュニケーションの大切さを実感しました。これからも英語の学習を続けると同時に、自ら一歩踏み出す勇気を持ち、多くの国の人たちと交流できるようにしたいと思います。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	12月23日	(対象)	全校
学校名	県立科学技術高等学校		氏名	野川 妙恵		学年	2年

1 目的・応募理由

今回、私が済州国際青少年フォーラムに参加した大きな理由の一つは、自分の視野を広げたいと思ったからです。普段の学校生活では、海外の文化や価値観に直接触れる機会が多くありません。そのため、さまざまな国や地域の人たちと約1週間生活を共にしながら交流することで、異文化を体感し、日本の文化の良さや他国の文化の魅力を改めて知りたいと考えました。また、国際的な問題について異なる背景を持つ参加者と意見を交わすことで、自分にはなかった視点や考え方を学び、社会的視野を広げたいと思いました。

2つ目の理由は、実践的な英語力の向上です。英語の授業や英語の検定試験だけでは、英語に触れる機会が少なく、自分の英語力がどの程度なのか、英語のみの環境に身を置くことで、自分自身の英語力を試してみたいと思ったからです。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

1日目：オリエンテーション

2日目：開会式、フィールドトリップ（美術館）、
ディスカッション

3日目：プレゼン準備・発表、K-pop 講座

4日目：フィールドトリップ（植物園、ビーチ）、
閉会式、カルチャーナイト

5日目：帰国



【ディスカッション、プレゼンテーション】

私たちのグループは、AIの倫理的な使い方について話し合い、ドラマを制作して発表しました。話し合いの時間は、英語を第一言語とする国のメンバーや英語が得意なメンバー中心となって進行してくれ、意見を伝える時間を作ってくれ、私のつたない英語を理解し、的確な表現にまとめたりしてくれました。また、ドラマの原稿や編集作業、エンディングの歌の制作を分担して行い、トピックに沿った約8分の作品をグループ全員で作りました。私は、先生役で出演しました。



【フィールドトリップ】

2日目は美術館、芸術村、4日目は植物園、ビーチ、みかん農園に行きました。日本とは違う世界観のある芸術作品やきれいに管理された植物、ユニークな形の建物などを見ることがで

き、とても印象的でした。濟州島はみかんが名産で、移動中のバスの中でもみかんが配られました。

【その他のプログラム】

開会式や閉会式、カルチャーナイトでは、それぞれの地域の民族衣装や伝統的な歌や踊りなどを見ることができました。私たちは、法被を着て清水港まつりで行われる「港かつぼれ」を披露しました。特にアメリカや現地の生徒たちがノリ良く盛り上げてくれ、楽しい雰囲気でした。



【部屋・食事など】

私は中国の方とカナダの方との3人部屋でした。部屋にいる時間は多くなかったものの、お風呂の順番や鍵の受け渡しなど、生活に必要なやり取りを英語で行うことができました。食事はルームメイトと一緒に食べることもあれば、今回参加した友達と食べることもあり、毎回楽しい時間でした。

3 感想等

私にとって、このフォーラムへの参加はとても貴重な経験になりました。特に1日目と2日目は、英語が思うように聞き取れず、話そうとしても言葉がすぐに出てこないことが多く、自分の英語力の課題を実感しました。しかしその一方で、自分の英語が相手に通じたり、意見をしっかり伝えられたりしたときには大きな喜びがあり、これまでの学習で身につけてきた力も確かにあると感じることができました。フィールドトリップのバス移動の際に、初めてモンゴルの方と翻訳機を使わずに会話し、お互いの国や学校について話すことができたことは、とても印象に残っています。また、初日のオリエンテーションで、ディスカッショングループに日本人が自分1人しかいないと知ったときは驚きました。しかし、先生や周りの参加者が私の言いたいことをくみ取ってくれたおかげで勇気をもらえ、また、自分自身も積極的に話すように努力したことで、2日間の話し合いにしっかりと参加できたことがとても嬉しく感じました。ドラマ制作では練習時間を調整してくれたり、作業ができるようにパソコンを貸してくれたり、本当に親切にしてくださいました。ドラマでは先生役を果たせたことは自信につながりました。出発前から現地での4日間まで、多くの人に支えられていることを強く実感しました。

今回の経験を通して、日本だけでなく国際的な社会問題にも目を向けられるようになり、これからも自分の英語力を伸ばすために学習を続けたいという思いが一層強まりました。このように、さまざまな国や地域の方々と交流し、英語だけでなく精神面でも成長できる機会をいただき、本当にありがとうございました。



教職員の海外研修

スウェーデンの学校現場から学ぶ主権者教育方法

静岡県立伊豆総合高等学校 教諭 千年 空



国名 スウェーデン
令和7年10月2日～10月16日

日本の若者の選挙投票率は約3割と政治的関心、主権者意識が低い。そこで、主権者教育の重要性が増している。学校現場で、若者の政治的リテラシーや政治参加意識を育む必要がある。スウェーデンは、世界幸福度ランキングで上位に位置しており、国民の政治的関心が高く、若者の選挙投票率は8割を越える。より良い社会を実現するために、若者を含め多くの国民が政治に参加している。より良い主権者教育を実施するため、若者の政治的関心が高い国でどのような教育が行われているのか、現地の学校を視察したいと考え、本研修を希望した。

－ 訪問先の概要 －

1. ミーマーシュ高校
2. NTIストックホルム高校
3. ヴィトフェルスカ高校
4. ファルクバーリス学校(小・中)
5. スtockホルム日本人補習校
6. スtockホルム大学
7. スtockホルム市庁舎・リクスダーゲン(国会)

1. 普通高校と特別支援学校の間くらいのサポート校である。普通高校とカリキュラムは同じだが、ペースは少しゆっくりで少人数制である。文系・理系・イントロダクションコースの3つのコースがある。
2. 技術科、美術科、IT科、ゲームデザイン科など特徴的な学科を持つ学校である。約600人の生徒が在籍する。
3. 1647年に創立された歴史ある学校である。第2の都市であるヨーテボリで最も大きな学校であり、生徒数は約2100人である。レベルの高い高校で音楽科など特徴的なコースもある。国際交流も積極的に行っている。
4. 6～9年生が所属する学校である。(普通は1～9年生まで同じ学校であるが、生徒数と学校規模の関係で分かれている。) 約420人の生徒が通っている。
5. 現地校やインターナショナルスクールに通う日本人子女を対象に文科省の学習指導要領に基づいた国語・算数(数学)を主たる教科として指導する学校である。小1～中3まで約200名の生徒が通っている。

－ 調査結果 －

授業の中での主権者教育

スウェーデンの学校では、小学生の段階から簡単ではあるが政治についての学習を始め、中高生の年代で、詳しく学ぶ。政党の政治指向にも踏み込んで学ぶそうだ。日本では、教員の政治的指向が生徒に影響しないように中立な立場から教える必要があり、中々深く踏みこんで話しづらい部分がある。スウェーデンも同様に中立の立場から指導するが、担当を決めて生徒自身にそれぞれの政党について調べさせ、共有・議論するなど方法を取り、深く学んでいると伺った。

また、社会科の授業を含めて多くの授業で、生徒が国内外の情勢について知り、考えることができるように、実社会の様子について触れ、それをテーマに議論する時間を作るように心がけていた。例えば、ファルクバーリス学校では、社会の授業で週1回国営放送のニュースを見せていた。ヴィトフェルスカ高校では、私が訪問した週が「Banbook Week(前の世代へ禁止された本を読む週)」(他の多くの学校でも取り入れているそう)で歴史・国語・英語などの授業で読み、過去の時代について学び、現代と比較して議論することをしていた。そして、学校によって多少違うが、多くの学校が最初の10分～20分で講義を行い、残り時間は生徒が授業内容についての課題に取り組む授業スタイルであった。思考力の育成をより大事にしていた。

これらの活動を積み重ねていくことで、国内外の情勢について自分事としてとらえ、批判的思考力を用いながら自分の意見を持ち、意見を反映させるために選挙へ行く若者が増えたと感じた。



民主主義をテーマに話し合う様子

授業以外の学校教育活動の中での主権者教育

最も驚いたことは、国政選挙などに合わせて学校で「模擬選挙」を行っていることである。選挙前になると、普段の学習に加えて、各政党の主張や政策について調べる機会を設けている。さらに、議員や政党関係者を学校に招いたり、演説場所や事務所へ出向いて話を聞く機会を設けている。このような活動を義務教育段階から行い、生徒は選挙制度や自らの意思に基づき投票する大切さを学んでいる。ちなみに、各学校で行われた模擬投票結果は集約されて公表されるので、選挙権を持たない年齢層の動向を政治家も気にするそうだ。日本でも選挙管理委員会の出前授業などで似たようなことを行う機会があるが、架空の政党などをモデルした仮定の投票である。本番さながらの緊張感はない。より投票の大切さを実感できる機会を設ける必要があると感じた。

また、スウェーデンの学校は生徒の自主性や主張を大事にしていると感じた。例えば、生徒会与校長、クラスの代表者と校長が定期的に話し合う機会を設けて生徒の主張に耳を傾けている。生徒が独自に運営する組織も多い。ヴィトフェルスカ高校の新聞サークルは、独自に政治家や政党についてまとめた雑誌を発行していた。

ほかにも、NTI高校では教室の壁に政治家紹介のコーナーを作ったり、すべての学校がリクスダーゲン（国会）や県議会、市議会へ見学する機会を設ける（遠い地域は国からの補助金あり）、など様々な方法で主権者教育を行っていた。



現地の先生ヘインタビュー後の写真

スウェーデンの国民性

学校教育以外のところでもスウェーデンでは、政治に触れる機会が多い。夕食などの際に家族間の会話の中で政治についての話題になることも多いそうである。投票へ行く際も子供を連れて行く家庭が多く、子供は選挙へ行くことが当たり前であるという認識になるそうだ。投票場所についても日本とは違い、国政選挙ではどこでもの地区からでも投票できる。駅などの立ち寄りやすい場所にも投票所があるとのこと。また、政党の青年部や若者で構成される政治団体等が発達しており、高校生の年代から参加している人もいる。国の社会情勢も関係しており、最近では移民問題、ロシア・ウクライナ戦争など国民の関心事項も多い。また、第2次世界大戦時のナチスドイツの独裁政治を踏まえてなど、民主主義の大切さを身に染みて感じている人が多いと伺った。様々な要因から、国民は政治を身近に感じており、自分の1票で政治が変わると考えている人が多いようであった。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

公民の授業などで生徒に還元していく。主権者教育の一環で行う選挙出前授業等も本研修を活かして工夫したい。現地で見た景観や文化や歴史的建造物などは、歴史の授業で活かす。さらに、主権者教育は様々な科目や学校全体での活動を通して行う必要があるため、本校教員に共有する。自校以外の場所でも機会があれば報告していきたい。本研修で生まれたつながりを活かして、現地の学校と授業でオンライン交流なども予定している。

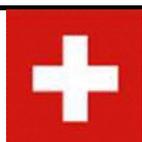
感想

現地の教員へのインタビューの中で、「ただ勉強ができる生徒ではなく、良い市民を育成することを目標としている」という話があった。（スウェーデンの大学等へ進学方法は、入試結果ではなく学校の成績である）日本も同様であるが、学力を伸ばし進学実績等を高めることに力を入れてしまう場合もある。国民性の違いもあるが、教育において実社会との接点を重視し、批判的思考力や主体的な社会参加の姿勢を育成してきたことが、高い選挙投票率を維持し、世界幸福度ランキングで上位になるような充実した国を自ら築きあげられる結果につながったのだと思う。今後は、日本での教育においても本研修で学んだ取り組みを積極的に実施していきたい。

— おわりに —

本研修を実施するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体の皆様には心より感謝申し上げます。本研修で学んだことを今後の教育活動に生かしていきたいと思いをします。

スイスの教育現場に学ぶー国際バカロレアと多文化共生



国名 スイス連邦
令和7年9月1日～9月24日

浜松市立舞阪中学校 教諭 清澤 涼介

国際バカロレアの理念である「探究する力を育む学び」を実際に見て、日本の教育にどう生かせるかを考えた。国際バカロレアは、文部科学省も国際教育の一環として導入や普及を進めており、多文化の中で子供たちが主体的に学ぶ姿を大切にしている。研修先にスイスを選んだのは、国際バカロレア発祥の地であり、子供たちが多言語・多文化の環境で学んでいる様子を直接見るができるからである。加えて、スイスは小国で資源も乏しいながら、経済的に大きな成功を収めている。その背景に教育がどのように関わっているのかも確かめたい。

ー 訪問先の概要 ー

- ① Kantonsschule Wettingen : アールガウ州立の名門校で、マトゥーラとIBの双方を目指す生徒が学ぶ。
- ② Kantonsschule Zug : ツーク州にある中高一貫校で、マトゥーラ取得を目指し、高い学力と主体性を育てる。
- ③ Realgymnasium Rämibühl : チューリッヒ市の伝統校で、IB認定校として多言語・多文化教育を実践している。
- ④ Leysin American School : レザンの全寮制IB校で、世界各国の生徒が国際的な環境で学び、協働している。
- ⑤ La Garenne International School : 家庭的な雰囲気の小規模IB全寮制校で、自然の中で探究心を育む。
- ⑥ Collège Alpin Beau Soleil : 100年以上の歴史あるIB全寮制校で、体験的な学びや国際理解を重視している。
- ⑦ SIS Swiss International School Zürich : チューリッヒ郊外のIB校で、英独イマージョン教育と社会参加を重視している。
- ⑧ Inter-Community School Zurich : 多国籍の教員と生徒が集うIB校で、探究心とインクルーシブ教育を大切にしている。
- ⑨ Institut Montana Zugerberg : ツーク近郊の山中にあるIB校で、自然環境を生かした少人数教育を行う。
- ⑩ ジュネーブ大学 : 国際都市にある歴史ある総合大学で、多様性と探究心に満ちた学習環境を備えている。
- ⑪ スイス連邦工科大学ローザンヌ校 : 世界屈指の理工系大学で、最先端研究と国際的議論が盛んな知の拠点。

ー 調査結果 ー

スイスの教育制度と進路の多様性

スイスでは小学校の終わり頃に進路の分岐が始まる。大学進学を目指す子どもは州立の中高一貫校「カントンシューレ」に進学し、数年間の学習を経てマトゥーラ試験に合格することで大学への道が開かれる。ただしマトゥーラを取得できるのは全体の20～25%にとどまり、結果として大学進学率はおよそ3割前後である。多くの子どもは職業教育の道に進み、週に数日は企業で働きながら専門学校で学ぶという実践的な学習を積み重ねていく。進学と職業教育の双方が社会にとって欠かせない道として尊重され、いずれを選んでも誇りを持って歩んでいける制度が整えられている点がスイスの特徴である。



国際バカロレアの授業風景

マトゥーラと国際バカロレア

スイスには二つの大学進学資格がある。伝統的なマトゥーラは、取得すれば国内のすべての大学に入学できる資格である。一方、国際バカロレア (IB) は世界中の大学に通用し、国境を越えて学びの道を開く。スイスの大学では、同じ科目の試験に二度不合格になると退学しなければならない制度があるため、入学すること以上に、その後の努力が大切になる。マトゥーラもIBも、それぞれ異なる強みをもつ制度であるが、共通しているのは「学び続ける力」を何よりも前提としている点であると強く感じた。

国際バカロレアのカリキュラムと多文化共生

国際バカロレア (IB) のディプロマ・プログラムは、高校最後の二年間で学ぶ課程である。生徒は6科目を幅広く選んで学び、加えて「知の理論 (TOK)」「課題論文 (EE)」「創造性・活動・奉仕 (CAS)」という3つの必修課題に取り組む。試験は世界共通の基準で評価され、45点満点中24点以上で合格となる。資格を得れば世界各国の大学への入学資格が与えられるが、その過程は容易ではなく、思考力や表現力が問われる。今回の研修で印象に残ったのは、この仕組みが単なる制度ではなく、多文化共生の環境の中で息づいていたことである。ある学校で見



様々な背景を持つ生徒たち

学したTOKの授業では、「歴史を知るとはどういうことか」という問いに対して、生徒たちがそれぞれの文化や家庭の背景をもとに意見を述べ合っていた。異なる視点がぶつかり合うことで、互いに理解を深め、知識の多様なあり方に気づいていく姿があった。また、SIS Zürichで見学したCASの取り組みでは、生徒たちが「Movie Night」という学校行事を振り返り、改善点を話し合っていた。国籍も文化も異なる仲間が協力し合い、次の企画をより良いものにしようと意見を交換していたことが印象的であった。楽しむだけでなく、集団で成長していこうとする姿勢に、IBが重視する「学びを社会に還元する精神」と、多文化の中での協働の力が重なって見えた。さらに、課題論文 (EE) について話を聞いた生徒は、母語とは異なる言語で資料を調べ、論文を執筆していた。異なる文化の文献や視点に触れながら研究を進めることは困難を伴うが、それこそが多文化的な学びの醍醐味であり、国際社会で必要とされる力につながっていると実感した。IBの学びは、知識を深めるだけでなく、文化の違いを互いに認め合いながら新しい価値を生み出すそのものと言える。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

キャリア教育では、体験を通して自分の生き方や将来を前向きに考え、主体的に進路を選べる力を育てたい。英語の授業では、実際に使える英語力を高めるとともに、国際バカロレアの理念を取り入れた教育実践を進める。探究活動や話し合いを通じて批判的思考や多文化理解を養い、国際社会で必要とされる資質を伸ばしていきたい。さらに、その成果を研究論文として発表し、他の教育者とも共有して静岡県全体の国際化に貢献したい。

感想

今回の研修の目的は、スイスの教育制度や国際バカロレア (IB) 教育の実際を学び取り、それを日本の教育に活かす視点を得ることであったが、思い描いていた以上に多くの気づきと成果を得られたと感じている。特に印象的であったのは、国際バカロレア校で学ぶ生徒たちの生き生きとした姿である。彼らは高い学習意欲をもち、自らの考えを積極的に言葉にして議論を深め、知識を表現する力を磨いていた。また、体験活動を重視し、自分たちで計画を立て、実行し、振り返るといった一連の学習を通して、社会に出てから役立つ実践力を育てていることも確かめることができた。こうした学びのあり方は、まさにIBの理念を体現していた。さらに、スイスの教育制度が大学進学と職業教育という多様な進路を整え、生徒一人ひとりの適性に合った学びを支えていることも理解できた。加えて、多文化共生社会の中で生きるには英語力が不可欠であり、グローバル化が進む世界において、日本の生徒もより高い言語力を身につける必要があることを強く実感した。今回の学びを通して、日本の学校でもIBの理念を取り入れ、探究心や実践力を育みながら英語力を高める教育が広がっていくことが重要であると考ええる。今後は英語教師として、自らの授業の中に体験的な学びや探究的な活動を積極的に取り入れ、生徒が自ら学びを深め、表現する力を身につけられるよう努めていきたい。

— おわりに —

この度、スイスでの4週間にわたる教育視察の機会をいただき「ふじのくにグローバル人材育成事業」を支援してくださった皆様に心より感謝申し上げます。視察を通じて得た学びは大きな財産であり、今後は静岡県の教育の発展に活かしてまいります。

学校におけるウェルビーイングを向上させるために



国名 フィンランド

令和7年8月10日～8月22日

伊東立刈島中学校 教諭 佐藤かおり

OECDの調査によると、日本の子どものウェルビーイングの状況は、「自己有用感」や「人生への満足度」などの項目において国際的に低い数値となっている。同調査において8年連続で世界1位に輝くフィンランドの教育現場を視察し、学校の風土を実際に感じ、知見を得ることで、日本の学校教育におけるウェルビーイングの向上のために何ができるかを学びたいと考える。特に「①子供の学習環境と学校生活環境について」、「②教職員の働き方について」の2点に着目し、フィンランドの学校教育について探究していく。

－ 訪問先の概要 －

① Vieremän high school ② Kauppi Heikki school ③ YSAO (Ylä-Savon ammattiopisto) ④ Martinlaakson school

- ① Vieremän high school (ビエルマ) : 人口約5000人の小さな町の公立小中高一貫校。
- ② Kauppi Heikki school (イーサルミ) : 人口約12000人の市の公立小学校の一つ。
- ③ YSAO (Ylä-Savon ammattiopisto) (イーサルミ) : 中学課程修了後に進学可能な公立職業専門学校。
- ④ Martinlaakson school (ヴァンター) : 人口約23万人の都市部に所在する公立小学校。

－ 調査結果 －

児童生徒一人ひとりが「選択できる」学習環境と学校生活環境

多様な背景や特性をもつ児童生徒が在籍するフィンランドの公立学校では、一人ひとりに適した学習環境、学校生活環境が整備されている。学習環境においてまず挙げられるのは、多様な「椅子」の提供である。例えば、多動性のある子供は揺れる椅子を使用していたり、視覚や聴覚が敏感な子供は、仕切りの付いた椅子で授業を受けたりしていた。その他にも、柔らかいソファ席で授業を受ける子供や、ビーズクッションの椅子に寝そべて授業を受ける子供の姿も見られた。これらを実現するために、教員は日頃から子供一人ひとりの理解に努め、子供本人の意思を尊重して授業経営を行っている。また、廊下や校庭にもソファやベンチなどが多く設置されており、子供たちは自由進度学習の際や休み時間などに使用することができる。子供たちが、自分が快適と感じる場所を選択することができるのは、子供たちが学校生活に対して安心感を抱きやすい要素の一つであると考えられる。



小学5年生の教室、授業風景

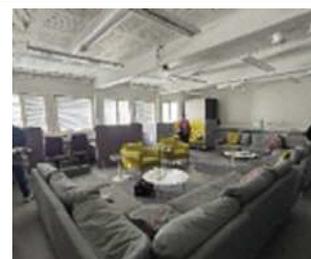
多様な児童生徒への配慮は、学校給食にも表れていた。給食の配食は子供自身で行い、食べることのできる献立を、食べ切れる量でよそうことができる。また、ヴィーガン対応として該当品目の除去食も提供されていた。

また、進路選択においても様々な選択が保障されている。9年生(中学校課程修了)後の進路は、「①大学進学を見据えて高等学校へ進学する」、「②職業専門学校へ進学し、資格取得を目指す」、「③決めきれない場合は、10年生として様々なコースを体験する」の中から選択できるようになっている。「③10年生」の生徒は、教員による定期的なカウンセリングを通して、自分の強みや興味関心について理解を深めることができる。10年生へのインタビューでは、「10年生のクラスは本当に必要な場所。自分としっかり向き合って、将来を考えたい。」と答えていた。

このようにフィンランドの子供たちは、学校生活のさまざまな場面で、自分に合ったものを選択する機会が保障されている。それにより「自分は何ができるのか、どうしたいのか」という自己理解を深め、一人ひとりが「人生の主体者」であることを自覚しているように感じた。

教職員が働きやすい職場環境の工夫

学校設備は、子供たちにとって快適な環境であるだけでなく、教職員にとっても働きやすい環境となるようデザインされている。まずは、教職員が十分な休憩をとることのできる空間が設置されている点である。職員室内には、メインスペースとして大型のソファが設置されており、教職員は空き時間にここで他の教職員と談笑したり、子供たちの情報交換を行ったりすることができる。「休憩する」ということにあたって、「時間」の設定だけでなく、「空間」の設置も、教職員にとって働きやすい環境づくりにつながっていると感じた。



休憩するための職員室空間

また、授業時数の管理においても工夫が見られた。今回訪問した学校では、教員一人当たりの授業の持ち時数は「1週間に24時間（24コマ）」であり、その内訳は「1時間（1コマ）＝45分授業+45分の準備時間＝90分」となっている。持ち時数の中に授業準備の時間が含まれており、教員は授業準備の時間に校内で勤務する必要はなく、自宅や飲食店など、自由な場所で授業準備に取り組むことができる。さらに、学校行事や校務分掌といったものはほとんど存在しない。そのため訪問時には、授業が終わると同時に帰宅する教職員の姿が多く見られた。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

事前に所属校の生徒や職員から、フィンランド文化や学校教育についての質問を募集し、現地での視察やインタビューを通して調査し、帰国後に報告した。現地研修中に所属校の生徒とオンライン中継を行い、フィンランドの街並みや文化を紹介した。帰国後は、所属校の生徒にフィンランドの文化や学校生活について、スライドを用いて紹介した。また、現地の小学生が書いた暑中見舞いを学年階に掲示し、1年生の英語の授業にて、「暑中見舞いの返事を書こう」という言語活動を行った。今後も現地校との交流を継続していきたいと考える。所属校の職員に対しても、本研修で学び、今後の職務で実践していきたいことについて、校内研修で報告した。

感想

本研修を通して、フィンランドの学校教育の風土を実際に感じ、なぜフィンランドが幸福度世界1位に輝き続けているのか、3つのヒントを得ることができたと思う。

1つ目は、「優劣で比較しないこと」である。学力や運動能力を優劣で比較してしまうと、競争が発生し、子供たちに過度なストレスを与える要因となる。フィンランドの授業では、個人の能力を他者と比較する場面は全く見られず、風土として「自分は自分、他者と異なるのは当たり前」という考え方が基盤にあるように感じた。またこの点については、日本の学校に見られる「テストの学年順位」や「勝敗を競う体育的行事、文化的行事」の意義について、改めて考えるきっかけとなった。2つ目は、「焦らず、時間をかけること」である。先述したように、フィンランドは休息の時間を大切にしている。また、授業中、手いたずらをしている子供に対して、直後に注意をするのではなく、彼らが集中力を取り戻し、学習活動に戻ってくるまで、それに気づきながらも気長に待ったり、個別の支援を行ったりする教員の姿がとても印象的であった。3つ目は、「選択肢があること」である。先述したように、子供が自分の特性に合った椅子や学習の場所、給食の献立や量を選ぶことができる点など、様々な選択肢や自己決定の場が設けられている。これらは、学校生活に対する安心感を生むと同時に、子供の主体性の育成につながっていると感じた。

これらの3つの要素は、フィンランドの学校や地域社会の高い幸福度につながっていると考える。この3点は、学級経営や授業における大切なマインドとして心に留め、子供たちの指導、支援にあたっていきたいと思う。

－ おわりに －

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成基金」にご支援くださった企業様、団体様には心より御礼申し上げます。本研修を通して学んだことを周囲に還元し、子供も大人も幸せに過ごすことのできる学校づくりに貢献していきたいと思っております。貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。

マリナー市から学ぶ多文化共生のあり方



国名 アメリカ合衆国
令和7年9月12日～9月21日

伊豆の国市立長岡中学校 教諭 山下夕月

伊豆の国市とアメリカ合衆国のマリナー市は友好都市となり3年目を迎える。昨年、所属校の第2学年がポストカードでマリナー市の生徒とやり取りをしたが、生徒の語学力向上に繋げる手立てをさらに検討したいと考えた。また、マリナー市には多国籍の人々が住んでおり、彼らの生き方・考え方から多文化共生について学びたいと考えた。そこで、「双方向のやり取りを通じた、より良い英語教育、日本語教育の方法を探ること」「多文化共生の実践的意欲の育み方についてヒントを得ること」という2つの研修課題を設定した。

－ 訪問先の概要 －

Lone Olson Elementary School（マリナー市内公立小学校）（幼稚園生～6年生）、Crumpton Elementary School（マリナー市内公立小学校）、Marina Vista Elementary School（マリナー市内公立小学校）、Los Arboles Middle School（マリナー市内公立中学校）（7～8年生）、Marina High School（マリナー市内公立高校）（9～12年生）

－ 調査結果 －

マリナー市の公立学校における日本語教育

Los Arboles Middle School と Marina High School では、日本人教員による日本語の授業が実施され、多くの生徒が受講している。生徒は日本語や日本の文化を学ぶことに意欲的であり、特に人気なのは、「ハイキュー」や「呪術廻戦」といったアニメであった。生徒は教室に入る前、授業前後の号令、教室を出る際など、すべて日本語であいさつをし、授業では、簡単な自己紹介や身の回りにあるものなどを日本語で言ったり書いたりする練習をしていた。（授業の様子はInstagramに投稿されている）彼らに、所属校で渡航前に撮影した1年生の動画を見せたところ、「お菓子は学校で食べてよいのか。」という質問に驚いていた。マリナー市の学校では、お菓子やスマホを持ち込むことが普通であり、朝食も学校で提供され、メイクアップや服装、髪色も自由である。

現在、Los Arboles Middle School の生徒が所属校の2年生とビデオのやり取りをしている。また、昨年に引き続き Marina High School と伊豆の国市の高校生でオンラインミーティングを実施している。本市の中学生が Los Arboles Middle School や Marina High School の生徒とのオンラインミーティングに挑戦したい旨を担当教員や生徒に伝えた。



日本語授業 山下のプレゼン中

マリナー市の公立学校における道徳教育

アメリカに「道徳科」の授業は設定されていない。しかし、生徒の人格形成に寄与する取組を見つけることができた。まず、Los Arboles Middle School では、毎朝0時間目に Advisory (8:35～9:10)がある。学術的なものに限らず、人との関わり方（例：友達に優しく接するためには）などの議題について小グループでディスカッションをしたり、担当教員から話を聞いたりする時間である。互いの考えを共有するだけでなく、悩みや葛藤を打ち明けられるコミュニティとなるようだ。また、小・中学校では、良い行いをした生徒に仲間や教員、支援員がチケットを渡し、そのチケットで文房具やお菓子、玩具を購入できるシステムがあった。生徒のモチベーションアップにつなげる意図があり、生徒は自

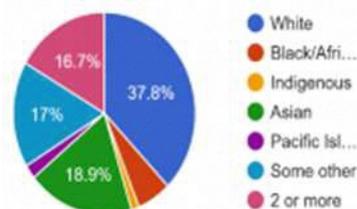


図1 マリナー市人種比率

ら荷物を運ぶのを手伝ったり、困っている友達に声をかけたりしていた。また、図書館には「LGBTQIA」「ヒスパニック」「宗教」などのコーナーが設けられており、小学生から多様性について学ぶ環境が整っている。さらに、マリナー市の人種比率は図1のとおりであり、様々な背景を持った生徒が共に過ごしている。音楽の授業では、英語だけでなくスペイン語の歌も全員で学んでいた。

マリナー市公立学校の特別なニーズを持った生徒に対する支援

特別支援級は、一人一人のニーズに合わせ個別の活動をしているため、2人の生徒に1人の教職員が配置されている。学級によっては、毎日机の配置を変えることもある。生徒が身体をリラックスさせる部屋（マットやメディシンボール、遊具が揃っている）があり、一日中そこで過ごす生徒もいる。多くの生徒が伝えたいことをタブレットの行動一覧を指でさして大人に伝えていた（机上の四角い端末）。また、通常級において学習面で支援を要する生徒について、教員が事前に名前をリストアップし、特別教室で週に一回、事前もしくは事後指導を行っている。



特別支援学級

マリナー市議会・ACOM（アジアン コミュニティ オブ マリナー）

マリナー市議会に参加し、友好都市代表として訪問した宣言書をいただいた。先日所属校に来校された議員の方々とお会いし、つながりを強化していくことを誓った。マリナー市長も、本市長も交換留学に向けて積極的に働きかけている最中である。また、ACOM(<https://acom2022ca.org/about/>)の会議にも参加した。メンバーは、韓国・中国・日本・台湾・ベトナムなど、アジア系の一、二、三世で構成されている。ACOM会議にて、日本の小学校の教育（Instruments of a Beating Heart | An Oscar-Nominated Op-Doc）を視聴し、議論を行った。すべてのメンバーが賛成の意見を示し、日本の「あきらめない姿勢を教育する」点や、「誰かのために努力をすることの大切さを伝える」点などが素晴らしいと話していた。韓国も似たような教育をしているようだ。

－ 研修を終えて －

研修成果の活用・還元

帰国後、所属校の担当学年の生徒に、サンフランシスコ、サンノゼ、マリナー市の様子や、マリナー市の学校の様子、市議会、ACOMなどについて写真や動画を用いて紹介した。渡米前に撮影した質問に対し、アメリカの生徒が答えたことに、驚き喜ぶ姿が見られた。また、マリナー市の生徒からのプレゼントを、教室で見ると触ったり、読んだりした。本市長、教育長にも、同様の報告をした。今後は、所属校の教職員に、事前に募集したマリナー市に関する質問事項について現地調査の結果を伝達する。また、マリナー市の学校で発見した教育システムで活用できそうなものを取捨選択し、実行する。そして、所属校にとどまらず伊豆の国市の英語教育や人権教育の推進、マリナー市との継続的な交流に貢献していきたい。

感想

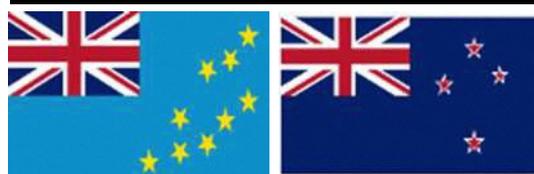
まず、友好都市であるマリナー市とのつながりをより強いものにしたいと感じた。マリナー市長と、本市長は交換留学に対し積極的に働きかけているため、それが実現することを願う。現在、Los Arboles Middle Schoolと、Marina High Schoolの生徒とは、オンラインミーティングや手紙の交換などのやり取りを継続している。今後は交換留学を見据え、アウトプットの時間を増やし、コミュニケーションスキルを磨くことに重点を置いた英語の授業を展開していきたい。次に、アメリカ社会では、まだ人種差別が根付いていると実感した。私が訪れたマリナー市では、ACOMというアジアンコミュニティが活発に活動していた。一方、各学校では、生徒の多様性を生徒自身が当たり前だと捉えているように感じた。学校で行う「道徳科」はないものの、小学生のうちから共生社会に身を置いていること自体が、彼らの生き方・考え方に強く影響しているのだと思う。今回の研修で、マリナー市の皆さんの温かさに多く触れ、私自身や伊豆の国市がマリナー市にできることは何か考える機会になった。友好都市から姉妹都市へと発展させるような強いつながりを創っていくことに、学校側からも提案していきたい。

－ おわりに －

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援してくださった皆様に心より感謝申し上げます。研修先に設定させていただいたマリナー市、サンフランシスコ、サンノゼでは、多くの方々と意見を交わし、自分の教育観を広げることができました。今回の発見や学びを、より多くの先生方に共有したり、自らの実践に生かしたりしていきます。

地球温暖化問題の最前線ツバルの実態と 環境保全先進国ニュージーランドに学ぶ環境教育と多文化共生

三島市立北中学校 教諭 山田 信彦



国名 ツバル・ニュージーランド
令和7年8月6日～8月15日

地球温暖化による異常気象で酷暑や豪雨災害で苦しむ日本。しかしそれ以上に海面上昇によって国家が水没するという危機が迫るツバルを視察することで、地球温暖化の世界的な関連性と私たちの生活のあり方を再考する機会としたい。一方で、環境保全先進国と呼ばれるニュージーランドでの環境政策や教育の取組を視察し、今後の環境教育を推進する一助としたい。さらに私の勤務校・三島市立北中学校と姉妹校になっているニュープリマス市・ワイタラハイスクールを視察し、先進的な環境や多文化共生教育について学び、認識を深めていきたい。

－ 訪問先の概要 －

【フィジー】在フィジー日本国大使館（ツバル兼務）、南太平洋大学、

【ツバル】フナフティ島主要施設、ナウティ小学校、南太平洋大学ツバルキャンパス、

【ニュージーランド】オークランド戦争博物館、オークランド日本語補習校、ワイタラハイスクール

経由地となるフィジーの日本国大使館（ツバル兼務）を訪れ、ツバルの国家概要や教育制度、日本のODA等についてインタビューをした。南太平洋島嶼国が協力して設立した南太平洋大学（USP）では、学生へのインタビューを行い、この地域の気候問題と将来について討議した。ツバルでは海面上昇の危機が迫る海拔1mの地域や日本のODA施設の見学、ナウティ小学校とUSPツバルキャンパスでは教育事情や環境教育について視察し、インタビューを行った。ニュージーランドでは、環境政策や先住民マオリの生活文化、多くの民族がうまく共生して成り立つ社会について博物館を見学し、現地校と日本語補習校に通う生徒にインタビューをした。三島市の姉妹都市ニュープリマス市にある本校との姉妹校・ワイタラハイスクールでは、マオリの文化継承や環境教育、個に応じたカリキュラムなどを視察し、学びを深めた。

－ 調査結果 －

地球温暖化で差し迫る国家水没の危機～ツバルを救うのは私たち～

平均海拔1mのツバルに降り立ち、地球温暖化による海面上昇が国家存続の危機にあることを強く実感した。オーストラリアの支援協定のもと、海外移住も始まり、8割近くの国民が希望する状態に。一方で、海岸を埋め立て新たな陸地の創出も行われている。海に沈むのが先か、人がいなくなるのが先かという難しい課題がある。その要因が私たちの生活に起因していると考えれば、他人事とは思えない。空港、港、病院、学校、発電所、TV・ラジオ局、電波塔、雨水タンク等、日本のODAが暮らしの大部分を支えていることも分かった。



いきいきと学ぶナウティ小学校の子どもたち

ツバルの義務教育は6～15歳の10年間。国内の各島にはすべて小学校はあるが、中学校は国内に2校しかなく、高等学校も同様に親元を離れ、寄宿舎生活をして学校に通うため、経済的にも大きな負担となる。よって中学校以降、高等教育への進学率が下がってしまうという課題がある。小学校にもパソコン教室があるが、教える教員が不足し、授業ではほとんど活用されていない。生活ではツバル語を使うが、小学校から始まる英語と算数・数学の能力が進学や就職に大きく影響する。学校施設や教員確保も財政的に厳しく、今後の大きな課題である。

若者が世界を動かす～南太平洋大学訪問～

2019年太平洋島嶼国の法学部生らが国際司法裁判所（ICJ）に地球温暖化に伴う先進国の責任を問う訴訟を起こし、この7月にICJが「気候変動問題に関し、各国に対応義務がある」との勧告的意見を発表した。この地域の未来を背負う大学生との討議を通し、差し迫った危機に対して現状変革を世界に求める熱意と行動力に感心した。諸問題を“自分事”として捉え、社会変革への行動に移していくことの重要性を強く感じた。

環境保全先進国・ニュージーランド

ニュージーランド入国に際し、驚いたのが、外国人には100NZ\$の「国際観光客保護観光税」が課され、それが自然保護に役立てられるということ。国家主導の環境政策は、スピード感をもって立法化されることが多い。発電も水力、風力、地熱発電ではほぼ賄われ、効率より安全性やクリーンを重視する姿勢があるということである。こうした背景には自然を大切にしてきたマオリ族の生活文化が大きく根付いている。環境教育は、小・中学生は、理科や社会の授業で行う程度であるが、高校生から本格的に始まる。環境教育を行った生徒の中には、ベジタリアンになる人も少なくないという。単に環境保全を学ぶばかりではなく、行動・実践するプログラムを取り入れており、省エネやリサイクルの考えが浸透し、国民の自然保護や環境保全に対する意識も高いように感じた。

ワイタラハイスクールの先進的なカリキュラム

ニュージーランドの公用語は「英語・マオリ語・手話」の3つがある。バスや鉄道のアナウンスは、マオリ語 → 英語の順。テレビチャンネルには「マオリチャンネル」があり、先住民の文化や人権がとても大切にされていた。

ワイタラハイスクールは、生徒の6割がマオリ族に由来し、マオリ語の授業やアートの授業の他、環境教育の一環として羊や牛を飼育したり、木材加工や実際に家を建てて一般の方に販売したりする授業もあった。個に応じた実践的で、柔軟なカリキュラムが組まれており、いきいきと学びに向かう姿が印象的であった。



ワイタラハイスクールのマオリ語の授業を参観

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

【校内】 道徳・社会科（公民）の授業実践。学級通信、校内掲示、校内研修において生徒・保護者・教員に地球環境問題に取り組む必要性を伝え、その意識を高めていく。

【校外】 三島市教育研究会（社会科班会）にて実践報告。授業に活用できるような実践を発表する。

感想

「百聞は一見に如かず」という言葉があるが、まさに今回の研修は、教科書や新聞・テレビニュースで見えたものを自分の足でたどり、現地の方との交流を通して、目・耳・心で実感し、大いに認識を深めることができた。ツバルの置かれている危機的状況は、ツバル自身に起因するのではなく、むしろ先進国をはじめ、世界に暮らす私たちの生活が引き起こしている。今後の授業でこの経験を生かすとともに、世界を「知ること」そして世界と「関わること」の大切さを意識し、世界のために行動ができる「世界市民」の育成に努めていきたい。

— おわりに —

このような実り多い研修の機会を作ってくくださった「ふじのくにグローバル人材育成基金」への援助をしてくださいました企業・団体の皆様に感謝申し上げます。貴重な研修機会をいただき、ありがとうございました。

グローバルハイスクール研究指定

グローバルハイスクール

テーマ：吉高 Spirit を持って未来を切り拓くための5つの力の育成～グローバルに生きる人間性を高める、グローバルな活動の構築～
(学校名) 県立吉原高等学校



1 グローバル教育の概要

国際科を中心としながら異文化体験、異文化理解、国際交流を通じて多様性を身につけるとともに、異文化体験報告会を通じて普通科の生徒へも理解を広げています。また、オンライン交流や台湾姉妹校交流に普通科の生徒が参加し、学校全体へグローバル教育を浸透させています。

2 実施計画と具体的内容

実施計画	具体的内容
海外体験	国際科海外異文化体験
	LORMA ニューヨーク短期留学
	姉妹都市米国カリフォルニア州オーシャンサイド市派遣「富士市少年親善使節団」
	韓国・忠清南道高校生派遣事業
国内（校内）における活動 （国際理解、異文化理解、留学生との交流、語学学習）	台湾姉妹校馬公高級中学との交流 オンライン交流、異文化体験発表会、留学生受入サマーセミナー、サマーイングリッシュキャンプ
	国際理解講座（本校生徒） （静岡大学留学生との交流）
	国際理解公開講座（地域中学生参加）
	フェアトレード講座、浴衣着付け講座、茶道講座
生徒の主体的な活動	外国人生徒学習支援ボランティア

3 各年度における取組

○国際理解公開講座（令和7年10月11日）

「マダガスカルでいろいろなことを考えてみた。」青年海外協力隊員としての活動経験を持つ、中田里穂氏を講師に迎え、マダガスカルの人々の暮らしや文化について楽しく学習した。現地とオンラインでつなぎ、現地の言葉や、生活について、中田氏と交流のある現地の方に直接質問した。また、開発途上国の中にある生活に役立つアイデアってなんだろうかという問いかけから、実際にアボカドオイルを作った。開発途上国であっても、人々が豊かな気持ちで暮らしている様子を知り、生徒は自分たちの今の生活を振り返り、神妙な面持ちで将来について考えていた。今回は近隣の中学生も参加できる公開講座として実施し、本校生徒が中学生と一緒に課題について考えたり、アボカドオイル作りのサポートをした。

↓写真左は中学生



○国際科海外異文化体験（令和7年11月28日～12月7日）

令和7年度もマレーシア・シンガポールにおいて、現地大学生と一緒に小グループでのクアラルンプール探索、学校交流、工場見学等を実施し、現地の人との文化交流を実施。最終日には予定していた飛行機が飛ばずに、予定よりも約8時間遅れて帰校。海外の厳しさを体験した。



○台湾姉妹校馬公高級中学との交流（令和7年12月9日）

今年度は馬公高級中学の生徒が本校を訪れる順番となる。12月9日の午前10時頃に、前日宿泊した御殿場から到着。校内見学、浴衣着付け体験、授業参加、部活動体験に、本校生徒と時間を共に過ごした。歓迎セレモニーでは馬公高級中学の生徒がダンスと歌を披露した。司会の生徒は日本語と中国語を用いて、通訳を介さずに進行した。



4 研究の成果と課題

国際科の2年生は、海外異文化体験帰国直後ということもあり、浴衣着付け体験では積極的に着付けを手伝い、コミュニケーションを図っていた。積極性というところでは、一度経験したかどうかということが大きい。本校で実施する異文化交流、異文化体験や講座が多くの生徒の国際理解への第一歩となり、お互いを知り合い、理解し、お互いを認め合う心の育成にもつながっている。多様な文化背景を持つ人々をつなぐ懸け橋となるために、さらなる内容のブラッシュアップと、限られた人員と予算の中で活動を継続させるための体制づくり、地域や海外の学校、関係機関との関係づくりを強化し、広く校内外での活動を実施していきたい。

グローバルハイスクール

テーマ：グローバルな視野と進取の気性を育み、異文化を理解する心を涵養し、外国人との共生など持続可能な社会に生きる力を身に付け、地域に貢献する人材育成の在り方について探る

静岡県立榛原高等学校



1 グローバル教育の概要

本校では、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」を令和元年度から3年間、静岡県の「オンリーワン・ハイスクール（グローバル・ハイスクール）」を令和3年度から3年間それぞれ指定を受け、この関連事業を「HAFプロジェクト」(HAIBARA ACHIEVING FUTURES PROJECT)と名付け、「地域と世界を結ぶ有為な人材育成の望ましい在り方についての研究」という副題をつけて取り組んできた。コロナ禍で中止していたグローバルな研修の再開やより改善・深化したHAFプロジェクトを継続的に推進し、「地域と連携した教育活動を通して、地域についての認識を深め、グローバルな視野を併せ持つ生徒の育成」「地域と連携した教育活動を通して、自ら課題を設定し、他者と協働してよりよい解決に向け主体的に判断し、表現する力を身に付ける生徒の育成」を目指す。

2 実施計画と具体的内容

- 1) 実社会とのつながりを考え、地元企業の地域貢献やグローバル展開を知る（企業訪問）
- 2) グローバルの知識・理解を得て、考察・探究する態度を身に付ける（海外研修、オンライン交流）
- 3) 英語によるコミュニケーション力を育てる（イングリッシュキャンプ・Touch up English、英検取得推進）
- 4) 地域の人と協働、地域貢献する態度の育成（地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業）等への参画）
- 5) グローカル部による地域・国際的課題の解決策の探究、実践活動

3 各年度における取組

1) 企業訪問

- (1) 普通科2年選択科目「グローバル探究」の選択生徒（2年生14人）が矢崎総業株式会社 Y-CITY（裾野）を訪問し、企業の地域貢献やグローバル展開について学んだ。
- (2) 海外研修（ベトナム）において、地元企業の海外事業所（矢崎ハイフォンベトナム有限責任会社）を訪問した。（1年生希望者26人参加）

2) 海外研修、オンライン海外交流

(1) 海外研修

「地域経済社会と諸外国が密接に関係していることを理解するとともに、グローバルな視野と国際感覚の醸成を図る。」を目的に昨年度に引き続き海外研修（ベトナム）を実施した。

日程：2025年12月21日（日）～25日（木） 参加者：1年生希望者26人、引率教員3人



12/21(日)	学校出発 12:00、成田国際空港→ノンバイ国際空港	ハノイ市泊
12/22(月)	タンロン遺跡・バッチャン村、旧市街自由研修他	ハノイ市泊
12/23(火)	ホーチミン廟他研修、矢崎ハイフォン・ベトナム有限責任会社訪問	ハロン市泊
12/24(水)	ハロン湾クルーズ、ハノイ旧市街自由研修他	機内泊
12/25(木)	ノンバイ国際空港→成田国際空港、午後学校着	

(2) オンライン交流

- ・グローバル部（最大 33 人）：令和 5 年度から台湾の「国立金門高級中学」とオンライン交流を続けている。2、3 人のグループ対グループまたは 1 対 1 で、英語を使って、複数テーマを設定してディスカッションするなど、今年度は 4 回実施した。
- ・グローバル探究選択生徒（2 年生 14 人）：台湾の「臺南市立永仁高中学」1 年生 13 人と交流した。お互いの国や地域、学校についての紹介、高校で学んでいること、自分が探究していることなどについて英語で紹介した。



3) イングリッシュキャンプ・Touch up English、英検取得促進

夏季休業中に、イングリッシュキャンプ（普通科 1～3 年希望者 28 人）、Touch up English（理数科 2 年 27 人）を行った。ネイティブ教員を講師に、様々なセッションを行った。



4) 地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業（主催：牧之原市地域振興課、一般社団法人 CLIP））等への参画、グローバル部による地域・国際的課題の解決策の探究、実践活動

例：牧之原市が主催するビジネスコンテストに参加、国内外（インドや韓国）企業が参加する中、本校の参加チームはジュニア大賞を受賞した。

4 研究の成果と課題

- ・夏季休業中の英語研修については、理数科のプログラムを「Touch up English」として刷新し、海外修学旅行を見据えた実践的な発信力の強化を図った。普通科においても、英語でのコミュニケーションスキルを集中的・実践的に学ぶ機会となり、概ね目標を達成することができた。
- ・海外（ベトナム）研修については、2 年目ということもあり昨年度以上に充実した研修となった。研修を通して行う班別探究活動では、単なる調べ学習にとどまらない探究テーマを設定し、実際に各班が調査を行う様子が随所で見られた。また、研修中に生徒が気づきや考えをアプリで随時情報発信し、それらを全員で共有することによって、多様な視点を持つ機会となった。企業訪問や自由研修を通して、自身のキャリア形成や地域貢献の在り方を再考する深い学びにつなげることができた。時期や研修期間の問題点もあるが、生徒・保護者の満足度は高く、学校主催の研修ならではの質の高い体験機会としての価値を再確認した。
- ・事業全般を通じ、異文化理解や共生を単なる「知識」として学ぶだけでなく、「自分たちがこれからの社会をどう作っていくか」という自分事として捉え、自ら行動しようとする姿勢が見られたことは、本事業の大きな成果である。一方で、円安や物価高騰に伴う研修費用等の上昇は深刻な課題として残った。次年度以降、本事業の成果を維持しつつ、経済的負担を軽減するためにプログラムのさらなる効率化など、持続可能な実施形態を検討し続ける必要がある。



グローバルハイスクール

テーマ：内向き志向が強く地域課題に対しては誠実に取り組む本校生徒が、外を向き「グローバルな視野」を身に付けようとするにはどのような働き掛けが有効か。
(静岡県立浜北西高等学校)



1 グローバル教育の概要

本校では「グローバル教育」を「国際理解教育」と言い換え、特色ある教育活動として推進してきた。スクールミッションに「国際理解教育、DX教育、地域連携・協働活動などを取り入れた探究的な活動を通して、グローバルな視野で、将来、地域社会（ローカル）で活躍できる能力と態度を備えた人材の育成を目指す」と謳っているが、内向き志向が強く、「グローバルな視野」の獲得に課題がある。

今回「グローバルハイスクール」に採択されたことを踏まえ、三つの方向から「グローバル教育」の深化を図ることとした。まず、第一の方向は『探究』×『グローバル教育』の視点からの取り組みである。探究学習をより充実させ、「地域課題」をさらに深く掘り下げていけば、自ずから世界が直面する課題に目線が向くはずと考えた。第二に「体験」の視点からの取り組みである。内向き志向の強い生徒たちに、より多くの海外の人との交流「体験」、海外の文化の「体験」をさせることで、生徒の視野を地域だけでなく世界に広げるきっかけになり語学学習の意欲も増すことが期待できると考えた。第三に校内の「環境」づくりの視点からの取り組みである。LL教室を「交流ラボ」に模様替えする中で、Wi-Fi環境を整え、海外の書物、映画のDVDなどを揃え、英語を苦手とする生徒が語学学習に関心を持ち、探究学習で培った知見を海外の生徒とオンラインで意見交換したいという希望者が増加することを期待している。

2 実施計画と具体的内容

(1) 『探究』×『グローバル教育』

- ①講師招請 ②連携大学（常葉大学）での探究学習発表 ③先進校視察

(2) グローバルな「体験」

- ①タイ国シリントン高校交流（受け入れ） ②タイ国シリントン高校交流（現地訪問）
- ③AFS及びアジアの架け橋 留学生受け入れ ④グローバル研修の実施

(3) 「環境」づくり

- ①「交流ラボ」創設 ②異文化理解の書籍等の充実

3 各年度における取組

【令和6年度】

(1) 『探究』×『グローバル教育』

先進校視察や探究講師招請等を行い、グローバルな視点やテーマで探究に取り組み、令和7年度の方策について検討した。



(2) タイ国シリントン生徒交流（受け入れ）

連携校から11名の生徒の短期留学を受け入れた。コロナ禍以降の久しぶりの海外交流に、多くの生徒が大変良い刺激を受けた。



(3) フィリピン留学生1名 受け入れ

アジアの架け橋事業で訪れた留学生と、授業や行事、部活動を4カ月間共に経験することで、海外へ関心を向ける生徒が増加した。



(4) グローバル研修 (バス研修)

生徒 51 名が参加し、静岡県立大学では国際文化学科の学びを、熱海市役所ではインバウンドの取組を視察し、知見を深めた。



(5) 異文化理解の図書コーナー設置

異文化理解の図書を購入し、コーナーを設けた。連携校のシリントン生徒との交流用に、クラスに 1 冊ずつタイ語テキストを購入した。



【令和 7 年度】

(1) タイ研修準備講習会

8 月に 12 名 (生徒 10 名、教員 2 名) がタイ研修を実施する計画の下、タイ語や文化を学ぶ事前講習を全 8 回に渡り実施した。



(2) タイ国とのオンライン交流

8 月のタイ研修が、タイ国境付近での武力衝突により中止となった。12 月実施を計画するも情勢悪化により渡航を断念せざるを得なかったため、オンライン交流を実施した。



(3) 留学生 3 名受け入れ

アイスランド、アメリカ合衆国、インドネシアからの留学生を受け入れた。生徒達は身近に海外を感じ、国際感覚が養われている。



(4) 「交流ラボ」創設

LL 教室を改修し、可変的に使用できるテーブル等を整備した。オンライン交流や国際交流系の活動拠点として、運用を開始した。



before → after

4 研究の成果と課題

【成果】

- (1) 外国や異文化への関心の高まり・・・生徒アンケート (令和 8 年 1 月実施) で、「国際交流活動を通して、外国や異文化へ関心が高まった」と答えた生徒が 77.3% と多くを占めた。
- (2) 留学希望者の増加・・・ふじのくにグローバル人材育成事業 (トビタテ! 留学 JAPAN) に 2 名、韓国・忠清南道高校生派遣事業に 1 名、高校生訪韓団に 8 名がそれぞれ応募し、留学希望者が増加した。
- (3) 学校の魅力化としての位置付け・・・「本校の魅力は何か」(複数回答可) という新入生アンケートにおいて、「国際理解教育」を選んだ生徒が、16.0% (R 6) から 21.0% (R 7) に増加した。

以上の成果から、本研究のテーマである「グローバルな視野」の獲得は達成できたと言える。また、生徒アンケートによれば、有効な働き掛けは、グローバルな体験であることが分かった。

【課題】

「グローバルな視野」の獲得には、研究期間終了後も継続して、グローバルな体験を実施することが重要である。今回、連携校であるタイ国シリントン高校への研修が、国境付近の武力衝突により実現できなかったことは誠に遺憾であるが、来年度以降の実施もまだ不透明な状況にある。グローバルな体験を進める上で、国際情勢の安定は欠かせない課題と痛感している。

海外インターンシップ

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	未定		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立沼津東高等学校	氏名	森田 奈緒	学年	2

1 目的・応募理由

応募理由は、自分の父親がタイに単身赴任していたことがあり、タイや日本企業の海外事業所などに興味があったり、自分が将来就きたいと思っている職業の分野が工業であり、工場や企業が海外にあることが多いため、今回のタイのジャトコを訪問することが、良い経験になるのではないかと思ったからです。

目的は、日本企業の日本事業所と海外事業所の違いなどについて知ることです。特に海外事業所ではそこで働く現地のスタッフや日本人の話を直接聞いたり、周辺の街の様子を見てみたり、働き方だけでなく文化など違うところが多いと思うのでそこについて詳しく知ることです。

2 研修内容等

25日の夜に現地につき、夕食を現地のタイ料理店で食べたのち、ナイトマーケットへ行きました。

26日はジャトコのタイの事業所を訪問しました。

午前は初めに日本人スタッフの方とタイ人スタッフの方に工場内を案内していただいたのち、社員食堂で昼食をいただきました。午後は、工場での業務を一部体験させていただいた後、タイ人スタッフの方に質問をしたり、日本人スタッフの方に事前に送っていた質問に回答していただいたり、一日見学した中で出た疑問について質問させていただき、終了しました。

27日は市内研修としてタイの寺院や王宮、ショッピングセンターに訪問しました。



3 感想等

初日は本場のタイ料理を味わうことからスタートしました。普段なかなか口にすることのない独特な味付けや香辛料、食材の料理を通してタイの食文化の豊かさを実感しました。料理だけでなく、食事を囲む雰囲気や現地のマナーにも触れ、日本との違いに気づくことができたのも貴重な経験でした。夕食後にはナイトマーケットを訪れました。通りには色とりどりの屋台や商品が並び、現地の人々の活気に触れることができました。買い物の際には、日本語以外の言語でコミュニケーションを取るといった貴重な経験もできました。英語やジェスチャーを駆使しながら値段交渉を行う中で、言葉の壁を超えたやり取りの難しさや面白さ、そして通じ合えた時

の喜びを体感することができました

2日目のジヤトコでの研修では、まず工場見学を通して、製造現場のリアルな雰囲気の間近で感じることができました。ラインの流れや作業工程を見学しながら、普段自分たちも利用する車の部品がどのような工程を経て作られているのかを具体的に知ることができ、ものづくりの奥深さに改めて気付かされました。特に、印象に残ったのは、日本とは異なる文化の中で、多くの若いスタッフがいきいきと働いていた点です。国によって働き方の考え方や職場環境に違いがあることを実感し、グローバルな視点から働き方を考えるきっかけにもなりました。

また、安全管理や教育への取り組みについても詳しく説明を受け、企業としての責任感や社員育成に対する真摯な姿勢を感じました。自動車部品がどのように実際の車の中で機能しているかについても理解が深まり、理論だけではない現場での学びの大切さを強く実感しました。さらに、異文化の中でのコミュニケーションの難しさと、それを乗り越えた時の達成感や充実感も経験することができ、言葉や文化の違いがあっても、信頼や協力を築くことで強いチームワークが生まれることを学びました。

市内研修では、タイの歴史や文化に触れる数々の貴重な場所を訪れることができました。エメラルド寺院や王宮では、その荘厳で美しい建築と、細部まで丁寧に施された装飾に圧倒され、タイの仏教文化が人々の生活に根付いていることを強く感じました。寝釈迦仏がある涅槃寺では、その巨大さに驚くとともに、タイマッサージ発祥の地としての歴史的価値も知りました。暁の寺では、美しい陶器のモザイク装飾や独特な建築様式に感動しました。最後に訪れたアジアティーク・ザ・リバーフロントでは、現代的でにぎやかな雰囲気の中、タイの多様な一面を感じられました。これらの経験を通じて、企業研修だけでなく、文化や歴史に触れることの重要性を実感し、視野が広がったと感じています。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立沼津工業高等学校	氏名	勝又 大翔	学年	2

1 目的・応募理由

私は今まで、旅行も含めて海外に渡航したことがありません。高校生のうちに一度は海外に行き、自身の視野を広げたいと高校入学以来、強く感じておりました。そこで、今回、海外インターンシップに挑戦することで、視野を広げ、国際的な環境での実践的な経験を積みたいと考えていました。そして、専門的な技術を向上させたいと考え、応募しました。

これから私たちが生きていく社会は、ただ単に語学力に長けているだけではいけません。異文化交流と理解、グローバルな視点に立った課題解決能力、そして、さまざまな物ごとに対する柔軟な考え方が求められる社会だと強く感じます。また、国内における伝統技術の継承や、国外における技術の動向について把握することは、私たち若者にとっての使命だとも思います。

さらには、高度工業化がみるみる進歩する現場の最前線において、最新技術を直接、体験できることは、自分自身の技術力向上及び人格の形成に大いに寄与すると考えております。

2 研修内容等

本研修では、ジャトコタイランド社での工場見学や作業体験をさせていただき、バンコク市内研修も行いました。

最初の研修地・ジャトコタイランド社では、社内で行われる基本技能競技大会の体験をさせていただきました。体験は2種目あり、そのうちの1種目は、ねじを締める早さ及び正確さを競うものでした。もう1種目は、製品の寸法を正確に測定するものであり、こちらも実際に体験することができました。また、工場見学では、「どのように効率化が図られているのか。」「どのように安全に対する工夫が施されているか。」という視点から見学を進めました。加えて、「どのような製品を作っているのか。」「どのような工程で製品を作り上げているのか。」という観点についても、間近に見て、体験的に感じ取ることができました。

工場見学の最後には、とてもうれしい経験でもできました。それは、ジャトコ社製の製



品が搭載された自動車に乗せていただける機会が設けられたことです。乗車体験で

は、CVT（無段変速機）を搭載したものと、AT（自動変速機）を搭載したものに、それぞれ乗車することができ、変速機の違いを肌で感じるができる、非常に貴重な体験となりました。

次の研修、バンコク市内研修では、「アジアンティーク」と呼ばれる大型複合商業施設での研修を行いました。現地の文化や生活様式、経済活動の一端を体感することができました。

3 感想等

今回の海外インターンシップへの参加は、静岡県内の高校から多くの生徒が希望し、高い倍率の中、私もその一員として参加することができました。まずは、このこと自体が非常にうれしく、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回のインターンシップでは、私が今までに経験したことのない異文化交流や、価値観の違いについて、実際に身をもって経験することができました。これらの体験は、普段の生活では決して得られない、多くの気づきを得ることができました。

海外インターンシップに臨むにあたり、事前に行った研修も、私にとって非常に有意義なものとなりました。文化理解やマナー、安全面への配慮を実践する中で、最も大切なことは、「知識を実際の行動へ移す」作業です。このことが最も重要なことであると、強く感じました。また、自分自身の強みと課題について、客観的に見つめ直す、貴重な機会となる研修でもありました。今までは特に振り返ることもなく、平凡な一日を送っていたのだと気付かされました。これは、私自身、今後の学習や進路選択に大きな影響を与える経験になったと実感しております。

現地での活動では、自身の積極性に欠ける部分や、語彙力が大きく不足していることを感じる場面がありました。特に、初対面の相手に対して自分の意見や質問が、上手く伝えられなかったことに対して大きな反省が残ります。その一方で、そのような経験を通じて、事前準備の大切さや、伝えたいことを簡潔かつ明確に表現する力を養う必要があることを痛感しました。

今後は、英語力やプレゼンテーション力を身につけ、異なる価値観を持つ人々とのコミュニケーションを積極的に図っていきたいと考えています。今回の研修で得られたこと、反省すべきことの両面を今後に活かし、より主体的に行動することによって、国際的な視野を持ち、地域社会に貢献できるような人間に成長していきたいです。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	10月10日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立吉原工業高等学校	氏名	望月 涼聖	学年	2

1 目的・応募理由

友人との何気ない会話をきっかけに、海外に興味を持ちました。そして、見慣れない場所に自分の足で立ってみたいと思うようになりました。私はこれまで、このような挑戦の機会があっても、一步を踏み出せずに避けてきたことがほとんどでした。しかし、今のままでは変わらないと感じ、自分に自信を持ちたいと思いました。さらに、文化や価値観の違いに直接触れることで、もっと広い視野を手に入れたいという気持ちも強まりました。

特に、異なる環境に身を置くことで、自分がどこまで通用するのか試してみたいという思いが強くなり、成長のチャンスとして今回のインターンシップに惹かれました。日本企業だけでなく、グローバルに展開している企業の在り方を実際に肌で感じることで、急速に変化しているこの社会の中で、自分に何ができるのか、どのような価値を発揮できるのかを見つけたいと考えています。

海外という未知の環境で、柔軟な適応力や行動力を養いながら、新たな価値観を吸収し、自分自身をより深く理解するきっかけを得たいと思い、今回の応募を決めました。

2 研修内容等

ジャトコについて教えてもらった後、工場見学や安全教育を経て、昼食後に実習をしました。特に印象に残っていることが2つあります。

一つ目は、工場見学をしているときに、売り上げやコスト削減などの状況を視覚的に分かるように表示されていたことです。具体的にどのように変化しているのか、社員全員に共有することの重要性を学びました。このような情報の見える化はモチベーションにもつながりますし、計画を立てやすくなると感じました。

二つ目は、整理整頓の重要性についてです。不要なものを整理したことで、スペースが生まれ、社員の休憩スペースとして活用されていました。しかも、その休憩スペースに置いてある机や椅子は、余った材料で社員が手作りしたもので、部屋の



飾り付けも工夫されていました。社員一人一人が環境づくりに関われる雰囲気があり、職場全体が明るく、働いている人達の笑顔が印象的でした。

実習では、ボルト締めや測定をしました。ジャトコでは、国内外問わず会社で技術力を競う大会を開催していることを知りました。社員同士が競うことで技術力も上がることに加えて、一体感も生まれると感じました。実習の説明は英語や通訳を通して行われました。日本語以外で学ぶのは初めてだったのでいい体験でした。

日本の人達と比べて若くて活発な印象を感じました。タイのジャトコの社員達は、お互いの文化を尊重しあっていました。私もそうなりたいです。初めて海外の人と雑談しました。

当たり前のことなのですが、文化や価値観が違って同じ人間であることを改めて感じました。満足に言葉は通じなくても、気持ちは伝えることはできると学びました。

3 感想等

私はこのインターンシップに参加するまで海外に行ったことがなく、海外を漠然としか想像できていませんでした。実際に飛行機を降りて、日本語のない世界に立った瞬間、初めて海外を実感しました。税関では英語がうまく通じず不安でしたが、身振り手振りでなんとか切り抜けることができ、ほっとしました。バスに乗ると、道路や植物、鳥の声まですべてが新鮮で、まるで別世界でした。特に印象に残ったのは電線です。日本とは違い、継ぎ足しされていて絡まっている様子に驚きました。また、タイの交通状況は日本と大きく異なり、日本の整備の良さを改めて感じました。サービエリアで、男子トイレが野外にむき出しの状態で設置されていて驚きました。ホテルではシャワーの使い方も分からなかったり、水も飲めなかったり、トイレットペーパーも流せなかったりなど戸惑うことばかりでした。食事も日本とは違う香りや味に驚きましたが、文化の違いとして受け止めることができました。今回のインターンシップを通して、挑戦することは大切で、乗り越えられるということを学びました。税関での経験のように、自分から一生懸命に話しかけて挑戦すれば相手もそれに応えてくると、今では自信をもって言えます。短い滞在でしたが、自分の世界が広がったと感じています。挑戦する自信もつきました。この経験を将来の進路選択に活かしていきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ			
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年		
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	杉山 菜那	学年	2	

1 目的・応募理由

将来の夢について、医療系か国際系のどちらに進むかで迷っています。海外に行くことで、自分自身を成長させることができると思い、その経験を通じて本当にやりたいことを見つけ、将来につなげていきたいと考えました。また、これまで静岡の企業についてあまり知らなかったため、この機会に知識を深めたいと思いました。インターンシップに参加することで、将来の選択肢を広げることができると感じたのも、応募の理由の一つです。昔から海外に強い興味があり、今回のような貴重な機会があったため、思い切って挑戦することにしました。異国の地での経験を通じて、自分をさらに成長させたいと考えています。

2 研修内容等

今回の研修先である株式会社ジヤトコは、自動車用変速機や電動パワートレイン、その部品の開発・製造を行っている企業です。私はその技術や取り組みを学ぶため、工場見学に参加しました。工場見学では、重い荷物を運んだり持ち上げたりする作業をサポートする機械が導入されており、体への負担を軽減する工夫がされていました。そのため、性別に関係なく誰もが働きやすい環境が整っていると感じました。驚いたのは、そうした機械の多くが従業員の方々自身によって開発されているということです。私たちは、大小さまざまなネジを使って、どれだけ正確に・速く作業できるかを体験するワークにも参加しました。見ていると簡単そうに見えましたが、実際にやってみると細かく難しい作業で、思うようにスピードが出ず、改めて技術者のすごさを感じました。次に、ものさし（測定器）を使って長さや深さを測る作業にも挑戦しました。私はその測定器に初めて触れたので、使い方も目盛りの読み方も分からず苦戦しましたが、教えてもらいながらなんとか測ることができました。それでも正確に測定するのは難しく、経験とスキルが必要だと感じました。

また、ジヤトコタイランドでは、自社で農園を運営しており、その土地で従業員が作物を育てて消費したり、自作の椅子や机を置いた休憩スペースがあったりと、SDGsにも積極的に取り組んでいる企業ということもわかりました。

市内研修では、いくつかの寺院を巡りました。もともと寺院にあまり興味はなかったのですが、実際に訪れてみると、その迫力や雰囲気圧倒され、宗教や歴史的背景

を肌で感じることができました。想像以上に印象深い体験でした。ショッピングの時間もあり、タイらしいお土産を購入することができました。

3 感想等

初めての海外で、しかも知り合いがいない中での参加だったため、出発前は少し不安がありました。しかし、最終的には仲間たちと交流を深めることができ、友情を育むことができ、本当に良かったです。協力し合いながら過ごした時間はとても素敵なものでした。体験作業では、私は他のメンバーより作業スピードが遅く、「工業系の仕事には向いていないかもしれない」と思いましたが、従業員の方々が温かく見守ってくださったおかげで、楽しく体験することができました。ナイトマーケットでは、日本ではあまり見かけないアクセサリなども販売されていて、新鮮で面白かったです。値下げ交渉に挑戦したのも印象に残っていて、英語力の必要性も改めて感じました。夜は少し治安が心配でしたが、それも含めて初めての体験で、好奇心が刺激されました。市内観光ではバスでさまざまな有名な寺院を巡りました。車窓から見える風景は日本とはまったく違い、特にスラム街の様子が強く印象に残っています。日本では考えられないような環境を目の当たりにし、日本での暮らしのありがたさを改めて感じました。訪れた寺院はどれも迫力があり、日本の寺院よりもカラフルで規模が大きかったため、写真を撮るたびにそのインパクトに驚かされ、たくさんの写真を撮りました。今回の3泊4日の研修では、数えきれないほどの貴重な体験をすることができました。静岡から世界に進出している企業のすごさや素晴らしさを実感し、私にとって本当に印象に残る、最高の時間となりました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立島田工業高等学校	氏名	鈴木 魁星	学年	2

1 目的・応募理由

私は将来システムエンジニア（SE）に就き、人々の生活を便利で豊かなものにしていきたいと考え、今回の海外インターンシップに応募しました。

応募したきっかけは、海外に興味を持っていたからです。母は海外への留学経験があり、私に物事の見方の変化や異文化の理解など、実際に海外に行かないとわからない話をしてくれました。また、SEになるためには視野の広さとコミュニケーション能力が必要です。海外研修に参加することで、日本とは違う文化や考え方が現地の人との交流を通して理解できます。そのため、グローバルな視野を広げ、語学力の向上ができると考えました。現地の企業、学生の方との交流を通じ、システムエンジニアに必要な視野の広さとコミュニケーション能力を習得したいと思い、研修に応募しました。

2 研修内容等

国内研修は、7月30日発生のカムチャツカ半島付近の地震により代替動画視聴に変更されました。代替動画視聴では、実際にタイで働いたジャトコ社員によるタイ生活上の注意とタイ語の基本を学びました。少し曖昧だったタイという国への認識が動画を視聴したことで鮮明になりました。また、タイ語を学ぶ中で、学校で学んでいる英語との文法の共通点について知りました。身近な言語との共通点を知ることで、新しく学ぶタイ語への抵抗感が薄れました。

海外研修の一日目には、タイ王国・バンコク市内について案内を受けながら、新しい環境に体を慣らしました。案内中は現地の寺院や宗教分布、チップ文化、渋滞が多い交通事情などの説明を受けました。渋滞について説明を受けた直後に1時間ほど渋滞にはまり、日が出ているうちはこれが日常だと聞き、驚きました。夜には初めてのタイ料理をいただきました。前日まで味わっていた日本料理とはあまりに違う味わいで、とても美味しかったです。しかし、口に合わない料理もまたありました。

二日目には、ジャトコ株式会社の現地工場へ見学を行いました。現地工場では、ジャトコ株式会社について概要の説明を受けた後、工場内の見学や作業体験、従業員との交流会を行いました。初めにジャトコの主な事業の説明を受けました。また、人材派遣、CO₂削減・リサイクルなどのCSR活動、機械部品・工具の研磨について説明を受けました。見学では、製品の品質、効率向上の工夫を学びました。

作業体験は、研修グループ内でジャトコ内の技能大会の種目の体験をしました。誰かと競い合う場が技術向上に大きく役立つことを実感しました。また、現地工場の安

全教育である、飲酒運転および作業中の事故の模擬体験をしました。体験によって事故や飲酒運転の危険さ、安全教育の説得力の高さを実感しました。

最後に、従業員の方と交流をしました。日本の従業員への質疑応答では、現地での言語の壁や文化の違い、海外転勤のメリットなどを聞きました。

三日目には、ワット・アルンやエメラルド寺院など各種寺院や、王宮といった文化的に重要な建築物を訪問しました。寺院に入る際は靴を脱ぐマナーや、壁画を通じた伝承などを聞き、関心が深まりました。また、寺院では日本の寺と違い、壁がすべて金箔で装飾されていたり、仏像に宝石が多く使われていたり、豪華絢爛という言葉が頭に浮かぶほどきらびやかで驚きました。

3 感想等

研修で特に印象に残ったことはジャトコ工場見学の人材育成です。説明に加え、実際に事故を体験し、手順書などを守る必要性や事故が起きた時の対処法を学んでいて、実体験の大切さを感じました。また、技能大会を開催することで技術向上のモチベーションを上げ主体的に成長を図る仕組みがあり、環境づくりが大切だと思いました。

また、研修に参加する前は外国の方との異文化交流には不安を持っていました。しかし、実際に話してみると表情や動作、声色などで考えていることが理解できました。言葉だけではなく、表情や動作もよく観察することの必要性を実感しました。あわせて、今回の経験で行動に移すことが多くの問題に気づき、早期解決や意思決定の能力を高めることを実感できました。これからも様々なことにチャレンジしていきたいと思えます。

タイの産業や生活の違いについて学ぶことで、タイだけでなく日本の良し悪しにも気づくことができました。私が海外に思っていた『生活や仕事は日本の方が良い』という偏見はなくなり、偏見にとらわれない考え方、そのための実体験の大切さに気づくことができました。研修中は文化や常識の違いに苦労することがありました。この経験を通じて、新しい環境に適応する力が身につきました。社会人になったとき、転勤で海外に行くことへの関心が強くなりました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜松工業高等学校	氏名	加藤 来都	学年	2

1 目的・応募理由

グローバル化が進み約100万人の人が海外で働いていて、多くの企業が海外進出している。そのため、自分も海外で働く可能性が高いと思い、高校生のうちから海外で働くことの意義や大変さを学びたいと思ったため本事業に応募した。特にジャトコ株式会社は、日本の自動車産業を支える企業であり、自動車開発に関わりたいと思っている自分の将来に直結する体験になると考えている。

2 研修内容等

《実施前研修》

- ・日時・場所
令和7年7月20日(日)
静岡県庁 別館7F 第四会議室
- ・内容
事業の趣旨説明
グループで自己紹介
国内研修・海外研修の説明
渡航ガイダンス

《国内研修》

- ・日時・場所
令和7年7月30日(水)
ジャトコ株式会社富士市A地区(本社)
- ・内容
会社紹介
タイの歩き方
タイ語の自己紹介を作ってみよう
工場見学



《海外研修》

- ・日時・場所

令和7年8月25日（月）～28日（木）

バンコク ジヤトコタイランド社

- ・内容

会社紹介・工場見学・作業体験

バンコク市内研修

3 感想等

事前研修では、同じグループの人との繋がりを深めることができ、研修をより有意義なものにできた。ジヤトコ株式会社で予定されていた国内研修は、津波警報の影響で中止となった。現場を実際に見て様々なことを体験したいと思っていたのでとても残念だと感じた。

海外研修では、工場にある様々な工夫を見た。生産ラインではカラクリを用いて従業員の負担を減らしたり、本当に必要な物か見直して無駄を削減しできた空きスペースを有効活用したりしていた。また、従業員が働く中で成長できる JEBS という生産方法やスキルトレーニングを行っていることから従業員の成長を重視した企業姿勢を強く感じた。作業体験では、ジヤトコで行われている技術大会の Global Basic Skill Championship の競技の一部に挑戦した。自信はあったが実際にジヤトコで働く人には速さも正確さも遠く及ばず、プロとの差を感じたのと同時に技術力の奥深さを実感する良い機会になった。市内研修では、エメラルド寺院やワット・ポー、ワット・アルン、王宮など歴史的建造物を見学し、タイの文化や宗教の奥深さを肌で感じる事ができた。独特な雰囲気を持つ建築や迫力のある仏像に触れることで日本との違いを改めて考える貴重な機会となった。研修以外の所では、文化、宗教、食文化の違いに触れた。本場のタイ料理の味付けが独特で慣れるのに時間がかかった。言語の違いによる壁が高かったが、観光地では英語を話せる人が多かった。苦手だったが英語で話す挑戦をした。そこでコミュニケーションを取るときに大切なのは、正しい文法や正しい発音ではなくジェスチャーなどを駆使してなんとか伝えようとする姿勢だと感じた。

今回の研修で得た学びや感じたことを今後の生活に結び付け、この研修で培った積極性や挑戦心を忘れず日々の生活や学習に活かしていきたい。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	9月22日、25日		(対象)	全校・ <u>学年</u>	
学校名	清水国際高等学校	氏名	澤野 修兵	学年	2

1 目的・応募理由

私は、公立受験に落ちてずっと後悔していました。いつも思ってしまう。

どんな学校生活があったのだろう、どんな部活に入っていたのだろう、どんな将来があったのだろう。きっと今とは違う、もっと生き生きとした自分になっていたのではないかと自分勝手に捉え、妄想の中の自分があたかも本当の自分なのだと思います。ようにしていました。私にこの話が来た時、いつもの私なら断っていたと思います。卑屈になっていたのです。

しかし、先生が私にこの海外インターンシップの声掛けをしてくださったとき、なんだか自分が認められたように感じました。「どうせ自分なんか」と卑屈になっていた私にとって、他人から認められることは自分が思っていたよりも嬉しく、誇らしく感じました。理想とは違う生活、せつかくなら色々なことに挑戦して、たった一度しかない高校生活を後悔のないようにしたい。そのような思いから、高校生海外インターンシップに応募しました。

また、なぜ研修先をジャトコにしたかという、ジャトコは静岡県の売上高ランキング一位の会社で車の変速機も、トップシェアを誇っており日本の工場やタイの工場でのどんな仕事をしているのか、どんな影響を及ぼしているのか気になったからです。日本の企業と海外の企業との違いにも興味があります。国内研修が津波警報で中止となったため、国内企業の研修はできませんでしたが、海外で働く日本人の方に日本との違いを聞いて比較してみたいと思いました。労働時間や労働環境、仕事に対する考え方など、比較してみたいことがたくさん思い浮かびました。世界と比較すると、日本人は働き過ぎだと聞いたことがあります。年間休日の数も先進諸国の中ではかなり少ない方だと認識していました。年間休日が多い国からすると、日本と同じように労働時間を設定した際、問題にならないのか？文化の違いには特別な対策を講じているのか？など聞いてみたいことが増えていきました。

2 研修内容等

今回、海外のジャトコに行って、海外で働く日本人を見て、海外で働くなんて言葉、文化、考え方、が違うから大変そうと思っていましたが、社員の方々はとても楽しそうに仕事をしていて、現地の人とも仲が良かったです。ジャトコは誰でもわかりやすい企業を作っていて、人を尊重することを大切にする理念が、大企業への成長に繋がっていったのだと思いました。

また、現地の人たちはとても働きやすそうな環境で働いていると思いました。なぜなら、広いサッカーコートや、気軽に会話できるカフェスペース、広い食堂などいろんなところでコミュニケーションがとれ、仕事の効率化、ストレス解消など社員のこともしっかり考えられていました。

ジャトコはほかにも事故なしを掲げていて、タイの社員が一つ一つ丁寧に製品を確認しているところが見られ、日本の企業の品質の良い商品がしっかり作られていて遠く離れた国の日本企業でも日本の理念が伝わっていて驚きました。

また、海外で働くことは不安が大きいと思っていたけれど、会社に認められたことがなにより嬉しかったとのことで、そのため不安はなかったらしく、私もこのインターンシップの話を担当の先生から聞いたときは、学校に自分が認められたと感じましたが不安は大きかったので、その決断力はすごいと思いました。

ジャトコでは、『事故なし』を目標に掲げており、タイの社員が一つ一つ丁寧に確認しているところが見られ、日本の企業の品質の良い商品がしっかり作られていました。遠く離れた海外でも、日本の企業の精神が根付いていることに驚いたと同時に嬉しくも感じました。この海外インターンシップで日本企業と海外企業の違いを比較し

たいと考えていましたが、残念ながら国内研修は中止となってしまったため、比較は難しいと思っていました。しかし、ジャトコのタイランド社のインターンシップを体験したことで、日本のジャトコも同じなのだろうと思うくらいに、企業の社風に反映されていると感じました。それほど、企業理念が国内外の社員を問わず浸透しているということなのだと思心させられました。

また、実際にある大会の競技のオリエンテーションがあり、車に使われるネジを締める競技はすごく単純な作業でしたが、両手を使って同時に絞めるのは、思ったよりも時間がかかって本職の人と一分以上の差がついてしまいました。ほかにも、実際使われる測定器を使って物の長さを図る競技では、使い方もわからない、見方もわからない状態で、簡単な説明と五分程度さわったところで競技が始まり、6問中3問正解と、なにもわからない状態でやってみた割には悪くない成績で終わることが出来ました。言語がなかなか伝わらない中での作業は、こんなにも困難をきわめるのかと思いました。今回体験した内容は、業務のほんの一部に過ぎないと思いますが、一つ一つの作業を社員の皆様が丁寧に行っているということを実感するには十分でした。



現地の日本の社員の方と話をすると、みなさん海外勤務に抵抗を感じておらず、むしろ前向きに海外勤務を希望されたことが分かりました。海外自体にしり込みしていた私とは違い、その積極性に感心させられました。私も何事にもしり込みせず、挑戦する心を大切にしたいと思いました。今回のインターンシップも参加したからこそその気づきや学んだことがたくさんあったので、挑戦するからこそ得られるものがあることを再認識することができました。

3 感想等

タイのジャトコで働いている日本人は、少人数でそんな中、二百人近くいる社員をまとめていて、とても背中が大きく見えました。日本の企業でも活躍していたことで転勤の話が回ってきたのだろうと思納得すると同時にとても尊敬しました。

また、タイでは日本車が多くジャトコの主要な納入先に日産や三菱、スズキなどがあり多くの日本車にジャトコの変速機が使われているため、大きな影響を世界に与えていることを知りました。しかし、違う地区に行くとともに貧困化が激しく、貧富の差が大きいことに驚きました。また、道路が毎日渋滞したり、ゴミが散乱していたり、日本の凄さを再認識する良い機会にもなりました。今回、初めてタイに行って、私は日本と似ているところがたくさんあるなと思いました。例えば、車が左側通行だったり、制服、高層ビルだったり、先生が言っていた通り「所詮同じ地球」という意味がわかったような気がします。海外にある企業を実際に見てとても興味を持ちました。いつかは、私も海外で働いてみたいと思うようになりました。その為には、たくさん勉強して海外に支社を持っている企業に就職する必要があります。



たくさんの方のことを体験して私は、自分に自信を持つことができ、色々な視点で物事を考えていきたいと思うことができました。何の目標意識もなく、ただ毎日を過ごしていた私でしたが、この海外インターンシップの経験は将来の「仕事」に対する意識を変えるとともに、日本での日常が世界の日常ではないことを実感したことで、充実した日々を過ごすことの大切さに気付かされました。自分を変えられるチャンスだと思い参加した海外インターンシップですが、その考えは間違っていなかったと、今はひしひしと感じています。挑戦することは人を成長させ、自分で自分を認められるようになると思学んだことで、これまでの私とは全く違う「私」に成長することができると思っています。この経験を今後の生活に活かし、高校生活を充実させたいと思いました。このような自分を変化させる機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	8月28日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立清水南高等学校	氏名	大場 百華	学年	2

1 目的・応募理由

私が今回高校生海外インターンシップに応募したのは、私自身が将来についてまだ詳細なビジョンを決めていないからこそ、実際の就労現場を直接拝見することで仕事や就労についての視野を広げることができ、本事業が自分の未来の選択肢を広げる機会になると考えたからです。今回の受け入れ先企業であるヤマハ発動機株式会社はオートバイを中心に事業を展開する輸送品機器メーカーであり、エンジン部品をはじめとする高度な技術を持ち、JAXAの研究する航空機用のモーターの開発・提供実績もあります。航空宇宙産業に関心がある私は、そうした分野との業務提携を行う企業で実際に働いている方々の姿を見ることで、自分の興味関心をどのような形で自らの将来に落とし込むかを考える一つのきっかけになると確信します。

また、将来海外で働きたいという個人的な希望もあるため、「海外で働くとはどういうことなのか」といった根本的な定義や意義を肌で体感する機会にもなると思います。高校生のうちに異文化でものを学ぶという体験は、私の人生の中でも非常に意味を持つ経験となることと思います。

2 研修内容等

今回のインターンシップは、国内研修と海外研修の二つの研修から構成されました。国内研修では、ヤマハ発動機株式会社の国内本社にて事業説明を受け、本社および工場の見学を行いました。また、台湾やタイに駐在経験のある社員の方から現地での経験や仕事内容について説明をいただき、グローバルな働き方への理解を深めることができました。ヤマハ発動機コミュニケーションセンターを見学する機会もいただき、ヤマハ発動機の歴史や製品展示をみて、企業の活躍の幅を一層理解することができました。



海外研修一日目には、台湾の現地工場の見学や、台湾の販売拠点への訪問を通じて、バイク文化の根付く海外市場での事業展開の実態を学びました。さらに、現地で活躍する駐在員の方との交流会では、海外勤務における実務面や生活面の具体的な話を伺い、グローバルに働く姿を身近に感じることができました。駐在員の方々の挑戦的な生き方、明るい考え方も強く影響を受けました。

加えて、海外研修二日目の台北市内研修では、龍山寺や中正紀念堂、九份を訪れ、台湾の歴史や文化に直接触れる体験をしました。特に龍山寺では、伝統的な神社の参拝方法・御籤の引き方を実際に体験して、日本との文化の違いを痛感しました。

さらに、二日間を通して台湾料理や北京料理を存分に堪能し、円卓料理の文化を通

じて現地理解を深める貴重な機会となりました。

3 感想等

今回のインターンシップを通じて、私は企業のグローバル展開の実態と、日本とは言語も常識も異なる地域の中で働くことの難しさや面白さを学ぶことができました。

国内研修では、静岡県内にあるヤマハ発動機株式会社の日本本社を訪問し、ランドモビリティに限らない幅広い事業展開や社員一人ひとりの新たな挑戦を後押しする温かい社風に触れました。特に、ヤマハ発動機の美意識には強く心を打たれました。オートバイを単に乗り物として扱うのではなく一つの芸術作品として扱い、細かなキズ一つないようバイクの外観や塗装のツヤに徹底したこだわりを持っていると言います。こうした意識や、出荷前に厳重に製品チェックを行う姿勢はまさに「感動創造企業」だからこそだと感じました。こうした企業特有の文化や工場の雰囲気に触れたことで、静岡のものづくりにおける価値観の拡大を実感しました。

海外研修では、台湾の工場や販売拠点の訪問、日本とは異なる市場環境の中で働かれる駐在員の方々のお話から、多くのことを学びました。高速で高品質な製品の生産体制や、従業員が一層働きやすくなる環境整備の工夫などを目の当たりにし、グローバル市場で活躍し続ける企業の努力を理解しました。駐在員の方々に教えていただいた言語の壁を乗り越えるためのコミュニケーションの工夫や、「できない理由を考えるより、どうすればできるか」というポジティブな思考法は、私の今後の人生で大きな財産になると確信しています。また、日本とは全く違う台湾のバイク文化を肌で感じ、グローバルに事業を展開する上で、その土地の文化や現地の人々のニーズを深く観察し、理解することの重要性を学びました。



また、台北市内研修では、龍山寺や中正紀念堂、九份といった歴史的で文化的な名所を訪れ、台湾の伝統や文化に直接触れることができました。龍山寺では信仰が生活の中に根付いている様子を体感し、台湾の歴史を象徴する中正紀念堂の美しい建築にも圧倒されました。九份の町並みには日本統治時代の面影を感じる和の雰囲気が漂っていました。加えて、台湾料理や北京料理を味わうことができたことも忘れられない思い出です。食文化はその土地の人々の暮らしが反映されやすいため、台湾現地の方々の生活や価値観をよく体感できたと思います。

今回のインターンシップ全体を通じて、私は挑戦することの大切さを学びました。実際、本事業へ応募するという「挑戦」をしたからこそ、研修のご縁をいただき大いなる学びと自身の成長につなげることができたため、挑戦により未来が大きく変わることを身をもって体感しております。本インターンシップに参加できたことは本当に幸運なことでした。トライ&エラーを繰り返し、何事も諦めずにやり遂げる姿勢こそが、自分の成長や未来につながるのだと思います。今回の経験を糧に今後も自分の興味を突き詰めて学び続け、将来は多様な価値観や背景を持つ人々と協働し、日本と世界をつなぐ存在になりたいと強く感じています。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月18日		(対象)	学年	
学校名	静岡県立掛川工業高等学校	氏名	鈴木 大翔	学年	2

1 目的・応募理由

私は将来海外で働きたいと考えています。その際外国の人とコミュニケーションをとることは必須です。そのため、この海外インターンシップに参加し経験を積みたいと考えたのが応募のきっかけです。またこのインターンシップには、県内の行動力のある人が集まる場所であるため、そのような人達と関係を持てるチャンスをつかみたいと思ったというのも参加した理由の一つです。他にも、実際に会社で働いている方にお話を聞ける機会は貴重なため、このようなチャンスを逃したくないと思いました。研修するにあたって、しっかり話を聞いて自分の成長につなげようと意気込んで研修に参加しました。

2 研修内容等

この海外インターンシップでは全部で三回の研修がありました。

一回目の事前研修ではこの事業が行われる意義や、日本経済の現状からこれから求められる人材などについて話を聞きました。そこでは、チャレンジ精神があり積極的な人材がこれから必要とされていくことを知りました。また、一緒に研修に行く仲間と自己紹介などの交流をして仲を深め、台湾に代表として向かうという心構えをつくることができました。他にも日本と海外の文化の違いや、注意点などを旅行会社の方に教えていただきました。

二回目は国内研修を行いました。ヤマハ発動機会社と工場を訪問させていただきました。海外駐在経験のある社員の方のお話を聞く機会があり、駐在中の生活の様子や海外の社員の方とコミュニケーションをとるコツなどについて知ることができました。また、工場見学をした際には、業務効率化の仕組みや福利厚生の手厚さを実感させられました。具体的には、製品を運ぶのがすべてロボットであったことや、社員一人一人にエアコンがついていたことなどです。また子供のうちからヤマハを好きになってもらい大人になった時大きな買い物をしてもらうために子供用の乗り物を作っているということを教えていただきました。このように長期の目線で物事を考えることが売り上げを伸ばすことに繋がっているのだと実感しました。



三回目の研修では、台湾のヤマハ発動機を訪問させていただいて駐在員さんや社長さんのお話を聞いたり、工場見学をしたりしました。工場見学で特に印象に残っているのは社長の言葉で、自分より年齢が大きい人のアドバイスは聞いたほうが良いというものです。親や先生に叱ってもらう時ただ頭にくるなど思うのではなく、冷

静になって聞き入れてみていると、ほとんどが大人になった時あの人が言っていたことは正しかったなと思うそうです。自分もそのような経験があったので、叱ってくれる人を大切にしてお話を吸収していきたいなと思いました。

また細かい作業が求められる場所には、女性社員を起用するなどして、女性の活躍できる職場づくりを行っているとわかりました。全ての業務が、さらなる利益のために合理的に組み立てられていることがよくわかり、改めて日本のものづくりのすごさを感じました。夜は市場に買い物に行ったり、台湾の料理を食べたりして現地の方とコミュニケーションを取りながら異国の文化に触れることができました。

3 感想等

今回の台湾でのインターンシップを通じて、文化の違いを肌で感じることができました。車でなくバイクを持つ人が多くて信号のところにバイクがたまる場所があったり、水道水が飲めなかったり、自販機が外に無かったりなど、日本にいるときは当たり前だと思っていたことが海外だと普通でないこともあると実感しました。特に水道水が飲める日本は本当に恵まれているとわかったので、当たり前を当たり前だと思わず色々なことに感謝して生きていきたいです。

また私は今回のインターンシップに参加してチャレンジする力がついたと考えています。今までの私はこのような活動に参加するような人間ではなかったのですが、成長する為に参加に踏み切ったからです。台湾では外国の人と英語で話す機会がたくさんありました。今まで勉強してきたものを実際に使い、会話できたことがうれしかったです。

しかし、学校で学んだものと実際話すのとは大きな違いがあり、うまく話せないこともありました。まだまだうまく話せないことを実感したので、これからもっと英語の勉強を頑張り、高校卒業までに英検準一級を取得したいです。

また、社長さんや社員さんなど、たくさんの方から勉強になる話を聞くことができました。特に、「自分から行動を起こせる人がどんどん成長するし昇進する」という言葉には感銘を受けました。受け身で過ごしていても進歩はなく停滞しているだけで、結局は自分から動かないと変わらないということを学びました。これからの生活では様々なことにチャレンジして、もっと主体的な行動が出来る人になりたいです。他にもヤマハ発動機の職場はとても雰囲気が良くみんなが楽しそうに仕事をしていました。自分も将来そのような良い雰囲気の会社に入るために勉強をもっと頑張らなければいけないなと感じました。ヤマハ発動機の社員の方々のようなカッコいい大人になるために、今回のかけがえのない経験をこれからの生活に生かしていきたいと思います。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立磐田西高等学校	氏名	太田 海斗	学年	2

1 目的・応募理由

現在多くの日本企業は日本国内にとどまらず海外に生産拠点を置き、諸外国と取引をしています。今後、私が働くときのために海外の生産現場の様子や海外の文化や価値観について知りたいと思ったのが応募した理由です。

私は海外に行くのが初めてなので、日本と関わりが深く、教育や生活様式、食文化などが似ている台湾、そして地元磐田市に本社があるヤマハ発動機株式会社に行きたいと決めました。

2 研修内容等

国内研修

<従業員の方のお話から>

- ・ヤマハ発動機は売上の9割が海外であり、それは180を超える国での販売によるものだということを知りました。ヤマハ発動機は他の会社に比べて他国の現地での長期滞在者が多く、そこもこのような売上の状況をもたらしている要因であるということがわかりました。
- ・ヤマハ発動機では乗り物だけでなく浄水装置や産業用ロボット、車椅子等の商品を作っていることを知りました。浄水装置はアフリカ向けに作っているようで、SDGsにも配慮をされていて感激しました。

<工場見学>

- ・産業用ロボットは組み立て工場の自動化にも使われていて、無人搬送機という機械が組み立て工場の中で動き回り、荷物の自動運転をされていて驚きました。
- ・組み立て工場の中には1日社員1本無料という自動販売機が設置されており今の日本の暑さを考慮し、社員のことを思っていると感じました。



海外研修

8月5日

<従業員の方のお話から>

- ・仕事で心がけてほしいこととして、①常にポジティブ思考でいること ②コミュニケーション能力を高めること の2点が挙げられた。ポジティブ思考でいることで職場全体の士気の向上にもつながり、失敗を恐れずたくさんの方に挑戦できるようになるそうです。そして、コミュニケーション能力を高めることは海外での外国人との会話の時に不可欠で、他の人と打ち解けることができると会社全体の生産性の向上につながると伺い、とても大事なことだと感じました。

- ・高卒で入社した人でも10人に1人は海外で働いていることに驚きました。そして、日本人と台湾の人では考え方に違いがあるようで、例えば指示を出す際にやったことにどのようなことがおこるかといった説明が必要であるなど、海外で働くことの大変さを知りました。
- ・学生時代にやっておいたほうが良いことは「視野を広げる」ということで、たくさん本を読んだり映画を見たりすることで様々な感情を抱くことが大切だということをお教いただきました。

<工場見学>

- ・日本と違ってあまり自動化されておらず、手作業で行っていることが多かったです。
- ・帽子につけるバッチによって、初心者なのか、ある程度熟練した者なのかが一目で分かるようになっていました。初心者の方が分からないことを聞きやすいようにとの配慮が手厚く、働きやすさにつながっていると感じました。

8月6日

<台湾支部の方のお話から>

- ・台湾では日本の文化が親しまれており、特にアニメの文化はとても親しまれていて街中の至る所に日本のアニメのイラストが貼られていたり、夜市では日本の商品が売られていたりしていて、日本文化が愛されているんだなと感じました。
- ・台湾の経済は順調に成長しており、2024年に台湾が日本を上回ったことを聞いて、危機感を感じました
- ・日本の商品は台湾ではやはり人気で、ドン・キホーテは日本では激安の殿堂とされているが、台湾では高級スーパーとして利用されていると聞きました。日本の高品質のイメージはまだ続いているということを知って安心しました。

3 感想等

海外インターンシップに応募したものの、最初はとても不安でした。しかし、他校の新たな仲間たちと出会うことができ、充実して学ぶことができました。多様な価値観や文化に触れ、自分の視野がとても広がっていくことを感じました。

台湾では、言語が通じないために戸惑うことがあり、そのたびにコミュニケーションの必要性和難しさを感じました。これまで私は、周りの人とコミュニケーションがとれる方だと思っていましたが、今回の経験を通じてコミュニケーション能力をもっと磨く必要があるということ、身をもって感じました。

ヤマハ発動機はグローバルな企業であり、高卒で就職しても海外へ転勤する可能性があることを知りました。以前は自分が海外で働くことなど想像できませんでした。今回の経験から、外国の方々のそれぞれの国民性を理解した上でコミュニケーションを図っていくこと、またポジティブな思考をもつことなど、必要なことを学ぶことができました。今後の高校生活では積極的にさまざまなことに挑戦し、英語などの語学力を身につけるなど、将来のためにしっかりと準備しようと思いました。今回、海外インターンシップにチャレンジして、本当に良かったです。ありがとうございました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	未定		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜松東高等学校	氏名	真砂 侑依	学年	2

1 目的・応募理由

私が応募した理由は2つあります。

1つ目は、もともと海外の文化や仕事に興味があり、この海外インターンシップを通して実際に現地で仕事を体験することで、自分の視野を広げたいと思ったからです。

2つ目は、二年生に進級して将来について考えるようになり、様々な価値観や環境に触れる経験が自分の成長につながると思ったからです。

2 研修内容等

《国内研修》

- ・ヤマハ発動機株式会社についての説明
- ・駐在を経験された方のお話
- ・ヤマハ発動機株式会社の工場見学
- ・コミュニケーションプラザの見学
- ・取り組みについての動画視聴



《海外研修》

- ・YMT（台湾の工場）の見学
- ・YAMAHA の駐在員の方のお話
- ・YAMAHA のバイク販売店訪問
- ・質疑応答
- ・県駐在員事務所訪問
- ・県駐在員の方のお話
- ・静岡と台湾についてや取り組みについてなど



3 感想

私は今回のインターンシップでとても大きな経験をしました。YAMAHA についてはもちろん、海外で働くことの実際の声や様子を体感し、働くこと自体への価値観や大切なことを学びました。国ごとの規則やニーズを的確にとらえた製品づくりを行っていることを知りました。製品設計だけでなく、梱包まで輸出する現地の事を考慮して対応しているという話は、YAMAHA のグローバル企業ならではの配慮と工夫を感じました。国内と台湾の工場を見学し、機械化・自動化が国を問わず進んでいると感じました。以前までは手作業で行っていたことも機械が自動で作業するようになり、工場の中で作業をする方の負担を軽減していることを知りました。その影響により今後は、「機械を操作、管理できる人材」が求められるという話を聞き、時代や環境にあったスキルを身に着ける事が大切だと思いました。台湾のホテルでエントランスで話す必要があったときに、台湾の言葉をしゃべることが出来なくて困りました。それでも英語でコミュニケーションをとることができ、言語の壁は想像以上に高いと思いました。本当に伝わっているのか、この表現で合っているのか。少し話すだけでもとても緊張し、不安もありました。ジェスチャーも自然と出てきて、日本ではなかなか経験できない貴重な機会だと思いました。トイレの使い方や、食事のマナー、日本人の癖など当たり前だと思っていたことが日本の文化であり、むしろ日本の文化の方が特徴的である事も気づき、日本についても少し詳しくなりました。仇分を散策していた時に、日本語で話しかけられコミュニケーションをとったことがとても驚きました。日本語は日本でしか話されていないと思い込んでいました。しかし、他のお店でも日本語で話しかけられ、わからないことがあれば日本語で優しく教えてもらいました。日本語を勉強し話せる方や日本に対して強い関心を持っている方がこんなにもいて、言語の壁は高くてもそれを乗り越えようと努力する人が沢山いると気づきました。言葉が通じるだけで、心の距離がぐっと縮まって、日本人同士と話すこととはまた違った新たな感覚を味わいました。自分自身も日本語だけにとどまらず、多言語や異文化への理解や学習に力を入れたいと思いました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜松商業高等学校	氏名	山崎 りん	学年	2

1 目的・応募理由

私が台湾での海外インターンシップに応募した理由は、実際に海外の職場を体験しながら、自分の視野を広げたいと思ったからです。日本と地理的にも文化的にもつながりの深い台湾での体験は、国際理解を身近に感じる大切なきっかけになると思いました。

目的としては、まず現地の人々との交流を通して、言語だけでなく価値観や考え方の違いを体感することです。台湾の人々はフレンドリーで人との距離が近いと聞いており、その中で自分がどのようにコミュニケーションを取れるのか挑戦したいです。

さらに、将来の進路を考えるうえで「海外で働くことが自分に合っているのか」を知りたいという思いもあります。

2 研修内容等

今回の研修は、国内研修と海外研修の二本立てで実施されました。国内研修では、磐田市にあるヤマハ発動機本社を訪問し、実際に働く社員の方から会社の歴史や製品の特徴、企業が世界展開するうえで大切にしている姿勢について説明をいただきました。また、将来社会に出るうえで必要となる力や心構えについて質問する機会もあり、自分の進路を考える上で大変参考になりました。



海外研修では、台湾にあるヤマハ発動機を見学しました。現地の社員の方からは、日本と台湾での業務の違いや、それぞれの役割分担について具体的にお話を伺うことができました。その後、専用車で販売店の見学にも向かい、店舗の方からは製品を販売する際の工夫や顧客対応へのこだわりを直接聞くことができました。商業を

学ぶ立場として、実際の現場の工夫に触れることは大きな学びとなりました。さらに、台湾県駐在員事務所を訪問し、台湾の地理的な特徴や経済的な役割、歴史的背景についても理解を深めました。午後には台北市内での研修を行い、日本との文化の違いを直接体感することができ、国際的な視野を広げる貴重な経験となりました。

3 感想等

今回、私たち高校生グループは台湾でのインターンシップに参加し、現地の企業や人々との交流を通して多くのことを学びました。特に強く感じたのは、将来必要となる力として、英語で自分の考えを伝える力の重要性です。授業で学んできた英語でも、実際の場面で使うとなると緊張や戸惑いがあり、言葉を選びながら相手に理解してもらう難しさを実感しました。一方で、積極的に話すことで相手も熱心に耳を傾けてくれ、言葉以上に「伝えようとする姿勢」が大切だと学びました。ヤマハ発動機の社員さんとの交流の際にも、国内外を問わず共通して「将来に必要なのはやはり英語だ」とおっしゃっていたことがその考えの裏付けとして確固たるものになりました。その言葉を受け、自分自身も将来に向けて英語力を磨き、国際的な場面で活躍できる人材になりたいと思いました。

また、自分の意見を持つことと、他人の意見を尊重することの両立が必要だと気づきました。グループ活動の中では考え方が異なる場面もありましたが、全員の意見を出し合い、最終的に折り合いをつけることで、より良い結果につながることを体験しました。これは、将来どのような環境で働くにしても欠かせない力だと思います。

今回のインターンシップで得た経験は、単なる語学力の向上にとどまらず、国際的な場で必要とされる姿勢や人間関係の築き方を学ぶ貴重な機会となりました。今後はこの経験を活かし、将来の進路や学びに積極的に取り組んでいきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月3日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜名高等学校	氏名	井田 深月	学年	2

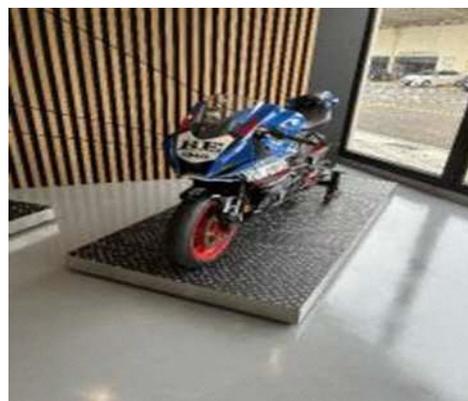
1 目的・応募理由

実際に現地で働いている人にお会いして、日本の企業が海外にどれほど結びついているのか話を聞いてみたかったからです。また、実際に日本と外国の文化の違いや価値観、現地の空気や雰囲気を肌で感じてみたかったからです。また、5年前にインドネシアに父の仕事の都合で2年間滞在していて、将来は外国に在住したいと思っていたので、自分の経験になると思い参加しました。

2 研修内容等

台湾山葉機車工業の新竹地区を訪れ、製造や販売、営業などを見学しました。また、海外駐在者に実際にお会いし、事前に送った質問に答えて下さいました。

そして静岡県と台湾を繋いでいる事務所に伺って私たちの地域と台湾がどのように繋がっているのかを知りました。そして、市内研修も行いました。



3 感想等

初日に台湾について外の景色を見た時に感じたことはバイク、バスの多さです。日本では車の幅区間がしっかりあってそこに車が縦に並んでいてその合間合間にバスやバイクがあるという印象でしたが、台湾ではバイクが道路の8割を占めていてその次にバスが多くあり、車も一定数あるのですが、圧倒的なバイクの多さに驚きました。

また信号機や音響信号機も日本と違っていて、外国に来た感覚のようなものが研ぎ澄まされました。

夕食では、絶対に食べきれないだろうと思うような量が来て、自分は食べ切る事ができなかったのですが、中国のマナーで少し残して食べる事は食べきれないほど食べさせてくれてありがとう、という感謝の気持ちがある事を知り、文化の違いを感じま



した。

2日目の1日研修では台湾がどれほどバイクを使っているかを知る事ができました。至る所にバイクの販売店があり、常にお客さんがいたのでヤマハ発動機やSYM、三陽工業などの企業のおかげで台湾の交通が成り立っている事を知れました。

また、移動中に日本の食事処(大戸屋、コメダ珈琲店、はま寿司・・・)などがさまざまなお店にあるのを見て、日本と台湾の結びつきがどれほど強いのか実際に感じる事ができました。

3日目は市内研修だったのですが、よく台湾人が日本語で自分たちに話しかけてくださり、にこやかに説明されているのを聞いて、日本に興味を持ってくれる人がいっぱいいる事を実感しました。お茶の美味しい淹れ方の説明をしてくれた方は、にこやかに流暢な日本語を話していて、なぜか嬉しく感じた事を覚えています。

また、研修先でも日本語で話しかけてくれる人がいたり、日本を思い出すような商品があったり、回っていて文化が違う部分、共通している部分を知る事ができました。

今回ヤマハ発動機さんにお邪魔してインターンシップを受けたのですが、自分にとって本当に貴重な経験になりました。旅行で外国に行くことはできるけど、実際に企業に訪れたり、販売所の詳しい説明を聞いたりすることは、この機会じゃなければできなかったと思います。私はずっと大学進学を希望していて、それ以外の選択肢はあまり受け付けていなかったのですが、この研修を機に就職して働くという新しい選択肢も生まれました。

自分の見聞がここまで広がったのはこの研修があったおかげです。今回学んだ事をしっかり学校に持ち帰り、他の人にも広げ、自分たちの地域には海外に誇れる企業があるという事を他の人に伝えたいと思います。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	3月10日		(対象)	全校・学年	
学校名	星陵高等学校	氏名	藤村 凌空叶	学年	2

1 目的・応募理由

私は、将来工学系の職業に就きたいと思っており、大学では工学部を目指しています。今回の研修で機械の製造にかかわる業務や販売店見学を通して、自分にはどのような知識やスキルが必要かを知り、多くの学びを得たいと思ったので応募しました。また、将来海外で働きたいと以前から考えていたことも、応募した理由の一つです。面識のない人と海外に行つてともに行動することはとてもハードルが高いと思っていましたが、自分の中で変化を望み、自身の成長を促す絶好の機会であると思い、本インターンシッププログラムに応募しました。

2 研修内容等

初めにこの研修全体の説明をしてくださった後に、各グループ別の自己紹介を担当職員の方も交えて行いました。今後の研修の流れを、日程や持ち物、服装等を踏まえてグループ別で昼食後に説明してくださいました。また全体での説明では、各グループの海外の行先別にクイズを交えて旅行会社 HIS さんが説明してくださいました。コミュニケーションプラザで海外研修の当日も行動を共にする浜松城北高校の生徒と先生と会いました。具体的にはヤマハ発動機株式会社とヤマハ株式会社の違いや実際に海外に駐在していた方が現地での生活などを説明してくださいました。その後、実際に工場に行き、製造している様子を見学させていただきました。当日は真夏日となっていたにも関わらず、工場内は涼しくてとても驚きました。この海外研修を経て海外での経験はもちろん、国内でも多くの貴重な経験をすることができました。羽田空

港第3ターミナルには一人で向かい、集合後、チェックインと保安検査を済ませました。台湾に到着後は現地ガイドと合流しバスで移動して、夕食は台湾料理を堪能しました。その後夜市を訪れ、日本とは異なる文化を肌で感じました。新竹のヤマハの工場見学では、偶然にもその場にいた台湾支社の社長の話を聞き、その後現地の店舗で販売と修理の現場を学びました。社長の「ポジティブシンキング」や「チャレンジ思考」



という言葉から、柔軟で前向きな姿勢の重要性を学びました。三日目には、大使館のような施設で台湾と日本の関係性について学んだ後、龍山寺という台湾最古の寺院で台湾独自の参拝方法やおみくじ文化に触れました。その後、中正紀念堂を訪れ、昼食後には九份を訪れました。少し大きめのお土産屋でお茶の体験を通して台湾文化を深く味わいました。現地での体験や仲間との交流を通じて、安心と興奮が入り混じった充実した研修となりました。日本と台湾の違いや共通点を実感し、異文化理解を深める貴重な機会となりました。台湾は一年の半分以上の日が雨であると聞いていたのですが、研修中はその覚悟を持っていましたが、一日目の夜に小雨が降ったくらいで、それ以外はずっと晴れか曇りで、とても天気にも恵まれた4日間でした。



3 感想等

ヤマハ発動機株式会社について、この研修では働いている人にしかわからないようなことまでたくさん知ることができました。国内研修での工場見学の際に、お金を入れるところがない自動販売機を工場の中で見つけました。案内してくださっていた方によると、この暑い夏に熱中症にならないように一人一本無料でもらうことができるものと伺いました。労働環境の改善を常に考えているからこそその施策だと実感しました。また特に海外研修では、事前に国内研修得た知識たちとは少し違った見方で工場見学をできました。バイクの塗装のように繊細な作業には女性の方が多く携わっていました。それは意図的にそうしているとおっしゃっていました。このように国内海外問わず、雇用形態にも力を入れているとおっしゃっていました。台湾の道路にはバイク専用の停車スペースが道路の先端にありました。そこにはヤマハ製のバイクが何台もありました。台湾の人々の生活インフラを支え、社会貢献する姿は、自分がこれから目指すものだとし示してくれているような気がしました。海外で働くとはどのようなことか実態を知れたので、将来に向けて今までとは少し違った勉強をこれからしていこうと思いました。また、異なる分野の人との交流、新しい環境への挑戦、そして異文化理解という貴重な経験を得ることができました。初めての海外での研修という不安を乗り越えた今、自信と達成感をもって次のステップに進めると感じています。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月28日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立三島南高等学校	氏名	渡邊 心花	学年	2

1 目的・応募理由

私は異なる文化や価値観に直接触れることで、自身の視野を広げ、将来の学びや仕事にいかせる経験を得たいと考え、海外インターンシップに申し込みました。現地の方々との交流や実際の生活の環境を体験することで、語学力やコミュニケーション能力をさらに向上させたいと考えたことに加え、将来は国際的な仕事に就きたいという思いも、このインターンシップに参加する大きな動機となりました。

2 研修内容等

○実施前研修

- ・参加生徒全員に対する事前研修
- ・今後の全体的な研修日程についての説明・確認
- ・事業の趣旨説明
- ・渡航ガイダンス
- ・グループ別研修

○国内研修

- ・会社概要、事業概要、企業理念、行動指針6か条、フィロソフィー、業務内容の説明
- ・インドネシアについての説明
- ・現地ホテルについての説明

○海外研修

- ・施設見学
- ・現地の方々との交流会



3 感想等

今回私はこの活動を通じて、多くの感動と学びを得ることができました。

初めての海外渡航に関しては不安が大きく、事前研修や国内研修を終えた後も、果たして楽しむことができるのか、また多くのことを学んでこられるのかと、不安でした。しかし、いざインドネシアに到着すると、目にするもの、口にするもの、言葉を交わす人々、そのすべてがこれまでに馴染みのないものであり、不安よりもむしろその膨大な情報量に圧倒され、胸の高鳴りを抑えられない3日間となりました。

研修中に特に大きな学びを得たのは、現地の方々との交流会です。そこで私は、日本との文化の相違や現地の人々の温かさ、国特有の課題、さらには他国の方々からも受け入れられる日本企業の素晴らしさを実感しました。こうした、現地に行かなければ得られない多くの気づきや感動から、私が学び、今後に生かしたいと思ったことは、“相手への理解を大切にすること”です。日本企業が海外へ進出したことや、現地の方々のやさしさは、相手を思いやる気持ちがなければできないことだったと思います。インドネシアは、私にそういった大切なことを教えてくれた国です。いつかきっとまたインドネシアへ行きたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月29日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立御殿場高等学校	氏名	大胡田 葵心	学年	2

1 目的・応募理由

現在、私は高校卒業後の進路として、国際関係の大学への進学、もしくはホテル業界への就職を考えています。現地の方と直接外国語で会話をするに加え、ホテルでの業務を見学させていただけることは、進路を明確にさせたいと考えている今の私にとって、とても良い機会であると感じたため、今回のインターンシップに応募をしました。

2 研修内容等

実施前研修

令和7年7月20日(日)

- ・海外インターンシップ内容説明
- ・自己紹介
- ・国内研修について
- ・海外渡航について
- ・海外研修について



国内研修

令和7年7月28日(月)

- ・会社概要
- ・事業概要
- ・企業理念
- ・宿泊業の業務内容・概要
- ・インドネシアについての概要



海外研修

令和7年8月17日(日)から8月20日(水)

8月17日(日) ▶ 移動 (羽田空港発 スカルノハッタ国際空港着)

8月18日(月) ▶ 午前：ホテル呉竹荘見学

午後：現地スタッフとの交流

8月19日(火) ▶ 市内研修 (ジャカルタ大聖堂、イクティクル・モスク、タマン・ミニ・インドネシア・インダー)

8月20日(水) ▶ 移動 帰国 (スカルノハッタ国際空港発 羽田空港着)

3 感想等

私は今回の研修で3つのことを学びました。

1つ目は経営戦略です。呉竹荘にある日本食のメニューを外国人が好んで食べていたり、数ある部屋の中から意図して和室の部屋に宿泊したりしていることを知り、日本の企業が海外進出することは、日本にとっても他国の人にとっても需要があるということを知りました。

2つ目はイスラム教徒に対する配慮が必要であることです。研修中にカツカレーをいただく機会がありました。イスラム教では豚肉の摂取が禁止されていることから、その際のカツには日本で一般的な豚肉ではなく、鶏肉が使用されていました。また、イスラム教徒の女性は肌を見せない文化を持っているため、呉竹荘の大浴場を利用する際には、使い捨て下着を着用するという決まりがありました。この経験から、イスラム教の人でも日本の食事や習慣を体験するための配慮やおもてなしが、海外進出する企業ならではのこだわりなのだと学びました。

3つ目は他人との関わり方です。私がホテル内にある大浴場への行き方が分からず困っていた時、同じエレベーターに乗っていた外国人が大浴場まで案内してくださるということがありました。この出来事に私は、言語が伝わらなくても他人に優しく接しようとする勇気と行動力に感銘を受けました。また、将来異国の方と関わることのできる職業に就きたいと考えている私にとって模範となる経験になりました。

この研修で現地の方と交流をしたことで、自分とは異なる言語や文化を持つ人と同じ話題について語り合えることの楽しさを実感し、将来は海外の人と関わりながら仕事ができる職業を目指していきたいと感じました。

改めて、このような貴重な機会をいただきありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月29日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立富士宮東高等学校	氏名	曾根川 智貴	学年	2

1 目的・応募理由

私が今回の高校生海外インターンシップに参加した理由は、二つあります。一つ目は、実際に外国へ赴き、日本と外国がどの程度文化や価値観が違うのかということを実際の目で実際に見たかったからです。二つ目はグローバル化が叫ばれる昨今においてそのような時代に対応できるような能力を自分自身が早くから少しでも身につけるためにも海外へ行って経験を積みたかったからです。私は将来県内企業で活躍したいと考えていたので、国際的な事業展開でホテル業を営む県内企業である呉竹荘を選びました。

2 研修内容等

研修内容は主にホテル内の見学でした。ホテルの裏側とも言える壊れた品を修理する特別な部屋や、特別な客室などを見学しました。そして、大浴場やテラスなどはすべて和風な装飾が施されていました。また、イスラム教の礼拝室もあり、インドネシアの異文化を理解し、その文化に合わせた工夫を県内企業がしているということが目に見えて分かりました。見学ツアーの後には、インドネシアの歴史を学んだり、インドネシア料理を実際に作って食べたりする経験をすることができました。インドネシアの歴史や現代のインドネシアを取り巻く様々な問題に関しては現地の大学教授、大学生、呉竹荘の支配人に教えていただきました。インドネシア独立時の残留日本兵の話では、日本とインドネシアの今の友好関係が複雑な歴史を辿って完成されたものであることを知りました。最初は日本がインドネシアを侵略する側でしたが、日本が敗戦すると、インドネシアに残留していた日本兵が日本が侵略を正当化するために掲げていた口実である大東亜共栄圏を本当に実現しようと、インドネシアの独立のために、オランダとの戦争に協力し、インドネシアのために貢献する立場に変わったと分かりました。インドネシアにおける問題は、目覚ましい経済成長の裏での大気汚染といった環境汚染の問題や洪水、頻繁に起きる渋滞など、特有のものがありました。

3 感想等

今回のインターンシップにより、私は沢山のことを学びました。まずは、県内企業が海外でも売上が伸びるように現地の文化を理解し、現地のニーズに合わせた工夫をしているということです。例えば礼拝室の設置や、食事では豚肉は使わず、肉料理は必ず牛肉か鶏肉のどちらかを使うなどです。インドネシアでは、多くの点で日本と異なります。多くの人がイスラム教を信仰していて、豚肉を食べてはいけない、決まった時間にメッカの方向へ礼拝しなければならないなどのルールがあります。このように宗教的な理由でインドネシアでは日常生活で気をつけなければいけないことが沢山あります。そして、インドネシアでの文化や価値観にそぐわないサービスをしていたら、その企業のインドネシアでの売上は伸びません。そうならないためにも、県内企業が異文化理解をし、現地に合わせた工夫をしていることは、今回のインターンシップだったからこそ知ることができたものだなと思いました。そして、外国と日本の違いとして、人と人との壁があまりないように感じました。私としては正直な所、インドネシア人はフレンドリーな印象はあっても、実際はそれほどではないのではと思っていましたが、本当にフレンドリーで驚きました。会う人全員が笑顔で接してくれて、また優しく迎えてくれたので、インドネシアに対するイメージが全く変わりました。英語が未熟でも手振り身振りや単語などでも伝えることができ、大体はその場の雰囲気ですぐにかなりなりました。

今回のインターンシップでは、企業が海外でも通用するビジネスを行うには、異文化理解が不可欠で、現地の文化を尊重、理解して初めて海外で活躍できるということを知り、また文化や価値観が全く異なる国でも人々の優しさや温情には国境がないということを知ることができました。グローバル化が叫ばれる昨今において、静岡県も例外ではありません。将来静岡県で働くときは、今回のインターンシップで得た経験を糧にしていきたいです。また、異文化理解をもっと深め、発信していけるようになりたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月14日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立静岡農業高等学校	氏名	望月 れい	学年	2

1 目的・応募理由

経験として一度海外へ行ってみたいと思ったからです。きっかけは母から聞いた留学の話で日本と海外では何が違うのか、考え方を学びたいと思いました。

ニュースや新聞、ネット上では海外の画像や映像、情報を見ることができます。しかし、画面越しで見ただけと、実際に自分が外に出て実際に見に行くのでは全く違うと思います。画面越しでは分からないことや現地の人と話すこと、言語・文化の違いに触れて、自分の視野を国内、国内から見た海外ではなく海外から見る、見られることで広げられると良いと思い応募しました。自分が外国人になることはなかなか体験できることではないですし、良い機会だと思います。

また、進路がまだ決まっていない私は、できるだけ多くの資格を取得することや、この二年生の間に色んなことを経験しておきたいと考えています。この海外研修は、自分の中で大きな経験になると思い応募しました。自分の生活している国から出ることによってこれからの自分の視野が広がり、一つの方向からではなく、いろんな方向から物事を見たり、考えたりすることができるようになると思います。

国内でもビジネスがグローバル化している今、そのような物事の考え方や、見方は社会で必要になる力だと思います。社会で必要になる力を今から養っていくことで、社会に出て貢献できるようになりたいです。

2 研修内容等

具体的には、ホテルでの工夫、限られた部屋の数、スペースで集客する方法、インドネシア文化交流、インドネシアでの食事、交通についてでした。

はじめに、ホテルの内装の工夫を教えてくださいました。呉竹荘とはまた違う雰囲気、日本の四季をイメージした内装になっていました。場所ごとに春夏秋冬が分けられていて、それぞれ季節が感じられる内装でした。部屋の数が少なく、スペースが限られているので、限られたところでも、魅力を感じてもらふ工夫が必要でした。実際に各部屋へ案内してもらいました。そこで、いくつかの部屋は日本の有名な場所をテーマに、壁の飾りや、インテリアの色、床を畳にするなどの工夫が見られました。

次に、提供されているサービスについて教えてくださいました。ホテル呉竹荘クマンジャカルタでは、男女で違う温泉や、漫画を読むことができるスペース、着物のレンタルサービス、体を動かせるジムのような部屋、マッ



サージをしてもらえる場所、結婚式を行えるなどの様々なサービスがありました。部屋数がない分、数多くのサービスで補っていることがよく分かりました。

最後に、文化交流会では、実際にインドネシアの食べ物で、「ガドガド」というサラダのようなものを作ってみる体験をしました。日本では見ない、餅のような食材があり、食べたことのない味でしたが、ピーナッツの味が強く、美味しかったです。他のインドネシアの食事「ルンダン」などについても教えていただきました。紹介されたものを実際に食べることができ、インドネシアの食文化に触れることができ、良かったです。



3 感想等

初めて行く場所で、違う言語を使うことや自分が外国人になるということを体験することができて、貴重な経験をすることができました。

自分の住んでいる国から出ることに最初は不安があり、緊張していましたが、飛行機から降りたあとの建物や植物などの景色を見て海外に来たということを実感しました。見るもの全てが新しく、知らないものばかりで期待が膨らみました。日本の店で売られているのをあまり見ないコウモリランという植物など自然に見られて興味深かったです。

日本と違うところは服装や、言語、食べ物からよく分かりました。特に食べ物は、現地の人々が普通に食べているのに、私達にとってはとても辛いと感じるものがいくつかありました。日常生活が宗教と深く結びついていることが印象的でした。実際に、インドネシアではイスラム教を信仰している人達が多く、宿泊施設に礼拝室が設置されていることが少なくないそうです。礼拝室があるかないかや、広さで宿泊を判断することがあるそうです。日本ではこのように宗教と生活があまり結びついていないので、違いを感じました。

ホテル内などで現地の人と英語で会話をすることができました。住む国が違ってても言語が通じたことや、自分の英語が現地の人々に通じて会話ができたことがとても嬉しく、勉強できて良かったと感じました。インドネシア語がよく話されていましたが、英語が通じる国は多いので、この経験を英語の勉強の励みにしてこれからも頑張っていきたいと思いました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	10月14日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立静岡商業高等学校	氏名	植松 小春	学年	2

1 目的・応募理由

私は、この海外インターンシップで、今後の進路を考えるきっかけを得て、自分の視野を広げたいと考え参加しました。私は、商業高校に在学しており、ビジネスマナーやビジネスマネジメントの授業を通して、社会で必要とされる幅広い知識を学んできました。挨拶や言葉遣いといった基本的なマナーだけでなく、組織の中での立ち振る舞いや相手の立場を理解して行動する姿勢など、実際に社会に出てから必要とされる力を意識的に身につけてきました。

こうした学びは、日本国内での将来のキャリア形成に役に立つものですが、私はそれをさらに広げ、海外という新しい環境の中で試してみたいと強く思うようになりました。

この研修に参加する理由の一つに、異文化に触れることで自分の視野を広げることがあります。国によって働き方や考え方は異なり、その違いを受け入れながら仲間と協力していく経験は、柔軟な適応力や発想力につながると思います。実際に現地で多くの人と交流をすることで、授業だけでは得られないコミュニケーション能力を高めることができると考えています。今回のインターンシップでは、日本とインドネシアのビジネスマナーの違いを実際に体験することで、自分の視野を広げ、より実践的な力を身につけたいと思います。

2 研修内容等

インドネシアに到着して1日目は、ホテルツアーと現地の大学生達との交流を行いました。ホテルツアーでは、客室を見学し、部屋の広さや設備が料金によって異なることを実際に目で見て確認することができました。また、客室の見学に加え、駐車場スペースや倉庫の中も案内していただき、ホテルの裏側を学ぶことができました。日本のホテル呉竹荘がインドネシアに進出しているため、浴衣やお茶のセットが部屋に用意されており、浴室には温泉が設置され、海外にいながらも日本らしさを感じることができました。また、館内には礼拝室もあり、イスラム教徒がお祈りを行う環境が整えられていることも知ることができました。

現地大学生との交流では、一緒にインドネシア料理「ガドガド」を作って食べる体験をしました。そのほかの伝統料理についても、味や作り方を体験することで現地の食文化について理解を深めることができました。



「ガドガド」作り体験

また、インドネシアの交通事情や社会問題についての話を聞き、バス移動中には渋滞の様子やバイクの3人乗りなど、日本とは異なる交通事情を体験することができま

した。

観光では、モナス、タマンなどの都市を訪れ、モスクやジャカルタ大聖堂などの宗教施設を見学しました。モスクでは、イスラム教徒が日常生活で宗教を大切にしていることを実感し、礼拝の時間や服装、建物の構造からイスラム文化を学びました。神聖な場所なので、靴を脱ぐ必要があり、警備員もいて、モスクは人々から大切に思われている場所だと再認識できました。ジャカルタ大聖堂では、カトリックの建築様式や歴史を間近で感じることができ、宗教施設の違いや文化の多様性を体感しました。モナスでは、インドネシアの独立の歴史や建設の経緯について学び、歴史を通して国の成り立ちや人々の努力を理解することができました。さらに、タマン・ミニ・インドネシア・インダでは、現地の建物や生活様式を一度に学ぶことができ、インドネシアの各地域の特色や文化の違いを直接見るすることができました。

3 感想等

今回のインドネシア研修では、日本との生活習慣の違いを肌で感じ、多くの学びを得ることができました。まず生活面では、トイレットペーパーを流せないトイレや、分別しても処理しきれないゴミの現状にも驚きました。普段何気なく使っている日本の設備や衛生環境のありがたさを改めて実感するとともに、異なる文化や事情に合わせた柔軟な対応の大切さを学びました。交通面では、車より圧倒的に多いバイクの姿があり、日本の都市とは全く異なる光景でした。道路には大きなテレビが設置され、夜でも街全体が明るく、近未来的な雰囲気が広がっていました。車やバイクの量が多い分、二酸化炭素排出量も気になりますが、アプリで排出量を確認できる仕組みがあり、環境問題に対する意識の高さも感じられました。こうした生活面の違いは、日本がこれから多様な文化や価値観を受け入れるうえで学ぶべき点だと考えました。

観光では、ジャカルタ大聖堂とイスラム教のモスクを訪れ、宗教の違いに触れました。インドネシアはイスラム教徒が多数派ですが、キリスト教の教会も大切に守られており、多様な信仰が共存していることに驚きました。それぞれの信仰が生活に深く根付いている様子を目の当たりにし、日本との文化の違いを感じると同時に、互いを尊重する姿勢の重要性を学びました。

今回の研修を通して、生活の中にある違いに気づくことで、文化や環境を理解する大切さを学びました。日本に戻った今、異文化の視点を取り入れながら、環境や生活習慣の改善に生かしていきたいです。インドネシアの人々が日本のアニメや漫画を通じて日本語を学び、温かく笑顔で接してくれるように、私もまた相手の文化を理解し受け入れる姿勢を持つことが大切になります。今回得た学びを基盤として、将来は異文化交流の懸け橋となることができるように成長していきたいと思えます。



イスティقلال大モスク外観



イスティقلال大モスク内部

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	未定		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜松大平台高等学校	氏名	佐野 楓真	学年	2

1 目的・応募理由

私は総合学科人文科学系列で、静岡県の都市の魅力調査に取り組んでおり、この探究心は海外の多様な文化やビジネス環境への理解につながると考えている。

また、高校卒業後の大学進学を見据え、座学だけでは得られない実践的な学びと異文化理解を深めたいと考えている。特にインドネシアのビジネス環境に身を置くことで、世界や人口の多い地域で通用する課題解決能力やコミュニケーションスキルを養いたいと考えた。この経験は、将来の専門分野を深める上で貴重な糧となり、グローバル社会で活躍するための視野と自信を与えてくれると確信し、本インターシップへの参加を希望した。

2 研修内容等

《国内研修》

- ・インドネシアについての説明
- ・現地ホテルについての説明
- ・ホテル業界の説明
- ・会社の概要について
- ・インドネシアへ渡航する際の注意点

《海外研修》

8月17日(日) 移動

8月18日(月) ホテル呉竹荘見学、現地スタッフとの交流

- ・ホテル概要と利用客に関する説明
(利用客のほとんどがインドネシア人、コロナ禍による日本人宿泊客の減少)
- ・ホテル館内の特徴的な施設の紹介
(日本風の装飾、和服のワードローブと結婚式、漫画コーナー、礼拝室、大浴場)
- ・客室の見学と説明(畳の部屋が人気、日本の雰囲気味わってもらうことをコンセプトにした客室の改装)
- ・インドネシアに関するプレゼンテーション(インドネシアと日本の関係、ジャカルタの未解決4大問題「洪水」「ごみ」「渋滞」「空気汚染」、インドネシアと日本の職場文化と社会的環境文化の違い)
- ・スダ族とスダ語の紹介(スダ文字で自分の名前を書く体験)
- ・インドネシア料理の試食と手作り体験(エス・チェンドル、牛肉ルンダン、ガドガド)
- ・インドネシアの交通手段や昼食についての説明



8月19日（火）市内研修（タマン・ミニ・インドネシア・インダー、イスティクラル・モスク、ジャカルタ大聖堂）

8月20日（水）移動、帰国

3 感想等

インターンシップで訪れたインドネシアは、町が活気に満ち、鮮やかな色に彩られていた。

飛行機での移動は、機内食が予想以上においしかったものの、思っていた通り慣れない移動で少し疲れた。

しかし、インドネシアに到着してからは、おいしい海鮮料理を堪能することができ、疲れも気にならなくなった。ゆでた野菜に甘辛いソースをからめて食べる伝統的なサラダ「ガドガド」や緑色のゼリーのようなスイーツ「チェンドル」といった現地の味を楽しむこともできた。

インドネシアで過ごした4日間の研修で、私は様々な経験をさせていただいた。その中でも、私にとって特に印象的だったのは、店員とお客さんとの距離がとても近かったことである。お客さんの中に誕生日を迎えられた方がおり、その方の誕生日を陽気に祝うような温かく和やかな雰囲気に触れることができた。接客するときに大切にしていることを感じることもできた。

建物は限られたスペースに工夫が施されていることに気づいた。また、インドネシアにも畳業者がいることには驚いた。

インドネシアでの研修を通して日本とは違う文化を肌で感じることもでき、とても充実したインターンシップになった。将来は、静岡県内の企業で地域活性化に貢献できる仕事に就きたいと考えている。今回のインターンシップで得たグローバルな視点を活かし、県内の魅力を国内外に発信したい。特に、文化や観光の側面から地域経済の活性化に寄与したい。県民が誇りを持つことができる、持続可能な地域社会の実現に貢献できる人材になりたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月1日		(対象)	全校・学年	
学校名	沼津市立沼津高等学校	氏名	山道 はるか	学年	2

1 目的・応募理由

今回、私が海外インターンシップに参加した理由は二つあります。

一つ目は、「海外で学びたい」という目標があるからです。これまでも何度か海外で学ぶことを考え、情報を集めてきました。しかし、前提として海外での活動は費用が高く、サポート体制やスケジュールの質などを考慮すると、「本当に学びたいことが学べるのか」「現地の方々とどれほど関わることができるのか」といった不安や疑問が多く、ハードルが高く感じてなかなか実現できずにいました。そんな中で、今回のプログラムは事前研修があり、県が実施するため信頼も厚く、費用面での支援もあるため、安心して挑戦できる大きなチャンスだと感じ、参加しました。

二つ目の理由は、この経験が将来に活かせると確信していたからです。私は将来、接客業に就きたいと考えており、初対面の方や異なる文化・価値観を持つ人々と関わることを通して、より広い視野や柔軟な対応力を身につけたいと考えています。そこで呉竹荘ならではのホスピタリティ、日本と海外のおもてなしの違いについて知りたいと思って研修に臨みました。現在、少しではありますがホテル業にも関心があり、実際にその現場を経験できるのは貴重な機会だと思いました。

2 研修内容等

○実施前研修

事業の趣旨説明・海外インターンシップの内容説明・渡航ガイダンス・グループ別説明

○国内研修

会社概要・事業概要・宿泊業の業務内容概要・インドネシアについての概要

○海外研修

ホテル業務見学・交流会・市内研修



3 感想等

参加者の学生の方々も引率して下さった先生も現地の方々も関わる全ての方が優しく親切で本当に親しみやすかったです。研修の時に不安で話しかけられなかった私に、みなさんフレンドリーに接して下さり、全員と話すことができたので良かったです。海外の現地の方々も私たちが日本人だと分かると「ありがとう」や「大丈夫」と日本語で話しかけてくれました。おもてなしの心が深く、わからないこと丁寧に教えてくれました。とてもフレンドリーでレストランではコミュニケーションがうまく取れない私たちに初対面にもかかわらず、積極的に関わってくれ、誕生日の子を急遽お祝いすることになっても全力で祝ってくれました。この出来事が最高の思い出です。

次に感じたのは日本とインドネシアのおもてなしの違いでした。日本とインドネシアのおもてなしは、日本は事前にお客様の要望を察したり、言葉遣いやサービスを丁寧にしたりします。一方でインドネシアはお客様に積極的に話しかけフレンドリーに対応するという違いがありましたが、双方素敵なおもてなしだと思いました。

私がインドネシアで一番驚いたのは信号が基本的にないことです。そして基本信号はないので、信号があっても守らない。歩行者はタイミングを見計らってダッシュするなど日本では考えられないことばかりでした。日本の当たり前は少し場所が変わるだけで当たり前じゃなくなるということを目の当たりにしました。



また、私は日頃から「挑戦は自己成長につながる」と意識していますが、実際には不安になり、ネガティブな気持ちになることが多々あります。しかし、今回の研修でインドネシアの皆さんが私に積極的に話しかけてくれたことがとても嬉しく、私の気持ちを明るくしてくれました。私は人と関わるのがあまり得意ではなく、自分から話しかけることができませんでしたが、この経験から「自分から積極的に関わること」の大切さを学びました。挨拶だけでも自分からすることで、相手に与える印象が変わります。そして、それが相手を少しでも明るい気持ちにさせることにつながると感じました。この経験を通して、もっと自分から人との関わりを増やしたいと思うようになりました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	未定		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立富士高等学校	氏名	後藤 久実	学年	2

1 目的・応募理由

私は英語部に所属し、その一環として昨年中国の高校生との交流に参加しました。その交流を通じて、日本との文化や生活習慣の違いを肌で感じ、海外の暮らしや価値感に興味をもつようになりました。今日のインターンシップでは日本以外の国を自分の目で見て、さらに理解を深めたいと強く思っています。今回、静岡で100年以上の歴史を持つ静岡鉄道さんの事業に触れる機会を通じて、将来の視野を広げる学びを得たいと考え応募しました。

2 研修内容等

【国内研修】

まず初めに日本平ロープウェイに乗車をしました。この日本平ロープウェイは日本平山頂と久能山東照宮を結ぶ全長1065mのロープウェイです。「四季折々違った風景が楽しめるんです」と通る箇所ごとに見所をロープウェイの中にいるスタッフさんが話してくださり久能山東照宮へいく道が「移動」だけではなくとてもわくわくした時間になりました。たいらぎの食事では日本平の土地にゆかりのある食材や料理で日本平の魅力がたくさん詰まっていました。鉄道部の紹介では、静岡鉄道さんは静岡市中心部から清水を結ぶ11km路線で“shizuoka rainbow trains”という7色で色分けした電車を運行しているそうです。僕のヒーローアカデミアとのコラボや昔使っていた電車も見せていただきました。事務所見学では災害等の時のための機器や、無人駅の対応の仕方、運行の管理をしているところを見ました。安全整備機器使用訓練では実際に体験させていただき、車内や踏切の非常用ボタン含め安全設備が行き届いていました。最後に鷹匠ビルの見学に行きました。静岡鉄道さんは鉄道事業だけではなく色々な事業を展開していることを知りました。

【海外研修】

19日、まず猫空ロープウェイに行きました。猫空ロープウェイは「動物園駅」から「猫空駅」までの約4kmを結ぶロープウェイです。元々は現住民の通勤手段に使われていたそうです。ロープウェイを繋ぐロープは一本の太い線ではなく細い線が合わさって人の手によって捻られできたものをさらに捻って作られていることに驚きました。次に車両工場に行きました。日本にはない様々なアプリや仕組みが導入されており、過去の事故をもとに安全安心な運行のための機械の仕組み等の説明をしていただきました。避難体験では静岡鉄道さんと同様、非常用ボタンの説明を受けました。しかしボタンの押す条件は違い驚きもありました。電気がなくても緊急時電車の扉が開くようになっており、後ろからも出ることが可能だそうです。台北

メトロに実際に乗車してみて、飲食厳禁というルールだけではなく椅子の配置が全然違ったり真ん中に手を掴む手すりがあったり見た目だけでも変化が大きかったです。車両司令センター視察では、大きなスクリーンに現在の状況が映し出され、いくつかのチームに分かれて対応をしていました。

20日、市内研修をしました。龍山寺は日本とは違った参拝方式や、おみくじの引き方で台湾の文化に触れられてよかったです。九份は“千と千尋の神隠し”で有名な場所です。色々なお店が連なり、みてまわるのが楽しかったです。

21日、日本に帰国しました。色々な人の支えがあり、すごく楽しくて思い出に残り、様々なことを学べた有意義な4日間を過ごせました。



法律では禁止されているものの日本でもたまに見る2人乗りだけではなく3人乗り、4人乗りをしている人も多かったです。信号で赤でもいけそうならいってしまうバイクもあり自分も実際にハラハラした場面もありました。台北メトロさんは安全な交通手段であり利便性も高いので多くの人から利用されています。大規模な経営でたくさんの方が利用する中で時間通りの運行や安全を大切に、安全設備だけではなく、アプリや機械で読み取った人の混み具合によって運行時間を調節していることがわかりました。地元寄り添った経営と大衆向けの効率的な経営。その土地のニーズ合わせて違うところもありましたが、安全を第一に考えていることは同じだと気づきました。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	8月27日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立科学技術高等学校	氏名	内野 壮一郎	学年	2

1 目的・応募理由

小学生の頃からバスが好きで中学生の時にはしずてつジャストライン鳥坂営業所で職場体験学習を行いバス会社の仕事を学びました。タイヤの締め付けや運賃収入の集計などを体験し、多くの人の支えによってバスが安全・快適に運行されていることを実感しました。高校生になってからは「土木」と「交通」を組み合わせた都市交通に興味を持つようになりました。調べていくうちに、中学校の職場体験学習でもお聞きした「利用者の減少」や「運賃の値上げ」などの地域の公共交通機関が抱える課題を改めて認識するようになりました。その結果、都市交通を通じて地域を盛り上げたいという思いが強くなりました。そのため、学校での課題研究は「長田地区コミュニティバスの利用促進」をテーマにより多くの沿線に住まわれている方々にコミュニティバスを利用してもらえるように活動を始めました。活動していくにつれて地域の交通問題を解決したいという思いがますます高まってきました。それとともに海外ではどのようにして交通が人々の生活を支えていて人々の暮らしを豊かにしているのか実際に見て学びたいという思いが芽生えてきました。そのため、今回の研修で静岡市の交通を支える静岡鉄道がどのように海外の会社と連携しているのかを学びたいと思い参加を希望しました。

2 研修内容等

《実施前研修》

自己紹介、研修概要、渡航時の注意

《国内研修》

日本平ロープウェイ現場見学、久能山東照宮観光、鉄道部見学、事業所見学・安全設備機器使用訓練、本社見学

《海外研修》

猫空ロープウェイ乗車・視察、台北メトロ車両基地・車両工場視察、レールメンテナンス視察、避難体験、乗車体験、車両指令センター視察、台湾夜市、龍山寺、中正紀念堂、総統府、九份観光



3 感想等

実施前研修では今回ともに研修する仲間と出会い、同じ志を持った仲間とつながることができ非常に多くの刺激を受けることができました。特に秀平さんは鉄道が好きで将来交通に携わる仕事に就きたいとも言っていました。私が通う学校の中だけでは交通に興味がある人とは出会わないので今回の研修



を通じてつながりを持つことができとても充実した時間を過ごすことができました。

国内研修では静岡鉄道の「安全・安心のあくなき追求」や地域と共に歩んで来た歴史について学びました。すべての駅・踏切にカメラを設置して乗客や通行人、線路の安全を守っていました。また車内や駅のホーム、踏切でそれぞれの安全対策が行われていました。静岡鉄道は「まちづくり」をしている会社であるということも大きな発見でした。静岡鉄道は鉄道・索道事業のほかにバス・タクシーや不動産、自動車販売などを行っています。研修をする前までは他業種の事業の間にどのような繋がりがあるのかわからずにいました。しかし鉄道を軸にしてその利用客の様々な要望に応えていった結果が多業種で事業を展開していることにつながっていることがわかりました。沿線住民の生活を豊かにするという1つの目標のもとで様々な事業を展開していることがわかりました。

海外研修では静岡鉄道と台北メトロの共通点と相違点を比べることができました。日本でも台湾でも乗客や線路を通行する人の安全を第一に考えていることがわかりました。静岡鉄道では「安全安心のあくなき追求」という言葉がありました。一方、台北メトロでは「安全第一」という言葉が幕に掲げられていました。国が違っても乗客を安全安心に目的地までお送りするというという基本的な考えや鉄道の使命は変わらないということがわかりました。車両監視センターもあり台北メトロの5路線を路線別や全体と細かく分けて一か所で車両の運行を監理していました。静岡鉄道はすべての駅のホームと改札、切符売り場にカメラが設置されていて台北メトロよりさらに細かく駅の情報把握できるようになっていました。静岡鉄道は多くの駅が無人駅であるのに対し台北メトロに無人駅がありません。そのため、監理をどこまで細かくするのは無人駅の有無など国やその地域によって違いがあるためその地域にあった無駄のない監理の仕組みが確立されていることがわかりました。また、どちらの鉄道会社も鉄道だけではなく非鉄道事業に進出していました。しかし、その切り口はそれぞれの会社で違いがありました。静岡鉄道では鉄道から他の交通機関に進出し、そこから沿線の不動産開発や商業施設の運営へと事業を拡大していました。台北メトロではロープウェイ、台北アリーナ、シェアサイクリング、ホテル事業とホテル事業を除けば、公共性の高い事業を非鉄道事業としていることが特徴的でした。台北メトロは市政府がバックに付いているため公共事業の中でも民間のような素質がある分野を台北メトロが非鉄道事業として担っていると感じました。そのほかにも未来の担い手を育てるといふところも共通していました。静岡鉄道ではしずてつ電車まつり、台北メトロではMRTの展示室やロープウェイの施設見学が行われていました。少子化の中でも未来の担い手を確保していく取り組みはとても似ていました。

今回の研修で日本と台湾の交通事業者を見学したことで日本との共通点や相違点を見つけることができました。私の興味がある交通政策の観点からみても国によって違いがありました。日本は民間主体なのに対し台湾は政府が民間に指示をする形で全然運営形態が違いました。そのため日本では公共交通の廃止、減便が相次いでいますが台湾では常に一定の本数が早朝、深夜問わず確保されており公共交通の好循環が生まれていました。日本も学ぶべきところがお隣の台湾にたくさんありました。将来、研修で学んだ内容を日本でどのように導入できるようにするのか考えていきたいと思いました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	8月28日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立藤枝北高等学校	氏名	小林 凜久	学年	2

1 目的・応募理由

この海外インターンシップを通して、海外の企業や現場を実際に訪問して見学したという経験が自分の強みの一つになると考えるとともに、異なる文化や価値観の中で生活してみて自分のグローバルな視点を養い、見聞を広げたいと考え、応募した。

2 研修内容等

〈実施前研修〉

日時：令和7年7月20日（日）

場所：静岡県庁

内容：海外インターンシップの趣旨説明

自己紹介

国内・海外研修の詳細説明 など



写真1 国内研修の様子

〈国内研修〉

日時：令和7年8月4日（月）

場所：静岡鉄道株式会社

内容：・日本平RW現場紹介・久能山東照宮案内

・鉄道部の紹介・事業所見学

・安全設備機器使用訓練

・新静岡駅、鷹匠ビル見学

〈海外研修(企業見学)〉

日時：令和7年8月19日（火）

場所：猫空ロープウェイ・台北メトロ

内容：・猫空ロープウェイ乗車、視察

・台北メトロ車両基地、車両工場視察

・避難体験・乗車体験・車両指令センター視察



写真2 3日目の昼食

※ 8月18日に台湾へ渡航

20日に台湾市内研修を実施

21日に日本に帰国

3 感想等

私はこの高校生海外インターンシップを通して、様々な学びを得ることができた。1つ目は多角的な視点から考えることの必要性だ。海外で実際に生活してみて、本での当たり前がここでは当たり前でないと感じた、これは日常生活の中でも存在すると思うので今後、何かを考えたり決定したりするような機会があった際には、自分がどうしたいのかではなくその決定により他の人はどう思うのかなど、客観的に物事を捉えて皆が納得するものを選択できるようにしていきたい。2つ目は自己実現のために必要、もしくは有利になる資格を見つけることができた。中にはとても難しいものも含まれているが努力し、先生方の力も借りながらできる限り取得できるようにしたい。

最後に人に恵まれているということに気付かされた。研修中は、先生方や引率者のサポートがあったからこそ安心して学ぶことができた。また、班の仲間と協力し合いながら行動することで、不安な場面も前向きに取り組むことができた。さらに、現地の方々が親切に接して下さり、文化や言葉の壁を越えて交流する喜びを体験できた。この経験から、私は「一人で成長できるわけではなく、周囲の人に支えられている」ということを実感した。これからも人とのつながりを大切にし、感謝の気持ちを忘れずに挑戦を続けていきたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立磐田南高等学校	氏名	秀平 誠朗	学年	2

1 目的・応募理由

社会が国際化していくなかで、海外で働く機会や、海外の人とオンラインでつながって会議をする機会が増えている。自分の将来のために留学について調べていたところ今回のインターンシップを知った。日本と海外のつながりや、日本の技術が海外でどのように生かされているか知りたいと思い、本インターンシップに応募した。

2 研修内容等

国内研修	海外研修
静岡鉄道車両基地見学 静鉄鷹匠ビル見学 日本平ロープウェイ営業所見学 久能山東照宮訪問	台北メトロ車両センター見学 台北メトロ乗車体験 猫空ロープウェイ乗車体験 ロープウェイ施設見学 静岡県台湾駐在事務所訪問 龍山寺訪問 中正紀念堂訪問

3 感想等

私たちはまず国内研修にて、静岡鉄道と日本平ロープウェイについて研修を行った。静鉄の車両基地では、静鉄鉄道部の中枢で働く社員の方を見ることが出来た。安全の確保のために一生懸命に動いている姿が印象的だった。日本平ロープウェイは、車両が新しくなったばかりだということも相まってとても乗り心地が良く、これまでのロープウェイに対して抱いていたイメージが覆された。久能山東照宮では特別に宮司の方にガイドをして頂き、日光東照宮との違いや本殿の造りについて詳しく教えて頂いた。宮司の方は1159段の石段を毎日登って来ているのだと聞き驚いた。



車両ごと混雑状況リアルタイム配信

国内研修後に台北へ向かい、静岡鉄道と提携している台北メトロや猫空ロープウェイについての研修を行った。台北メトロ車両センターでは台北メトロの概要を知ることが出来た。言語に関して障壁のある私たちにも、台北メトロの魅力について社員の方が親身に語ってくださった。台北メトロでは車両の号車ごとの混雑

状況についてリアルタイムに配信するサービスが行われており、日本の鉄道会社も是非積極的に導入してほしいと思った。

台北メトロでは、多くの路線で自動運転、自動放送が行われていた。日本の鉄道で自動運転を行っている路線はかなり少なく、自動運転に関しては台湾の鉄道会社の方が発展していると思った。台北メトロの車両には日本製の車両が使用されており、日本の技術力の高さを台湾でも感じる事ができた。



台北メトロ車両基地

猫空ロープウェイでは下がガラス張りになっている車両に乗った。山をいくつも越え、営業距離がとても長く、標高の高い所を走るのとても景色がよかった。通常の車両の他にもケーブルの点検用の保線車両にも乗る機会があり、普段は作業員しか乗ることが出来ないためとても貴重な経験になった。

中正紀念堂では、ガイドの方の時間調整のおかげもあり兵隊の交代式を見ることができた。1時間に1回、数分間しか行われなため、非常に貴重な経験となった。この儀式は、軍の制服に身を包んだ兵士が一糸乱れぬ動きで交代の儀式をする。日本では、まず見ることができない。この交代式は1980年に始まり、約44年間行われ、2024年の7月中旬から内容が変更され現在に至っている。



中正紀念堂交代式

この研修を通して

最初に県庁で会った時にはお互いに緊張しており不安もあったが、国内研修を経ていざ台湾へ向かう時には、完全に打ち解けあい、何でも話せるような関係になっていた。引率していただいた先生は、私たちへ細やかな配慮を頂き、安心して研修へ臨むことが出来た。

引率者を含め、台湾へ向かったのは8人であった。人数が少数であるため、一つ一つが濃い研修内容になったと思う。研修中には、私と同じ鷺津地区出身の静岡鉄道の社員の方との出会いもあった。この他にもこの研修に参加しなければ出会えなかった多くの素敵な方との出会いがあった。そこで出会った多くの人たちは、私たちに学びを提供してくださり、私に新たな発見を与えてくださった。本研修で出会ったすべての人や、参加を認めてくれた両親、参加するにあたって尽力してくださった磐田南高校の先生方、引率してくださった片井先生に感謝をしたいと思います。本研修は多額の寄付金によって成り立っている。ここまで多くの経験をさせて頂いたのは、この事業に賛同し寄付をしてくださった静岡鉄道などの県内企業の皆様のおかげである。私たちに大きな期待を寄せて寄付をして頂いているので、いつか何らかの形で静岡県や県内企業に貢献することで期待に応えたい。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	今後、2学期に実施予定		(対象)	全校・ <u>学年</u>	
学校名	静岡県立浜松湖北高等学校	氏名	鈴木 一世	学年	2

1 目的・応募理由

鉄道業界への就職を希望し、社会や地域の発展に持続的な貢献をしたいと考えています。インバウンド需要がある海外でのインターンシップに興味がありました。鉄道ビジネスを通して社会や人々が受けとめる価値観が何か、どのようなサービスで顧客満足度を得られているのかを学ぶことを目的に応募しました。

2 研修内容等

(1) 実施前研修

実施日：7月19日（土）

研修場所：静岡県庁別館 第4会議室

研修内容：諸連絡や関係者紹介、高校教育課挨拶、趣旨説明、全体研修、グループ別研修、質疑応答等

あらためて海外インターンシップの内容を理解し、浜松湖北高校、静岡県の代表として参加する自覚を持ちました。交流や視察、就労体験等の活動を通して、海外マーケットにおける企業の魅力や競争力、貢献度などを現地で実際に見聞きして肌で感じることを大切にしようと思えました。そして、将来の働き方や生き方について、真剣に考えられる活動にしたいと思えました。

今回の研修は、ふじのくにグローバル人材育成基金（寄附金）によって支援をいただいています。この後実施予定の国内研修・海外就労体験・研修成果発表を充実したものにできるよう、目的とスケジュールの確認をして臨もうと思えました。国際的視野を持ち、地域社会の発展に貢献できる人材になりたいです。



(2) 国内研修

実施日：8月4日（金）

研修場所：日本平ロープウェイ、静岡鉄道事業所、新静岡駅・鷹匠ビル

研修内容：会社概要、事業概要（鉄道部）、ロープウェイ体験、久能山東照宮見学、昼食、事業所見学、安全設備機器使用訓練、新静岡駅・鷹匠ビル見学、質疑応答等

今回の研修で、静岡鉄道は静鉄グループの中でも中心企業であり、強み（鉄道、索道、バス・タクシー、ホテル、不動産事業等）によって人々の生活を強固に支え、まちづくりに貢献している企業であることを実感できました。

日本平ロープウェイでは、その整備や管理、観光客の迎え入れ体制が安全・安心とおもてなしの精神から成り立っているものだと感じました。昼食の「大御所御膳」やお土産は静岡をアピールするインパクトある商品でした。思わず買ってしまったくなる戦略があると感じました。学校でマーケティングを勉強している私にとって、大変興味深いものでした。

運転運輸営業所での研修では、静岡鉄道の沿革やサービスに対する思い、「安全・安心・快適のあくなき追求」について説明を受けました。お茶を輸送することから始まり、全国で初めてワンマン運転をしたという内容については、静岡が改めてお茶の産地であること、産業を支える役割を担っていると実感しました。安全設備機器使用訓練の体験では、安全があって安心を得られることを理解しました。こちらでの経験は、学校で学んだ経営におけるマーケティングとマネジメ



ントについて、体感することができた内容でした。

鉄道の役割は人やものを運ぶだけではなく、地域活性化やまちづくり、CO₂削減で環境問題の解決、コミュニティの提供やイベントの企画で新たな場所や人との出会い（繋がり）を作るなど、無限大に役割があると感じました。特に、まちづくりにはまちを良くしたいという想いと前向きに楽しめるマインドやパーソナリティが大切だと学びました。私は、鉄道の強みを活かした社会や地域の発展に持続的貢献できる職業人になりたいです。

(3) 海外研修

実施日：8月18日（月）から8月21日（木）まで

研修場所：台湾 台北メトロ、猫空ロープウェイ、静岡県台湾事務所

研修内容：1日目 浜松→羽田空港→台湾

2日目 午前 猫空ロープウェイ乗車・視察（体調不良のため通院）
午後 見学（車両工場、レール車両メンテナンス、車両司令センター）、避難体験、乗車体験（復興崗駅-台北駅）

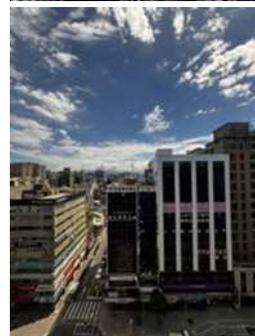
3日目 午前 静岡県台湾事務所所長講話「台湾最新事情」
午後 市内視察

4日目 台湾→羽田空港→浜松

県内企業が海外とよりグローバルな関わりを持ち、企業の成長と社会貢献を目指して企業努力し続けていることや、自社の強みで社会貢献に繋げる取り組みを目の当たりにすることができた研修となりました。国内だけではなく海外に進出することは、新たなニーズや発見を見つけ、新たな繋がりを作り、企業成長と企業の強みを活かした社会貢献への展開に繋がることになると思いました。

今回多くの貴重な経験と学びを得られたことで、自己実現のためにグローバルな視野をもっと広げていきたいと思いました。地元で貢献できる職業人になるためには、地元を知ることはもちろんですが、社会の変化やニーズの変化に気づき、柔軟にタイムリーに対応できないといけないと感じました。そのために、前向きに自ら行動することで、視野を広げていくことが必要だと考えます。また、普段から自分の目標を明確にしておけば、チャンスは掴めるものだと実感しました。

台湾での企業見学だけでなく、文化や食文化の違いを体感し、台湾の方々との直接交流、大好きな交通機関の体験、本当に充実した時間を過ごすことができました。これらの経験を通じて台湾の魅力を深く理解することができ、台湾にまた行きたいと思いました。体調を崩してしまったため、体験できなかったロープウェイには必ずリベンジします。この研修で得た学びや繋がりを大切に、今後の成長に繋げていきたいと考えています。



3 感想等

将来鉄道業界で働きたい私にとって、鉄道界における国内外での実体験は大きな学びとなりました。社会や人々にとって鉄道ビジネスの提供価値は「安全」と「ニーズに合わせた価値」だと実感しました。鉄道にはものや人を運ぶことだけでなく、人とも、人と人を繋ぎ、まちづくりに大きな役割があると感じました。その役割を担うことで、社会や地域の持続的発展に繋がるのだと感じました。

世の中が変化していく中で、鉄道の役割も変化していく部分はあると思います。また、観光地等でのインバウンド対応をはじめとする様々な課題については、鉄道界の力が解決の糸口にもなると思います。今回の貴重な経験を活かし、学校の授業や日常生活の中で具体的に考え、提案していくことを挑戦したいと思います。

今回、特別な経験をすることができたことは、何よりこのような学びの場を提供していただいたことのおかげです。本当にありがとうございました。私は将来、鉄道界で「繋ぐ」仕事に従事し、地域や社会全体に笑顔をお届けられるような職業人になりたいです。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾			
校内発表会	2026年2月		(対象)	全校・学年		
学校名	静岡市立清水桜が丘高等学校	氏名	大石 優芽	学年	2	

1 目的・応募理由

私は、元々ある趣味がきっかけで韓国の文化や言語に興味を持っていて、実際に家族で韓国に訪れたことで、アジアの文化にも興味を持ち始めた。高校一年生の時に台湾の方との国際交流で実際に会話をしたり、文化に触れたりするという経験をしてとても楽しかったのを覚えている。もう一度この研修を通して、語学や文化などを肌で感じつつ、ビジネススキルや実際に海外で働いている方々の異文化での柔軟なコミュニケーション能力や対応力を学びたいと思ったからだ。

2 研修内容等

【国内研修】

国内研修では、日本平ロープウェイに実際に乗り、日本平の山頂から久能山東照宮まで移動した。ロープウェイは、日本平の山頂と久能山東照宮を結んでおり、全長 1065 mもある。1957年に開業し、現在に至るまで約 68 年間有責無事故を継続している。ロープウェイからは、屏風谷や久能海岸などを見ることができた。久能山東照宮では、神主さんに歴史を説明してもらいながら回った。普段なら入れないところにも入ることができた。日本平ロープウェイの方に戻ってから、たいらぎというレストランで昼食をとった。午後は、静岡鉄道の運転運輸営業所の方に行き、鉄道部の紹介を聞いた。静岡鉄道の歴史や静岡鉄道の概要やまた日本平ロープウェイの概要についても少し説明を受けた。次に事業所見学で、駅務係の仕事現場を見たり、説明を聞いたりした。また、昔実際に使っていた鉄道なども見させてもらった。そして、静岡鉄道の電車を使って安全設備機器使用訓練を行った。非常ボタンをどんな時に押すのかを説明を受けたり、実際に押してみたりなどの体験を行った。最後に、静鉄電車に乗って新静岡駅まで行き、新静岡駅・鷹匠ビル見学を行った。そこで働いている社員さんから静鉄グループが行っていることや事業内容などを説明してくれた。

【海外研修】

海外研修では、1日目に台湾についてからガイドさんに会い、まず「丸林」というレストランで夕食をとった後、「饒河街観光夜市」で観光した。2日目は、猫空ロープウェイに乗ったり、「指南宮」という場所でお寺に行き、お参りをしたり、猫空茶屋で猫空茶を買ったりした。昼食は「金品茶樓」というレストランで焼売や餃子を食べたりした。次に、台北メトロの本部に行き、車両基地や車両工場・レール車両メンテナンスの視察をした。また別の施設で、避難体験や安全設備機器使用訓練等も行った。その後実際に街中を運行している電車に乗って乗車体験を行った。最後に車両指令センター視察なども行った。3日目は、県駐在事務所よる講話を聴いて、事業内容や台湾の基本情報・文化などの説明を受けた。次に、専用車で車窓から中正記念堂や總統

府を見た後、「龍山寺」というお寺を訪れ参拝した。龍山寺でガイドさんから台湾のお参りの方法を習いながら神様にお祈りをし、くじ引きを引いたりした。昼に、中正記念堂で衛兵交代式を見たり、ガイドさんの歴史の説明などを聞いたりしながら観光した。午後は、エバーリッチ免税店でお土産を買い、九份で千と千尋の神隠しのある場面のモチーフとなった場所で記念撮影をしたり、幸福堂というお店でタピオカを飲んだり、お土産を買ったり観光を満喫した。夕食は、北京料理屋さんで北京ダックを食べたりした。

3 感想等

静岡鉄道は台北メトロと日本平ロープウェイは猫空ロープウェイと友好協定を結んでいて、今回の研修で国際比較をしたが、台湾は鉄道・索道のどちらも規模がとても大きくて、ロープウェイは日本ではあまり長い時間乗らなかったが、台湾では、30分以上と長い時間乗り、景色もより楽しむことができた。また猫空では、ロープウェイだけでなくエリア全体を楽しむことができた。鉄道は、静鉄は車両も台北メトロに比べて小さくあまり長い距離は運行していないが、台北メトロは台北市内を中心に長い距離を運行していて、どちらかというともJRに近い感じがした。実際に電車に乗って分かったこととして、台湾は電車の座席の位置に日本と違いがあり、とても驚いた。今回の研修で日本でも台湾でも安全設備機器の訓練を行って知識を得たので、万が一電車内や駅のホームで危険な場面に遭遇した場合は、非常ボタンを勇気をもって躊躇せずに押したいと思った。また日本では、線路内の落とし物としてワイヤレスイヤホンが多らしく、線路内に落とし物をした際にどれくらいの影響が周りに及ぶのかが分かったため、今後自分もさらに気を付けようと思ったし、乗客の方にも気を付けてもらいたいと思った。台湾の食は少し味付けの濃いものもあったが、日本人にとってはとても食べやすいものであり、どれもとてもおいしかった。3日目の県駐在員事務所の講話で自分が興味を持っていた台湾の文化や言語について知ることができたのでとても面白かった。今回の研修を通して台湾のさまざまなところ観光して台湾の文化を感じたり、歴史を知ることができたのでとても良い経験をする事ができたなと思った。また、台北メトロや猫空ロープウェイや県駐在員事務所の現場をみて海外で働くとはどういうことなのかを実感することもできた。この経験を通して、早い段階からコミュニケーション能力や語学力などの力を将来のために身に付ける必要があるなとも思った。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	9月22日		(対象)	全校・学年	
学校名	聖隷クリストファー高等学校	氏名	谷口 奏斗	学年	2

1 目的、応募理由

私は国際関係の分野に関心を持っていて、最近海外で働く日本人のことについて興味があります。そこで、静岡県が主催する海外インターンシップのことを聞き、参加しようと思いました。僕は台湾へのインターンシップを希望しました。他にもタイやインドネシアへのインターンシップがありましたが、近年経済成長を続けている比較的都市部の台北に興味がありました。単純な英語力だけでなく、他国の国の人、特に、英語を公用語としない国で自分のコミュニケーション能力はどこまで通用するのを知りたいと思っていました。加えて、日本の文化や都市機能の違いを学びたいと考えていました。鉄道や交通関係にはあまり興味がありませんでしたが、鉄道やバスは自分にとって身近なもので、生活に深く関わっています。そして、このような交通機関を運営している企業の規模は地域限定のものだと考えていましたが、その企業が海外進出をしてどのような部分に繋がり、活かされているのかを調べて、地元をどう励ますのかを探究しようと思いました。

2 研修内容等

まず、訪れたのは猫空ロープウェイで、国内研修の際に訪れた日本平ロープウェイと友好協定を結んでいて、なにがどう違うのかを間近で確認できる貴重な機会となりました。日本平ロープウェイと大きく違うのは距離で、猫空ロープウェイは遥かに長い距離をつないでいました。それに比例してゴンドラに乗っている時間も長く退屈にならないかと思っていましたが、企業の方が丁寧に台湾の街並みや風景について説明してくださり、とても楽しい時間でした。やはり日本と同様に、移動時間でさえもお客さんに楽しんでもらう努力はされているのだなと気づきました。

次に伺った台北メトロ車両基地、車両工場では、台北メトロの様々な技術に驚きました。電車の床に人が一定の面積にどれだけ乗っているかを測るシステムを導入し、それを元に混雑状況を駅のホームやアプリに表示して渋滞を少なくできる仕組みにとっても興味を持ちました。他にもAIを活用したものがあり、人々の生活に深く根付いている企業としての努力を見ることができました。このような取り組みも発信して日本だけでなく、人口の多い国もと入れられたらいいなと思いました。最後に駐在員事務所の方によるお話を伺いました。その方は主に静岡の魅力を発信する仕事をされ

ていて、SNS や地元の店舗でのポスター掲示や商品の販売をしていました。また、台湾で起業することの難しさや日本との相違点も教わることができました。海外で働くことを志望する僕にとって有益な情報となりました。

3 感想

僕はこの高校生海外インターンシップに参加して様々なことを得ることができました。まず、県内に数ある企業が地元や地域住民のために工夫を重ねていることを知りました。年に数回イベントを開催したり、見学会を主催したりして、交流を深めていく活動には心を打たれました。信頼してもらうことが何よりも大事なのだと感じました。静岡鉄道さんが企画してくださった台湾の研修は、鉄道部や営業部署などのビジネスのことについて考える時間だけでなく、実際に台湾の街や観光地を訪れる時間も取られていました。丁寧に説明してくれるガイドさんとバスの運転手の方と行動をさせて頂き、すごく楽しくてもう一回行きたいな、と思わせてくれました。改めて自分たちの町の良さや改善点にも気付き、いかに国際的な交流が大事かを知りました。加えて、今まで不鮮明だった将来の夢や目標についてもじっくりと考えることができ、新たな視点で自分を見つめて、どう地域に貢献していくか、どうやって地域を励ますかを考えたいと思えるようになりました。自分の語学力とコミュニケーション能力がまだ不足していると感じるので、今後、「トビタテ！留学 JAPAN」の活動にも目をつけて、他のインターンシップにも参加してみようと思います。このような素晴らしい経験ができる高校生海外インターンシップを他の人にも勧めて、よりよい社会を目指すことのできるように日々精進していきたいです。



ものづくり等の世界大会参加

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		ものづくり等の世界大会参加		訪問国		リトアニア共和国	
校内発表会の有無		無		(有の場合)		日にち	
学校名		県立科学技術高等学校		氏名		杉原伸弥	
				学年		3年	

1 目的・応募理由

私は、部活動で ARDF 競技という野山に隠された電波発信源を探索する競技に取り組みました。高校2年の時に、第32回2024全日本ARDF競技大会に参加し、3.5MHz帯クラシック競技で優勝、144MHz帯クラシック競技で第3位となりました。この結果から第22回IARU ARDF世界選手権大会の代表選手として推薦され出場が決まりました。高校時代に日本代表として世界各国の選手たちと競い合えることや、異国の文化や言語に触れることは自分に取ってかけがえのない経験になると思い応募しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

大会前日に行われたトレーニングでは、緑豊かな森の中で世界各国から集まった選手たちが、国際大会を前に最終調整を行っていました。私も機材の動作確認や周波数の確認を行いながら、体を動かして大会の準備をしました。

開会式では、地元リトアニア共和国の伝統的な歌やダンスが披露され、参加者たちはその文化に触れながら交流を深めていました。民族衣装に身を包んだ人たちの姿や、各国代表との記念撮影も行われ、和やかで華やかな雰囲気に包まれていました。私もダンスに参加し他国の選手の中に溶け込み交流を図ることができました。



本競技は、森など自然の中に隠された複数の電波発信源を、地図とコンパス、そして専用の受信機を使って探索するというものです。電波の発信源は1分間ごとに切り替わるようになっており、競技者はその方向や電波の強さを手掛かりにして位置を推測し、走って探索します。走力や地図を読む力が必要な上に、体力、集中力、判断力のすべてが試される競技です。

リトアニア共和国の森は、日本の山や森とはまったく異なる雰囲気を持っており、まさに「北欧の森」といった印象でした。高低差があまりなく、下草も低いため視界が広く、地図を確認しながら直線的に移動しやすい環境でしたが、地形の読み方やルート選択の難しさを感じました。一方、海外の選手たちの走り方には強い衝撃を受けました。競技中、同じ方向に進むチェコ共和国の選手がいたのですが、沼があろうと、草が生い茂っていようと、迷わず直線的に突き進んでいく姿は圧巻でした。改めて世界のレベルの高さを感じさせられました。



閉会式終了後、各国の選手たちが一堂に会する交流会が開催され、会場はとても賑やかでした。国や言葉の壁を越えて、互いの健闘を称え合う温かい雰囲気に包まれていました。中でも特に印象的だったのが、ドイツ人の女性との交流です。とてもエネルギッシュでフレンドリーな方で、私に「ユニフォームを交換してほしい！」と熱心に話しかけてくださいました。自分のユニフォームが異国の地でこんなに喜ばれることに驚きつつ、同時に嬉しさと誇らしさを感じました。互いのユニフォームを交換した際は、国境も言語も世代も超えて繋がれるのだと実感することが出来ました。また、会場では世界各国から持ち寄ったお土産を交換する場面もありました。ちょっとした贈り物が会話のきっかけとなり、言葉の壁を越えて一気に距離が縮まるのを感じました。



3 感想等

今回の世界大会で4競技のすべてで記録を残せたことは日頃の練習の成果であったと思っています。しかし目標としていた表彰台には遠く及びませんでした。日本で行われた大会で結果を出すことが出来ていたのもとても悔しい思いをしました。取り組んだ練習やトレーニングがまだまだ世界では通用しないことが分かりました。今後は地図や受信機の使い方をこれまで以上に熟知し、知らない森の中でも草木のものともしないで突き進むことができるメンタル面を鍛えていこうと思いました。場所や気象など同じ条件で行われることがないこの競技は、毎回違う課題が出てくるためとても面白いと感じています。これからも ARDF 競技を続けていき、次の全日本大会で、代表選手に選ばれるよう頑張りたいと考えています。ARDF という競技、また無線を通じて、私はたくさんの経験をする事ができました。自然の中で電波を頼りに走る難しさや楽しさ、異なる環境での新しい発見、さらには世界の選手たちとの出会いや交流、その一つひとつが自分にとって大きな学びであり、かけがえのない財産となりました。世界大会に出場できるとは思いもしませんでした。その機会を通じて得られた経験をこれからの人生で生かしていきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		ものづくり等の世界大会参加		訪問国		リトアニア共和国	
校内発表会の有無		無	(有の場合)	日にち		(対象)	
学校名	県立科学技術高等学校		氏名	西島 大勝		学年	3年

1 目的・応募理由

ARDFとは、野山に設置された電波の発信源（TX）を受信機やコンパス、地図を用いて、制限時間内に探索する競技です。走力や体力はもちろん、地図から地形を読み取る力や、電波の強弱を頼りにして探索する方向を判断する力も求められます。

私は群馬県高崎市で行われました、2024 全日本 ARDF 競技大会に出場し、144MHz 帯クラシック競技の M19（19 歳以下の男子）部門で優勝することができました。そして第 22 回 IARU ARDF 世界選手権大会に日本代表選手として推薦され、出場が決まりました。

日本から遠く離れた国に日本代表として参加することは、一人の選手として成果を出し、日本の勝利に貢献するという責任感があります。また、異なる文化や価値観の中で日本の魅力を伝える重要な役割を担いながら、日常生活ではできない貴重な経験になると考えました。私の力を最大限に発揮するために、競技に集中できる環境が不可欠であると考え、今回応募させていただきました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

- 16 日（土）トレーニングキャンプ・
オープニングセレモニー
- 17 日（日）3.5MHz 帯クラシック競技
- 18 日（月）スプリント競技
- 19 日（火）休息日
- 20 日（水）Fox-O 競技
- 21 日（木）144MHz 帯クラシック競技・
閉会式・交流会



トレーニングキャンプでは、緑地広場で全種目の練習をしました。持参した受信機材が正常に動作するのか、実際に電波を受信して確認しました。電波発信機から 10m、20m、30m、40m、50m と異なる距離から電波を受信し、どの距離でどのような受信音が聞こえるか、再確認しました。受信音から想定できる、発信源と自身の距離感が、日本と同じであることを知り、機材が普段通りの感覚で使えると感じました。

3.5MHz 帯・144MHz 帯クラシック競技は、5 つの電波発信源を探索します。発信源の距離はスタート位置から 750m 以上、各発信源から 400m 以上離れていて、地図と受信機を頼りに、どのような道筋で探索するかを、競技を行いながら考えます。Fox-O 競技は、10 個の電波発信源を探索します。地図に描かれた地点まで移動することで、微弱な電波が受信でき、探索することができます。事前に探索ルートを考え、地図やコンパスを用いて正確に目的地に到達する力と、

走力と体力が求められます。スプリント競技は、10個の電波発信源を探索する競技です。一回の電波送信時間が12秒と他の競技に比べて短いのが特徴です。その短時間の中で、探索する方向と距離感を想定するのが私にとって難しく、苦手意識があります。私が競技の中で特に意識したことは、私が出せる最大限の移動スピードを保つということです。蜘蛛の巣や倒木があっても迂回せずに、直線的に進みながら探索しました。その結果、全ての電波発信源を探索することができました。さらに探索時間が30分を切る、29分17秒でゴールし、私にとってはこれまでの最高の成果を出すことができました。しかし、1位の選手は16分58秒でゴールしていました。より早くゴールするには何が必要なのか、スプリント競技の技術向上について考えるきっかけになりました。

・結果

- 3.5MHz 帯クラシック競技 14位
- スプリント競技 12位
- Fox-O競技 17位
- 144MHz 帯クラシック競技 順位なし



3 感想

リトアニア共和国は日本とは気候、食文化、言語、歴史など、様々なことが全く異なりました。特に印象に残っているのは、食文化の違いです。リトアニア共和国では、パンや茹でたポテトが主食でした。日常的に米を食べている私にとって、毎食パンというのは新鮮であり、驚きでした。また、飲料水も硬水が普通でした。普段軟水を飲んでいる私にとって、最初は硬水に慣れず、腹痛になりましたが、実際に異文化に触れるという体験をできました。



事前学習でリトアニア共和国について調べたとき、現地の人達は警戒心が強く、冷たく振る舞う人が多いと知りました。しかし、現地のスーパーで水を購入した際、店員の方がセルフレジの使い方を丁寧に教えてくださり、さらに割引チケットのようなものまで渡してくれました。10日間程の滞在でしたが、リトアニア人に対する印象が変わりました。そして、先入観で物事を決めつけるべきではないと感じました。

最終日に他国の選手たちと交流する機会があり、同年代で優勝をしたチェコ共和国の選手たちとの会話を楽しみました。彼らはこの先も ARDF 競技を続けると話していて、いつか世界大会でまた会おうという話をしました。また、ドイツの選手からは国旗のシールを頂きました。それに対し私は、アニメのキャラクターが描かれたアイマスクや日本の和菓子の代表である羊羹を渡しました。このような経験を通して、英語でのコミュニケーション力の成長につながったと考えています。今回の世界大会では、入賞することはできませんでしたが、選手や現地の人たちとの交流を通して貴重な経験をすることができました。世界の舞台上で挑戦する機会をいただけたことに深く感謝し、これからも、ARDF 競技に取り組んでいきたいと考えています。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	ものづくり等の世界大会参加		訪問国	リトアニア共和国	
校内発表会の有無	有 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 無	(有の場合)	日にち	(対象)	
学校名	県立科学技術高等学校	氏名	森島 瑚葉	学年	2年

1 目的・応募理由

私は、高校入学後はこれまでと違った部活動で活動したいと考えていたところ、ARDF という競技に出会いました。ARDF 競技を始めるにあたって世界大会出場を目標に練習をしてきました。県大会や全国大会などに出場し、練習の成果が出て競技に対して少しずつ自信を持つようになりました。そして、一年生の時に開催された第 32 回 2024 全日本 ARDF 競技大会の 3.5MHz 帯クラシック競技で第 2 位、144MHz 帯クラシック競技で第 3 位という結果を残すことができ、第 22 回 IARU ARDF 世界選手権大会に推薦され出場が決まりました。これまでの練習の成果が世界大会でどの程度通用するのかを試したいと思い応募しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

8月16日 トレーニング・開会式

8月17日 3.5MHz 帯クラシック競技

8月18日 FOX 0 競技

8月19日 休息日

8月20日 スプリント競技

8月21日 144MHz 帯クラシック競技



初日のトレーニングでは4競技すべてが練習できるように設定されていました。私は受信機が正常に動作しているか、また国内で使用しているときと同様な使い方ができるかを確認しました。特に苦手意識のある 144MHz 帯クラシック競技で使用する受信機については重点的に動作確認をしました。受信機の動作確認後は、高低差による音の聞こえ方の違いに気を付けながら4競技の受信練習をしました。

大会の開会式では、他国の選手達とコミュニケーションが取れるかととても緊張していましたが、年齢差や言語の違いなど関係なく、会話や写真撮影をして交流を図りました。

3.5MHz 帯クラシック競技は、制限時間 150 分の競技時間でした。当日は気温が 20℃以下となり、スタート時刻まで寒さを上着一枚でしのぐのが大変でした。8月の暑い日本の気候とは全く異なっていると、実感しました。競技中は、国内の大会同様に地図とコンパスを用いて野山に進んでみたところ、地図中の自分の位置を見失ってしまいました。草木が生い茂っている場所や、川を渡る際に方位を見誤ったのが原因だったと思います。場所を見失った私は電波発信源の音を聞いて、電波発信源に直線的に行くことを選択し、地図をあまり見ることなく探索することにしました。草木が生い茂る地点もあり直線的に移動出来ないところもあり大変でしたが、ゴールまでたどり着くことができたので安心しました。

FOX-0 競技は、苦手意識がありました。地図中に示された円の付近まで行かないと電波発信源

の音が聞こえないため、地図とコンパスを使いながら自分の現在地を確認し移動しました。私はスタートからできるだけわかりやすい道を使い移動しましたが、自分が思っているところよりも現在地がずれていることが度々ありました。その際は、判別できる元の位置まで戻り、ここからはできるだけ地図に書いてある判別しやすい道を進みました。国内大会よりも電波発信源を多く探索できたので嬉しかったです。

スプリント競技は得意分野だったのですべての電波発信源を取り、早く帰ってくるのが目標でした。しかし、競技が始まって電波発信源の音を聞いた瞬間、ヘッドホンから音が聞こえていないことに気づき、予備のイヤホンに変更するというアクシデントが起きました。練習不足で自分が思っていた探索時間よりも時間がかかってしまい、国内大会では感じたことのない悔しさを感じました。

144MHz 帯クラシック競技では、受信機とヘッドホンの接続に必要なコネクタがないことにスタート直前に気が付きました。リトアニア共和国のスタッフに助けを求めたところ、チェコ共和国の選手に助けられコネクタがついているヘッドホンを貸していただき、スタートに間に合うことができました。思わぬ場面で他国の選手の優しさを感じられて嬉しかったです。この競技での私の一番の失敗は、川を超える前に野山の中で現在地がわからなくなってしまったことです。スタート順が遅かったこともあり他の選手が一人もいなかったのもとても不安になりましたが、遠くで歓声が聞こえてきて無事ゴールにたどり着くことができました。



3 感想等

私はこの世界大会に向けて放課後や休日を使って地図読みや走力強化に取り組み、できるだけ本番に近い環境で練習し、少しずつ実力と経験値を上げていきました。

その成果として、すべての競技で制限時間内にゴールすることができました。その結果、144MHz 帯クラシック競技、3.5MHz 帯クラシック競技の2競技 W19 クラスで女子団体第3位に入賞することができました。世界大会という大舞台で表彰台に登れたことをとても誇りに思います。しかし、実際の競技では課題も多く残りました。練習では冷静に判断できていたことが、本番では焦りや緊張から判断を誤ってしまったことや、後半になると体力がなくなり走るスピードを維持することができなかつたことが反省点です。ハプニングもたくさんありましたが人の温かさが感じられてとても良い経験になりました。

今回の大会を通して感じたのは、基礎体力の大切さと、どんな状況でも冷静に対応できる精神力です。また、自分の弱点と向き合うことができ良い経験になりました。

この経験を生かし、次の世界大会で個人の成績でメダルが取れることを目標に、コンパスと地図の使い方を再確認し、基礎体力の向上に努め、国内の大会で常に成績を残せるようにしたいです。



トビタテ！留学JAPAN「拠点形成支援事業」

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	マイ好奇心探究コース		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	笠井洋子	学年	2年

私は犬を飼い始めたことで、動物愛護に興味を持ちました。そして、テレビでファシリティドッグという病院でハンドラーと共に平日は毎日働く犬がいるということを知り、ファシリティドッグを日本に長年提供してきたハワイにあるファシリティドッグ育成施設である Assistance Dogs of Hawaii さんを訪れ、本場でどのようにファシリティドッグが育成され、病院でどのように働くことで患者の方々の心のケアをしているのか、そしてどのようにそれらの犬のストレスケアが行われているのかを探究したいと思い、この留学を計画しました。

留学前には自分が通っている学校でファシリティドッグの認知度を測るためのアンケート調査を実施しました。そこで、150人の方から回答をいただきました。ファシリティドッグを知っている人はそのうちの10%で、病院で犬が働くことに賛成する人は68.2%と多かったです。犬に対するイメージは可愛いや賢い、癒しのようなプラスのイメージが多いが、噛みそうや汚いのようなマイナスのイメージも見られ、日本では犬に対する印象は良いものの、公共施設で犬が働くことに対する抵抗感が強いのだということがわかりました。



留学中には Assistance Dogs of Hawaii さんに普段のファシリティドッグの仕事の様子や訓練の様子、ケアの仕方、ストレス解消方法を教えていただいたり、Hawaiian Humane Society というハワイにある動物保護施設を見学させていただき、保護動物のストレス解消法についても教えていただきました。ファシリティドッグの訓練は、おやつを使い、うまく行ったらおやつをあげることを繰り返すことで行っていました。病院見学の際に癌の男の子にファシリティドッグが寄り添っているのを見学して、その男の子がリラックスしているように見え、その子にとってファシリティドッグとの時間が特別なのだとわかりました。また、患者だけではなく、その家族や医療従事者までもファシリティドッグが来た時に嬉しそうだったので、ファシリティドッグは病院全体を明るくし、人々の人生を豊かにするということがわかりました。普段のケアはファシリティドッグがリラックスできるようにされており、ストレス解消のために定期的な休憩や十分な運動、ハグなどをしたりしていました。また、動物保護施設では体の大きさに合わせて十分なスペースが確保されている個室がそれぞれに与えられていたり、ボランティアの方によって全ての犬が1日2回散歩に連れて行ってもらっていたり、落ち着くように穏やかな音楽が流れていたりしました。



留学中にハワイで、日本と同じ質問内容で行ったファシリティドッグの認知度調査をしました。ハワイの方からは21人から回答をいただき、ファシリティドッグを知っている人はそのうちの33%で、病院で犬が働くことにはハワイの方全員が賛成していました。日本と違い、働く犬が社会に受け入れられていることがわ

かりました。犬に対する印象は可愛いや賢い、好き、家族の一員などプラスなものばかりで、マイナスな印象はなく、犬が働いているのを見たことがある場所として、約 62%の方が病院、9.5%の方が日本では出てこなかった裁判所や学校を挙げていました。

日本とハワイのファシリティドッグに対する認知度を調査してみて、日本よりもハワイの方が認知度が高く、病院で働く犬に対して賛成する人も多いことや、裁判所や学校でも働いている犬を多くの人々が見たことがあることから、ハワイの人々は公共施設に犬がいることにより慣れていたり、犬に対して信頼を寄せられていると考えられました。そして、サービスドッグのオルに会わせていただきましたが、オルを飼っている障害を持つ方が、オルは身体的にも支えてくれるし、人生の目的や行動をする機会を与えてくれる、オルがいるから散歩に毎日2回出かけ、社会と関わることができているとおっしゃっていました。そのことから、ファシリティドッグのような働く犬は人々を精神的にも身体的にも支え、人々に生きる目的や行動の機会を与え、人々と社会を繋いだり、人々の生活をより活発にしたりするなど影響を与えることがわかりました。そして、人は人のために働いてくれる犬たちを一番に大事にし、日々のケアや運動、定期的な休憩を十分に行うことでストレス解消を行うことができ、犬も人もお互いが幸せになることができると考えました。

そして、私の最終目標は人と犬の幸せな共生社会を作ることですが、ハワイのような人と犬の幸せな共生社会を作るためには、日本の人々の動物に対するイメージをよくすることや、人々が小さな頃から、動物への正しく、愛のある関わり方を学ぶことが必要であるため、動物に関する教育を学校で行うことが必要だと考えました。Hawaiian Humane Societyさんは毎年ハワイにある150校ほどの学校で動物に関する講義をしていますが、そのような教育を行っていくといいと思います。それによって人々の動物に対するイメージが変わり、ファシリティドッグがより普及することにつながります。その後、その他にも裁判所で働くコートハウスファシリティドッグや学校で主にカウンセラーと共に働くスクールドッグなどを導入していくことで、人々にとってより幸せな社会を作れると考えています。そして、犬にただ働いてもらうだけではなく、働く犬のストレス解消もしっかり行うことや、動物たちのための質の良い保護施設を保つこと、そこに地域の人々が積極的に参加していくことで動物にとっても、人にとっても、幸せな共生社会を作ることができると考えました。



参加した コース	マイ好奇心探究コース			訪問国	カナダ
学校名	静岡県立静岡城北高校	氏名	佐々木ありさ	学年	2年

私は静岡の保育事情について興味をもち、静岡の保育施設をより良くしたいという強い気持ちから、カナダに留学をしました。現在の日本の保育現場では、保育士が子どもに対して虐待をしてしまう事件や、保育士の減少など、さまざまな課題を抱えています。その課題を解決するために、私はカナダの保育内容に興味をもちました。カナダの保育は日本よりも内容が充実しており、先進国の中でも高く評価されているので、実際に現地へ行き、自分の目で確かめたいと思いました。



カナダでは、午前中に語学学校に通いました。語学学校ではレベル分けテストを行い、自分のレベルに合ったクラスで学びました。クラスには私より年上の人が多く、私は最年少でしたが、楽しく英語を学び、積極的に通うことができました。授業では文法を学んだり、ゲームをしたりし、休憩時間にはみんなでソファに集まって雑談をするなど、オンリーイングリッシュの生活を送りました。学校へはバスや電車を使って自力で通学し、その経験も新鮮でした。また、現地の人とはとてもフレンドリーで、たくさんの友だちができ、一緒に遊びに行ったり、連絡先を交換して、今でもつながっている友だちを作ることができました。

午後は探究活動を行いました。主な活動は、現地の保育士へのインタビューや、公園で遊んでいる保育園児の保護者への街頭インタビューです。そこから、カナダではレッジョ・エミリア・アプローチ（子どもの個性や創造性、自律性を尊重し、子どもが主体となって学ぶ教育法）が浸透しており、子どもたちが自立して行動していることが分かりました。また、夏でも涼しく日が長いため、広い自然の中でのびのびと遊ぶことがで



き、自然に触れ合う機会が多いと感じました。その分、体力も身につくと考えられます。保育内容が充実しているため安心して預けられる一方で、保育園に入りにくいという日本と似た課題もありました。これらのことから、カナダの保育をそのまま日本に取り入れるのは難しいですが、日本でも、夏でも涼しく遊べる環境づくりや、子どもが主体的に取り組める室内遊びなどは取り入れられると思いました。今後は、カナダで学んだ経験や知識を多くの人に発信し、静岡の保育に明るい未来が来るよう、探究活動を続けていきたいと思います。



参加した コース	マイ好奇心探究コース			訪問国	英国
学校名	静岡県立沼津東高等学校	氏名	大川大和	学年	二年

留学テーマ 県による国際交流と「紳士の国」から学ぶけん玉道の発展

● 留学前

私はけん玉を3歳の時から続けている。幸運にも仲間や家族に恵まれたおかげで、日本一を3回、ギネス世界記録を3回とっている。私の大事なアイデンティティである。けん玉は、手に取りやすく、場所も選ばない。誰とでも繋がることのできるコミュニケーションツールでもある。

3度目の日本一は、中学3年の1月。進路のこともあって思考も変わった。

「上手いだけじゃダメ。けん玉を通じて、何か伝えたい。」

そんななか、「トビタテ！留学 JAPAN」を見つけた。はじめは、とにかくけん玉を広めたい！という単純なものだった。しかし計画書を書く過程で深く考えざるを得なくなった。そして、思いを巡らせていくうちに、より良い世の中のためになるかどうかということが広めるその先にあるとわかった。そこで、「けん玉の普及発展を通じて、より良い社会に貢献する」をテーマに据えることにした。例えば、「音楽」は国境も言語も超えて人の心を豊かにしてくれる。「けん玉」も同様なツールではないのか、ということだ。

けん玉体験会をロンドンで開くという目標を立て、そのための教材プリントもチラシも、英語で作成した。日本けん玉協会の機関誌「けん玉通信」も調査し、けん玉普及活動の記事を読んで学んだ。

● 留学中



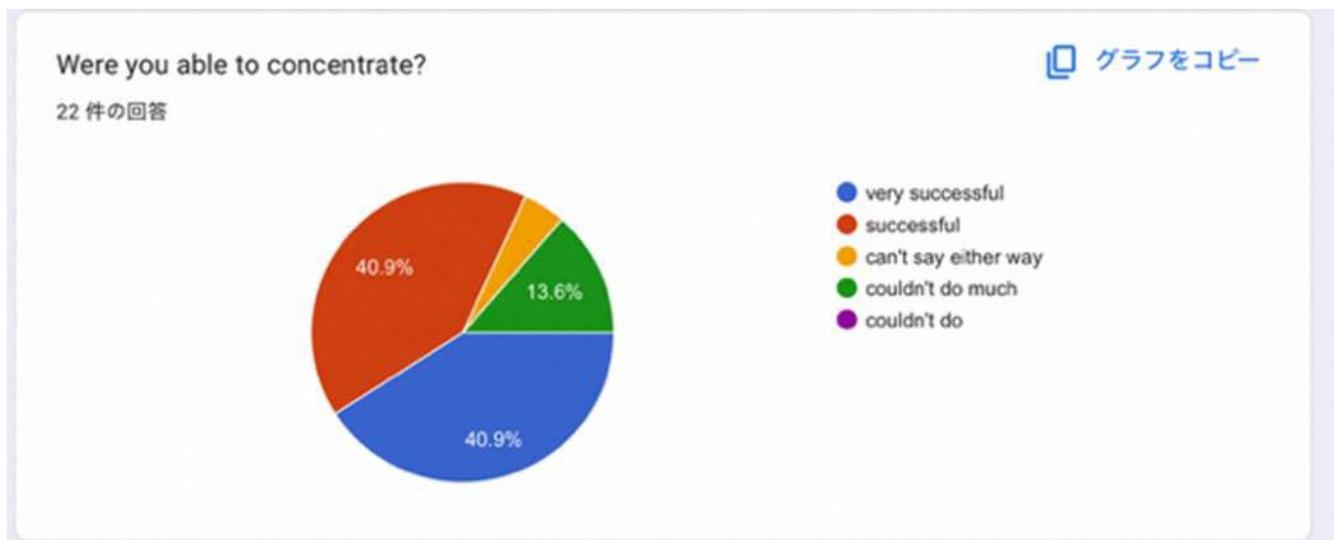
8月中旬ごろから公園(ラッセル・スクエア)にてストリートショー開催。通算5回開催。興味を持っていただいた方々にけん玉を体験してもらった。体験してもらった人は親子連れがほとんど。大抵は子供が興味を持ってくれたパターン。実施時間は1組あたり約20分～30分程度。「Great!」と褒めてくれた時は、自然に口が「Thank you!」と返していた。自分から話しかけて、けん玉の楽しさを紹介できた。同時に、自分から行動する難しさと大切さを感じた。

9月2日 St.Giles London 校にて課外活動としてけん玉体験会開催。15人が参加した。

実施時間は1時間。1人1人に進捗に対する個別指導を行った。もしかめによる参加者同士のミニ対決も実施。

また、体験者にはけん玉による効果を尋ねるアンケートを実施。

実際に想定していた効果が発揮されていたことが実証されていた。けん玉による運動、集中、コミュニケーション等。以下はけん玉体験会の様子、そしてアンケートの一部である。



● 留学後

これからはさらに多くの人にけん玉の魅力を伝え、アンケートのさらなる収集に勤めたい。また、けん玉が持つ可能性を内側からだけでなく様々な視点から考えていきたい。

参加した コース	マイ好奇心探究コース			訪問国	イタリア・英国
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	味元葉瑠	学年	2年

テーマは「建築から見る世界 with guitar and sketchbook」です。テーマの通りギターとスケッチブックを持ってイタリアとイギリスに留学に行きました。ギターはアコースティックギターです。

最初に様々なハプニングや余談から話させてください。余談といっても学んだことです。

まずイタリアのフィレンツェの空港に着きました。生憎の雨でした。なぜか私の乗った飛行機の人荷物が出てきません。1時間待ちました。早速日本との違いを感じました。さらに私のギターが出てきた際に‘Wow! Guitar?!’と沢山の人が反応してくれたおかげで、自分のやっていることの無謀さと海外の方の明るさを再認識しました。

そのあとも留学中には飛行機が2回キャンセルされた挙句に機体の故障で飛ばないなどなかなか事件もありました。それでも行ってよかった、また行きたいと思ったのが今回の留学です。特に良かった点はたくさんの方と関わり、自分の世界を広げられたことです。

ここから探究についてです。

1. 音楽
2. 絵画
3. 建築・街づくり
 - 3-1 「素材について」
 - 3-2 「自然の生かし方」
 - 3-2-1 留学中に学んだこと
 - 3-2-2 大学教授の方との対話
 - 3-2-3 大阪万博
4. 今後について



1. 音楽

イタリアにもイギリスにも、路上で演奏している方々が多くいました。イタリアでは道路を通過する音楽隊により授業が中断されることもありましたが、路上での演奏というと、多くの方が、ギター弾き語りを思い浮かべるでしょう。もちろんギター弾き語りをされている方もいました。しかし、イタリアではマイクとスピーカーのみの方がいたり、イギリスでは、バイオリンを弾いている方がいたりしました。日本よりも静かなかんきょうではないので、音楽もより受け入れられていました。

2. 絵画

絵画についても、イタリア、イギリスを問わず、街中の壁に沢山の絵が描かれていました。特に印象的なイギリスの合法グラフィティ・トンネル「Leake Street」について紹介します。下の写真のように壁から床、天井まで絵で埋め尽くされているトンネルです。誰かが描いた絵の上から新たに絵を描くことも可能だそうです。

3. 建築

建築については「素材について」と「自然の生かし方」について詳しく説明します

3-1 「素材について」

イタリアのフィレンツェでは大理石が主に使われています。この大理石は物理的な刺激と酸性物に弱いです。酸性物は大理石を溶かします。しかし、イタリアでは鳥が多く（鳥のフンは酸性）さらに地球温暖化の影響も受け、酸性雨が降るようになり、この大理石の建築が課題になっています。ピサの斜塔内部の階段も大理石でできているのですが、よく踏まれるところは凹んでいます。

イギリスではレンガが主に使われています。今のところ特に課題はないです。綺麗なレンガ造りの街並みをこれからも維持してもらいたいです。



3-2 「自然の生かし方」

3-2-1 留学中に学んだこと

Q 街中の自然はどのように置かれている？

A 壁に植物が吊るされている

軽トラックや自転車のカゴに植木や花を入れてあるものが路上に置いてある
移動販売車でのお花の販売など

Q ヨーロッパで体感した自然の効果とは

A 緑のリラックス効果あり。また、街が賑やかになる→観光に生かせる

3-2-2 大学教授の方との対話

やはり日本で自然を増やすには湿気が大問題。

街路樹や植木の木は自然ではないと思う。結局は人工的に作られた自然である。

教授が思う自然は落葉樹のようなもの。もしも、家の庭、窓際に落葉樹があると、夏は葉をつけ、それがサンシェードとなり室内が涼しくなる。

冬は葉を落とすため、日が室内に入り、部屋が暖められる。

このように元からある自然の原理を生かすのが教授の考える「自然」である。

3-2-3 大阪万博

事後研修で廃棄花をどうにかしたいと話したら、研修グループのメンバーの一人が「万博でも廃棄花を使用した例があるよ」と教えてくれました。そこから調べていくうちにさらに廃棄花に興味を持ちました。

4. 今後について

少し探求の大筋からは外れますが、「子どもの政治参加」についてより活発にしたい、問題提起していきたいと考えています。また、「廃棄花」についても活用方法を見つけないです。

今の一番の新たな探求、目標は「建築とホスピタリティの融合」です。

これらは留学に行ったことで磨きがかかったり、見つかったりした目標です。

最高の留学でした。これからも留学で培った力、留学で発見したことをもとに思考を止めず、努力していきたいです。



参加した コース	社会課題探究コース			訪問国	オーストラリア
学校名	静岡県立ふじのくに 国際高校	氏名	須藤 馨	学年	3年

はじめに

私が里親制度に関心を持つようになったのは、小学校時代の友人が里子として里親家庭に引き取られ、突然離れ離れになった経験がきっかけである。「なぜ家族が別々に暮らさなければならないのか」という疑問から、自分なりに里親制度や特別養子縁組について調べ始めた。中学3年生では児童養護施設の職員から話を聞く機会があり、日本の里親制度の現状や課題、そして海外との違いを知った。里親制度は、さまざまな事情で実親と暮らせない子どもを家庭で養育する制度であるが、日本では多くの子どもが施設で生活しているのが現状である。本探究では、日本の里親制度の課題を明らかにし、よりよい制度のあり方について考えていく。

日本の里親制度の問題点

日本の里親制度には、以下のような課題が挙げられる。

- ・登録里親の数が少なく、受け入れ家庭が不足している。
- ・児童養護施設の負担が大きく、職員の業務が過重になっている。
- ・制度自体の社会的認知度が低く、理解が十分に広がっていない。
- ・生活保護を受けている家庭が里親になる場合、経済的支援との両立が難しい。
- ・里親家庭ごとの生活環境に差があり、支援の質にばらつきがある。
- ・社会全体に里親制度への偏見が残っており、制度利用への心理的な壁がある。

これらの課題を踏まえ、私は留学前に実際に現場や関係者から話を聞き、課題の背景を探った。

事前調査

留学前には、元衆議院議員の高橋みほ氏にお話を伺い、制度を政治的な観点から考察する機会を得た。また、児童養護施設の職員、幼児教育の専門家にも取材し、現場の課題や支援体制の実情について学んだ。こうした実地調査を通して、書籍やインターネットだけでは得られない生の声を聞くことができた。この段階で、里親制度に関わる課題は単に制度の仕組みだけでなく、「社会全体の意識」や「支援ネットワークの弱さ」にも関係していることを強く感じた。

オーストラリアでの探究

現地ではまず、ブリスベン市立図書館でオーストラリアの里親制度の歴史的背景を学び、制度の成り立ちと社会的背景を整理した。その後、民間の里親支援機関を訪問し、担当者から制度運営の仕組みや支援体制、里親と行政・民間との連携の実際について詳しく話を伺った。さらに、ケアーズでは里親家庭に委託された子どもたちの心理的ケアを専門に行うカウンセラーと面会し、子どもの心のケアを重視するオーストラリアの取り組みを学んだ。

また、地域の保育士養成機関や幼稚園を訪れ、子どもを育てる文化的価値観や保育方針の違いを日本と比較した。おもちゃ貸し出しボランティアや日本人会のアンバサダー活動にも参加し、現地の人々との交流を深めることで、多様な人々が子育てを支える文化を実感した。

さらに、留学先の街頭でインタビュー調査を行い、年齢や性別を問わず合計 60 人に里親制度の認知度を尋ねた。その結果、60 人全員が制度の存在を知っており、そのうち 32 人が制度の仕組みを具体的に説明できた。この結果から、オーストラリアでは制度が社会に根付き、市民の理解と関心が非常に高いことを確認した。

特に印象的だったのは、来場者約 2 万人規模のブリスベンフェスティバルで、日本とオーストラリアの里親制度の違いについて英語でスピーチを行った経験である。多くの人々が足を止め、真剣に耳を傾けてくれたことから、社会的関心の高さと、個人の声が社会を動かす力を強く実感した。



おもちゃ貸し出し
ボランティアの様子



スピーチの様子

エヴァンジェリスト活動

私はオーストラリアでの学びを通して日本の里親制度の改善に向け、民間機関の確立と役割の拡大、ブルーカード制度の導入、広報・啓発活動の充実の三点が重要であると考えられるようになった。そこで広報・啓発活動の一環としてトビタテ留学 JAPAN10 期生による講演会を開催し、50 名の留学関係者や今後トビタテに挑戦したい児童、生徒に向けて、自身の探究課題である里親制度の普及を目的として講演を行った。

まとめ

今回のトビタテ留学を通じた探究活動は、私にとって日本では得られない特別な経験の連続だった。留学中は、すべての判断を自分で行う必要があり、成功も失敗も自分の責任だった。その環境の中で、私はこれまで以上に決断力・勇気・問題解決力を身につけることができた。

また、初対面の人とも臆せず話せるようになり、新しいコミュニティに飛び込むことへの恐怖心がなくなった。英語で社会的なテーマを伝えるという挑戦は、自分の想いを言葉で表現することの大切さを教えてくれた。人と関わることの面白さや、考え方の違いを尊重する姿勢の大切さも学んだ。

さらに、失敗を重ねる中で「大抵のことはなんとかなる」という柔軟な考え方を身につけることができた。うまくいかないときも焦らず、原点に立ち返ってまた前に進めばよいという教訓は、今後の人生にも生かせる大切な学びである。

現地での出会い、ケアンズ日本人会やボランティア団体の人々との協働、街頭アンケート活動などを通して、多様な視点に触れることができたことも大きな財産となった。これからも、探究を通して得た気づきを社会に還元し、「子どもが幸せに生きられる社会」の実現に向けて行動し続けたい。

参加した コース	社会課題探究コース			訪問国	ニュージーランド
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	望月咲杜	学年	2年

探究テーマ 日本の子どもの幸せとは。必要な法律、制度はあるのか？

ニュージーランドのパパモアにある街で約3週間ホームステイをしながら、現地高校及び空手道場へ通い、子どもたちの生活を実際に体験することで、日本とNZとの生活習慣や制度として子どもを守る仕組みの差異を明らかにし、少子高齢化が急速に進行する日本の現代社会において、子どもたちの幸せを守る方法を探究するものである。今回の探究課題を通してさらに貴重な存在となる子どもに対するコミュニティとしての扱い方、幸せの見つけ方、存在意義とそれらに絡んでくるであろう各民族の市民意識の差異について探究を行なった。



〈ホームステイ&キッズセンター〉

8歳の息子がいる親子3人の家庭に、約3週間ホームステイし、主にNZの生活リズムや市民意識を調査した。9歳以下の子どもを一人にさせないという制度を家庭の仕組みとして守っていくために、日本が著しく傾く傾向のある仕事重視ではなく、子どもを第一に考え、仕事は家庭の次という意識が感じられる様な生活をしていた。また民間が経営しているキッズセンター（日本でいう放課後児童クラブ）は放課後の一人の時間をなくす良い制度であり、日本の行政が行なっているものよりも自由度があり、地域として子どもを持つ親を支える仕組みが構築されていた。

〈パパモアカレッジ&空手〉

実際の登校方法や放課後の一人での時間の使い方を探究し、問い解決への一歩にするため、語学学校ではなく現地の学校へ行き、各年齢層、民族の生活リズムを調査、体験した。私が訪れた空手道場は、夕方から道場を開け、様々な年代の人が稽古に励むため利用することで、子どもを一人にしないようにしている家庭もあるそうだ。日本にもスポーツクラブ等は多く存在する。では違いはなにか。学校から直通で道場へバスが通っていることだ。それに伴い互いの文化交流を行うこともできたため、とても満足だった。

また、登下校方法も日本とは大きく異なり、学校には独自のバス、バス停システムがあり、子どもをできるだけ集団で下校させる様な仕組みになっていた。日本に比べて、保護者の仕事が終わるのが早いため、帰宅の際も多く乗用車がバス停に停まり、バス停から自宅へ子どもの送迎を行っていた。



〈最終結果〉

ニュージーランドにおける子どもの留守番に関する法律や制度を日本で用いることで、子どもの安全は以前より確保されるかもしれない。しかし日本人は仕事に過度に傾いている、そのような社会において厳しく規制を課すことは働けなくなってしまうシングルの保護者がいると思った。制度の施策よりも現在急速に少子高齢化が進行しさらに大切な存在となる子どもたちに対する我々の市民意識を変えることが最も重要であると思った。また日本に比べてニュージーランドは圧倒的に民族の数、総数共に多いと感じた。元来文化が全く異なり子どもへの扱方や日常の異なるコミュニティの中では今回探求したようなより厳しい法律が施行されているのかもしれない。その点日本とはコミュニティを構成する要素が違い、民族性が大きく問題を左右していることが分かった。

〈これから〉

今回、日本、ニュージーランドでの法律と市民意識との関係について興味をもった。日本において、貴重な存在となる子どもと法の探究を続けると共に、各民族のもつ市民意識についてもこれから深め、その因果関係、ひいては特定民族に対し効果的な法律を導き出すような仕組みをプログラムできるよう、情報収集の第一歩に努めたいと思っている。

参加した コース	社会課題探究コース		訪問国	フィンランド	
学校名	静岡県立清水南高等学校	氏名	野上しずく	学年	1

1 目的・応募理由

私が留学しようと思ったのは、日本のいじめを失くすための取り組みをフィンランドで学ぶためだ。フィンランドの学校教育や教育システムから、日本のいじめ対策に活用できる学びを得られると考えた。それに加えて私の人間力を向上させたかったのもある。探究活動を行いながら留学する、言語の壁、文化の違い、一人だけの生活、障害だらけの環境に身を置くことで精神的に成長し、私という人間の中身を充実したものにできると思った。

2 研修内容等（普段の生活、休日の過ごし方、探究活動など）

私は語学学校に通わなかったため、朝の英語のレッスンを終えた後は、近くのスーパーに行ってみたり、一人で街の方に出かけてみたり、一日中勉強していたり、毎日自身で計画を立てて生活を送った。休日はホストファミリーが付き添ってくれるので、都市部へ連れて行ってくれたり、コテージで過ごしたり特別で楽しかった。日がたつにつれて生活にも慣れてきて、公共交通機関を利用して一人で遠出することも可能になった。最初は慣れない場所で怖さもあったが、時間がたてばもう長年住んでいるかのように恐れがなくなる。そしてマリメッコの店には必ずと言っていいほど日本人がいるので、困ったときや母国を感じたいときはそこへ行っていた。異国に滞在していると不安もあるが、その分その国をより知ることができる。探究活動はホストファミリーとともに行うことが多かった。学校訪問や大学訪問へは付き添ってくれたので、フィンランド語を話せず、英語も慣れない私には翻訳家のようにありがたかった。アンケート調査はオンラインで行えるようにし、インタビューは録音して聞きとれなかったところをカバーした。できないことが多い分、やり方を工夫してチャンスが無駄にしないよう努力した。学校に行ってみてわかったのだが、日本文化を好きな若者が結構いる。アニメの服を着ている子もいて、日本語を学んでいる子もいた。よく話していた友達は今度日本に行くと言って、よく質問してくれた。私が思っていた以上に日本は愛されているので、日本のお菓子やアニメのグッズなどをもっていくと喜ばれる。こんな遠い場所でも共通の話題ができることに感動し、世界はつながっているのだと改めて実感した。

学校の生徒が書いてくれたメッセージ→



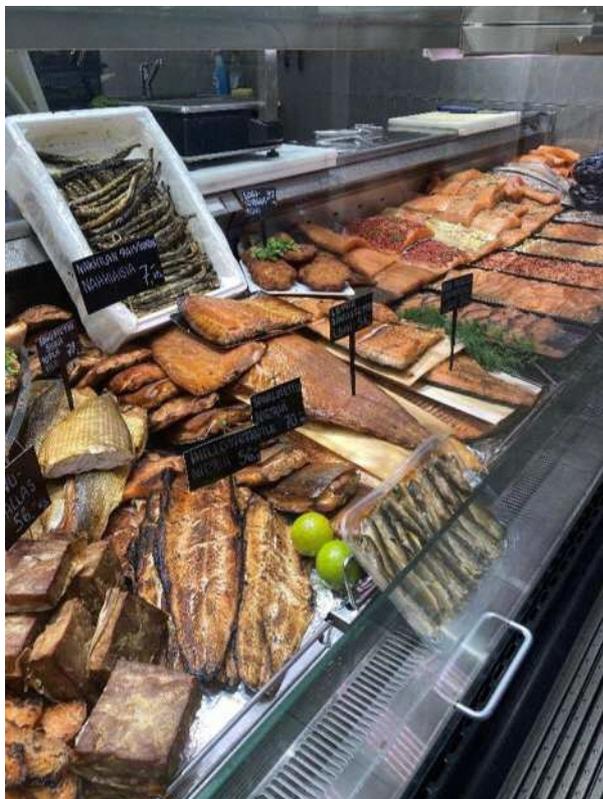
ヘルシンキ図書館に
←あった日本の漫画



3 感想等

私は留学してみて本当にたくさんのものを得たと思う。この経験は一生もので、高校一年生の私に与えた影響は計り知れない。些細なことさえ、16年間住んでいる環境で行うのと地球の反対側でするのは、全く違う。食事という日常なことさえ、まず手に持つものが違う。用いるのはナイフとフォーク、そして主食も米ではなく小麦とじゃがいも、量も普段の2倍。慣れないことだらけで戸惑い、肌も荒れて体にも変化が出た。近年はグローバル化といわれていて、確かに多くの人に英語は通じるし、マクドナルドもスターバックスもそこら中にある。しかし、実際に生活するとあらゆることが違うと気づく。百聞は一見に如かず、というように実際に生活してみないと気づかないことが数多くあった。私はこの違いこそ、留学の醍醐味だと思う。慣れない場所で生活して、人種の違う人達と流暢でない言語で話す、この経験は私を確実に強くした。今の私ならどんな場所でも適応でき、人や文化の違いを受け入れられると自信を持って言える。また異文化に触れることは、その国の文化を知るだけでなく、自国の文化を見つめ直すことにもつながった。フィンランドで憧れのシナモンロールや大好きなサケ料理を食べて、優しい人たちとふれあって、美しい街並みに見惚れてなお、最後には日本の文化の魅力を感じた。留学は何かしら自分を大きく変える経験となる。私自身、日本や海外に対する考え方が変わり、精神的にも大きく成長できた。この経験を糧にして、これからの挑戦に積極的に取り組んでいきたい。

フィンランドの屋台の鮭↓



ホストファミリーのコテージ周辺↓



参加した コース	社会課題探究コース		訪問国	モロッコ	
学校名	静岡県立静岡高校	氏名	アサディあや	学年	2年

留学の概要

- 1 留学地域 モロッコ（カサブランカ市）
- 2 留学期間 2025年7/29～2025/8/21
- 3 留学テーマ 日本に寄付文化を広く根付かせるためにはどのような取り組みが必要か？

テーマと留学先の設定理由

私は社会課題に強い関心を抱いてきた。私の両親地元静岡でNPO活動を行い、私はその様子を幼い頃から身近で見てきた。両親が主に行っていた活動は募金活動でその募金がどのような生活をしている人に送られるのか聞いてきた。幼いながらもそのような辛い生活をしている人がいることに強い衝撃と悲しみを覚え、そのような人たちを少しでも救いたいという想いが芽生えるようになった。私は、寄付にはみんなが思っている以上に大きな力があると考えている。寄付とは必ずしもお金だけではなく、物や人々の隣人に対する善意も一種の寄付となりうる。



研修内容等

現地のNPO団体の代表の方にインタビューをしたり、義援金プロジェクトの建設現場を見学させてもらう。また地元にある、寄付で成り立っている施設の見学、その施設長へのインタビューを主に行った。街の様子も視察し、日本に取り入れられる要素がないか考察した。



感想

今回の留学はとにかく楽しいものであった。様々な人と出会い、話し、様々な場所に行っているいろいろなものを見た。ずっと日本に暮らしてきて私にとって現地では何をしても新しい発見の連続であった。現地で使われる言語はアラビア語とフランス語であり、そのどちらも流暢のように話せるわけではなかったが、色々な方法で相手とコミュニケーションをとろうとしたことは大変だったが楽しかった。モロッコに留学することは、私の中で大きな一歩であった。高校2年の夏休みに3週間海外にいたことで普通の高校2年生が夏休みに行く進路関係のことができなかったことを現地で焦ったこともあったが、今思い返してみてもその時にしかできないことに全力で取り組んでいたことは本当に良かったことだと思う。

私は今回の留学で非常に大きく成長することができたと思う。それは他ではないこのトビタテ留学 JAPAN のプログラムだからこそだと思う。トビタテ留学は事前の準備から事後の研修、報告書までやるのが本当に盛りだくさんだ。正直に言うと、課題が出されるたびにこなすのを辛いと思ったこともあるが、自分と向き合ったり、新しい仲間と出会ったりするのは自分にとって良い刺激となった。

今回の留学で培った力や経験を生かして、これからの人生を歩み静岡や日本に貢献していきたい。



参加した コース	STEAM 探究コース			訪問国	アメリカ合衆国
学校名	沼津工業高等専門学校	氏名	佐久間悠愛	学年	3年

1. 日時

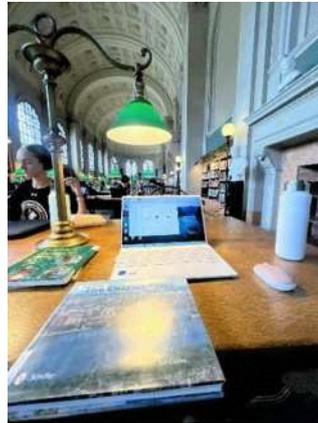
2025年8月4日～9月12日の40日間

2. 渡航先

アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン

3. 受入先

EC English Language school, Boston



4. 探究活動テーマ

化学の力をどのように平和利用していくのか？

今後、化学技術が発展する裏で付随する課題は何なのか？そして、その解決策は？

5. 探究活動の結果

① 化学技術の歴史と負の側面を理解した

ボストン科学博物館や図書館で、化学技術が産業発展だけでなく、戦争・環境破壊とも深く関わってきた歴史を学んだ。

特に、化学兵器や工業排水による環境汚染は、化学の「光」と「影」を強く意識させられた。

② チャールズ川の環境問題を現地で調査した

実際に川へ足を運び、図書館で文献調査も行った。

分かった主な課題：

- シアノバクテリア（藍藻）の大量発生
→ 分解すると有害物質を出し、人や動物に危険原因
- 生活排水・農地肥料・工場排水に含まれる窒素・リン
- 地球温暖化による水温上昇
- 流れが停滞しやすい地形



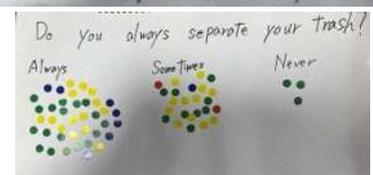
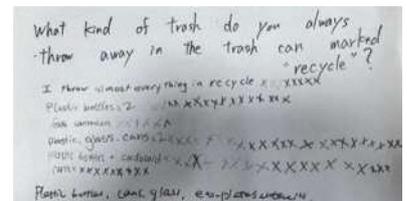
今でも汚染から完全に脱却できていないということが分かった。

③ アメリカのゴミ問題を街頭調査で実感した

街頭でアンケートを行い、現地の人にゴミ分別について質問した。

結果：

- ゴミを全部リサイクルに入れてしまうという人が多い

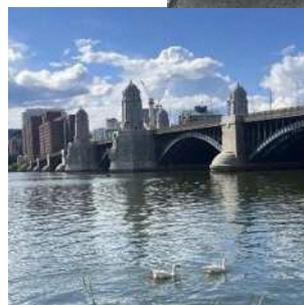


- 分別方法を知らない人も一定数いた
 - 実際のゴミ置き場ではゴミが散乱している場所もあった
- 課題の本質は 人々の意識の違い にあると感じた。



④ 自分の地元（三島市）との共通点を発見した
チャールズ川の環境改善の歴史は、
三島市の源兵衛川の再生と非常に似ていた。

- どちらもかつては汚染が深刻
- 市民・行政・企業の協力で改善
- 「川を大切に思う文化」が改善の原動力



異なる国でも、自然を守ろうとする気持ちは共通していると実感した。

⑤ “人と人の化学反応” を体験した
内向的だった自分が積極的に話しかけ、街の人に質問し行動できるようになった。
アメリカの人々のポジティブさに触れ、自分の性格にも少し変化が生まれた。

6. アンバサダー活動

語学学校では、日本のお菓子、折り紙を配った。

ホストマザーには日本の浴衣をプレゼントして、ホストマザーの家族に折り紙を教えて一緒に折ったり、バーベキューのときに日本の食べ物を一緒に食べたりした。

街頭調査に協力してもらった方にも日本のお菓子、折り紙を配った。



7. 留学の成果

今回の留学では、探究活動以外にもたくさんの方のことを学びました。語学学校での学習や色々な国の学生との交流を通して、英語で自分の考えを伝える力が向上し、内向的だった自分が積極的に行動できるようになったと思います。色々な国の友達と過ごすことで、アメリカだけではない色々な文化や言語に触れ、自分の知っていた世界がより広がった気がします。最初は緊張していたけれど、みんなとてもフレンドリーに話しかけてくれたおかげで、本当にたくさんの友達に出会えました。街の雰囲気や生きている動物も日本とは全然違うし、買い物や食事、地下鉄などもすべてが日本とは違う新しい体験だったのでとても良い思い出となりました。



参加した コース	スポーツ・芸術探究コース		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立駿河総合高等学校	氏名	繁延 亜周	学年	3

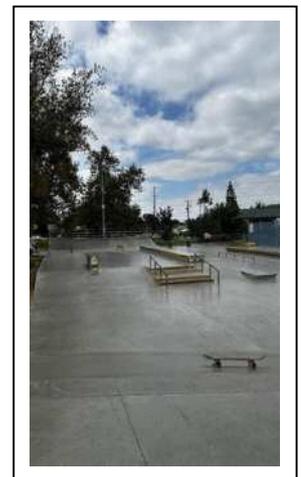
探究テーマ

＜スケートボード発祥の地アメリカの文化を探究し、静岡文化の発展と活性化に貢献する＞

私はスケートボードが大好きです。スケートボードをする中で、日本ではスケートボード競技者の数に対して、練習できる場所がとても少ないことに疑問を持っています。練習できる場所が無いと、公園や街中で練習する人が増え、騒音等の社会問題も起きています。スケートボードは限られた場所でしか練習ができません。私自身高校進学を考えた時には、高校から練習に通えるスケートパーク近くの学校を選びましたが、県内にも少ないため大変悩んだことがありました。今後日本でスケートボード文化が地域社会と共存し、地域活性化や青少年育成を推進するスポーツとして定着するためにはどのようなことを行っていく必要があるのか考えるために、スケートボード発祥の地アメリカの文化との違いを感じる必要があると考え、私は本場アメリカで探究したいと強く思い挑戦しました。

渡航前の準備と計画

渡航前には、訪問予定のスケートパークを事前にリスト化し、それぞれの位置関係を把握した上で、移動時間のロスが最小限になるルートを自分で考えました。その結果、現地での無駄な移動時間を減らし、スケートボードや交流の時間を多く確保することができました。また、現地のスケーターとの交流のきっかけを作るため、自分でオリジナルのステッカーをデザインし、制作しました。さらに、日本らしさを伝える方法として、Chabacco(チャバコ)を活用しました。Chabaccoは、タバコの箱のような見た目をしていますが、中身は粉末のお茶のスティックで、「タバコを吸う代わりにお茶を楽しむ」というコンセプトの商品です。この特徴的なデザインは海外の人の興味を引きやすく、スケーターとの会話のきっかけになると考えました。そこで、自らChabaccoの会社に連絡を取り、活動の目的を説明した上で協賛をしていただきました。高校生の立場で企業と直接やり取りを行った経験は、主体性や行動力の面で大きな学びとなりました。加えて、現地での気づきを感覚的な印象だけで終わらせないため、スケートパークの構造や路面の状態、利用者の人数や年齢層、雰囲気などを記録できる調査シートを作成しました。



現地でのスケートパーク調査

現地では、合計23か所のスケートパークを訪問し、写真撮影や観察、実際の滑走を行いました。特に印象的だったのは、どのスケートパークも路面が非常に綺麗だったことです。調査を

進める中で、アメリカの暖かく乾燥した気候が路面の質の高さに大きく影響していることが分かりました。細かいアスファルトを使用しても、時間をかけてゆっくりと乾燥させることができるため、滑らかで質の高い路面が維持されていると分かった。また、どのスケートパークでも常に10人以上の利用者が見られ、性別・人種・年齢を問わず、多くの人が集まっていました。それぞれのパークには特徴的なセクションがあり、初心者から上級者まで楽しめる構造になっていた点も印象的でした。

スケートボード大会への出場

今回の留学では、調査活動に加えて、競技者として現地のスケートボード大会にも出場しました。日本人は私一人で、他の出場者とは全員初対面でしたが、誰もがとても優しく、快く受け入れてくれました。技が成功すると、初対面にもかかわらず自然と歓声が上がり、会場全体が一体感に包まれていました。大会では決勝に進出し、最終的に8位という結果を残すことができました。日本の大会では真剣に取り組む雰囲気が高く、緊張感を感じる場面が多いですが、アメリカの大会では楽しむことを大切にしながら盛り上がる文化があると感じました。そのため、過度に緊張することなく、自分らしく滑ることができました。一方で、集中すべき場面では全員がしっかりと集中し、大会が終わるとすぐに切り替えて交流を楽しむなど、メリハリが非常にはっきりしている点も印象的でした。大会終了後には、現地のスケーターたちに誘ってもらい、12人で車に乗ってナイアガラの滝へ行きました。大会中は闘争心を持って真剣に滑っていた人たちも、終了後には同じ仲間として接してくれました。この経験を通して、スケートボードが勝ち負けだけの競技ではなく、人と人を深くつなぐ文化であることを改めて実感しました。言葉や国籍が違って、同じ場所で滑り、同じ時間を共有することで自然と信頼関係が生まれます。スケートボードの持つ力の大きさを、実体験として学ぶことができました。

今回のトビタテ留学を通して、私はスケートボードを競技としてだけでなく、文化として捉える視点を身につけることができました。路面環境やパークの設計、利用者の多様性、大会の雰囲気など、日本では気づきにくかった点を多く学ぶことができました。今後は、この経験で得た学びを日本や地元のスケートボード文化の発展に生かしていきたいと考えています。また、競技者としてもさらに成長し、海外の大会に積極的に挑戦し続けることを目標としています。今回の留学はゴールではなく、新たなスタートです。この貴重な経験を糧に、これからも挑戦を続けていきます。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	スポーツ・芸術探究コース		訪問国	英国	
学校名	日本大学三島高等学校	氏名	原季実珂	学年	2年

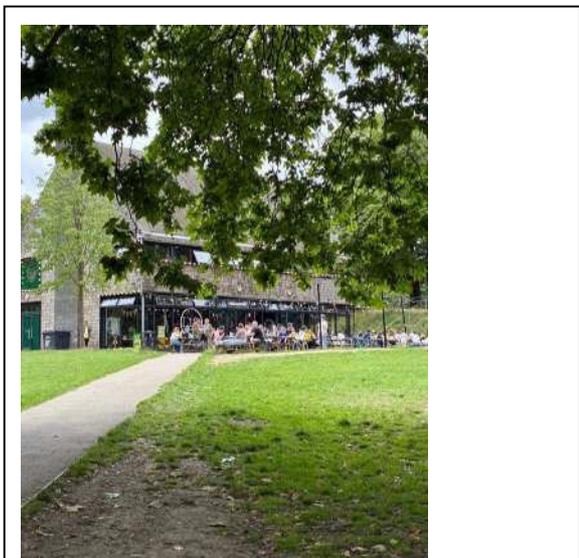
私は今回日本の子供達が伸び伸び過ごす空間づくりを学びに英国に留学しました。私は小さい頃から建築や街づくりなど人々の生活に関わるライフスタイルデザインに興味がありました。そこでトビタテの留学のテーマも建築や街づくりをもとにしたものしたいと考え、自分の幼少期を振り返り伸び伸びと過ごしていた場所である公園をテーマに選びました。公園をテーマに選び調べ進めていくうちに日本の子供達の公園の利用率が低下していることに気がつきました。外に出なくても遊べる家庭用ゲーム機、スマホの普及などが原因に挙げられています。公園が栄えている国はどこか調べていくと英国という場所が多く挙がっていてその理由は英国で公園は憩いの場、交流の場で週末に頻繁にイベントを開催しているからと調べていくうちにわかりました。以上のことから私は英国の公園を調査しに行こうと決意しました。

私の主な留学中の探究活動は英国での公園の調査、アートスクールでの作品制作、現地でのアンケートの実施です。

公園の調査では今回3つの公園にいきました。それぞれの公園の特徴や共通点を調査し日本の公園に取り入れるべき物を考えました。

英国の公園は子供達が遊ぶ場所と大人達が休憩する場所が分けられておりさまざまな年齢層の人たちが公園を楽しめること、公園が道路を挟んで点在しており通勤通学中、ペットの散歩など公園を日常的に利用しやすい工夫がされていると感じました。

その中でも私が一番英国の公園で素晴らしいと思ったのは子供が遊ぶ場所であるプレイスペースが柵で囲われていることです。入る時にロックを開け、入ったらロックを閉める仕組みでこの仕組みにより子どもを迷子や誘拐から守ることができるかつ、私たちの様な学生、大人達が意図せず子どもを傷つけることもなく気を使わず伸び伸び過ごすことが出来る仕組みだと思い日本にも是非取り入れるべきだと思いました。



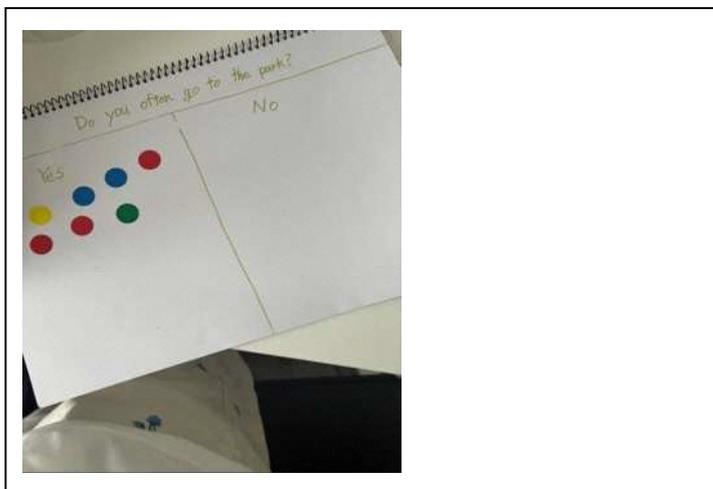
アートスクールでは理想の公園というテーマで作品制作をしました。

先生からジオラマの作り方を教えてもらったり、公園の調査をもとに日本にこんな公園があったら良いなーということを考えながら作りました。制作した作品は先生にも褒めていただき良い出来だと個人的にも思いました。



英国で公園に関するアンケートを行いました。

公園によく行くかどうか、公園にお気に入りの所はあるかなどの質問をクラスメイトや先生公園にいる人々に聞きました。アンケートの結果約 95%公園をよく利用すると回答しました。この結果からも英国の人々は日常的に公園を利用しており、生活に根付いているとよく感じました。



今回の留学と探究活動を経て。

英国に行く前、公園は子どもたちの為の場所であり子どもたちの事だけを意識していましたが英国の公園の様々な人々が公園を過ごしやすい場所として利用しているのを見て、子どもたちを軸としたより多くの人々が豊かに過ごせる公園を作っていきたいと思いました。そのためにも今後は公園の調査の幅を広げたり事前調査の年齢層を変えてみたりしようと思います。またこの素晴らしい留学の制度をより多くの学生に知ってもらうために講演を開いたりしています。そして将来静岡県に私の考えた公園を作り大きな目標である多くの人々が豊かに過ごせるライフスタイルをデザインすることの第一歩にしたいです。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり・地域産業コース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	科学技術高校	氏名	網谷羽真	学年	3年

§ 1. 概要

私は、2025年度ふじのくにグローバル人材育成事業で米国に「人が危険な時にとる共通の行動」を知るために7週間留学に行きました。米国で参加した活動での経験について、目的、内容、結果、今後の展望について以下に詳細を記します。

§ 2. 留学の目的

私は災害復興のボランティアを始めてから、多くのボランティアの方や被災された方などに会ってきました。活動中は家具の撤去や壊れた壁の撤去など多くのことに挑戦しました。電動工具を使う機会があり、何度か危険なこともありました。私はその『危険』ということが死にも繋がると知り、多くの人が安全に電動工具を使用できる世界を創りたいと思いました。そのため今の高校に進学し機械について学んでいます。しかし、機械について学ぶだけでは私の目標は達成することが出来ません。私の通う合気道の道場では技をかけられた際『大きく息を吐く（吸う）』『叫ぶ』『痛いところを押さえる』それぞれ違う行動をします。これらの痛みが生じた際に人がとる行動は国によって違うのか、共通の行動はあるのかを知りたくなりました。そこで、私は『人が危険な時にとる共通の行動はあるのか』をテーマに2025年度ふじのくにグローバル人材育成事業に応募し、採択されました。私は留学に向け以下3つの目的を持ち臨みました。

- ① 小学生のころから続けているため理解のある武道教室にて、合気道とブラジリアン柔術の道場の練習に参加し、技をかける直前直後の行動を知る。
- ② 夢を持つきっかけとなったボランティアは日本と海外では活動意識が異なるため、食事提供ボランティアとして活動することで、日本のボランティアとの意識の違いを知る。
- ③ UC Davisにて電動工具による事故や日常に関する街頭アンケートを実施することで、性別、年齢、国による結果の違いを知る。



§ 3. 活動内容

- ① 現地では『Aikido Center Sacramento』と『Kaiju BJJ Academy』の二つの道場に受け入れてもらいました。この2つの機関では、自身が技を掛けたり掛けられたりすることに加え休憩中は練習の様子を撮影しました。また、体験したり撮影したりする中で危険だと思ったポイントをあげ練習をしました。



- ② 『Davis Community Meals and Housing』というボランティア活動では現地の人に交じり、十分に食事のとれない人に食事と温かく食事を食べられる場所の提供をしました。活動中にほかのボランティアの参加者との交流の中で『ボランティア』というも

のがどのような存在なのかなどの意見交換をしました。

③ デービス市内の UC Davis にて学生を中心に電動工具による事故や日常に関する街頭アンケートを実施しました。さらに市内のホームセンターの方に許可を取り従業員の方にもアンケートを取らせていただきました。

§ 4. 結果

① 合気道もブラジリアン柔術も両者ともに共通して技を掛けられる前に備えていることがわかりました。その『備え』というのは、技を掛けられた後にする反撃や技からの逃げ方を意識した動きをするということでした。

② 日本でボランティアに参加をした際に聞こえた声は『誰かのために』という理由が目立ちましたが、米国でのボランティア参加者は『自分のために』という理由を挙げていました。

③ 200 件以上得られたアンケート結果では電動工具の使用経験がある人は約 66%、そのうち事故の経験がある人は約 22%という結果になりました。事故が起きた際にとった行動としては、パワードリルをうまく握ることができず手を痛めパワードリルを離してしまったということがありました。次に日常でけがをしそうになった例としては、物が落下した際に手で防ごうとすることや刃物が刺さりそうになると手を引くという結果を得ることができました。

§ 5. 本事業での活動を通して

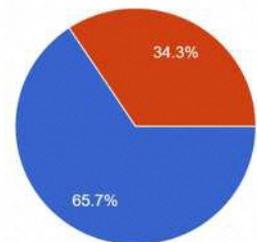
本事業の活動に共通する目的であった『人が危険な時にとる共通の行動はあるのか』という問いに対し、人の動きを『反射』として捉えることが『世界で共通した行動』に結びつくことができました。この結果は米国で若い年代が対象となっている比率が高いため、別の年代や後進国ではどのような結果が変化するのか、ということが次の問いとなりました。来年度からは室蘭工業大学で学ぶこととなりますが、継続して『誰もが安全に使いやすい電動工具の開発』という夢を叶えられるよう勉学に励みたいと思います。加えて、本事業での活動を通して新たに出た疑問を解決するために次の留学にも積極的に挑戦したいです。

他にも留学で得られたことがあります。留学期間中に誕生日を迎えた私はアメリカで『成人』となりました。年齢が大人になっただけでなく、初めての環境で多くのことに挑戦することで人としても成長することができたと実感しています。また、苦手を克服する努力も私の人生に欠けていたと気付きました。『留学』は苦手な英語、他者とのコミュニケーション等多くの壁を乗り越えることを身につけてくれました。書類の作成には先生や両親など大人の手を借りる必要があったこと、同じ 2 期生の仲間がいたこと、スポンサー企業からの支援があったことなどが挙げられます。多くの人のサポートが有り『最後まで諦めてはならない』と思えたからです。プレッシャーに押し潰されそうな 7 週間でしたが、私の人生を大きく変化させる『留学』となりました。

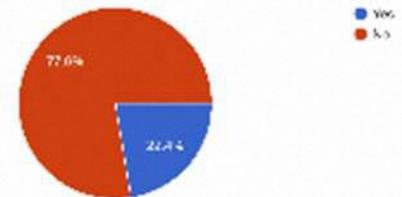


Have you ever used a power tool? 1

204 件の回答



When you used a power tool, have you ever been injured or almost go injured?
14 件の回答



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり・地域産業コース)			訪問国	ニュージーランド
学校名	浜松西高校	氏名	松島詩歩	学年	2年生

1. 留学概要
2. 探究概要
3. 結果と考察
4. まとめ

1. 留学概要

私は夏休み期間を利用して、ニュージーランドのオークランドに3週間留学をした。平日は語学学校に通い、午後や週末を探求に利用した。

(1) 留学したきっかけ

私が留学した理由は、主に二つある。一つは、英語力を向上させたかったからである。私は英語でディベートを行う部活動に所属しており、2年生は大会に出られる最後の年である。そのため、留学することで英語力を高め、チームに貢献し、悔いのない引退試合をしたいと考えた。また、もう一つはユニバーサルデザインについての探究を行いたかったからである。私の弟は車椅子利用者であり、弟と一緒に外出をするときさまざまな不便があることに気付かされる。そのため、弟や弟の世話をする家族のために、自分が将来関わりたいものづくりの観点から何かできることを見つけたいと考えた。その際に注目したのがトビタテ！留学 JAPAN という制度である。この制度では自分の好きなことを海外で自由に探求することができる。私はその自由度に惹かれ、トビタテ留学 JAPAN 制度を利用して留学へ行くことを決心した。



(2) 留学先について

私がニュージーランドを選んだ理由は、ニュージーランドがバリアフリー先進国であるためである。ニュージーランドでは新しく建てる建物について、バリアフリーでなければならないと

いう法律が存在しており、バリアフリーに関する意識がとても高い。そのため、このような国と日本とを比べることで日本の改善点が見つけれられるのではないかと考えた。

2. 探究概要

私は「ニュージーランドから学ぶユニバーサルデザイン」というテーマで探究を行った。

(1) 方法

私は、街を探検したりホームステイ先、学校の作りを観察したりして探究した。また、Instagramを活用し、日本人のユニバーサルデザインに関する意識を調査した。

3. 結果と考察

探究を通して、ニュージーランドには車椅子用の自動ドアなど日本ではあまりみない設備はいくつかあるものの、全体的には日本のバリアフリー設備とほとんど同じものが設置されていることがわかった。そこからわかることは、日本もバリアフリー先進国と位置付けることができるということである。それにもかかわらず、私が普段不便を感じていたのは、その設備の普及に地域格差があったからだと考える。ニュージーランドにおいても、バリアフリー設備における地域格差は感じられた。また、私はニュージーランドに行って、日本よりもユニバーサルデザインを意識していると感じた。その理由は、日本では階段とスロープを設置する建物が多い中で、ニュージーランドではそもそも段差を減らす工夫が見られたからである。日本はユニバーサルデザインというよりバリアフリーを意識する段階にあり、それはアンケートの結果にもみられた。これらのことから、日本はバリアフリーの全国的な普及をさらに目指すとともに、その一歩先である「誰もが使いやすい」デザインであるユニバーサルデザインを目指すべきであると考えた。



4. まとめ

留学を通して、私は自分や自分の国、地域について見つめ直すことができた。普段の生活をしている中では、普通のことに思われたことが、違う状況に自分を置いて見ることで特別なことであると認識することができたり、自分は何が得意なのか、何が好きなのかを見つめ直したりすることができた。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡県立掛川西高等学校	氏名	多田遥花	学年	2年

探究の問い：ステレオタイプと上手く付き合い、静岡での異文化コミュニケーションをより活発にするには？

テーマ：外国人を受け入れるための「多文化共生意識」を静岡に広める

○探究の問い・テーマ設定の背景/留学の目的

静岡県は、日本国内でも外国人人口が多く、民間・公的機関ともに多文化共生を推進するための様々な取り組みが行われている地域である。しかし、こうした取り組みが進められている一方で、意識の面では課題が残っている。静岡県が実施した静岡県内在住の外国人および日本人を対象とした多文化共生意識調査の結果によると、「地域に暮らす日本人に親しみを感じる」とした外国人は7割を超えている。一方で、「地域に暮らす外国人に親しみを感じる」とした日本人は5割弱にとどまっている。このことから、日本人と外国人の間には、互いに抱いている親しみの意識に差が生じていることがわかる。私は、このギャップの要因の一つとして、日本人が無意識に抱いているステレオタイプが影響しているのではないかと推察した。そこで、このギャップの解消にステレオタイプ抑制が有効であると仮説を立て、ステレオタイプと多文化共生の関わりについて探究することにした。加えて、異文化交流を円滑に行うために必要な素質である異文化理解力を備えた人々が、どのような意識を持って外国人と接しているのかを推察することで、異文化と接する際に求められる姿勢について、自らの答えを導き出すことを目的とする。

○現地での探究活動

留学中、平日は語学学校に通い、休み時間や放課後の時間を使って教師や生徒を対象にインタビュー調査を実施した。主に、外国人に対して抱くステレオタイプの有無や、異文化と向き合う際にどんな心構えでいるのかについてインタビューし、異文化に関する意識を調べた。また、ホストファミリーに、外国人を家に迎え入れる際の関わり方や対話においての注意点について質問し、異文化理解に必要な視点を探った。



○調査結果

インタビュー結果から、海外旅行を趣味としている、留学経験がある、身近に外国人がいるなど、異文化接触経験が多い人ほど、異文化理解力が高く、異文化交流に積極的である傾向が見られた。その一方、異文化接触経験が多いにもかかわらず、外国人に対するステレオタイプから脱却できていない人も多数見られた。しかし、抱いているステレオタイプはポジティブなものも多く（日本人は礼儀正しい、フランス人はおしゃれなど）、ステレオタイプを抱いていても異文化理解には意欲的であるケースが多かった。また、異文化理解力が高い人の考え方として、異文化間で起きた摩擦やトラブルを否定的に捉えるのではなく、文化的な違いとして解釈していることがわかった。

○考察

異文化に接触する経験が異文化理解力を養うのは、交流の中で感じる不安や違和感と向き合う経験を重ねることで、各個人の異文化との向き合い方が構築されていくためではないかと考えた。また、実際に外国人と対話することで、自身が抱いていたステレオタイプへの意識が修正され、外国人を一般的なイメージではなく、個人として認識できるようになる点も、異文化の受け入れが容易になる理由だと考えた。加えて、調査では、ステレオタイプから脱却していても異文化理解に積極的な人々が見られた。これらの人々は、ステレオタイプの存在を認知しつつも、実際に相手と対面した際は、相手を一個人として考え、一般的なイメージとは切り離して関わっていたのではないかと考えられる。ステレオタイプを完全に払拭することができなくても、実際の対人場面で相手を一個人として捉え、先入観にとらわれずに関わろうとする姿勢があれば、異文化理解は十分に促進される可能性がある。

○最後に

この事業を通して、留学中の学びに加え、準備や振り返りの過程でも多くの経験や成果を得ることができた。書類やプレゼンテーションの制作、事前・事後研修への参加、課題への取り組み、そして現在執筆している本報告書の作成などを通して、自身の考えを言語化し、他者に伝える経験を多く積むことができた。その過程で多くの困難はあったが、それらを乗り越える中で、自身の課題発見力や発信力を見直し、成長させる貴重な機会となった。今後は本事業で得た視点を大切に、本留学を支えてくださったすべての方々に感謝して、異なる文化を持つ人々と向き合う姿勢を忘れずに過ごしていきたい。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	オランダ	
学校名	藤枝明誠高等学校	氏名	菅ヶ谷 桜パラマルタ	学年	高2

オランダから学ぼう！

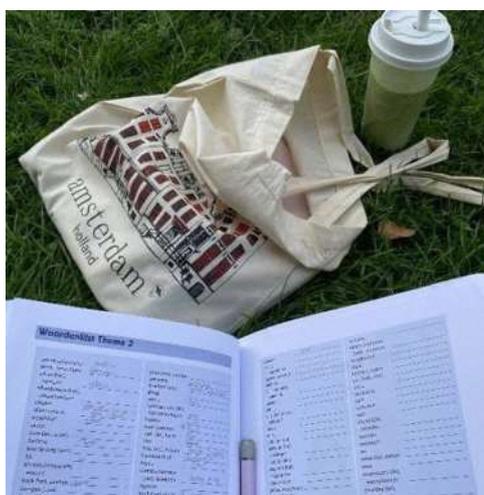
— 移民受け入れの体制・多文化共生社会 —

【探究の背景】 静岡県では外国人住民が年々増加しており、多文化共生の重要性が高まっております。15歳で来日した私は、日本語を学びながら生活する中で、言語や文化の違いによる困難を実感してまいりました。その経験から、言語の壁を下げ、対話を通じて相互理解を深めることが、多文化共生社会の実現には不可欠であると考えようになりました。移民の受け入れが進んでいるオランダには、静岡県が今後多文化共生社会を進めていく上で参考となる制度や社会の在り方があると考え、トビタテ留学を通じて、本探究に取り組みました。

【留学の概要】 8月2日～8月10日 タイトジェンホルン市（ホームステイ）、8月11日～8月22日 アムステルダム（ホテル）、8月23日～9月6日 ドロンテン市（ホームステイ）

【留学の目的】 〈探究〉①移民政策に比較的成功してきた国の事例を日本に紹介すること。②言語教育の全体像を観察すること。③オランダ人（ローカル）の視点から見た「移民」への意識を探ること。

〈自己成長〉①自分の中にある「問い」を明確にするため。②ヨーロッパ（先進国）に住む人々の生活を体感するため。③自身の可能性を広げるため。



【活動内容】 ①アムステルダムにて約2週間、語学学校に通い、オランダ語 A1 レベルを修了しました。②移民の歴史に関する博物館を2か所訪問しました。③街中観察（スーパーに並ぶ食品の多様性、公共交通機関の多言語表記）を行いました。④市内図書館で実施されているオランダ語教室を見学しました。⑤ 難民施設を訪問しました。⑥ ボランティアの方、難民の方、語学教師の方へ1時間以上のインタビューを行いました。⑦ モスクを訪問しました。



【結果】〈探究〉①多様な背景を持つ移民・難民（パキスタン、クルド、イラン、フィリピン、日本、南アフリカ共和国から）の方々へのインタビューを通して、ニュースでは捉えきれない「一人ひとりの人生」として移民問題を理解することができました。②言語能力は、学校教育のみならず、幼少期から触れてきた環境や日常的な言語接触が大きく影響していることが分かりました。③移民受け入れに対する反対意見は差別ではなく、生活への不安として捉えた上で、冷静に議論を進める必要があると感じました。④行政・市民・民間団体の役割分担が明確であるため、移民支援が社会の中で円滑に機能している点が印象的でした。

〈自己成長〉ヨーロッパでの生活を探究と結びつけて体験することで、向上心が高まりました。先進国から学ぶ機会を得たことで、日本の将来に希望を持つようになり、社会課題に貢献したいという意識が芽生えました。また、進学につながる学びを通して、自身が学びたい分野を明確にすることができました。加えて、ホテルでの2週間の単独滞在や、一人での移動を通じて、生活管理や行動面での自立心を養うことができました！

【まとめ】 トビタテ！留学 JAPAN を通じて得た本留学経験は、私のこれまでの人生や今後の進路を考える上で、大変重要なものとなりました。本留学を支援してくださった企業の皆さま、ならびに関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。これからも、身近にある社会問題に目を向け、常に貢献していきたいと思えます。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カナダ・トロント	
学校名	静岡東高校	氏名	長田詞葉	学年	3年

■ 留学計画の概要 / 誰もが自分らしく生きられる社会を目指す！

私の留学テーマは、「Rainbows rise, Borders fall ～多様性を越え、輝く社会の実現～」です。男女双子として育つ中で、幼い頃から性差を意識してきました。また、ダンスを通してゲイカルチャー発祥の **Waack** に出会ったことをきっかけに、ジェンダーや LGBTQ について深く知りたいと思うようになりました。しかし日本では、同性婚が認められていないなど制度面での課題も多く、当事者が安心して生きられる社会とは言い切れません。そこで、LGBTQ の権利が法的にも守られ、多様性が社会に根付いている**カナダ・トロント**で学び、静岡で誰もが自分らしく生きられる社会を実現するためのヒントを得たいと考え、留学に挑戦しました。



■ 留学中の活動内容 / LGBTQ 探究と Waack !

留学中は、多国籍な学生が集まる語学学校に通い、英語でのコミュニケーションを通してさまざまな価値観や文化的背景を持つ人々と交流しました。学校や街で **LGBTQ に関する意識調査**を行い、年齢や国によって考え方が異なることを知ると同時に、「**理解しようとする姿勢**」が人の安心につながることを実感しました。

また、LGBTQ コミュニティの中心地であるトロントのチャーチ・ストリートを訪れました。チャーチ・ストリートに限らず、トロントの街中には**レインボーフラッグ**が自然に掲げられ、人々が特別な意識をせずに自分らしく過ごしている姿が印象的でした。**LGBTQ の存在が日常の一部として受け入れられている社会の雰囲気**を、実際に肌で感じることができました。

さらに、現地のダンススタジオに通い、Waack のレッスンを受講しました。年齢や性別、国籍に関係なく、**誰もが歓迎され、自分らしい表現を肯定される空間**はとても温かく、ダンスで人とつながれることを実感しました。ダンスを通じた自己表現は、ジェンダーに縛られない在り方を学ぶ大切な経験となりました。

■ アンバサダー活動 / 日本の文化をダンスで伝える！

語学学校で行われたタレントショーに出演し、椎名林檎の「長く短い祭」に合わせて Waack ダンスを披露しました。日本語の楽曲であっても、リズムや表現の力が各国の留学生に伝わり、会場全体が一体となって盛り上がりました。その結果、優勝することができ、日本の音楽やカルチャーの魅力を通じた表現を通して伝えられたことは、大きな自信につながりました。出演後には多くの人に声をかけてもらい、新しい交流が生まれたことで、挑戦することの大切さも学びました。



■ 成果と学び / Ally を増やす！

トロントでの生活を通して、LGBTQ が受け入れられる社会には、多様性が「特別なもの」ではなく、「当たり前なもの」として共有されている文化があると感じました。当事者から「理解しようとしてくれること自体がうれしい」という声を聞き、周囲に理解者や Ally がいることが、生きやすさにつながるのだと実感しました。

一方、留学前に行った静岡での調査では、若い世代を中心にジェンダーへの関心は高まっているものの、「何をすればよいかわからない」と悩む声も多く聞かれました。また、意識が変わっても法律や制度が変わらなければ生きづらさは残るという当事者の意見から、理解を行動につなげる難しさにも気づきました。

■ 今後に向けて / 大学でもさらに探究・発信！

来年度からは大学生として、これまでの留学で得た学びをさらに深めていきたいと考えています。大学では文化学や社会学の視点から、ジェンダーや LGBTQ を取り巻く社会構造や歴史的背景について学び、個人の意識だけでなく制度や文化が人の生きやすさにどのように影響しているのかを探究していく予定です。また、留学中に興味を持った「第三の性」や、地域ごとに異なるジェンダー観についても調査を進め、より広い視野で多様性を捉えたいと考えています。

その学びを、学内での発信やワークショップ、ダンスなどの表現活動を通して共有し、理解者や Ally を増やすことにつなげていきたいです。高校での探究を一つのゴールで終わらせるのではなく、大学での学び、そして将来の社会へとつながる探究として発展させていきたいと考えています。



本留学は、世界を知るだけでなく、自分の当たり前を見つめ直し、次の行動を考える大きなきっかけとなりました。留学は特別な人だけのものではなく、「もっと知りたい」「挑戦してみたい」という気持ちがあれば誰にでも開かれています。この報告書を読んだ方が、大学やその先での学びを見据えながら、留学という一歩に挑戦してみたいと思ってくれたら嬉しいです。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探求コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カナダ	
学校名	日本大学三島高等学校	氏名	森島心	学年	2年

私が留学に行こうと決めたきっかけは日本での児童擁護施設のボランティアを通じ、他国の現状についてももっと知りたいと考えたことでした。これまでの短期留学は決められたプログラムに沿って語学を学ぶだけで自主的に学ぶ機会が少なかったのですが、トビタテ留学 Japan(ふじのくにグローバル人材育成事業)では自ら立てた問いを探究することが出来るという部分にとっても魅力を感じました。結果的に私の留学体験は、語学力の向上にとどまらず、自分の価値観や物事の見方を大きく広げてくれるものでした。実際に海外で生活し、現地の人々と関わる中で、日本にいただけでは気づくことのできなかつた多くの学びを得ることができたと思います。



カナダに留学した際、私は児童福祉施設を訪れ、現地で働く職員の方々に話を聞く機会を得ました。施設では、子ども一人ひとりの考えや気持ちが尊重されており、日常生活の中での小さな選択から将来の進路について職員と児童とがお互いに話し合える環境が用意されていました。(施設内のデザインがカラフルでとても可愛いらしかったです)

日本では、子どもの安全や生活の安定を守ることが最優先されるため、大人が判断を下す場面が多くなりがちです。日本でのこの体制は否定するべきものではないと思いますが、子どもの自主性を育てる機会がカナダでは積極的に取り入れられていると感じました。留学先での体験を通して、子どもを個人として捉え、意見を尊重する姿勢の重要性について改めて考えるようになりました。このような気づきは、実際に海外で現場を見なければ得られなかったものだと思います。

また、ホームステイ先での生活も、留学の価値を強く感じた経験の一つです。ホストファミリーは、私を「お客さん」ではなく、一人の家族として迎え入れてくれました。食事の内容や休日の過ごし方、日常のささいな出来事についても、私の意見を自然に聞いてくれました。その中で、自分の考えを言葉にして伝えることや、相手の意見を尊重しながら話し合うことの大切さを学びました。文化や言語の違いがあるからこそ、相手に伝えようとする姿勢がより重要になることを実感しました。特に、普段からスピーキングをしていないと簡単な英会話でもつまづくことが多いため、とてももどかしかったです。



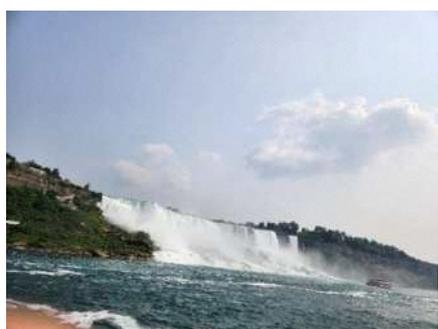
留学生活では、思い通りにいかないことや戸惑う場面も多くありました。しかし、そのような経験を通して、自分で考え、行動し、乗り越える力が身についたと感じています。一番困ったことはバスの乗り換えです。毎日、ほとんど同じスケジュールですが、時々バス停や止まる時間が異なるため、その時はとても不安でした。私はスマホで確認しましたが、運転手の方に聞いた方がスムーズに移動できたと後悔しています。日本では言葉が通じない人がいたとしても、スマホを使ったり、会話を他人に任せてしまいましたが、留学先では私が外国人だったため自分からアクションを起こすことがとても大変でした。



これらの経験から、留学は語学を学ぶためだけのものではなく、人として成長するための重要な機会であると考えようになりました。実際に海外で生活し、人と関わり、社会の違いを体感することで得られる学びは、教科書や映像だけでは決して得られないものだと思います。例えば、保育園では緊急連絡先が宗教ごとに異なっていたり、出身国の子どもたちのイベントを定期的に行なったりしているなど日本では見られないような環境がありました。特に、これからの社会では、多様な価値観を理解し、異なる背景を持つ人々と協力する力が求められます。その力を育てる上で、今回の留学での体験はとても良いものだったと思います。



だからこそ、私は同年代の学生に留学に挑戦してほしいと考えています。留学は不安も伴いますが、その先には自分の世界を広げる大きな学びがあります。私自身、この留学体験を通して得た視点や問題意識を、今後の学びや進路に生かしていきたいと考えています。そして、留学によって得られる学びの価値が、更により多くの人に伝わり、留学に挑戦する人が増えていくことを願っています。



参加した コース	ふじのくに地域研究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡県立藤枝東高等学校	氏名	田中風介	学年	2年

留学の概要

1. 留学地域：カナダ [トロント]
2. 留学期間：2025/7/26～2025/8/16
3. 留学テーマ：カナダの様々な人々と入植者・移民という歴史から「異文化・多人種」について学ぶ。

<目的・応募理由>

近年の静岡県では多様性や多人種共生が義務教育の場でもよく話されているが実際の静岡県では在日外国人や外国人旅行客との問題が多く騒がれていて、外国人の方々とうまく生活できていないと感じたことからそれらを解決することができる本当の多様性を探究したいと思ったから。

そのためには従来の教育や概念で決まりきっている日本ではなく、多様性が元々富んだ場所の文化や風土を知らなければならない。だからこそ多民族国家であるカナダへの留学を決意した。また、多様性を知るためには自分だけの意見ではなくより多くの人に意見を求め、自分自身もより多くのことを知る必要がある。そのためにただの留学ではなく多くの人と繋がれて時に助けに、時に友人になってくれるトビタテ留学に大きな魅力を感じた。



<探究活動>

一つ目に留学中にカナダのスーパー、博物館、美術館を周り、カナダの文化・歴史を多く学んだ。また学んだ知識を日本のものと比べてより違いを明確にした。さらに、生活の中で日本との大きな違いと小さな違いのどちらも探究してその違いが何を意味していて何から生まれたのかを調べた。例えば大きな違いではカナダでは宗教によって住む地域がある程度決まっており自分が住んでいた地域ではユダヤ教の人々が多く、ユダヤ教専用の学校や病院があることであり、小さな違いではス

ーパーには同じような商品でも絶対に宗教やアレルギーに配慮されたものがあることである。さらにいくつかのハプニングを経験した。帰宅中にバス内でコカイン中毒者が隣に座ってきてとても怖かった。しかしコカインはカナダでは合法であり何も悪いことではなかった。しかし周りの人も自分もその人のことをすぐに避けてしまって、何もされてないし、何も悪いことはしていないのにその対応が本当に良かったのか考えるきっかけになった。

二つ目に留学中にホームステイ先・語学学校の友人、先生といった色々な人に多様性とは何かを聞き込みそれぞれの意見を聞き込みしました。また自らの意見も相手に話して評価してもらいました。それぞれの生活や経験から生まれるとても貴重な話を聞くことができた。彼らにとっては日本人の感覚よりも海外の文化が身近にあることが普通であるが日本と大きく違うかというところというわけでもなく日本はただそれに慣れていないだけであって海外でも異文化を拒むことは平然とある。という先生からの話は確かにと共感できる部分が多く、その後の生活では言われているほど日本が多様性に関して遅れをのっているのだろうかという疑問を持ちながら生活するきっかけになり、結果的に自分が考える多様性が本当に世界的に考えられている多様性と同一なものなのかを疑うきっかけになった。

この二つから当初考えていた考察から一変した予想が生まれ、プランにはなかったような場所への見学へ行くことになった。軍事的な歴史の深い場所へは行く気は無かったが当時感じていた違和感を解決するために行くことにした。結果的に探求には繋がらなかったが普通に観光しては一生わからなかっただろうカナダの軍事的歴史を知れ探求からよりじぶんのちしき w

<結論>

カナダで多様性について調べていくにつれ、自らが想定していた多様性像とは真反対の対応や文化が多く見られるようになった。留学前までは私は多様性を個々がグループ化することだと考えていた。それは多様性によって個々が互いに相手を理解し、仲間あるいは友人といった友好関係を築けると考えていたからだ。しかし、ホームステイや語学学校の友達との交流、トラブルへの遭遇などから多様性はグループ化と真逆なことだと感じた。カナダでは自分と違う人を否定をすることも、差別することもない。しかしそれと同時に自分と違うというだけでその人を遠ざけてしまう。それは他者と理解し合いグループ化するのではなく、他者と距離を作り自らが理解できる範囲で人と交流することだった。すなわち本当の多様性とは理解できない人との関わりを避け、両者にとって問題や不満が生まれないように干渉しないということであった。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	イギリス	
学校名	静岡県立浜松西高等学校	氏名	下位峻介	学年	2

僕は、公共交通に関する探究で、約3週間、イギリスのロンドンに留学しました。

【探求のきっかけ】

探究活動で「公共交通」というテーマを設定したきっかけは、中学生のときのバス通学の経験から、地元浜松の公共交通について、衰退の流れがあると感じるようになり、問題意識を持ったことです。日本全体では、地方のローカル鉄道やバス路線について、駅をなくす、路線を廃線にするなどの議論がなされていることも多いですが、政令指定都市でもある浜松市は、そのような議論とはかけ離れているように見えるかもしれません。確かに、路線が丸ごとなくなるといった大胆な例は多くはないかもしれませんが、それでも、一人の利用者として、運賃の値上げが相次いでいることや、バスの本数が依然と比較して明らかに減っていることなど、明らかに衰退の流れを感じています。

【留学先の選定】

留学先をロンドンに選んだのは、ロンドンが世界屈指の「バス都市」であるからです。赤い2階建てのロンドンバスは、もはやロンドンという都市の象徴そのものになるほど発達していて、毎日600万人の利用者を輸送しています。人々の移動の多くを「バス」が担っているという点は、浜松市内の公共交通の体制と共通しています。



▲写真が趣味で、現地でも多く撮影しました

【留学先での探究】

現地では、3週間で計80回以上バスに乗り、ホームステイ先と語学学校とを結ぶバス路線の混雑調査を行いました。混雑調査とは、バス路線の区間・時間ごとの乗客数や乗車率、客層、主要な停留所の乗降客数を調べることにより、その路線が都市の中でどのような役割を果たしているのかの傾向をつかむものです。今回の探求で実際に調査した路線は、起点と終点のほか、途中にも複数の鉄道との結節点があり、そのほとんどの停留所で乗降客数が著しく多いことから、鉄道とほかの鉄道を結ぶ補完的な役割が強いことが分かりました。また、留学前の事前調査では、地上の鉄道、地下鉄、バス、テムズ川の河川交通といったロンドンの公共交通が、ロンドン交通局という機関により一元的に管理されていることが分かり、このことが鉄道とバスの連携をより深いものとしているのではないかと考察しました。



▲探究で訪れた交通博物館のポスター
乗用車に対するバスの優位性を示す

【留学後の研究】

鉄道とバスの連携という点を地元浜松に活用するための手立てとして目をつけたのが「ミニバスターミナル」構想です。現状浜松市のバスは、浜松駅前のバスターミナルから市内各地に放射状にバス路線が伸びていますが、新しい構想では、浜松駅以外の駅に小さなターミナルを設置し、そこを起点としてさらに郊外にバス路線を設定します。郊外から浜松駅周辺に移動する場合は、一度鉄道駅での乗り換えを挟んで、2種類の交通機関を利用することになります。このような構造の変化により、所要時間や運賃、運行本数といった乗客の「利便性」にかかわる要素にどのような影響が見込まれるか、調査しています。

【ロンドンでの留学生活】

平日は、毎日3時間から4時間程度語学学校に通い英語の学習をして、それ以外の時間は探究活動に充てました。学校の時間は毎日変則的で、朝8時30分頃からお昼までの日もあれば、10時ごろから始まって昼休みを挟む日課、午後から始まって夜終わる場合などもありました。休日は探求活動の他、ロンドン市内の名所を訪れたり、約80km離れたオックスフォードに小旅行に行ったりと、日本ではできない経験をたくさん得られました。

滞在はホームステイで、ホストファミリーのほか、同じ家でホームステイをしていたフランスからの留学生とも、毎日交流することができました。特にホストファミリーは、アンバサダー活動で紹介した折り鶴をはじめとする日本文化やお茶、日本のお菓子などに深い興味を示してくれました。



▲週末に訪れた大英博物館

【留学を終えて】

今回の留学は、これまでで最も大きなプロジェクトだったと思っています。ひとりで飛行機、しかも国際線に乗って外国に渡航し、3週間もの長い間日本の家族や友人と離れて過ごすのは、当然初めての経験でした。それゆえに、留学に行く直前は、「自分の英語で現地の人とコミュニケーションをとれるのか」「現地でトラブルに巻き込まれたりしないか」「入国審査に引っかからないか」など、数々の悩みと不安に駆られました。ロンドンについてころまでは、3週間という期間が途方もなく長いものを感じられました。

それでも、現地で実際に英語を使ったり、リスク管理を行ったりすることで、心にゆとりを持ち、徐々に自分に自信をもって行動できるようになりました。帰り際は、ロンドンを離れたくない気持ちでいっぱいでした。

留学について考えるにあたり、不安に足を引っ張られる機会は必ず訪れると思います。それでもそのすぐ先には、日本には絶対のない数々の経験や濃密な時間が待っています。

自信がなくても問題ありません。心配事も大抵解決できます。

ひとりでも多くの方が、悩みと心配を乗り越えて、留学に旅立つことを願っています。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	アイルランド	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	ハーディケン絵真マリー	学年	2年

留学の概要

外国人観光客の増加が続く静岡県において、主要な観光地にとどまらず、地域の魅力をより効果的に発信する手段として、ストーリーテリングを用いることがあったと考えました。ストーリーテリング、物語を伝えることを通して、観光客の記憶に通常より2.2倍も残りやすくなるという研究があります。(スタンフォード大学の論文より) 口承文化のケルト文化が今もなお世界的に発信されているアイルランドにおいて、ストーリーテリングによる観光業のヒントを探し求めました。

探究活動の成果

探究活動として主に文献調査、インタビュー活動、ストーリーテリングの体験の3つを行いました。

文献調査

アイルランド文学、ストーリーテリングの伝統と重要性について、アイルランド国立博物館やレプラカーンミュージアム、The little museum of Dublin で基礎知識を身に付けました。この活動で特に印象に残っているのは、ストーリーテリングが観光客にむけて頻繁に行われていたことです。レプラカーンミュージアム、the little museum of Dublin ではストーリーテラーによる館内の案内が行われていました。多くの博物館のように、自分で展示物を見て学ぶ形だと思っていたので驚きました。ストーリーテリングイベント、つまりお話会のようなものに参加しなければ聞けないと思っていましたが、その逆で、アイルランドにおけるストーリーテリングというのは人々の間に根付いているものであり、頻繁に、様々なところで行われているということ学びました。また、アイルランド国立博物館は広いためか、ストーリーテラーはいませんでした。代わりに、ストーリーテリングの録音にアクセスできるQRコードとヘッドホンが設置されていました。このような技術を利用した取り組みならば、他言語対応のため、外国人観光客向きであり、静岡の博物館にも取り入れやすいのではないかと考えました。

インタビュー活動

ストーリーテラーには、①ストーリーテリングをする上で意識していることはなにか。②聞き手に合わせて話の内容は変えているのか。③ストーリーテリングによって引き出される地域の魅力にはどのようなものがあるか。という質問をしました。結果として、ストーリーテリングにおいて一番大切なことは、自分が物語の主人公になりきることだと伝えられました。物語の一番の理解者が自分になるように何度もストーリーを読み返すことが必要となり、伝える時は聞き手の出身、年齢、バックグラウンドを考慮して、話を合わせる努力をするとより伝わりやすくなります。また、臨場感を出すための



雰囲気作りも大切になると言っており、実際に会場は薄暗いパブの地下でした。ストーリーテリングが終わって帰路につこうと地上に出た時、物語から冷めたような、とても不思議な気持ちになりました。イベントの発信方法としては、主に SNS が用いられており、個人営業のストーリーテラーは口コミ掲示板、ビジネスカードを重宝しているそうです。

ストーリーテリングの体験

単なる歴史的データや展示品ではなく、その場所、時に生きた人々の葛藤や喜びをそのまま物語として聞くことで、遠い国の出来事が自分事として感じられました。体を大きく使い、言葉だけでなく、ボディランゲージも取り入れながら巧みに聞き手を物語の中に引き込む技術に息を呑むばかりでした。

探究をふまえ、これから

これらの活動を通し、静岡でもアイルランドのような、昔話や歴史をつなげた観光ツアーを展開することで観光客の誘致に成功すると改めて考えました。実際にアイルランドで開催されているナイトイベントのように、地域と一体化したイベントにその土地ならではの、お話を盛り込むことで、現地でしか聞けず、その場の空気感を楽しめる貴重な体験を提供できると考えました。具体的には、富士山の神話、わさび畑の伝統、温泉の歴史を口承イベントやウォーキングツアーで展開することができます。地元農家・職人が語るインタビューコンテンツを作って、デジタルチケットや季節イベントに連動させていくことができると考えます。



留学を通して得たもの

この留学を通して、私は多くの宝物をいただいた。一番は、私の留学生生活をより豊かにしてくれた素晴らしい人達との出会いです。16~18歳が在籍する語学学校のプログラムに参加したため、イタリア、フランス、ブラジルなどの同年代の友達がたくさんでき、今でも連絡を取り合う仲になっています。大学進学準備の違い、放課後の時間の使い方など、日本に帰国した今も外国の文化や教育の違いを日々学ぶことができ、楽しいです。加えて、ホストファミリーはとても穏やかで優しく、アイルランドについて多くのことを教えてくれ、留学生生活を安心して楽しめるものに整えてくださった。まさに一期一会。この出会いを大切にしていきたいです。

このような貴重な経験ができ、多くのものをいただけたのは、トビタテ留学 JAPAN に関係するすべての皆様、資料の作成から添削まで行ってくれた先生、先輩トビタテ生、そして家族のサポートのおかげです。改めて感謝申し上げます。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡雙葉高等学校	氏名	東 すみれ	学年	2年

〈留学計画の概要〉

留学先:アメリカ合衆国、ハワイ州

期間 :7/14~8/3 (3週間)

〈留学のきっかけ〉

私は高校1年生の夏に学校のプログラムでイギリスを訪れたことをきっかけに、海外や留学に興味を持つようになりました。イギリス研修では、観光地へ行く前に先生やガイドさんに文化や歴史を教えていただいたことで、ただ観光するだけでは分からないその場所の魅力に気づくことができ、観光の楽しさが何倍にも広がったように感じました。この経験から、知識や工夫によって観光体験の価値が大きく変わることに気づき、観光業に興味を持ちました。そしてトビタテでの留学を通してさらに深めたいと考えるようになりました。

〈テーマ〉

静岡県で持続可能な観光業発展を目指す！

〈テーマ設定の背景〉

訪日外国人観光客が急増している今、日本の魅力を沢山の方に知ってもらえたことを喜ばしく思う一方、観光客と地域社会の摩擦もよく耳にします。今のままでは地域社会に悪影響を及ぼすだけでなく、せっかく日本に来てくれた観光客の方にも日本の魅力が伝わらないのではないかと考え、解決すべき課題であると感じています。そこで私は、観光客、観光事業者、地域住民の三者が共存した、持続可能な観光業を目指したいとと考え、このテーマを設定しました。

〈ハワイの観光地〉



▲カメハメハ大王像



▲ダイヤモンドヘッドからのワイキキの街並み

〈探究活動〉

1. ハワイ州観光局への訪問

ハワイ州観光局への訪問は、実際にハワイの観光業に関わる方からお話を聞ける貴重な機会でした。

・レスポンシブルツーリズム（責任ある観光）

レスポンシブルツーリズムとはハワイがコロナ禍に始めた取り組みであり、観光客が観光地を訪れる際、地域社会や環境を思いやり、配慮することを心がけるというものです。これを実践しはじめたことにより観光客が増え過ぎてしまったことによりずっと下降傾向であったハワイの、地元住民の観光業への満足度が初めて上昇したということをお聞きし、観光客に地域社会や環境保護への責任を持って旅行してもらうことが大切だと分かった。

その他にも静岡にも応用できそうな、観光客に地域社会に対して配慮してもらうための方法が沢山ありました。

- ・ダイヤモンドヘッドの事前予約制&観光客のみ入場料が必要→オーバーツーリズム対策
- ・ホテルに必ず1人文化を伝えるカルチャーアドバイザーがいる→文化継承→地域保全
- ・ウミガメや珊瑚礁保護のための日焼け止めの成分制限→環境保護
- ・観光客参加型ボランティアプログラム→環境保護

2. 観光地でのインタビュー

観光地で観光客と地元住民に対してアンケートを行った。観光客へのアンケートでの、ハワイを旅行先に選んだ理由ではほとんどの人が海や自然などを挙げており、旅行先を選ぶ際に観光資源というものが大きく影響していることがわかった。また、地元住民へのアンケートでのハワイはオーバーツーリズムが起きていると思いますか？という質問にはほとんどの人がいいえと回答しており、観光地としてずっと人気で、観光客が多くいるのが当たり前なハワイでは観光客を受け入れる姿勢が地域に根付いているのではないかと考えました。

〈留学を通して考えたこと〉

今回留学を通し、持続可能な観光業を実現するためには歴史や文化を正しく伝え、理解してもらうと同時に地域のルールや自然環境を守る取り組みを促すことで、観光客と地域社会の摩擦を減らすことが重要であることがわかりました。また、日本人にも経済効果だけでなく、異文化交流などの観光の価値を伝え、観光客を受け入れる広い姿勢を持ってもらうことが重要であると考えました。これらのことを実現するのは難しいけれど、今回の留学で学んだことを活かして、将来に繋げ、いつかは静岡で持続可能な観光業の実現をしたいです。

語学学校や探究活動など全てを1人で計画し、行動するのは大変だったし、不安に感じることも多くあったけれどそれを乗り越えた先には大きな達成感と自分への自信を得ることができました。留学での体験や思い出を一生の宝にして、これからも頑張っていきます！



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡英和女学院高等学校	氏名	上野花帆	学年	2年

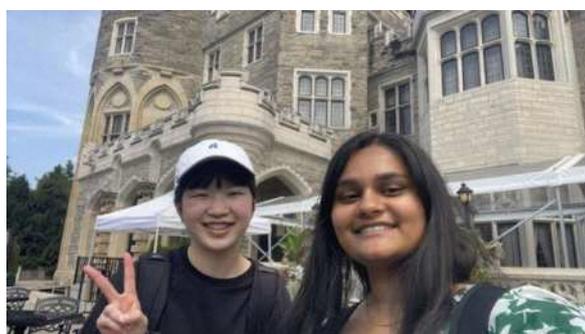
テーマ：カナダから学ぶオーバーツーリズム対策～静岡の未来を守るために～

留学前、私はオーバーツーリズム対策のみに焦点を当てて探究をするつもりでした。しかし、事前調査で静岡の観光の現状を調べていくうちに、静岡にはオーバーツーリズム以外にも観光事業において課題があるとわかりました。それは、オーバーツーリズムが起きている地域と過疎化が起きている地域が共存していることです。富士山周辺や伊豆の温泉地ではオーバーツーリズムが深刻化していますが、県の北西部や伊豆の南部などは過疎化が進んでしまっている状況です。このことを知り、私はオーバーツーリズムが起きている地域に集中している観光客を過疎地などに分散させることで、オーバーツーリズム緩和と過疎地の活性化、この2つを両立できるのではないかと考えました。そのために、カナダのトロントに約1ヶ月間、ホームステイをしながら、現地の鉄道会社や観光局、国立都市公園のスタッフにインタビューをしたり、実際に観光名所を訪れたりしました。



まず、実際に観光名所を訪れて、トロントは観光名所が点在していると感じました。点在していると移動が大変なように思われますが、トロントはある方法で観光客の移動を促進していました。インタビューで、鉄道会社の方からバスや電車の運賃が距離に関わらず一律であることを知り、この仕組みがあることで観光客が離れた観光名所へも足を運びやすくなっていると思いました。静岡県はJRの線路が海側に寄っていて、山側（北側）とのアクセスが弱い、つまり東西（熱海～浜松）は移動しやすいけど、南北移動が弱いので、「点在する観光地を組み合わせで回る」という回遊が難しいです。そのため、トロントのこの運賃一律制度に加えてバスの本数を増やすなどして、南北の移動を活発化させる必要があると考えます。また、トロント観光局からは、AIによる観光ルート提案の導入についてお話を聞くことができました。人が多い場所だけに集中させない、“あえて空いているスポット”を提案することで観光客を分散でき、オーバーツーリズム解消+地域の活性化の両立が期待できそうです。静岡県にも、観光ルートを提案してくれるアプリがありますが知名度は低いため、SNSなどのツールを利用してそのアプ

りの存在を認知してもらう必要があります。これらの仕組みを静岡にも還元することで、オーバーツーリズムの緩和と過疎地の活性化を両方達成できるのではないかと考えます。



アンバサダー活動では、ホストマザーと一緒に華道をやりました。剣山は持って来れなかったため100円ショップで買ったオアシスで代用しました。私は、高校で華道部に所属しており、華道を紹介したことでホストマザーに私自身についてより知ってもらうことができ、会話も広がりました。ホストマザーもとても喜んでくださって、余ったオアシスをもってまた生けてみるとおっしゃっていました。自国の文化を海外の方に喜んでもらうと、改めて日本文化の魅力に気付かされます。今回の留学では、留学先のカナダの文化に魅了されただけでなく、自国の素晴らしさを再確認することができました。自国の文化に誇りを持つとともに、その評判に恥じぬ人になりたいと思いました。



この留学を通して、海外の事例から学ぶことの重要性と、自国の文化や地域を客観的に見つめ直す視点を身につけることができました。今後は、今回得た学びを静岡県の観光課題の解決に生かし、地域と世界をつなぐ架け橋となれるよう探究を続けていきたいです。

いた。また、道路わきにたくさんのごみ箱が設置されていることもあってか街並みはとてもきれいで、ごみのポイ捨てはほぼ目にしなかった。シンガポールは法律が厳しいことで有名だが、治安の良さは日本に負けないと感じた。お店の店員さんの多くはこちらの言語が片言でも聞き取ろうとしてくれたため、気持ちよく観光できた。

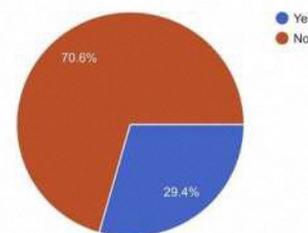
②アンケート調査

観光地で観光客に、語学学校で生徒に日本国内でやったものと大方質問項目が同じアンケートに協力



して

もらった。その結果、SNSで情報を集める人が多いこと、観光地の魅力の情報は欲しいが、交通手段についての情報の重要度が高いことが分かった。アンケートに答えてくれた全員がいつか日本を訪れたいと答えてくれたのはとても嬉しかった。一方で静岡県認知度はまだまだ低いと感じた。



○アンバサダー活動

語学学校で文化についての授業の日には日本の文化を浴衣で発表した。また、別日には他クラスの生徒も対象にフリースペースで JAPANESE PARTY を開き、日本のお菓子の試食や薄茶糖の試飲、書道体験や折り紙体験を行った。多くの生徒から好評で、自分の国の文化に興味を持ってもらうことの嬉しさを実感した。



○留学の価値

探究留学を通して、正解のない問いに向き合い、自ら考え行動しながら答えを探す姿勢の大切さを学んだ。現地では想定外の出来事も多かったが、人と関わり対話を重ねることで乗り越え、机上の学習では得られない学びの価値を実感した。異文化の中で自分の価値観を見直し、相手の立場を尊重する力も身についた。この経験から、探究留学には大きな価値があると感じており、今後も新たな留学に挑戦し、さらに学びを深めていきたい。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	シンガポール 大韓民国	
学校名	静岡県立駿河総合高等学校	氏名	佐々木普慈	学年	1年

1 留学に行こうと思った経緯

私が留学に行こうと思ったきっかけは、静岡空港が地域の玄関口として十分に活かされていないのではないかと感じたことです。静岡県には多くの魅力があるにもかかわらず、空港が「移動のためだけの場所」になっている現状に課題を感じました。そこで私は、空港そのものが目的地となり、地域の魅力を発信できれば、静岡全体の活性化につながるのではないかと考えるようになりました。



シンガポールのチャンギ空港や韓国の仁川空港・金浦空港は、空港内の体験型施設や文化発信の工夫により、世界的に高い評価を受けています。実際に現地を訪れ、利用者目線で海外空港の工夫を調査し、その成果を静岡空港の活性化に活かしたいと考え、今回の留学を決意しました。

2 出発前の活動

現地での探究活動をより有意義なものにするため、出発前には静岡空港や地域活性化に関する情報収集を行いました。静岡空港の利用状況や課題、県内外の人が空港に対してどのような印象を持っているのかを調べ、「なぜ静岡空港は目的地として選ばれにくいのか」という視点を明確にしました。また、海外の先進空港であるシンガポール・チャンギ空港や韓国の仁川空港、金浦空港について事前調査を行い、空港内の施設やサービス、地域文化の発信方法を比較しました。これらの準備を通して、現地では利用者目線で空港の工夫を観察・調査することを目標にしました。

3 現地での活動

シンガポールと韓国では、空港がどのように人を惹きつけ、地域の魅力を発信しているのかを中心に現地調査を行いました。シンガポールのチャンギ空港では、空港利用者や来訪者にインタビューを行い、印象に残った施設や「また来たい」と感じる理由について話を伺いました。また、チャンギ空港内の体験型施設を実際に利用するとともに、空港周辺の環境や施設配置についても観察し、空港と地域とのつながりを調査しました。韓国では、仁川空港・金浦空港を訪れ、施設構成や地域文化の取り入れ方を観察しました。特に金浦空港では、韓国国立航空博物館を見学し、航空の歴史や空港の役割について理解を深めました。



これらの現地調査を通して、海外の空港は観光客と地域の人どちらか一方ではなく、両方が楽しめる空間として設計されていることが分かりました。空港が移動の場であると同時に、滞在したくなる場所になっている点が、今の静岡空港との大きな違いだと感じました。

4 アンバサダー活動

アンバサダー活動では、日本の文化や魅力を海外の人に伝えることを意識して活動を行いました。ホストファミリーに対しては、抹茶を実際に点てて振る舞い、その作法や意味について英語で説明しました。慣れない英語での説明に最初は緊張しましたが、興味を持って話を聞いてくれたことが印象に残っています。また、静岡の伝統工芸である竹千筋細工を実物で見せながら、その歴史や作り方、特徴について紹介しました。写真や言葉だけでなく、実物を使って伝えることで、日本や静岡の文化の魅力がより伝わったと感じました。



この交流を通して、文化を伝える際には体験を通じて伝えることの大切さを学びました。この経験は、今後、空港を拠点に地域の魅力を発信する取り組みにも活かせると感じました。

5 探究活動の成果

シンガポールや韓国の空港では、その土地ならではの文化や特徴を空間づくりに取り入れている点が強く印象に残りました。空港内には体験型施設や展示が多く、移動のためだけでなく、滞在そのものを楽しめる工夫がされていました。

また、空港周辺とのつながりも意識されており、空港が地域の魅力を広げる起点として機能していると感じました。利便性や最新設備だけでなく、地域性と快適さのバランスを取ることで、誰にとっても使いやすく、何度でも訪れたい空港が生まれているのだと分かりました。これらの事例から、空港は単なる交通拠点ではなく、工夫次第で地域の魅力を伝え、人を惹きつける観光資源になると感じました。

6 留学を終えて

今回の留学を通して、自分から行動し、挑戦することへの自信が大きく身につきました。海外で空港の調査や利用者へのインタビューを行い、慣れない環境の中で英語を使って人と関わった経験は、以前の自分では想像できなかったことです。その結果、失敗を恐れずに行動し、新しいことに一歩踏み出すことが以前よりも楽になりました。また、シンガポールや韓国の空港を訪れ、空港が地域の魅力を発信する拠点として機能している様子を学んだことで、空港運営や地域活性化に関わる仕事への関心が高まりました。将来、大学でどのような分野を学び、社会にどのように貢献したいのかを具体的に考えるきっかけにもなりました。



現在は、留学で得た学びを活かし、静岡空港を会場としたイベントの企画に取り組んでいます。海外空港の事例を参考に、空港を「通過点」ではなく「目的地」として感じてもらえるよう、若い世代や家族連れが楽しめる企画を検討しています。今回の留学で得た経験を一度きりで終わらせるのではなく、今後も空港を起点とした地域活性化に継続して取り組み、静岡の魅力を広く発信していきたいです。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)			訪問国	カナダ
学校名	浜松西高等学校	氏名	川島美紗	学年	1年

1. 応募理由

私は幼いころから世界遺産を訪れたり、学んだりすることが好きです。また、私が住む静岡県は自然豊かで、食べ物も美味しく、とても魅力がある私たちの県をもっと発展させるために私の好きな富士山を活かしてさらにPRを強化することが一つの方法だと思いました。しかし、実際に富士山周辺を訪れたところ、オーバーツーリズムが問題となっていて、富士山を活かすためには、まずはその保護が必要だと感じました。持続可能な観光地域づくりを最終目標として、バンクーバーの環境保護の取り組みやカナダ人と日本人の観光に対する意識の違いを調べるべく応募しました。

2. 探究活動

①街頭インタビュー

放課後に何日かに分けて街頭インタビューを行いました。インタビューの内容は、「バンクーバーの現地人は観光する際にどのような環境配慮を行っているのか」です。その調査の結果、ごみの分別をしたり、家に持ち帰っている人がとても多かったです。そして、実際に私が街で見かけただけでも100台以上設置されていました。大半のごみ箱には捨てる物がイラストで描かれていて、ごみの分別の意識が表れていました。



また、公共交通機関やエコな乗り物を使う人が多いこともわかりました。電車は二方向のみなので乗り換えがなく利用しやすかったり、自転車を電車に乗せてよいので自転車ユーザーが多かったりしました。レンタルバイクの制度が充実していて、バンクーバーで一番大きい公園では、自転車専用の通路がありました。



②企業訪問

訪問したお土産ショップでは、社長様からお話をいただくことができました。店内では、外国人観光客に配慮した多言語対応の表示がされていました。そして、私が一番印象に残っているお話は、どんな人種や国、民族のお客様にも丁寧に接客し、偏見を持たないことが最も重要

であるということです。この考えは、私が将来観光業に携わるうえで最も大切な考えではないかと思い、大切にしていこうと思いました。

③エコツアーへの参加

エコツアーとは、自然や地域の文化・歴史を楽しみながら学び、その価値を理解して保全に責任を持つ観光の在り方です。そこでは、ガイドの方が自然環境の保護の大切さを実際に地域の環境を見ながら説明されていました。そして、観光は「守りながら楽しむもの」であるという考え方が私の中に生まれました。

④ファーマーズマーケットの訪問

地域のファーマーズマーケットを数件訪れました。そこでは地元食材や環境に優しい食材を多く取り扱っておりました。地産地消で環境に優しい食材が消費されていました。また、この施設は観光地となっており、観光客も利用しやすい場所で経営されていました。そして、この写真のように地元のブランドであることが一目でわかり、この表示はこの施設だけでなくあらゆるコンビニエンスストアでも見かけることができました。



3. 全体を振り返って



バンクーバーでは、日本よりも環境配慮の意識が高いことが実際に留学してわかりました。それは、現地人の意識が高いところにありました。この成果を日本で還元するためにできることを考えました。富士山周辺では富士山夢の大橋でオーバーツーリズムが問題となっていました。この原因は単なる人の多さではなく、観光客の配慮の不足ではないのかと考えました。そして、観光は守りながら楽しむものであることを観光客に伝えていく必要があります。私は、地域住民に迷惑とならず、環境配慮ができるように注意喚起文を製作

しました。それを英語と中国語に翻訳したのもインターネット上に投稿し外国人観光客にも伝わるようにしました。今後も富士山を守るための取り組みを続けていこうと思います。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	清水南高校	氏名	河原崎 朱	学年	高校2年

1. 実施内容

- ・ 成果：12月に自作ショーを完遂。企画・制作・実施までを個人で行った。個人の表現技術の向上を確認できた。
- ・ 身につけたこと 自己の表現力の向上、目の前の観客へ、どのように表現するかには成功した。

2. 同期のトビタテ生と「静岡への貢献」の不足度

- ・ 静岡の土地柄、歴史、特産品、あるいは「静岡ならではの空間」を演出に組み込めていなかった。
- ・ 自分の稽古からトビタテに参加したいと思って相談してくれる学生の数が極端に少なかった。また、自分も積極的に声掛けをすることができなかった。
- ・ ショーを通じて、知らない人にミュージカルを知ってもらおうという目標を達成できなかった。身内やミュージカルのことが好きな人しか見に来てくれなかった。

3. 具体的な反省点

- ・ 内向きな視点：「自分が何を表現したいか」に集中し、「この街でやるからこそその意味」に焦点を置くことができなかった。
- ・ トビタテで海外に行き自己理解に取り組めたからこそ今の自分がいるということを示すことができなかった。

4. 学んだこと

- ・ 完成度の高さは自分が持っている実力ではなく稽古への取り組む姿勢で大きく変わることが分かった。
- ・ 小さい子たちから出てくる無限のやる気や自分にとっての利益を考えずに取り組む姿は自分も見習うべきだなと改めて気づかされた。



次回の再演静岡まつりに向かって取り組みたいこと。

1. 「静岡まつり」ならではの演出：

自分が作ったショーに静岡を連想させるような演技をプラスし、静岡祭りにぴったりで貢献できるような演目を作りたい。

2. アクセスの良さ（映画感覚）：

お祭りに来ている人たちが、ふらっと足を止めて観てくれるようにお客さんを巻き込める温かいステージづくりを稽古の時からもっと積極的に行いたい。例えば、参加者の学生とのコミュニケーションの機会をもっと増やしたい。

3. 12月との決定的な違い：

12月の時は、歌のレベルに大きな差があり、そこが後で見返していても残念だったので個人の得意をどう伸ばし、本番で見せるか。全体像ではなく個人に焦点を当てて稽古に取り組んでいきたい。

4. 地元の反応への期待：

静岡の人たちに、自分のショーを通じて、ミュージカルってなんだろう。ミュージカルって面白そうというミュージカルに関してプラスの感情を抱いてもらいたい。また、トビタテで得た実行力、計画力、人を動かす力を示したい。

5. 参加者との団結力

12月の時は、ショーをいかに成功させるかという結果にこだわってしまったので、参加者のみんなとプライベートな交流をする時間が取れず、教師と生徒のような関係になってしまった。このような関係ではなく、お互いを高め合えるメンバーの1人として取り組んでいきたい。また、その中で自分の将来につながるような発見もしていきたい。

ショーまでの本番までの関わりだけでなく、終わった後も参加者と交流し、個人の悩みや留学についての相談にも気軽に相談できるような関係性を作っていきたい。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探求コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	藤枝東高等学校	氏名	中村栞里	学年	2年

目次

- ① アメリカへ行った理由
- ② 留学中の活動と感想
- ③ 今後の挑戦

① 私がアメリカへ行った理由

私がトビタテを利用してアメリカへ留学しようと考えた理由は、主に三つあります。一つ目は、アメリカという国に強い魅力を感じているからです。中学三年生のとき、市の親善使節としてアメリカを訪問し、個性を尊重する価値観に触れ、この国で学びたいと強く思うようになりました。

二つ目は、幼い頃から続けてきたダンスへの挑戦です。小さい頃からジャズダンスを習っており、ダンスの本場であるアメリカで世界レベルの表現に触れ、自分の可能性を高めたいと考えました。

三つ目は、地元・静岡のダンス環境をより良くしたいという思いです。海外での経験を持ち帰り、静岡をダンスで盛り上げたいと考え、この留学を決意しました。

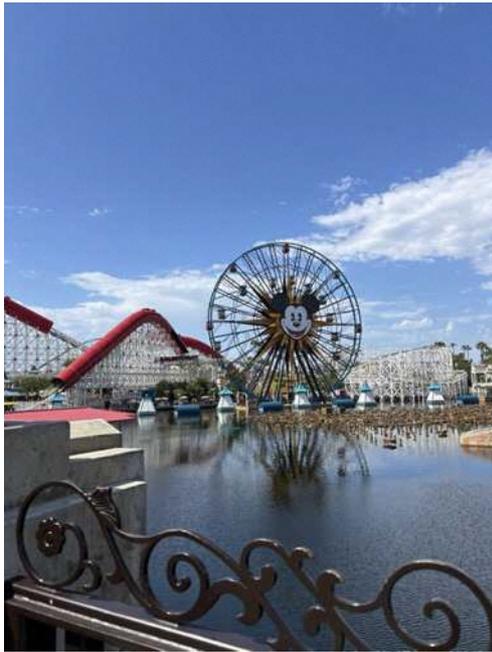


② 留学中の活動と感想

留学中は、平日にダンスレッスンと語学学校に通い、休日は観光やインタビューを行っていました。語学学校は1日4時間で、さまざまな授業を受けていました。学校では、日本人ダンサーにも多く出会い、友達をつくることができ、とても充実した時間を過ごしました。英語で英語を学ぶ環境だったため、語学が身につについていく実感が強くあり、この学び方の意義を深く感じました。

ダンスレッスンでは、毎回圧倒されることばかりでした。特にアメリカのヒップホップはレベルが非常に高く、これまで見たことのない動きや振り付けに刺激を受けました。また、レッスン全体を通して、自由に自分を表現することこそがダンスなのだと実感しました。

観光では、カリフォルニア・ディズニーやユニバーサル・ハリウッド、ドジャースタジアム、チャイニーズシアターなど、世界的に有名な名所を徒歩や車、電車で訪れることができました。身近な距離で多くのエンターテインメントに触れ、楽しむこと、そして参加すること自体が産業として成り立っている点に大きな魅力を感じました。



③ 今後の挑戦

私は、世界中を旅するという新たな目標を持つようになりました。留学とは、新しい文化や価値観に触れる経験だと思います。そして、新しいものに触れることは、自分の価値観を見直し、広げるきっかけになります。だからこそ私は、世界を旅し、多くのことを知ることで、自分自身を成長させていきたいと考えています。

また、ダンサーとしても世界で活躍し、たくさんの人の個性を見れるダンサーになりたいです。

ご覧いただきありがとうございました。ぜひ、皆さんも留学をしてみてください！

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡県と世界をつなぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	柳井 花椰	学年	1年

1. はじめに

私は「ふじのくにグローバル人材育成事業」を利用し、アメリカ合衆国ハワイ州に三週間留学しました。本報告書では、留学の目的、現地で行った探究活動の内容、調査結果、そしてこの留学を通して得た学びと今後の展望についてまとめます。本留学は、「静岡茶をハワイでどのように広めることができるのか」という探究テーマのもと実施しました。

2. 留学の目的

日本では近年、若者を中心に急須でお茶を飲む習慣が減少し、いわゆる「茶離れ」が進んでいます。一方で、海外、特にアメリカでは抹茶ブームが起きており、日本茶がスイーツや飲料、美容分野など、さまざまな形で取り入れられています。この日本と海外のギャップに着目し、静岡茶を海外で広めるためには、どのような価値や伝え方が必要なのかを明らかにすることを目的として、本留学に臨みました。

3. 現地での活動内容

午前中は語学学校に通い、すべて英語で行われる授業を受講しました。クラスメートは多国籍で、日常的に英語を使う環境の中でコミュニケーション力を高めることができました。午後は探究活動を中心にを行い、以下のような調査・活動を実施しました。

- ワイキキ周辺での街頭インタビュー（約 50 人）
- スーパーマーケットやカフェでの日本茶商品の陳列調査
- ハワイ日本文化センターでの資料調査
- ホストファミリーや現地の人への日本茶提供・意見収集
- SNS を活用した若年層の反応の観察

これらの活動を通して、現地の人々が日本茶に対してどのようなイメージを持っているのかを多角的に調査しました。



4. 調査結果

調査を通して分かったことは、ハワイでは日本茶が「伝統文化」として保存されているのではなく、生活の中に自然に溶け込む形で受け入れられているという点です。インタビューでは、「Japanese」という言葉そのものがブランド価値として捉えられており、健康や美容に良いイメージが強いことが分かりました。また、店舗調査では抹茶がパスタ、パン、スイーツ、さらには化粧品などにも応用されており、日本では見られない多様な展開が行われていました。

5. 考察

留学前は、「静岡茶のおいしさや品質をそのまま伝えれば広まる」と考えていました。しかし、実際にはそれだけでは不十分であり、健康・美容・ライフスタイルと結びつけた伝え方が重要であると気づきました。日本文化は、形をそのまま守ることで残るのではなく、本質を保ちながら形を変えることで、世界に受け入れられているのだと実感しました。

6. 今後の展望と私の挑戦

今後は、静岡茶を「飲み物」としてだけでなく、日常に寄り添う存在として発信していきたいと考えています。その一例として、抹茶パスタのレシピを考案しました。これは、ハワイで見た抹茶の多様な使われ方をもとに、日本茶をより身近に感じてもらうための試みです。また、今回の留学で身につけた英語で発信する力や、異文化の中で行動する経験を活かし、今後も新しいことに挑戦し続けたいと考えています。

7. まとめ

本留学を通して、私は「行動することの大切さ」と「変化を恐れず挑戦する姿勢」を学びました。静岡茶には、世界の中で進化しながら広がっていく可能性があり、日本と世界をつなぐ架け橋になり得る存在だと感じています。この経験を今後の学びや進路に活かし、さらに成長していきたいです。

8. おわりに

最後に、本留学を支えてくださった家族、学校の先生方、トビタテ関係者の皆様、そして現地で協力してくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡中央高等学校	氏名	長谷川芽咲	学年	2年

1. 留学期間 9月1日～10月3日
2. 留学地域 オーストラリア パース
3. 留学テーマ オーストラリアで学ぶ絶滅危惧種、野生動物保護の方法

<テーマの設定理由>

幼少期から動物が大好きで動物保護の活動に興味があったことと、近年クマやカモシカの出現が問題となっておりニュースなどで殺す殺さない論争が流れることが多く動物と人間の共生について、通っていた塾で絶滅危惧種について学ぶ中でそれらの動物を守るために自分にできることを探したいと思うようになったからである。

<探究方法とその他留学中に行ったこと>

1. レッドレンジャー動物園でボランティア活動に参加する
2. 職員の方にインタビューをする
3. RSPCA 動物保護施設への訪問
4. ロットネスト島に行く
5. パース動物園に行く



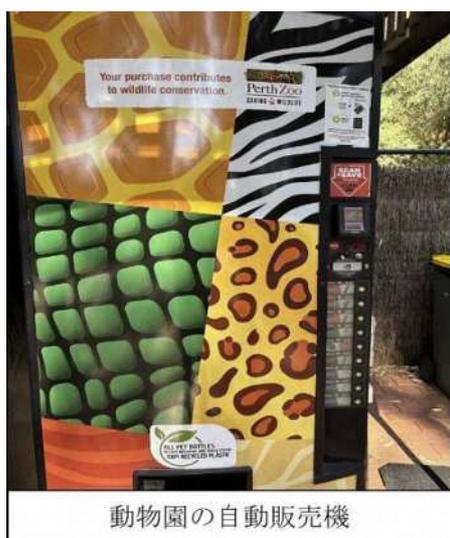
ボランティア活動中に触ったコアラ



ロットネスト島で撮ったクオッカ

<探究活動で得たもの>

ボランティア活動に参加し、動物との接し方を学んだ。それは動物の視点に立って考えて行動することだとわかった。職員の方へのインタビューではオーストラリア市民の絶滅危惧種や野生動物などの動物保護への関心が高い理由は自国の固有種である動物に誇りを持っているからだを知った。そして、日本が絶滅危惧種や野生動物を守るためにすべきことは公衆教育を行うことだとわかった。庭に在来植物を植えるなどの簡単にできる保全活動を啓発することで実際に試してくれる方を作り、そこから環境保護や動物保護へ関心を持つきっかけにもなるからである。



動物園の自動販売機



野生復帰について書かれた看板

<その他の活動で得たもの>

ロットネスト島に行きクオッカを見てきたのだが、とても平穩に暮らしていて個体の数も多かった。そしてその訳はきっと自然豊かな環境とルールを守る人々のおかげなのだろうと思った。人間が動物の環境に与える影響は大きく、人間の行動が非常に大切なことが分かった。

パース動物園という絶滅危惧種の繁殖プログラムや野生復帰を行っている動物園にも行った。そこでは自動販売機の売り上げの一部が野生動物保護の活動の資金として使われているとのことだった。また、具体的にどのような動物の繁殖プログラムや野生復帰などを行ったかについて園内にある看板に掲載されていた。園内の道中に建てることで人々に見てもらいやすいなと思った。

<この留学を通して感じたこと>

留学は上手くいかないことばかりで途中で投げ出したくなったことも少なくなかったけれど、周りの人の支えもあり、無事に留学を終えて探究活動の問いに対する答えを持ち帰ることができて安心した。異国の地で興味があることを探究し、親元を離れて生活したことで挑戦する気持ちや自立性を高めることができ、人として大きく成長できたと思う。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	知徳高校	氏名	戸塚富有	学年	2

中学生の時から留学に興味がありましたが留学は難しいだろうと考えていました。そんな中、高校の先生がトビタテ留学のパンフレットを見せてくれたのがきっかけです。自分で留学先や留学期間などを計画できるという新しさに惹かれ、応募を決めました。

幼い頃から茶道に慣れ親しんでいたこともあり、静岡のお茶をテーマに留学することを決めました。また現地校に通い現地の生徒と交流をすることにも興味がありオーストラリアの SNS 利用禁止法についても探ろうと決めました。

オーストラリアのゴールドコーストにあるリンディスファーン・アングリカン・グラマースクールに1か月通い、現地の生徒と同じ授業を受けながら学校生活を送りました。授業は生徒の発言や話し合いを重視するスタイルで、日本とは大きく異なり、最初は戸惑いを感じることもありました。次第に慣れ、前向きに楽しく学校生活を送ることができました。

また、先生と生徒の距離が近く、質問や意見を伝えやすい環境であったため、自分の考えを英語で伝える力を伸ばすことができました。校則も日本ほど厳しくなく、生徒一人ひとりの自主性が尊重されており、自分で考えて行動する姿勢の大切さを学びました。

さらに、多文化共生が進んだ学校であったため、さまざまな国籍の生徒と関わる機会が多くありました。日本の文化や静岡のお茶について紹介すると強い関心を持ってもらえ、自国の文化を発信することの意義を実感しました。他国の文化や価値観に触れることで、考え方の違いを身近に感じました。

これらの経験は、トビタテに挑戦し、実際に海外の学校で生活したからこそ得られたものだと感じています。

以下では、この経験をもとに取り組んだ活動1と活動2について報告します。



活動 1

16歳未満 SNS 利用禁止法について事前に調べた上でオーストラリアに渡航し、現地ではインタビューを通して調査を行いました。その結果、年齢層によって賛成・反対の意見が大きく異なることを実感しました。

現地の学生の多くは反対の立場で、犯罪を防げるというメリットは理解しているものの、時間制限やサイト制限などの機能を活用し、完全に禁止するのではなく工夫して利用すべきだという意見が多いと感じました。SNS のデメリットを理解した上で、適切に使うことが大切だという考えが印象的でした。

一方で、ホストマザーをはじめとする保護者の立場からは、利用禁止法に賛成する意見が多く聞かれました。SNS の危険性を理解し、慎重に利用することを子どもたちに教育していく必要があると教えていただきました。

このインタビュー活動を通して、学校で SNS に関する講座が開かれていることや、16歳未満が利用できる YouTube キッズ向けチャンネルが用意されていることなど、オーストラリアならではの工夫を知ることができました。この調査を通して、SNS は単に禁止するかどうかではなく、どのように付き合っていくかが重要だと考えるようになりました。現地の学生からは、SNS のデメリットを理解した上で工夫して利用したいという声が多く聞かれ、保護者からは教育の必要性を強く感じました。これらの経験から、日本においても若者が SNS と安全に向き合える社会をつくるために、どのような工夫や教育が必要なのかに興味を持つようになりました。

活動 2

私は、静岡のお茶や茶道の魅力を伝えるため、ホストファミリーや現地の友人に向けて茶道体験を行いました。想像していた以上に多くの人が日本の文化に興味を持ってくれたことがとても嬉しく、積極的に質問をしてくれる姿が印象的でした。渡航前は、茶道は現地ではあまり馴染みのない文化だと思っていました。しかし、オーストラリアでは「T2」という有名な紅茶ブランドやスーパーで静岡産の抹茶が販売されており、抹茶だけでなく茶道セットも現地で手に入ることを知り、大きな驚きを感じました。この活動を通して、オーストラリアでは抹茶が珍しいものではなく、日常の一部として親しまれていることに気づきました。一方で、現地で楽しまれている抹茶や茶道と、日本の本場の茶道には違いがあるとも感じました。今後は、より本来の茶道の魅力を伝えるために、どのような工夫ができるのかについて考えていきたいです。

また、この経験を通して自分の高校で報告会を開き、トビタテ制度や留学の魅力を伝えることができました。また、今回の報告会をもとに、より多くの生徒に留学やトビタテ制度を知ってもらうにはどうすればよいかを考え、今後の活動に活かしていきたいと思います。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡聖光学院高等学校	氏名	夏目徳	学年	1年

私はオーストラリアのクイーンズランド州で静岡県内の過疎化が進む地域で、持続可能な医療システムを構築するために必要なことは何か?について探求しました。広大な国土のオーストラリアでは、十分な医療を受けられない地域が点在しています。そのような地域で暮らす住民のために、都市部にある大学病院などとの間で先進的な僻地医療が取り組まれています。静岡県でも過疎化や医師不足等に伴って、伊豆半島や山間地でこれまでの医療が受けられなくなってしまう地域があり、オーストラリアでの先進的な取組や地域住民の医療に対する考え方などを現地で調査し、日本の医療体制と比較、考察することで、医療困難地域が抱える課題解決に関する知識や理解を深めました。

探究活動から分かったこと。

Q. オーストラリアでは実際にどのような形でへき地での診療や病院への搬送を行っている?

A. 専門のドクター半年～数年単位で交代しながら常駐していて、都市部への搬送をする場合はドローンやヘリ、飛行機などを使う。長距離搬送専門の航空事業も存在(Royal Flying Doctor Service)。

Q. へき地に医療従事者を送り込むためにはどのような活動を行っている?

A. 専門のトレーニングセンターで研修を行い、それ用のシナリオも用意している他、へき地で活動を何年か行う場合の優遇制度や補助金などを出している。

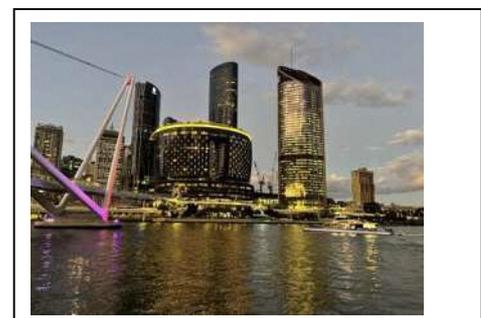
Q. 医療体制を維持するために必要なことは?

A. 官民共同で医療従事者の継続的な支援や設備の供給や予防接種などの無償化などでそもそも病気の人を作り出さないようにもしている。

(クイーンズランド州ブリスベンのグリフィス大学→)



(留学したクイーンズランド州ブリスベンの景色→)



ブリスベンの語学学校にホームステイしながら通学し、語学学習と並行して医療に関する調査を行いました。例えば、ホームステイ先の家族や語学学校の先生にアンケート調査を実施。グリフィス大学のオープンキャンパスに参加し、先進的な医療研究を視察したほか、現地の図書館などを訪れて調査を行いました。さらに、大学関係者との意見交換を通して、オーストラリアの僻地医療の現状や課題、解決に向けた取り組みについて理解を深めました。

アンケート調査や大学でのインタビューは良く取り組めたと思います。ホストファミリーや先生などに話を聞くこともできました。

僻地に実際行くことはスケジュールなどの関係上行くことができなかったのですが、良い情報をたくさん得ることができました。

今後は医療従事者となって、それまでに得た知見を生かして過疎地などの医療困難地域における医療に貢献しようと考えています。地域の医療現場で働き、各地の医療困難地域を飛び回ることで、多くの人々に質の高い医療を提供していきたいです。

(卒業式の最終日本語学校にて撮影→)



(資料を調査したブリスベン市内の図書館→)



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界をつなぐマイプロジェクトコース)		訪問国	カナダ	
学校名	沼津工業高等専門学校	氏名	高橋英寿	学年	2

1 目的・応募理由

留学の目的は、ゲーム開発能力の向上、カナダの異文化に触れて様々な場所を回るという2つでした。僕は小学五年生からゲームプログラミングを始め、高校生になってから本格的にUnityでゲーム開発をするようになりました。しかしコンテストではあまり勝つことはできず、今年初めて県の大会で賞をいただいた位の実績しかありませんでした。次第になぜ勝てないのかについて考える機会が増え、自分なりの答えを出した結果、興味を引くようなアイデアを生み出せるレベルの経験が不足、コーディングなどの技術力も不足しているからだと考えました。そこでゲーム産業が発展しているカナダで技術を学びながら日本にいただけでは体験することのできない様々な経験を積むことを目的に留学しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

僕は平日は語学学校に通っていました。基本的には午前中から午後の早い段階で授業が終わるため、イベントや観光地に行くこととの両立をはかることができました。学校には日本人がおよそ半数ほどいたのですが、日本人とは殆ど話さず他国の人と関わるようにしました。僕が話す英語は拙いため、相手から何を言っているのかわからないという顔をされることも珍しくありませんでしたが、互いに理解しようとしたことで良い関係を作ることができたと思っています。

休日は基本的に外出していました。ホームステイ先のお父さんが休日、家にいないことが多かったため、一人で外出して自然を満喫してました。

探究活動は、計画の段階ではゲーム会社を訪問する予定でしたが、100件近くのメールをすべて断られてしまったため、実施することが叶いませんでした。そこで第2のプランとしてSIGGRAPH2025という技術やCGの世界規模のイベントに参加したり、Full Indie Meetupというインディーゲームの開発をしている人が集まるイベントに参加したりしました。どちらのイベントでもすべての企業の方に質問をし、技術を実際に体験することで、技術に対する知見を広げることができたり、どの分野が研究されているのかについて、少しですが学ぶことができました。また、ゲーム開発のイベントでは、事前に用意していた質問をして、開発の能力の上げ方を知ることができました。他の人のゲームを遊んだり、プレゼンテーションを聞くことで、全く気にしたことのないような詳細な部分のデザインなどについても学ぶこともできました。

また、バンクーバーに住んでいる、シリコンバレーでインターンシップをしている知り

合いに連絡を取り、大学で学んでいることやカナダでのゲーム産業の立ち位置などについて幅広い話を聞くことができました。UBCの研究室のような部屋にも入らせてもらうことができ、通常では体験することのできないことを多く経験できました。



3 感想など

僕は飛行機に乗ったこともなければ海外に行ったこともありませんでした。そのため外国に対する偏見や恐怖があり、留学先でも勇気を持って行動できるのか不安でした。しかしトビタテ留学 JAPAN で知り合った仲間や家族、学校の先生方、現地の友達に支えてもらうことで多くの良い経験をすることができました。日本にいただけでは殻を破れていなかったと思います。

今回の探求のテーマは、ゲーム制作能力の向上 でしたが、技術以外にも、カナダの文化や風習、語学、どの分野の研究が盛んなのか、自然のあり方など、書ききれないほど多くのことを学ぶことができました、とても良い経験をすることができました。

現在でも留学中にできた友達やインディーゲームを開発している方と連絡を取り続けており、留学後にも良い影響を与えてもらっています。

留学をしたことによって本当に良い経験をすることができました。今後も機会があれば異文化に触れて学びを増やしていきたいです。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース(静岡と世界をつなぐマ イプロジェクトコース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡県立浜松北高等学校	氏名	桂花穂	学年	2年

私は、「未来を担う子どもたちに必要な環境教育
～カナダの保育園で学ぶ持続可能な社会～」というテーマで
カナダのBC州ビクトリアに3週間留学しました。

〈探究の背景〉

小学生から継続して行ってきた自由研究等を通して、
ゴミを出さない暮らしが大切だと分かりました。
同時に、多くの人に環境に優しい行動をしてもらう
ことが持続可能な地球環境を作ると考えました。そこで
今回は教育に注目し、未来を担う子どもたちが自然を
大切に思って行動できるようにするために必要な教育の
あり方を自然豊かなカナダから学ぼうと思いテーマを設定しました。



↑ 自由研究

〈問いに対する仮説〉

日本に環境教育が主流でない理由として、現在の日本社会では、自然環境に対する親近感や理解が十分に広
まっていないため、人々の関心が向かず、環境教育に力を入れることのできる園や学校の需要が少ないのではな
いか。また、街には自然と呼ぶことのできる緑が少なく、日本の子どもたちは学歴社会の中で幼い頃から塾に通う
など屋内で過ごす時間が長いことが、自然に触れる機会の減少につながっていると考えました。

〈留学前の活動〉



卒園した保育園を訪れ、保育がどのような流れで行われているのか調査しました。また環
境への意識の違いを探るために、自然と関わる機会や環境に対する取り組みに関するイ
ンタビューを行うとともに、日本で環境教育が主流でない理由を自然との関わり観点か
ら仮説を立てながら考察し、カナダでの探究活動に応用しました。

〈留学中の活動〉

現地の保育園に通い、環境教育について学びました。
ボランティアを通して、子どもたちがどのような環境
でどんな活動を行っているのか、また自然の中で学ぶ
ことにはどのような意義があり子どもたちにどんな影





響を及ぼすのかを調べました。また、マイクロプラスチックの採集・分析を行う企業のオフィスを訪問し日本に持ち帰ることのできる技術を学んだり、草取りを通して地域環境を守る取り組みを体験したり、ホームステイを通して、日常生活における環境設定のための工夫を探したりしました。

↑ゴミ拾い

↑企業訪問

〈問いに対する答えと考察〉

カナダの保育園では、公園やビーチなどの自然で遊ぶ時間が必ず毎日設けられている、子どもたち自身で自然と遊ぶ経験を大切にしている、先住民との関係を意識させることで感謝の気持ちを育てているなどの様々な環境教育の工夫が見られました。自然の中で学ぶ意義としては、自然との関わりは自分が思ったようにいくことばかりではないため、「共生する」ことを学ぶことができること、また、自然のことが好きになり、自然を大切にしようと思う心が発達することで、環境意識の向上や、将来地球のために積極的に行動できる人材の育成につながるなどが挙げられます。これらを踏まえ、浜松に応用する方法として、小さい頃から自然と関わる機会を頻繁に設けることが大切だと思います。身近にある自然環境で遊ばせてもらうことに感謝したり、少人数教育によって自然の多い場所に行きやすい体制を作ることが、環境教育の実現への一歩になると考えました。

〈留学後〉

自分が卒園した保育園に訪れ、文化や生活環境が違うカナダで学んだことから浜松で応用できる教育方法を自分なりに考察し、提案しました。また、SNSを使って留学で得た環境教育の工夫や環境に配慮した暮らしについての情報を発信し、自分の経験を共有することで、より多くの人に自然を大切にすることを覚えてもらえるようにしました。



〈今後の留学の展望〉

より多くの人に環境に対する意識を高めてもらうために、今度は貧困層に着目して活動したいです。「日本に住む私達にも貧困地域に住む人にもできる、取り組みや環境を守るための工夫は何か？」というテーマでアフリカの貧困地域に留学し現地の学校に通いながら、現地での生活やインタビュー、ボランティアを通して貧困地域に住む人々とともに直接問題に向き合い、現地の人だけでなく今の日本に住む人々にもできる最も有効なアクションのアイデアを自分なりに考察し、地域や国に還元します。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡県立清水南高校	氏名	笹本のの	学年	2

私はカナダのトロントで3ヶ月間「落書きとアートの違いは何か」という探究テーマのもと探究活動を行う留学をしました。

1 今回の留学の目的

今回の留学の大きな目的は、「落書きとアートの違いは何か」という問いを、海外の現場で実際に考えてみるということです。小さい頃、壁に絵を描いて怒られた経験があり、「同じように描いているのに、紙だと褒められて壁だと怒られるのはなぜだろう」と疑問に感じていました。この経験がきっかけとなり、ストリートアートについて興味を持つようになりました。

日本にいるだけでは分からないことも多いのではないかと感じ、実際にストリートアートが盛んなトロントに行き、「現地の人はどう考えているのか」「街の中でアートはどんな役割を持っているのか」を知りたいと思いました。現地の作品を見るだけでなく、人の話を聞き、自分の目で街の雰囲気確かめることを目的にしました。



←日常に定着したストリートアート

また、外国の文化の中で生活してみることで、視野を広げたいという思いもありました。日本とは違う言語や価値観の中で、自分の考えを伝える力や、自分から行動する姿勢を伸ばしたいと考えていました。さらに、日本文化について説明したり体験してもらったりすることで、自分自身が日本の文化を理解し直すことも目標に含めていました。

2 留学前の準備と事前研修で考えたこと

留学前には、事前研修に参加して自分の目的や目標を整理した。研修では、安全面や生活面の注意点だけでなく、「なぜ留学するのか」「何を学びたいのか」を改めて言葉にして考える時間がありました。

自分の探究テーマを説明するとき、うまく言葉にできない部分もあり、「自分は何を知りたいのか」をもう一度考え直すきっかけになりました。また、全国に同じように挑戦しようとしている同世代の人がいることを知り、心強く感じ、自信が持てるようになりました。

準備として、ストリートアートに関する本や記事を読み、トロントの街についても調べた。写真を見るだけでは分からないことが多く、「実際に見たらどう感じるのだろうか」という期待と少しの不安を持ちながら、出発の日を迎えました。

3 留学中の活動内容

現地では、まずストリートアートが多い地区を歩いて回り、気になった作品を写真に撮りながら記録していました。作品そのものだけでなく、「どんな場所に描かれているのか」「人が立ち止まって見るのか、それとも通り過ぎてしまうのか」という点も意識して観察しました。



同じ壁画でも、人が集まり写真を撮る場所もあれば、ほとんど見られないまま放置されている場所もありました。そこから「作品そのものだけでなく、場所や人との関係で意味が変わる」ということを実感しました。

美術館やギャラリーにも足を運び、展示されているアートとの違いを比べました。静かな展示室で見る作品と、街の生活の中にある作品では、見る側の姿勢も大きく変わり、展示室では作品と向き合う時間が長くなる一方、街の中では日常の一部として存在していることが分かりました。

さらに、現地の人や学校の友達にインタビューを行いました。

・落書きとアートの違いは何だと思うか・ストリートアートを見てどう感じるか・街にとってプラスかマイナスか、などを質問し、さまざまな意見を聞きました。「許可があるかどうか」「公共物を汚していないか」といった視点のほか、「地域の雰囲気を良くしている」「観光につながっている」「自分の考えを表す手段」という意見も聞くことができました。

4 日本文化紹介・アンバサダー活動

アンバサダー活動として、水墨画のワークショップを行った。墨や筆、半紙を準備し、簡単な説明をしたあと、実際に描いてもらう体験を中心にした。最初は「難しそう」と言っていた人も、にじみやかすれを楽しむうちに、自由に表現するようになっていきました。

完成した作品を見せ合いながら感想を話す時間も作り、線の太さや濃淡の違い、思い通りにいかない部分が味になることなどを共有しました。日本の伝統的な表現方法に興味を持ってもらえたと感じることが出来ました。

浴衣の着付け体験や味噌汁づくりも行いました。実際に着たり食べたりする体験は言葉だけより伝わりやすく、「日本の文化」を身近に感じてもらうことができました。こちらにとっても、日本の文化について改めて説明する良い機会になりました。

実際に来てもらった浴衣→



5 留学中に感じたこと・考えたこと

留学中は楽しいことばかりではなく、うまくいかないことや戸惑うことも勿論ありました。英語が聞き取れなかったり、自分の言いたいことがすぐに言葉にならなかったりして、悔しい思いをする場面も多々ありました。

しかし、失敗しないように黙っているより、まずは伝えようとするのが大事だと感じるようになった。完璧ではなくても、相手が理解しようとしてくれることで会話が成り立つ体験を重ね、自信につながりました。

また、日本では当たり前だと思っていたことが、海外では必ずしも当たり前ではないことにも気づきました。挨拶の仕方、時間の感覚、授業中の発言の仕方など、さまざまな違いに触れる中で、自分の考え方が広がっていくのを感じました。

6 成果

探究面の成果として、「落書きとアートの違いは作品だけでは決まらない」という結論にたどり着きました。関係しているのは、

・描かれた場所・許可の有無・地域との関係・見る人の受け取り方・社会への影響

など、複数の要素であることが分かりました。語学面では、英語でのコミュニケーションに対する抵抗が小さくなりました。聞き取りや表現が完璧でなくても、「伝えたい」と思って行動すれば通じる場面が多いことを実感しました。生活面では、自分で考えて行動する場面が増え、自立心が育ったと感じています。困ったときにすぐに誰かに頼るのではなく、気付けばまず自分でどうするか考える習慣がついていました。

7 今後の目標と日本への還元

今後は、今回の経験を日本での活動に生かしていきたいです。アートに関心がある人もあまりない人も参加できるようなワークショップを行い、「表現することの楽しさ」を広げたいと考えています。

ストリートアートや水墨画、ケーキを使ったアート体験など、身近な素材や方法でアートに触れられる場をつくりたいです。そこから「落書きとアートの違い」を一緒に考えるきっかけにもしていきたいです。また、学校や地域での発表の場があれば、留学中に感じたことや多文化理解の大切さについて伝えていきたいです。将来は、日本と海外をつなぐ存在として活動できるよう、学びを続けていきたいと思っています。

8 まとめ

今回の留学は、これまでの学校生活では得られなかった多くの経験を与えてくれた時間でした。現地でストリートアートを見て回り、人の話を聞き、日本文化を紹介する活動を行う中で、「落書きとアートの違い」という自分の探究テーマについて深く考えることができました。作品そのものだけでなく、場所や社会とのつながり、人々の受け取り方によって意味が変わることを知り、アートを見る視点が大きく広がったと感じています。

また、言葉や文化が違う環境で生活したことで、自分の考えを自分の言葉で伝えることの大切さや、まずは行動してみる姿勢の大事さを実感しました。うまくいかない場面もありましたが、それも含めて自分の成長につながったと思います。日本について説明する機会も多く、自分の国の文化を見直すきっかけにもなりました。これからは、アートや文化を通して人がつながる場をつくること、日本と海外を結ぶ存在として活動することが目標です。今回の留学で得た学びを大切にしながら、これからの自分の行動に生かしていきたいと考えています。

9 今後の探究の展開

今回の留学を通して得た気づきや体験をもとに、今後も探究活動を続けていきたいと考えています。これまでは主に「落書きとアートの違い」について見てきましたが、今後は「アートが社会にどのような影響を与えるか」という点にも視野を広げていきたいです。とくに、街づくりや観光、コミュニティづくりとの関係に注目しながら、アートの役割について調べていく予定です。また、海外だけでなく、日本の街や地域で見られるストリートアートや公共空間の表現にも目を向け、比較しながら考えていきたいと思っています。ワークショップや発表の機会を通して、周囲の人の意見も取り入れながら、自分の考えをさらに深めていきたいです。今回の留学は、探究を「課題」としてではなく、「自分が本当に知りたいこと」として向き合うきっかけになりました。これからも自分の興味を大切にしながら、学びを続けていきたいと考えています。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	シンガポール	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	海野 桃花	学年	2年

「美味ららら」静岡ガストロノミーツーリズムの推進

問い：世界が求める静岡「ガストロノミーツーリズム」を実現するためには何が必要か？

【留学期間】 2025. 07. 27～2025. 08. 17 (22 日間)

【受け入れ先機関】 EF International Language Campus Singapore

【留学の動機】

数あるトピタテの魅力の中でも、私が特に惹かれたのは、留学のテーマを自分で自由に設定できる点でした。そこで私は、「自分の一番の強みは何だろう」と考えました。そして真っ先に思い浮かんだのが、「食べること」でした。調べていくうちに、静岡県が日本の食文化を形づくるうえで、非常に重要な役割を担ってきた地域であることを知りました。一方で、静岡県はコロナ禍以降、観光客数がコロナ前の約7割にまで落ち込んでいるという課題も抱えています。そこで私が注目したのが、「静岡ガストロノミーツーリズム」でした。「食」を通して静岡の魅力を世界に発信したい、そう考えるようになったのです。その実践の場として私が選んだのが、シンガポールでした。世界有数の多民族国家であり、美食国家としても知られるシンガポールで、静岡の「食」はどのように受け止められるのか。そこにはどのようなニーズがあるのか。それを自分自身の目で確かめたい。こうして私は、「食」をテーマにしたシンガポール留学に挑戦することを決意しました。



【留学前】

- ・静岡の伝統料理について作り方や歴史を学ぶ
- ・静岡「ガストロノミーツーリズム」について日本での浸透度調査を行う
- ・SNSを通じて静岡「ガストロノミーツーリズム」について発信する
- ・静岡「ガストロノミーツーリズム」を行っている団体にアポイントを取る
- ・シンガポールに留学経験を持つ友達に現地の食文化・生活様式について話を聞く
- ・シンガポールの多文化融合に至る歴史や文化を学ぶ

【留学中】

- ・ホストファミリーと一緒に日本食を作る
- ・語学学校で日本の伝統文化について紹介するイベントを開催する
- ・静岡・ガストロノミーツーリズムについて街頭調査を行う
- ・毎日 SNS で留学の様子を投稿する



【留学後】

- ・留学して体験したこと、トビタテ留学 JAPAN の活動などについて、レポートやパワーポイントにまとめて学校で発表する
- ・留学準備から留学中、そしてその後の活動を、SNS を使って発信していく
- ・富士市・富士宮市の中高校生で創られたラジオエフ部のパーソナリティとして、ラジオを通して静岡県の魅力を発信する
- ・在日外国人の方々を対象とした学習支援ボランティアにて静岡の食文化を共有する

【問いに対する答え】

私はこの問いに対して2つの答えを見つけ出しました。1つ目は、「静岡の食」を物語として伝える力を身につける必要があるということです。私たちは「なぜこの食が生まれたのか」や「暮らしとどのように結びついているのか」などの食文化の裏側まで知る必要があると強く感じました。2つ目は、「食べる」だけでなく「体験できる」ことの大切さです。食がどのように作られ、誰に支えられているのかを知る体験は、海外の人たちにとって新鮮であることに気づきました。体験できることは、私たちが自分たちの文化をより身近に感じるようになるきっかけにもなると思います。

【留学を通じて】

シンガポールで出会ったのは、宗教・文化・食習慣などの違いを超えて対話することの楽しさでした。異なる価値観を持つ人々と触れ合う中で、自分の中に新しい視点が次々と芽生えていきました。特に強く感じたのは、「食」と「笑顔」が持つ力です。言葉が不十分でも、美味しいものを囲んで笑い合えば、国や文化の違いを越えて自然と心を通い合わせることができます。これこそが人と人をつなぐ最強の共通言語だと強く実感しました。留学を通じて、国際交流の可能性を肌で感じ、自分の課題にも向き合えたことは、人生における大きな財産です。今後は、この経験を力に変え、さらに挑戦を続けていきたいと思っています。最後に、この留学を通して、数えきれないほど多くの方々に支えていただきました。現地で温かく迎えてくださった方々、共に学び、励まし合った仲間、そして常に見守り、背中を押してくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アイルランド デンマーク	
学校名	静岡県立浜松西高等学校	氏名	鈴木舞歩	学年	3年

探求テーマ

教育や家庭生活など、様々な角度から幸福度の高い国から学び、静岡県の幸福度を上げる

私は生まれも育ちも浜松で、トビタテの探求を通じて地元である静岡に還元したい！という思いがあり、「静岡を幸せな街にする」という目標を立て、7月から8月にかけてアイルランドとデンマークに5週間留学をしました。

探究活動について、日本の幸福度が低いという問題を知ったとき、幸福について興味を持ち、幸福度の高い国との違いについて考えるようになりました。そして幸福度について考える中で、「幸福」そのものに疑問を持ち始め、幸福度の高い国と日本の幸福に対する価値観の違いについて探求することを決めました。また、「幸福についての価値観は人格形成される幼少期が大きく影響している」と仮説をたて、教育と家庭生活に注目しました。

アイルランド

4週間滞在したアイルランドは、ホームステイをしながら語学学校に通い、アンケートに答えてもらったり、先生方にインタビューしたりしました。その中で印象に残っていることは、「幸せですか?」「自分自身に満足していますか?」という項目に対して、ほとんどの人がとても賛成していました。また、家族と過ごす時間をとても大切にしている、子どもがプレッシャーを感じていない、平日の昼でもパブから音楽が聞こえてくる、など自由でゆったりとした雰囲気が幸福度の高い要因だと感じました。

デンマーク

デンマークでは、幼稚園と小学校に訪問し、インタビューや授業見学をさせてもらいました。そこで一番感動したことは、教師として大切なことは何かという質問に対し、「生徒自身が何をしたいのかを考えさせる」という答えが二つの学校で一致していたことです。先生に指示されて動いてきた私はすごく感動しました。

幼い頃から自己決定の文化が根付いており、幸せについて考える機会が多いから各々の幸福の形が確立しているのだと思いました。



幸福博物館

デンマークのハピネスリサーチ研究所が作った幸福博物館は、幸福についてのさまざまなデータや物が展示されていました。様々な角度から幸福について考えることができ、興味深かったです。中でも目玉の展示物は壁一面に付箋が貼られている部屋で、来場者が自分の思う幸せを書いて張っていきます。世界中の言葉で書かれていて、圧巻でした。

このように幸せとの距離感が近いことがとても重要だと感じました。



アンバサダー活動

静岡の良さを世界にひろめるため、森町のいしだ茶屋様に協賛して頂き、ティーバッグ 150 個と折り鶴を配りました。葛飾北斎の柄のティーバッグがとても喜ばれ、日本茶と日本の作品の地名度が高く嬉しかったです。ホストファミリーにはみたらし団子と水ようかんを作りました。

留学を通して

最後に、私が経験することの出来たトビタテでの留学は本当に貴重な体験となりました。アクシデントも自分を成長させてくれました。留学先で出会ったさまざまな人や場所、物との出会いが新鮮でとても良い思い出です。これを機に世界を相手にアクティブになることも楽しめるようになり、今後も世界中に行ってみたいと思いました。また、ゼロから探究活動を考え、ひとりで行動したことも自信につながりました。今後は静岡に還元するべく、SNSでの発信やイベントの計画などに力を入れています。今後も留学の経験を活かし、多くのことに挑戦したいと思っています。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	スウェーデン	
学校名	浜松湖南高等学校	氏名	藤田 優希	学年	3年

1. 留学概要

期 間：2025/08/05~2025/08/22 (約3週間)

渡航先：スウェーデン・ストックホルム

受入先：Önskeförskolan (就学前学校)

2. 探究テーマ

問 い：多様性を認め尊重できる人材を静岡県で育成するために必要な教育と考え方とは？

経 緯：私の地元である静岡県で多様性を実現したい！

考え方や価値観の基盤が築かれる幼児期の教育を変えることが効果的だと考える。

インクルーシブ教育の先進国であるスウェーデンの就学前学校で活動すると決める。

3. 活動内容

<探究>下記の3つの活動を中心に両国(日本・スウェーデン)において探究をした。

・実習 日本：NPO法人むく(児童発達支援事業・放課後等デイサービス)

スウェーデン：Önskeförskolan(就学前学校)

NPO法人むくでのボランティア経験があったため、障害やLGBTQなど様々な特徴を持つ人々同士が共生できる社会に興味を持ち始めた。そのため、探究テーマを多様性に決めたきっかけとなった施設で再び活動することで、日本の現状を再確認してから留学することにした。施設では、1人1人に合わせたサポートをし、その子の「できる」を増やすことを重視していた。

就学前学校では、平日の9:00~15:00(約6時間)先生のサポートをしながら、子どもたちと過ごした。インクルーシブ教育とは、障害の有無や人種・性別によって分け隔てることなく共に過ごし共に学び合う教育のことを指す。基本的には全ての子どもが共に過ごしていたが、室内遊びなどの時間には、サポートが必要な子は少人数のクラスに集め、個々に応じた対応をしていた。常に全員が共に過ごすのがインクルーシブ教育だと思ってしまっていたのだが、必要に応じて個々に応じた対応やサポートをすることも大切だと実感した。日本でも支援学級を設け対応していたりするため、スウェーデンと同じ形ではなくてもインクルーシブ教育は日本でも行われているのではないかと気づいた。



・街頭インタビュー

日本では静岡県の遊園地「浜名湖パルパル」(30名)で、スウェーデンでは公園や駅前の広場(20名)で街頭インタビューを行った。円滑にインタビューを行える、かつインタビューの結果が見える化する方法を考えた結果、質問と回答の選択肢が書いてあるスケッチブックにシールを貼ってもらう形で行うことにした。そのため最悪の場合、言葉を交わさなくてもインタビューが完結してしまい、現地の人意見を生の声で聞けなくなってしまう。



そのため、不審者ではないと分かってもらうためにも、スウェーデン語で話しかけてインタビューへの協力をお願いし、インタビュー自体は英語で行った。話しかけても「Nej(No)」と断られてしまうことが多く、心が折れて話しかけるのが怖くなってしまうこともあったが、「どのくらい滞在するの?」「日本行ってみたいんだよね」と話しかけてくれたり、「多様性に興味があるのいいね!」と言ってくれたりした人のおかげで頑張ることができた。「インクルーシブ教育について知っていますか。」という質問に対して、「知っている又は聞いたことがある」と答えた人がスウェーデンでは20/20だったのに対して日本では13/30だった。インクルーシブ教育は多様性を実現するために有効的だと思うが、街頭インタビューから分かったように日本において認知度が低いのが課題である。そのため、ポスターやSNSを活用することによって認知度を上げ、インクルーシブ教育の良さを知ってもらいたい。

・先生へのアンケート

卒園した幼稚園やNPO法人むく・就学前学校の先生にアンケートに答えてもらった。スウェーデンでは、「金曜日までに回答して欲しいです」と置き手紙をして用紙を置いておいたのだが、目にとまらなかったのか、後回しにされてしまったのか、あまり答えてくれなかった。直接お願いしたりして工夫すれば良かったと後悔している。発達障害を持つ子どもと普段から関わっている人は、その子に応じた対応を大切にする傾向があり、インクルーシブ教育を行うべきだと思わない人が多かったが、大半の人は行うべきだと考えているようだった。医療的ケアが必要なだけでその他は問題なく行える子どもには向いているかも知れないが、知的な遅れがある子どもは周りについていけない可能性があるため、体制を整えたり、本人や家族の意見を尊重したりすることが大切だと考えた。

<アンバサダー活動>



ホストファミリーと浜松餃子作り！
皮から作ったので大変だったが、なんとかできた
<その他>



折り紙でくす玉や鶴・紙飛行機を作った！
作って～とリクエスト！ちょい人気者に！

上記の探究活動以外にも、ホストファミリーから沢山の話を聞くことでスウェーデン人の考え方などを知ることができ多くの学びを得ることができた。

医療的ケア児を受け入れられる環境が整っていない教育施設が多いため、学校への付き添いが必要だったり、保育園や幼稚園への入園を断られてしまったりすることがある。そのことから、その家族の負担も大きくなってしまっているという現状があるため、私が教育施設（幼稚園や学校など）において医療的ケア児のサポートをする学校看護師となり地域に貢献したい！

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	イタリア・トルコ	
学校名	静岡県立藤枝東高等学校	氏名	花田くらら	学年	2年

留学の概要

1. 留学地域 イタリア (フィレンツェ)・トルコ (イスタンブル)
2. 留学期間 2025/8/4～2025/8/29
3. 留学のテーマ 「温泉文化と人々の関わり方は日本と海外でどう異なるのか？」

<目的・応募理由>

私がふじのくにグローバル人材育成事業に応募したいと思ったきっかけは、同校のトビタテ 9期生の先輩である水野美咲先輩の、インドネシアバリ島留学の報告発表を聞いたことだ。美咲先輩は、持続可能な観光産業を留学の探究テーマに掲げ、エコツーリズムの観点から、観光地としてのバリ島の姿だけでなく、環境汚染や貧困の孤立化などのバリ島に隠された問題を目の当たりにして、支援の輪を広げるために、バリ島の現状を多くの人に伝えるエヴァンジェリスト活動を行っている。そんな美咲先輩の大きな背中を見て、私もこの静岡をよりよい街にするためにアクションを起こしたいと思い、ふじのくに人材育成事業への応募を決めた。私が思うトビタテの最大の魅力は、全国のトビタテ生が集まるコミュニティに参加できることだ。同年代の留学に興味を持った学生同士で、研修会を通してグローバルな問題について互いに意見を交換することで、良い刺激を与え合える貴重な機会になると考えた。私は過去にオーストラリアに一ヶ月の間、語学留学を経験して、留学を通してオーストラリアにはバスタブに浸かる習慣がほとんどなく、日本のような温泉やスパのような施設がないことに気がついた。日本では当たり前前の温泉文化が、海外では存在しないことにカルチャーギャップを受けた。それと同時に、温泉文化が存在する国では、日本とどのような温泉文化の違いがあるのだろうと興味を持ち、今回の留学の問いに設定した。



<探究活動>

留学中に現地の語学学校に通い、簡単な日常会話が交わらせるようになることを目標に、現地で使われている言語を学んだ。現地の図書館や資料館、遺跡を訪れ、各国の温泉文化や温泉療法の歴史的背景について

考察するための情報を収集した。イタリア滞在中には、16世紀に温泉文化で大いに栄えた都市である「Montecatini Terme」を訪れ、トスカーナ地方で古くから親しまれてきた治癒力のある温泉の飲泉文化を実際に体験した。また、ローマではカラカラ浴場などの公衆浴場（テルメ）の遺跡や関連資料を見学し、古代ローマ時代における温泉が治療や衛生のみならず、社交や政治の場としても機能していたことを学んだ。これらの体験を通じて、イタリアにおける温泉文化が医療・健康を重視しつつ、都市文化や歴史と密接に結びついて発展してきた点を、文献調査だけでなく実体験として理解することができた。トルコでは、ハمامと呼ばれる古くから人々の生活に根付いてきた温泉施設を実際に体験し、現地の職員に対して利用者の利用頻度や温泉の効能、利用目的などについてアンケート調査を行った。その結果、ハمامが身体の清潔を保つ場であると同時に、地域住民の交流やリラクゼーションの場として重要な役割を果たしていることが分かった。また、宗教的習慣と結びついたトルコ独自の温泉利用文化が存在することを、現地での聞き取りを通して理解することができた

<結論>

今回の留学を通して温泉文化を探求して分かったことは、温泉はどの国でも体を温めるためだけのものではなく、その時代の人々の暮らしや社会と深く結びついて発展してきたということである。古代ローマでは、温泉は生活に欠かせない公共施設だった。カラカラ浴場のような大規模なテルメ（浴場）には浴槽だけでなく、運動をする場所や庭園、図書室もあり、人々は入浴をしながら会話を楽しみ、情報交換を行っていた。温泉は衛生や治療の場であると同時に、人が集まり、社交の場でもあった。しかし、ローマ帝国の衰退とともにこうした巨大な浴場は使われなくなり、温泉は次第に治療や健康を目的とした利用へと形を変えていった。その流れが、モンテカティーニ・テルメの飲泉文化などに受け継がれている。トルコのハمامは、ローマの浴場文化の影響を受けながら、イスラム教の考え方と結びついて発展した。トルコでの入浴は、礼拝の前に汗を流して体を清めるという宗教的な意味を持ち、日常生活の中で欠かせない場所となっている。また、ハمامは現地の人々が集まり、世間話をする交流の場でもあり、今でも地域の暮らしに深く根付いている。日本の温泉は、自然の中で湯に浸かり、心と体を休める場として発展してきた点が特徴的である。こうして比べてみると、同じ温泉でも、古代ローマでは都市と国家を支える公共施設、トルコでは宗教と生活に結びついた場所、日本では自然とともにある癒やしの場として役割が異なっていることが分かる。温泉文化は、それぞれの国の歴史や価値観を映し出す鏡だと言える。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	フィリピン	
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	磯部さつき	学年	2

1. 応募理由

私は高校入学当初から、学校の探究活動を通して自己肯定感に興味を持つようになりました。日本人は自己肯定感が低いといわれていることに目を向け、他人の評価ではなく『自分自身に満足する』＝自己肯定感の高い状態であることが重要であると考えました。また、調べていく中でギャルマインドに出会い、明るく自他を肯定する考え方に惹かれました。インタビューやイベントを通して、理想的なマインドの在り方であると考えようになりました。そこから、「静岡をアゲな街」という目標を掲げ、まずは自己肯定感が高い国で人々のマインドを知りたいと思い、トビタテに応募することを決めました。

2. 活動内容

主な活動内容はインタビュー活動、語学学校、孤児院の訪問、ダンスレッスンの受講でした。インタビュー活動では、現地の人々にフィリピン人のマインドについてお聞きしました。一番驚いたことは、あなたはポジティブですか？という質問に対して90%の人がはいと答えたことです。日本でアンケートをとった時は50%程度だったためポジティブな国といわれていることが本当なのだと実感しました。また、自分をどのくらい愛しているかという質問に対しても100%愛していると答える人が8割以上で自己愛の高さにも驚きました。



スラム街を訪れた際、子どもたちの笑顔に触れ、胸が温くなりました。フィリピンでは貧困が深刻な社会問題であることを事前に学んでいましたが、実際に現地を訪れると、厳しい生活環境の中でもエネルギーに満ちた子どもたちの姿が強く印象に残りました。もちろん経済的な格差や生活の厳しさが解決されたわけではありませんが、限られた環境の中でも人とのつながりや日常を大切にしながら生きる姿から、精神的な豊かさについて考えさせられました。今回の経験を通して、物質

的な豊かさだけでは測れない幸福のあり方があることを学んだと感じています。

語学学校では、英語力の向上だけでなく様々な国の人や素敵な先生と出会うことができました。また、学校でおこなわれるイベントにも参加し交流を深め、充実した時間となりました。英語が伝わることの喜びや楽しさを日々実感し、もっと頑張ろうと英語学習を前向きに捉える大きなきっかけとなりました。



この留学では海外でダンスレッスンを受けるという一つの夢も実現することができました。日本のダンススタジオとは異なる穏やかな雰囲気の中で楽しみながら学ぶことができました。また日本人の Anya さんが運営する孤児院の Anya's HOME では、子どもたちにダンスを教える機会をいただきました。指導する立場になることは初めての経験でしたが、子どもたちが笑顔で踊る姿を見て、大きな喜びを感じました。Anya さんへのインタビューを通して、現地が抱える課題や支援の現状についてリアルな声を聞き、高校生である私にもできることが多くあると実感しました。

3. 今後の展望

今回の留学のテーマでもあった「静岡をアゲなまちにする」という目標を、今後実現していきたいと考えています。その第一歩として、私の学校で生徒の自己肯定感を高めるために、カジュアルウィークを実施することが私の夢です。この留学を通して、叶えたいことや目標が明確になり、進路や人生にも影響を与える大きな機会となりました。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	フィンランド	
学校名	静岡県立清水南高等学校	氏名	福地絢心	学年	2年

概要

留学期間:2025年8月24日～2025年9月8日

受入先機関:Home Language International

探求テーマ:自然と共存するフィンランドの質の高い幼児教育の視点から日本の教育の課題を突き止める!

探究テーマの設定

私は以前から『幸福』に興味があった。日本は先進国の中でも子どもの幸福度が低く、対してフィンランドは子ども大人どちらの幸福度も世界トップレベルだと知った。その原因として幼児教育と豊かな自然環境の融合にあるのではないかと仮説を立て、本留学のテーマとした。

活動内容

留学前

静岡市の保育園・幼稚園に計5ヶ所訪問し、サポーターとして子どもの遊び相手や食事補助などを行った。また、各園で職員の方々にインタビューを行った。

留学中

3ヶ所の保育関連施設を訪れ、サポーターとして活動し、内1つの園でインタビューができた。加えて、自然環境調査、幼児教育に対する意識度調査として街頭インタビューを行った。



結果

日本(静岡)では子どもは集団で行動する時間が少なく、個々で別々の遊びをしている光景が印象的だった。対してフィンランドでは必ず誰かと行動を共にし、遊んだり活動を行っていた。そのため職員の配置にも違いが見られた。日本は全園で、適宜職員が移動しながら全員に目を配る体制がとられていたが、フィンランドでは各グループに職員が1人つき、決められた活動を全員で一緒に進める、というスタンスだった。ここに、職員の負担の差も見られた。特に日本の園職員は人手不足に苦難している様子だった。また、フィンランドではどの園にも園庭がなく、外で遊ぶ時は付近の自然公園や小山、湖などが利用されていた。これは意図的であり、自然との関わりを重視しているという話を聞くことができた。街頭インタビューでは、8割強の現地の人々が幼児教育の体制に満足を示していることがわかった。自然の取り入れにも肯定的であり、子どもに対する意識度も高いという結果が出た。

考察

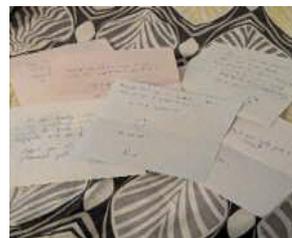
日本では、学習ではなく『発見』を重視している。日常生活の中にある気づきそのもの積み重ねを小学校の学習に繋げている。好奇心や観察力が身につくのではないだろうか。一方フィンランドは、発見による『学習』に重きを置いており、学ぶ意欲や探求心がそそられるような教育方針であると感じた。特に、自然に囲まれて遊ぶ中で、触れるモノや事象を一つひとつ考えたり、英語で言ってみたり、そんな些細なことに学習要素が豊富に含まれている。小学校からの『学び』を見据えた活動を豊かな自然中で育てていくこと、それが行政、地域、国民が三位一体となって関心を示し、協力していることこそが幼児教育の質の高さに影響を与えている1つ重要な要因ではないかと考える。

アンバサダー活動

訪れた園の職員、街頭インタビューに協力してくれた現地の方々に静岡産の抹茶を使用した和菓子を、静岡と和菓子の紹介が書かれているパンフレットを付属でプレゼントした。

今後の展望

幼児教育を専門的に学び、将来は教職に就きたいと考えている。今回は自然環境に注目したが、他の視点からも幼児教育を深掘りするため、大学では長期留学をすることが目標である。静岡の子どもの幸福度向上に携わっていきたい。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)			訪問国	フランス
学校名	静岡県立清水南高等学校	氏名	太田小春	学年	2

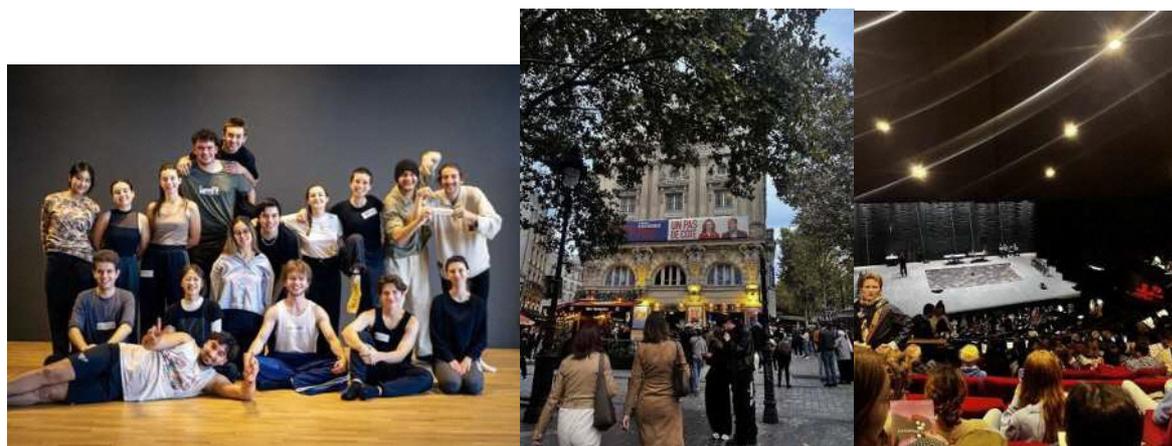
1 目的・応募理由

私は清水南高校芸術科演劇専攻に在籍しています。これまで演劇を通して、韓国の高校生やフランスの芸術学生と交流をしてきました。その中で、第一言語が異なる相手とも、身体表現や発声を通して通じ合える演劇ならではの交流に大きな魅力を感じました。

数ある国の中でフランスへの留学を決めた理由は、昨年11月にフランス・ルーアン市の芸術学校コンセルヴァトワールの演劇・音楽・ダンス専攻の学生が私の高校を訪れ、三日間共に演劇の授業を受けた経験にあります。授業では、普段コンセルヴァトワールで行われているエクササイズやワークを共有してもらい、また一人の学生がモノログを披露してくれました。そのモノログはフランス語で書かれた作品でしたが、言語の壁を越え、演じられた役の孤独や哀しさがエネルギーとなって強く心に響き、深く感銘を受けました。さらに最終日には、演劇・音楽・ダンス専攻の学生が融合したパフォーマンスが披露され、言葉に頼らず観る者に伝える高度な表現力に圧倒されました。この経験から、世界中で活躍できる舞台俳優になるためには、現地で学びを深める必要があると強く感じました。

また、フランスでは芸術家を支援するアンテルミタン制度が導入されており、日本と比べて芸術が社会に根付いている点にも大きな魅力を感じました。俳優訓練法や演劇の歴史から見える日本とフランスの演劇の違いを探究し、将来は静岡を拠点に世界で活躍できる舞台俳優になるための力を培いたいと考え、フランス留学を志望しました。

2 研修内容等（語学研修、授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリー）



語学学校には週5日通い、午前9時から午後1時00分、午後2時00分から午後4時00分まで授業を受けました。夕方の空き時間や土日には、野外劇やオペラなどを鑑賞するため劇場を訪れました。

コンセルヴァトワールでは、週6日、月曜日から土曜日までの間に、演劇・合唱・ダンス・ミュージカルの授業が1日3～6時間組まれていました。授業の空き時間や夕方、休日には、現地の学生たちと観劇に出かけたり、パリの劇場で現代劇を鑑賞したりしながら、日本の演劇や伝統芸能について共有し、演劇に対する価値観を深く語り合いました。

また、アンバサダー活動として、能の経験を生かし、三保の松原に伝わる羽衣伝説をもとに

した能「羽衣」の仕舞を、留学前に師匠から指導を受けて稽古を重ね、コンセルヴァトワールや現地のフランス人の知人の店で披露しました。その際には、フランス人の友人に能や羽衣伝説の神話について説明してもらい、協力を得ながら発表を行いました。

ホストファミリーについては、コンセルヴァトワールに所属する日本人のピアノ教師の方に手配していただき、第一週目は語学学校の手配先だったのですが、それ以降は学生や先生方のお宅に滞在しました。結果として5軒の家庭にお世話になりましたが、卵と牛乳のアナフィラキシーショックを伴う重度のアレルギーを持つ私のために、毎朝晩温かい食事を用意してくださり、デザート文化のあるフランスならではの配慮として、アレルギー物質のないデザートを用意してくださるなど、心からの優しさを感じました。

特に印象に残っているのは、日本から持参したうどんセットを使い、「もう一度日本で食べたいうどんを味わいたい」と話していたピアノ専攻の学生と一緒に夕方うどんを作った時間です。この交流は、文化を越えて心が通じ合った大切な思い出となりました。

3 感想等

帰国後も、毎日「また戻りたい」と思えるほど、多くの人に支えられながら学びの多い充実した留学生活を送ることができました。

また、日本が大好きで将来日本映画を制作したいと考えているコンセルヴァトワールの学生から、自作の詩や『マクベス』の独白を日本語で朗読し、録音したいという依頼を受け、撮影協力を行いました。このような素晴らしい縁に出会えたのも、自分が勇気を出して一歩踏み出したからこそだと感じています。留学を通して、帰国後の自分自身の姿勢や考え方が大きく変化したことを実感しています。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡県と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	英国	
学校名	静岡県立韮山高等学校	氏名	北村祐介	学年	2年

探究テーマ：石文化の発達したイギリスで保全の取り組みから伊豆石文化の
保全・継承の在り方を探る

1. 探究の背景・理由

私は以前から部活動で「伊豆石」というものを研究してきた。伊豆石というのは伊豆半島で採れる石の総称で、かつては江戸城の石垣などに使われたうえ、伊豆半島の周辺で、石蔵や塀など人々の生活に密着して使われてきた。私も実際にミカンの保管に使われている石蔵を見学させていただいたことがある。しかし、伊豆石は外国の石材などとの競争や時代の流れで採掘されなくなってしまい、解体される建物も多くある。このままでは、伊豆石の文化は失われてしまう。そこで、現在も石の建造物が多くあるイギリスのオックスフォードに行って、そこで
の保全の仕方を学び伊豆石の現状をかえるために留学をした。

2. 探究活動

留学前に伊豆石の保全・研究に実際に関わっている方からお話を伺い、講演会に参加した。そこから、伊豆石の問題点について考えた。伊豆石の問題点としては、修繕・維持には費用がかかり、多くが民間所有の小規模な建造物であり、一括した管理が難しいことなどがあるが、最も問題なのは圧倒的な知名度の低さだろう。



ブレナム宮殿の大屋根



コッツウォルズ地区の街並み

実際に留学中におこなっ

た活動は建物の見学と現地の人へのインタビューである。世界遺産で修繕中であるブレナム宮殿というところでは、普段は登れないような修繕中の大屋根に登ることができるようになっており、修繕の方法、費用、スケジュール、意義などが詳細に発信されていた。修繕中である部分が見えるようになっていところ、修繕中ということ逆を活かして普段とは違う部分が見えるようにしているところに驚いた。コッツウォルズ地区では民家の多くが石造りであることに驚かされた。日本と大きく違うところは近くで石を採掘して身近く日本よりは石が手軽であること、石の建造物が長く持つように作られていること、石の建造物に対する意識が違うことなどが挙げられる。また、石の建造物と自然が一体となっている一方で、公共交通機関の便が悪く、車が多すぎると感じた。観光地とするには、観光資源だけでなく、交通、自然など様々な面での“雰囲気づくり”が重要だと考えられる。留学中に他に感じた点はオックスフォード

にいる人の多くは石の保全、街並みに肯定的考えを持っている点だ。カーファックスタワー（下の写真）で働いている方は建物を昔のまま保存することで、昔の生活を実感することができ、そうして歴史を伝えられるとおっしゃっていた。また、オックスフォードには石を建物前面だけや窓枠だけなど部分的に使用する例も見られた。

これらから、伊豆石に必要な活動を考えた。1つ目は、伊豆に住む多くの人が伊豆石を知らないので、地元の人を中心に伊豆石を広めて保全をしようという雰囲気をつくることだ。2つ目は、伊豆石を建造物全体でなくとも部分的な使用を推進すること、3つ目は保全や修復の活動自体も積極的に発信していくことである。これらから伊豆石を新たな観光資源することを目指す。



授業でのプレゼンテーション



カーファックスタワー



クラスメイトと

3. 留学の感想等

私は、オックスフォードで3週間、語学学校に通いながら留学した。そのなかで、感じたこと、学んだことについて述べる。留学をする上でやはり欠かせないものは人とのコミュニケーションだとこの留学で実感した。私の場合、浅く広くという感じだったのだが、いろいろな人と交流することができて楽しかった。語学学校のクラスで一緒にディナーを食べたり、語学学校の人とサッカーをしたり、いろいろな経験をした一方で、自分と改めて向き合うきっかけにもなった。私は人と仲良くなるのが得意な方ではないが、今回の留学で改めて少し意識的に自分からかわりを作ることが大切だと気付かされた。留学を通して、さらに留学に挑戦していき、海外で活躍したいという気持ちはとても強くなったと感じる。また、今回の留学で建築学を学びたいという気持ちが強くなった。具体的には、長く使用でき、修復できる建造物に興味があるので、大学ではこれに関連した留学ができればよいと考えている。

エヴァンジェリスト活動として、自分の高校で留学に関するプレゼンテーションを高校生の視点として行い、アンケートによるフィードバックを得た。留学に興味がある（「少しある」も含む）回答は過半数を占めていたが、実際に海外に行きたいと答えた人は4割未満であった。実際に留学をする様々なハードルを下げることの必要性を感じたが、留学に行きたくなったという意見も多くあったので、実際に留学に行った高校生として、丁寧に留学の良さを伝えていくことは有意義で効果のある事だと感じた。これからも留学の良さ、伊豆石の魅力を伝える活動を行っていきたい。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	大韓民国	
学校名	静岡県立浜北西高等学校	氏名	桜井 唯稀	学年	2年

1 目的・応募理由

私は小学生の時、友人に K-POP を勧められ韓国が好きになりました。しかし、韓国のことを知るにつれ日本と韓国の間には、文化の違いや過去の戦争、国の支配が原因でおこった差別や偏見があることを知り、私はこれからの日韓の関係を更に良いものにしたいと考えるようになりました。友好関係を築いていくために互いの文化や価値観の違いを理解することが大事だと考えました。同時に SNS で外国人に人気の都道府県ランキングを見たとき生まれ育った静岡の魅力がまだ知られていない事に気づき、韓国の人に静岡の魅力をもっと知ってもらいたいと考えました。更に日本の文化として有名な書道と日本で生産量 1 位の静岡のお茶を活かし、韓国の人に日本の文化を伝えながら静岡の魅力について知ってもらいたいと考えました。そのため私はふじのくにグローバル人材育成事業に応募しようと考えました。

2 活動内容

私は日韓の関係の修復を目的とし、静岡の特産品のお茶を活かし、静岡や日本の魅力を伝えたいと考えました。そこで私はお茶を墨の代わりに使う書道である抹茶書をし、お茶の香りを楽しみながら書道の面白さも体験してもらいたいと考えました。更に韓国の文化を私が実際に体験したり、韓国で生活してみても感じたことを帰国後に SNS や事後研修を通して広める活動を行いました。他にも韓国ならではの食の文化や有名な建造物である景福宮にチマチョゴリを着て訪れたり、事前に日本で韓国語の勉強をしていき、韓国の人と韓国語でコミュニケーションをとれるようにして実際に韓国で英語や翻訳をあまり使わないように頑張りました。

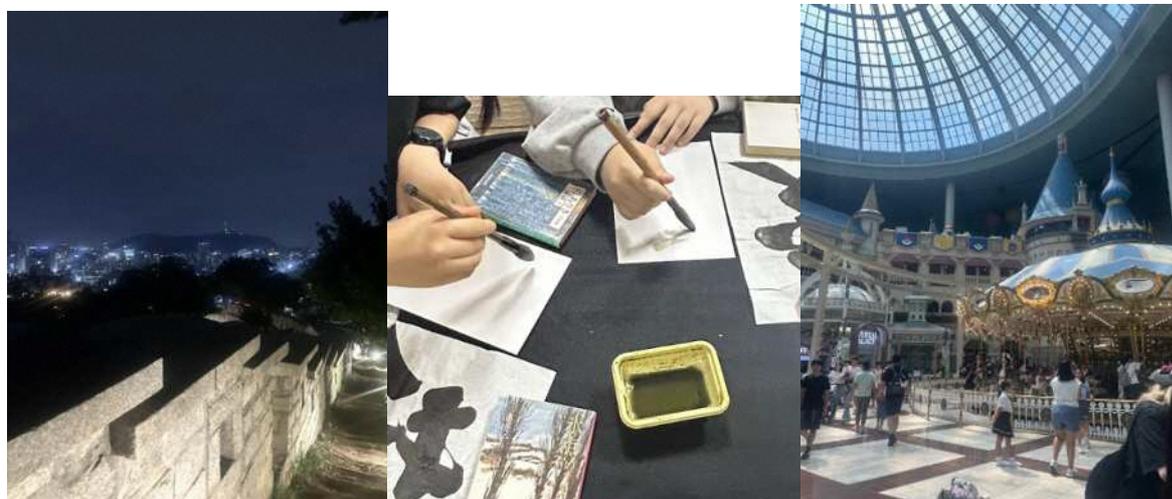


語学学校の放課後や休日は、語学学校でできた友達や同じホームステイ先の子と一緒に韓国のとても有名なピョルマダン図書館にいたり、漢江の噴水ショーを見に行ったり、ナクサン公園やソウルタワーの夜景を見に行きました。また語学学校の人たちと一緒にロッテワールドに行ったり、ダンスレッスンを受けに行くなどとても充実していました。



3 感想等

私はこの留学を通して、異文化の中で生活することで培われた価値観の広がりや主体性を得ることができました。もともとこの留学を決意した理由は、韓国語をもっと話せるようになりたいという強い思いがあったからです。日本でも韓国語に触れる機会はありますが、実際にその言語が使われている環境に身を置いて生活したいと考え、留学を決めました。しかし、最初に親や祖父母に思いを伝えたときには期待していた反応が得られず、とても悲しい気持ちになりました。それでも諦めずに思いを伝え続けた結果、留学の実現につながりました。また、トビタテへの応募も最初は自信がなく不安がありましたが、書類審査を通過し、面接でも無事に合格できたことで、念願の韓国留学が叶いました。やりたいことが見つからない時期が続いていた中で、初めて強く「やってみたい」と思えたことだったので、合格の知らせを受けたときは本当に嬉しかったです。出発前は、日本語が通じない環境で3週間も生活できるのだろうかという不安がありましたが、韓国で行きたい場所がたくさんあったことがモチベーションとなり、前向きに準備することができました。実際に韓国で生活してみると、文化の違いや新しい発見が多くありました。韓国の食べ物には辛いものが多いイメージでしたが、実際には辛い家庭料理も多く、食事を通して食文化の豊かさを知りました。また、韓国ではカフェ文化がとても発達しており、地下鉄やバスの中でもコーヒーを持っている人が多いことに驚きました。さらに、日本では公共交通機関での電話や飲食がマナー違反とされる場合がありますが、韓国ではそうした制限があまりなく、実際に電車内で電話をしている人が多かったことも印象的でした。そして、目上の人を敬う儒教文化が根強く残っているため、言葉遣いや行動に気を配る人々の姿勢から文化の違いを強く感じました。一方で、明洞で爆破予告が出たり、デモ活動を見かけたりと、少し怖い経験もありました。また、買い物の際に店員さんの言っていることが聞き取れず戸惑う場面も多く、語学の壁を痛感しました。それでも時間が経つにつれて語学学校で学んだ単語や文法を使って会話ができるようになり、帰国する頃には聞き取り能力が大きく向上したことを実感しました。この留学で挑戦する勇気を持ち、自分で選んだ道を実行できたことは、これからの自信につながる大きな経験となりました。ホームステイ先の友人と一緒にさまざまな場所を訪れ、日本ではできない体験を多くすることができ、とても楽しい時間を過ごせました。そして、この留学をきっかけに TOPIK を受けたという新しい目標も生まれ、帰国後も韓国語の勉強を続けています。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	中国	
学校名	静岡英和学院高等学校	氏名	武井明	学年	高2

2025年夏に実施した中国・内モンゴル自治区オルドス市における1か月間の留学について、その内容と成果をまとめた。留学のテーマは、「自然と共生する文化を学び、それを映像化し、静岡の人々に伝えること」であった。草原と家畜、モンゴル民族の暮らしが色濃く残るこの地域において、「無駄を出さない暮らし」や「恵みに感謝するとは何か」という問いを、自身のルーツをたどりながら探究した。

現地で特に印象的であったのは、伝統文化が特別なものではなく、日常の中に自然に存在している点である。週に一度行われる民族ダンスは観光向けではなく、地域の人々が自発的に集う場であった。また、血縁を中心とした交流の中で郷土料理を共に作るなど、文化が世代を超えて受け継がれている様子が見られた。さらに、伝統楽器とポップ音楽の融合や、民族衣装の現代的なアレンジといった工夫により、若い世代にも伝統が受け入れられていると感じた。

留学を通して、「恵みに感謝する」という行為についての認識が大きく変化した。留学前は感謝しているつもりであったが、内モンゴルでは、資源を最大限に活用し、別の形で循環させ、最終的に自然へ返すという実践が行われていた。羊は肉だけでなく、乳、皮、骨に至るまで使われ、廃棄されるものはほとんどなく、次の営みへとつながっていた。これは、地球の循環を滞らせない暮らしであると感じた。



日本と内モンゴルの共通点として、侘び寂びに通じる価値観が挙げられる。生活の中に質素な美しさを見出す感性が共通している。一方で相違点は、自然環境への向き合い方である。厳

しい寒さの中で生活してきた背景から、乾物など保存性の高い食文化が発達し、多くの知恵が蓄積されていた。日本では利便性の向上により、「作る」「育てる」といった過程が見えにくくなっている。そのため、食べ物や資源が自分の元に届くまでの背景を知ることの重要性を強く実感した。

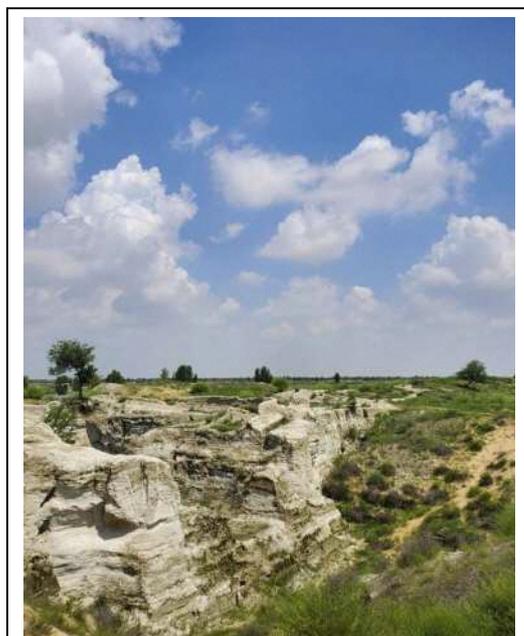
留学中はドキュメンタリー制作にも取り組んだ。短編では「日常にある自然の恵みの美しさ」を、長編では「伝統とともに生きること」をテーマとした。映像は言葉を超えて想いを伝える表現手段であり、撮影を通じて、これまで見過ごしていた暮らしの価値に気づくことができた。制作した作品はコンテストに応募し、受賞することができた。今後はYouTubeでの公開も予定している。



そのほか、農業見学、乳製品ビジネスを行う夫婦への取材、馬頭琴の演奏会への参加などを行った。学生交流では、静岡茶染めやかるとを通じて日本文化を紹介し、互いの文化を尊重し合う対等な交流の機会となった。

留学を通して、日記を書くこと、生活の手伝いをすること、手作りのギフトを渡すことの大切さを学んだ。一方で、語学準備や時間管理については課題も残った。しかし本留学を通じて、「自然と共に生きるために社会で活躍できる人になりたい」という新たな目標を見出すことができた。

以上より、本留学は「恵みに感謝する」という概念を実感をもって理解する機会となった。動物と人が共に生き、共に成長する暮らしには、効率だけでは測れない豊かさが存在することを学んだ。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり×アジアコース)		訪問国	シンガポール	
学校名	静岡県立科学技術高等学校	氏名	山本ひより	学年	2年

1 目的・応募理由

水不足が深刻化したシンガポールでの現状とそれに対する取り組みを自分の目で見て確かめたい！先進国でありながら水不足という大きな問題に直面しているシンガポールに行きそこでしか学ぶことが出来ないインフラの施設や政府の取り組みを学びたい！都市デザインとインフラのつながりを追求したい！と強く思いトビタテ留学 JAPAN に応募しました。私は今、科学技術高校の都市基盤工学科でインフラや街づくりについて学んでいます。インフラについて興味を持ったのは能登半島地震の報道がきっかけです。進路に悩んでいた時、能登半島の被害を見てインフラの大切さを感じ、科学技術高校に入学してインフラについて学び、将来災害に強いインフラを手掛けたい！と強く思いました。入学後、水道に関する勉強をしていた時、シンガポールが深刻な水不足に陥っていると知りました。調べてみると下水の再生や、海水の淡水化などに力を入れ取り組んでいるとわかり強い興味を持ちました。そこでシンガポールに行ってインフラについて、それに関わる都市デザインについて学びたいと思いました。



2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

午前中は語学学校にて学習、午後の時間を使って NEWater Visitor Centre 等の大規模下水処理再生工場やインフラの歴史を学ぶことができる政府のギャラリーを見学し、日本でも生かすことができないか考え、インフラの知識を深めました。今回の留学では、探究活動として「なぜシンガポールは水不足の国なのに、水をたくさん使った建物が多いのか」という問いをテーマにしました。なので、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイに行き都市デザインとインフラについても見学しに行きました。また土日にはシンガポールで知り合った方とバスでマレーシアにも行きました。実際にマレーシアからの輸入水を送るパイプを見学しに行きまし



た。パスポートさえあれば日帰りで行ける距離にあり、国境を越えることの身近さにも驚きました。私が行ったジョホールバルという街は、治安やインフラ設備の面でシンガポールとは大きな差があり、その違いを実際に目で見て感じることで、同じ東南アジアでも国によって環境が大きく違うことを実感しました。

私はホームステイではなく、相部屋に滞在しました。交流を大切に、英語でコミュニケーションを取ったり日本のお菓子を配ったりしました。とても喜んでもらえました。語学学校の最終日にはトラディショナルパーティーを開催しました。クラスメイトや先生たちと自分の国のお菓子やご飯を持ち寄ったり伝統衣装などを着たりして、お互いの文化を伝え合う活動を行いました。いろいろな国の食文化や聞いたこともない文化もありその国のイメージが変わり価値観が大きく変わりました。

3 感想等

留学して一番よかったと感じたことは、いろんな国の人と話すことができたことです。多文化国家ということもあり、差別が少なく、フレンドリーな方がとても多かったです。そのおかげで、自分から積極的に話しかけることができました。英語がうまく通じず、言葉に詰まってしまう場面もありましたが、相手は表情やジェスチャーを使って理解しようとしてくれました。その経験から、完璧な英語でなくても、「伝えたい」という気持ちがあればコミュニケーションは成り立つと実感しました。

不便に感じることもたくさんありましたが、日本では感じない不便さだからこそ新鮮で、逆に楽しいと感じることも多かったです。そして、日本で当たり前だと思っていた生活のありがたみを改めて感じることができました。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流×アジアコース)		訪問国	マレーシア	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	香月旺典	学年	2年



私は今年度の夏休みに、トビタテ！留学 JAPAN「拠点形成支援事業」の派遣留学生として、マレーシアに3週間留学をした。この留学は、“コンフォートゾーン”での生活に慣れきっていた私をリセットしてくれた、大きなターニングポイントとなるものだった。海の向こう側での体験や、日常では決して会うことのできない人との交流は、一つ一つが新鮮、かつ刺激的で、自分の価値観を、そして自分の将来を今一度見つめ直す機会となった。走馬灯に必ず登場すると思う。そんな留学だが、この事業がなければ、私は行くことができなかった。非日常で生活する留学は、費用も非日常的で、多くの人にとって現実的なことではない。私自身、海外に行きたい、留学をし

たいという思いはあっても、親にかけることになる負担を考えると言い出せず、自分でお金を稼いでから行こう！と、ある意味では諦めていた。しかし、この事業はそんな私に手を差し伸べ、親の背中を押してくれるものであった。金銭的な援助だけでなく、採択していただくための準備や事前事後の研修を通して、出資したいと思っていただけるような、価値のある留学にする手助けもしてくれた。大学以降で海外に行っても、それはそれで学びがあると思うが、人生の方向を決める高校生のタイミングだからこそ学べたことも非常に多かったと感じ、改めて、今回留学する機会をいただけたこと、大変ありがたく思う。

ご支援いただいた全ての方、文章を通じてとしてなのが歯がゆいですが、本当にありがとうございました！



ご支援いただいた留学の成果、学びを

- 1 高校生のこのタイミングだったから学べたこと
- 2 探究を通しての学び 　　　　　に大別して以下にまとめる。

1 これは2つある。1つが、多彩なトビタテ！同期の仲間等との出会いを通じて、価値観や考えが柔軟になったことだ。16年間生きてきて、似たような学力を持つ人が集まる高校という集団に属し、さらに文理や科目選択を経て似た将来を思い描く仲間と過ごす間に、知らず知らずの間に世界が狭くなっていた。しかし、トビタテ同期の、日本代表の人や、企業とコラボしている人、ピザにとりつかれ師匠をもつ人や、現地で知りあった、自分のバイト代で海外旅行をしている同級生等との出会いを通じて、その世界が大きく広がった。今の自分の生き方は、本当に自分が望むものなのか、本当にやりたいことは何なのか、自問することができ、また、今の自分は自分が選んできたものだ実感することができた。今自分がしていることの意味、目

的を再確認できた私は、これまで以上に毎日が楽しい。2つめは、高校生は守られる存在であるということだ。やってみたいことがあったとき、自分が一步踏み出せば大人が助けてくれる、導いてくれる制度がとても充実していることを知った。自分が動きさえすればどうにかなる、どうにかしてくれる。だからこそ、これまでより挑戦できるようになった。

2 私の探究テーマは、“観光の力で静岡県をより盛り上げるためには”である。特に、ムスリムマーケットや、交通網の整備に注目して探求をした。まず、クアラルンプールにある日本政府観光局（JNTO）クアラルンプール事務所を訪ね、インバウンド観光がもたらす経済面での恩恵や、マレーシアにおける観光市場等についてレクチャーしていただき、また訪日を考えるイスラム教徒が直面する課題等についての質問に答えていただいた。インバウンド観光客の消費額が、日本人の日帰り旅行者21人分もの値であること等、新たな学びが多かった。また、イスラム教徒の訪日を妨げているものとして、食や礼拝においてイスラム教徒が特別に必要とする配慮を提供できていないことが大きな要因であると知った。続いて私は、語学学校で



知り合ったイスラム教徒の友人と行動を共にすることや、モスクでのインタビューを通して、具体的にどのような配慮が必要とされているのかについて調査した。調査の結果、礼拝については専用の部屋がなくても、簡易的な仕切りでスペースを作るだけでも十分であったり、近年駅をはじめ礼拝所の整備が進んでいたり、あまり問題を感じないことが分かった。一方で、食は深刻な問題であることが分かった。イスラム教徒が食べることの許されない“ハラム”は、よく知られた豚肉やアルコールだけでなく、屠殺の方法や運送の方法等細かい決まりがあり、それらの基準を全て満たしていることを示す“ハラール証明”を、彼らがとても必要としていることを知った。マレーシアで始まったハラール証明は、マレーシアやインドネシア等のイスラム教国家においては国が管轄する認証機関がある一方で、日本においては民間が認証を行っており、費用や審査基準の不統一等の課題が多く、普及していないことが分かった。ハラール証明の普及が、今後イスラム教徒がもたらす経済的な恩恵を受けることができるか、どうかの鍵を握っていると言える。

交通網の整備については、都市と地方を結ぶ交通網としての飛行機の普及や、ライドシェアサービスによる需要に一对一対応の供給が日本との大きな違いであった。静岡県で交通網を充実させるためにできることとして、特にライドシェアサービスに注目した。仲介会社による管理や、流し(市中を走り、客を探す業務)ができないといった制限のもと、タクシー業務を一般人が行えるというものだ。ハード面の整備を必要とせず、なおかつ地方において雇用を生み出せるこのシステムは、大きな可能性を秘めている。安全性に不安を感じていたが、仲介会社による厳格な管理があるため、日本におけるタクシーと同等の安全性が担保されていた。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探求コース (観光交流✕アジアコース)		訪問国	インドネシア	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	渡邊 芳	学年	3年

私がこの留学に挑戦した背景には、日本茶を取り巻く現状への問題意識があります。高校での活動を通して、日本ではお茶の消費量が年々減少し、それに伴って放棄茶園が増えている現状を知りました。実際に茶畑や生産者の方と関わる中で、「このままでは日本茶の文化そのものが衰退してしまうのではないか」という危機感を抱くようになりました。そこで私は、日本国内だけでなく海外にも目を向け、日本茶の新たな可能性を探りたいと考えるようになりました。留学先としてインドネシアを選んだ理由は、人口が多く経済成長が続いている点に加え、イスラーム教徒が多く宗教的理由からアルコールを飲まない人が多いため、嗜好飲料としてのお茶が生活に入り込みやすいと考えたからです。この留学では、「日本茶はインドネシアで受け入れられるのか」という問いを軸に、実際の生活や価値観の中でその可能性を確かめることを目的としました。

留学前、私は文献や事前調査を通してインドネシアの社会や文化について学びました。その中で、人口構成の若さや経済成長、宗教と生活習慣の関係性に注目しました。これらを踏まえ、私は「インドネシアでは、日本茶は健康的で新しい飲み物として受け入れられるのではないか」という仮説を立てました。特に、日本茶が持つ「健康」「伝統」「自然」といったイメージは、今後生活の質を重視する層にとって魅力になるのではないかと考えていました。一方で、味や飲み方、価格帯など、日本とは異なる文化の中でどのように受け止められるのかについては、実際に現地で確かめなければ分からない点も多いと感じていました。

留学中は、現地の人々に日本茶を紹介し、実際に飲んでもらいながら意見を聞く活動を行いました。その中で強く感じたのは、日本茶そのものの味だけでなく、「どのように伝えるか」が評価に大きく影響するということです。初めは「苦い」「飲み慣れない」といった反応もありましたが、淹れ方や日本でのお茶文化、健康面の特徴を説明すると、印象が大きく変わる場面が多くありました。



また、インドネシアでは甘い飲み物が好まれる傾向があるため、日本茶をそのままの形で広めることの難しさも実感しました。この経験から、海外で日本茶を広めるためには、日本の価値観をそのまま持ち込むのではなく、現地の生活や嗜好に寄り添う姿勢が重要であると学びました。

留学を通して得た答えは、「日本茶はインドネシアで受け入れられる可能性はあるが、そのためには文化的な工夫が不可欠である」というものです。留学前に想定していた人口や経済、宗教といった条件は確かに日本茶にとって追い風となりますが、それだけで自然に広まるわけではありませんでした。現地の人々の反応から、日本茶を広めるためには、味の調整や飲み方の工夫だけでなく、なぜ日本茶が特別なのかを分かりやすく伝えることが重要だと感じました。この点において、私は「商品売る」という視点だけでなく、「文化や背景を伝える」という視点の必要性を強く意識するようになりました。

帰国後に参加した浜松インドネシア祭りでの活動を通して、国や文化が違っても、「分かりやすく伝えること」「相手の背景を尊重すること」の重要性は共通していると改めて感じました。これは留学先だけでなく、今後日本で活動が続けていく上でも大きな学びとなっています。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流×アジアコース)			訪問国	大韓民国・香港
学校名	清水南高等学校	氏名	天野ひな	学年	2

【探究テーマ】

海を活かした港町の観光 d x 事情を多面的に考える

観光 DX とは、観光業にデジタル技術を取り入れて業務の効率化や観光業の活性化を図る取り組みのことで、コロナ禍が明けてから静岡に来る外国人観光客数が増えているため観光業に興味を持ち、これをテーマに観光地として人気があり日本よりも IT 先進国である韓国と香港に約 3 週間留学に行きました。

【探究活動】

① 観光地の視察

韓国の釜山の人気な観光地ではどのような観光 d x の取り組みが行われているのか実際に自分で直接訪問して視察をしました。その結果、釜山全体の観光情報を得られる大型端末が何台も設置してありました。その端末では季節ごとのおすすめの観光スポットや祭り、イベント、駅の乗り継ぎの仕方、お得な情報、バリアフリーの目的地へのルートなど多言語対応で旅行雑誌では分からないようなマイナーなことも知れます。それらは、観光地だけでなく主要な駅にも設置されていて、現地の人々が利用しているのも実際に目にしました。また、香港の地下鉄 MTR の中環駅には「Virtual Service Ambassador Tracy」という AI を駆使した端末がありました。画面上にいるバーチャルキャラクターに話しかけると瞬時に返答し、図なども出してくれます。



② 街頭インタビュー

街頭インタビューでは韓国を訪れている外国人観光客にキャッシュレス決済や地図アプリなどに関することをインタビューしました。海外旅行では現金かキャッシュレス決済どちらがいいかという質問では 7 割がキャッシュレス派でしたが、現金派では旅行の記念として現地の通貨を使いたいという声もありました。

③ 韓国全体を通して

観光案内所はデザインが洗練されていて気軽に入りやすかったです。韓国の飲食店はキオスク端末の導入率が日本よりも圧倒的に高かったです。卓上で注文し、カード決済ですが支払いができるのはもちろん、割り勘やメニューごとに分けて支払いができるためグループで食事することが多い観光客や従業員にとって便利で効率が良いと思いました。

また、韓国には「パリパリ文化」というあらゆる場面で効率の良さやスピード感を重視する国民性や価値観を意味する言葉があるほど、せっかちな人が多かったです。この国民性から高齢者でもスマホを使いこなしたり、現金を使わない人が多かったです。この国民性から社会全体で効率性をよくしようとするいろいろな場面でデジタル化が進んでいるのかなと考えました。



【考察、まとめ】

この2か国には、公共の場に大型な端末を設置し観光情報を提供するサービスが多くありました。デジタル化の進展の差には国民の意識が関係しているかもしれないという新たな視点を増やすことができました。これらの取り組みを静岡に取り入れて、静岡の観光業をより良いものへと変えていくべきだと思いました。

【アンバサダー活動】

日本の文化を現地に伝えるアンバサダー活動では、日本からお好み焼き粉や鯉節、ソースなどを持参し、韓国と香港の2か所のホームステイ先でお好み焼きを振舞いました。ホストファミリーだけでなくフランス人のルームメイトにも食べてもらい、「とてもおいしい。」や「次日本へ行ったら買いたい。」など言ってもらえて嬉しかったです。この活動によって双方の文化をより知るきっかけとなり親睦を深めることができました。

このトビタテ留学で探究活動以外に語学力を向上させるだけでなく、静岡県や全国のトビタテ生や現地で知り合った人などたくさんのお会いや予想外の出来事があり、自分の視野を広げることができ、とても良い経験になりました。この事業や留学の魅力を多くの人に伝えるエヴァンジェリスト活動にも力を入れていきます。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (農林水産業みらいプロジェクトコース)		訪問国	ミクロネシア	
学校名	焼津水産高等学校	氏名	石原成真	学年	2

私は、トビタテ留学ジャパンのふじのくにグローバル人材育成事業2期生として留学しました。自分は小さいときから近くに海があり、それが当たり前だと思っていました。しかし年がたつにつれ、海洋環境が変化していき魚が獲れなくなってきました。その原因を知るために留学へ応募し、日本の海を変えるという目標を持ちました。書類審査の書類作成をしている間や、計画を作るとともに留学へ行きたいと言う思いも強くなっていきました。そうして、迎えた審査の日、自分は思っていたことを素直に心のまま話して熱意を伝えました。しかし、途中で言葉に詰まったり、噛んだりなどいろいろやらかしましたが一生懸命にやりました。そして、トビタテの書類面接や面接などを受け無事に合格することが出来ました。合格通知票が届いた時には、とても嬉しかったです。

それから、留学の支度や手続きなどをこなし留学前日、とても不安で本当に大丈夫だろうか、困っても人にうまく聞けるだろうか、言葉は通じるだろうか。など多くの不安に駆られていました。そうして留学当日、日本の空港で緊張しまくり、大丈夫だろうか、と言う気持ちもあったが、なぜか楽しみだと言う気持ちもありとてもわくわくしている自分がいました。そうして、日本を離れ乗り換えのためにグアムへ行きました。すでに、自分は知らない世界へ来てしまったなと感じましたが、日本とは違う景色、空気、雰囲気すべてに感動しました。最初にテンションが上がったのは、車が左ハンドルだったことです。そんなともあり、本命のポンペイ島へ向かっていきました。ポンペイ島へは、いくつかの島を渡る小さな飛行機へ乗る必要があります。その登場口はグアムの空港の端にあって本当に合っているか心配になりました。そして最初の島、チューク島へ着きました。そこで驚きの事実が発覚しました。島国で滑走路が短いため、急着陸、急離陸で衝撃がすごかったです。お尻が浮いて前の席に突っ込む勢いでまるでジェットコースターみたいだなと感じました。



いよいよ、ポンペイ島へ着きました。気温は、日本よりも暑く、でも肌がべたつかない程度の湿度で、過ごしやすそうだなと感じました。現地でお世話になるケニーさんと合流し、ポンペイの空港から町まで行きました。想像していたイメージとは、かけ離れていて、ジャングルの中にコンクリートの建造物が建っていて、しかも、建物すべてがカラフルで明るい町だなと感じました。そうして、自分たちの住むアパートのオーナーさんのところへ行き手続きと、鍵をもらいました。そうして、アパートに着きポンペイの冒険のスタートです。ポンペイに行き当日に気づいたことは、犬や鶏が放し飼いで道路や店の前を歩いていて、日本では考えられないなと感じました。そうして次の日、早速地元



の港や魚屋へ行きました。そこには、日本では見られないような、カラフルな魚たちやマグロや鰹など様々な魚が置いてありました。そこで気になった事、探求のテーマにも関連している魚のおいしい食べ方を教えられるなど感じました。魚屋では、氷や水につけずに、日向の直射日光の当たる机の上にそのまま置いてありました。それを現地の人たちは買っていきます。そこで、聞いてみました。「それはどうやって食べるのですか？」そうしたら、「焼いて食べるよ」と言っていました。さすがに火は通すのだなと感じました。でも、衛生的にあまりよくないとも思いました。

そうして、売られている魚の味が気になったので、買って食べてみることにしました。そうしたらなんと、味は普通で違和感なく食べられました。しかし、その数時間後に少しお腹を壊しましたが、すぐに治りました。その時、日本の衛生管理はすごいのだと感じました。その後、現地の学校や水産関係の会社や施設を訪れ、インタビューや一緒に活動しました。ある海洋施設へ行き話を聞いていると、今回の留学の答えがわかりました。「今、何が主な海洋問題ですか？また、それを解決するために何をすべきですか？」そうしたら、「まだ、何が海洋問題か明確にわかっていなくて、プラスチックや温暖化だけではないと言っていて、それを解決するためには、世界中のあらゆる海洋問題の情報がないといけないと言っていた。」それを聞いて、自分は、海洋問題を解決するために、留学へ来たのが、その根底、海洋問題とは？になって規模、スケールの違いを知りました。ですが、自分たちが海に対してもっとアピールして、興味を持ってもらえれば、情報が集まり、より早い海洋問題の解決につながるのではないかと感じました。そのために、留学を通して、学んだ事、日本で学んだことをもっと世界中に発信していきたいです。ポンペイの人たちが言っていた言葉があります「海は私たちを切り離す壁ではなく、私たちがつながれる橋だと」その言葉を聞き、確かに、見方を変えれば同じ海でつながっていて、言葉が通じないところでも、海を思う気持ちは一緒なのだなと感じました。

ほかにも、水産系以外で空港の避難訓練に参加させてもらいました。自分たちは怪我人役を遣らしてもらって、普通の人、留学生でも出来ないような体験をさせてもらいました。とても印象に残っています。

留学を通して、自分の意外な一面、コミュニケーション能力が意外と高かったり、チャレンジ精神があったり、案外食に対して耐性があったりなど知らない一面を見られて良かったです。留学に行けて人生が変わったのもそうですが、日本中世界中に友達を作ることが出来てとても嬉しかったです。これからも、いろんなことに自分から挑戦していきたいと思います。また、トビタテ、ふじのくにの留学する後輩たちの少しは助けられる様に、活躍したいと感じたのもありますが、ふじのくになど本部、運営側にも手伝いが出来たらなと感じました。なので、積極的に参加したいです。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (農林水産業みらいプロジェクトコース)		訪問国	ミクロネシア連邦 ポンペイ	
学校名	静岡県立焼津市立水産高等 学校	氏名	林 桜子	学年	高校 2 年

1 目的・応募理由

静岡県のサクラエビ資源の減少と同じく、全国的に漁獲量の減少が課題と考えています。その課題を改善するために、漁業が盛んに行われているポンペイ周辺海域はどのような漁況や海洋環境になっているのかを調査し、静岡のサクラエビ資源を増加させるためのヒントにしたいと考えました。また、船員の人手不足も魚の漁獲量が増えることで解決につながるのではないかと考えました。

2 研修内容・日程等

現地にあるカツオ・マグロ類の資源保護と漁獲規制をしている国際機関で講義を受けました。外国からミクロネシア 200 カイリ内に入る漁船の受け入れをしている企業に行き、どこの国からの入漁が多いのかを調査した他、サンゴの保護活動を行っている団体の活動に参加し、実際に海に潜ってサンゴの白骨化がどの程度進行しているのか、海洋ゴミの量などの調査をしました。また、現地にある日本国大使館に行き、ポンペイ島内の生活状況や環境汚染について話を聞いたり、現地の漁師、さんや、海外から来ているカツオ漁船の船員（漁師）からも聞き取り調査を行いました。



私たちは3人のチームで留学したので、現地での生活はアパートを借りた共同生活をし、滞在費用節約のために自炊をしたり、毎日のように停電して、お湯が出ないので水のシャワーを浴びたりと大変でしたが、日々忙しい研修に追われながらも実のある生活がで



きました。高校の同級生と外国で一緒に生活するのは二度とないので、とても貴重な機会だったと思います。

3 感想等

とても楽しく大変な14日間だったので、ここまで記入しながら、改めて自分の16年間という人生の中で今回の留学がどれほど大きく心に残っているか実感しました。私が得たものは、行動力と飛び込む力です。留学中、自分からアクションを起こさなければいけないという場面に何度も直面しました。状況を説明してもらったり、値段を聞いたり、質問をしたりという場面の連続でしたが、黙っていたって相手の人は何も感じてくれることはないが、間違っていたとしてもそれを必死になって話す、やる姿勢を持つことで人の関心は自分に向くのだということを実感しました。そのおかげで、以前の私よりも発言できる場で自分の意志を持って言うことができるようになっていて実感しています。何事もやる気と勇気と自分の意志が必要不可欠だということ学びました。

今回の留学の思い出は一生の宝ものだと思っています。未だに留学に行ったメンバーで集まれば思い出話をするのがあり、何て良い留学で良い友達を持ったのだろうと思います。それほどまでに私たちの留学は素晴らしいものになりました。

次の目標はもう決まっています。今度は、ポンペイ島のようなゴミの処理施設が確立していない場所で、ごみ処理を提案することです。今回の留学で、日本がどれほどまでに清潔で恵まれている国なのかを身をもって実感しました。今でも留学中の生活を思い出すたびにハードで、日本ではあまり現実味のない生活だったと振り返ることができます。だからそれぞれのニーズや課題に合ったゴミの処理方法を提案していきたいと思います。ゴミが溢れている地域には事の重大さと、どうしたらポイ捨てなどをやめさせることができるかなどの適切なアプローチをしていきたいです。そのような取り組みが海洋環境問題の解決にもつながっていくものと考えています。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (農林水産業みらいプロジェクトコース)		訪問国	ミクロネシア連邦	
学校名	焼津水産高等学校	氏名	大石 美濤	学年	2

昨年10月に、学校内でトビタテ留学 JAPAN の募集案内があり、私は中学生のころから海外に興味を持っていたので、思い切って応募することにしました。はじめは、漠然とした軽い思いだったので、先生から「どこの国に行きたいのか?」、「海外で何をやりたいのか?」、「留学した経験を自分の将来にどう生かすのか?」と色々質問され、なかなかうまく答えられず困ったのを懐かしく思い出します。

私の将来の夢は、客船のキャビンアテンダントクルーとして就職し、船の仕事をしながらも、自ら海外からのお客様に日本や静岡の良いところを英語で紹介するような人になることです。私の学校には、そのような就職先からたくさんの方が来るので、きっと就職すること自体は難しくないでしょうが、本当に英語でコミュニケーションが取れるようになるかは、少し不安もありました。

私の学校からは、私も含めて3人が応募し、先生に指導してもらいながら留学計画書づくりをスタートしました。他の2人は同じクラスで、私だけが違うクラスだったので、あまり相談することもできず、先生から勧められたミクロネシアへ留学することで、具体的な活動内容を考えていました。そんな中、先生から言われたのは、3人とも海・船・魚に興味があつて留学することを決意しているの、いっそのこと3人チームで応募したらどうかというものでした。チーム応募ということは、3人とも合格して留学できるかもしれないけど、不合格だったら3人ともダメということです。個人応募なら、不合格になっても自分の内容が甘かったと納得しますが、チームだと、自分のせいでみんなが不合格になるかもしれないという責任感と不安がありました。先生から提案され2日間考えた末にチームで応募することを決め、そこでクラスの違う2人と話し合うようになり、そのうち次第に仲良くなっていき、留学活動の役割分担などを決めていきました。



そして、合格発表の日。合格のメールが届いた時には本当にうれしく、みんなで握手して喜び合いました。でも、本当の不安は、ここからでした。英語は興味あるけど、それほど流ちょうにしゃべれるわけでもなく、まして初めての海外旅行で、いきなりミクロネシアに行くのだから、本当に活動ができるのか不安が大きくなってきました。



ミクロネシアに到着してからは、出発までに英会話の勉強をして、自分なりに準備を整えていたつもりですが、

ポンペイの空港では入国するときに英語で色々と質問され、その意味が分からず早くも不安が的中した感じでした。ですが、空港に出迎えに来てくれた受入れ先会社のケニーさんがとてもやさしく、根拠はないですが、何となく3週間やっていけるような気がしてきて、いよいよ本格的な留学活動が始まりました。

はじめに、在ミクロネシア日本国大使館を訪問して、ポンペイの治安や気を付けること、日本がミクロネシアで果たしている役割など、概要的な話を聞きました。他にも、大洋ミクロネシア社が所有する海外巻き網漁船や鯉節工場の見学、ダンプサイトといわれるゴミ置き場などもダークな部分も見せてもらいました。滞在中は、主にサンゴ礁の保護活動を行っている団体と一緒に、海に潜って死滅しているサンゴのエリアを見て回ったり、新しくサンゴ礁を増やすための活動を手伝ったりしました。見るからに熱帯の青く綺麗な海ですが、潜ってみると意外にも白くなったサンゴが全体に広がっていて、やはり地球温暖化の影響はあるのだと感じました。

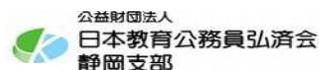
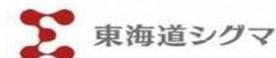
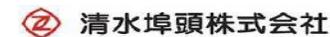
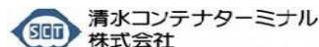
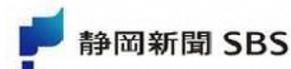
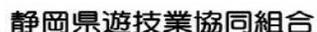
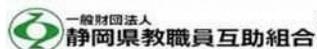
私の留学テーマである食生活と健康の変化については、ポンペイ州立病院へ行って聞き取り調査をしました。驚いたことに、ポンペイの人は一日に4~5回の食事をとっているそうです。そのためか太った人が多く、若いうちに成人病で亡くなる人が多く平均寿命が短いとわかりました。もともとポリネシア系の海洋民族だった人々が、アメリカから輸入される肉食に変化したことが原因ではないかと思っていたら、やはりそのようでした。しかし、出生率も高いため、島には若者が多いという印象でした。

他にも、マタラニウム高校とカルバリー・クリスチャンアカデミーに行き、授業に参加させてもらいました。マタラニウムの高校生は、とても明るく元気でフレンドリーな人が多く、みんなと打ち解けるまで時間はかかりませんでした。

さいごに、私は今回の留学でとても大きな成果が二つありました。一つは、一緒に行った3人の同級生との友情です。同級生とはじめての海外で、しかもアパートでの共同生活だったので、みんなの仲が深まり普通にはできない体験をさせてもらいました。もうひとつは、英語で会話することに自信がついたことです。英会話が得意ではない私でも、伝えたい意思が大切だということがわかりました。このような留学を支援してくださった親や学校の先生、グローバル事業に寄付していただいている企業の皆様には感謝したいと思います。ありがとうございました。



ふじのくにグローバル人材育成基金 寄附企業・団体様(50音順・2024年度～)



ネットワークシステムズ株式会社／株式会社ウェブブランディング／株式会社経営サポートプラスアルファ／一般社団法人 彩
株式会社DYM／静岡県高等学校長協会／静岡県高等学校等副校長・教頭会／静岡県公立高等学校事務職員協会
学校関係団体(同窓会、後援会等)／ふじのくに応援寄附金(個人支援者)